

---

# 琥珀色の風

徳次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

琥珀色の風

### 【ZPDF】

Z0077D

### 【作者名】

徳次郎

### 【あらすじ】

内向的な性格の為クラスでも存在感の薄い五十嵐優子は高校二年生。しかし、脳内を駆け巡る彼女の思考はちょっと過激で挑発的だ……。そんな彼女に思いもかけない事件が起きる。校内イチのモテ男が向こうから電話をしてきたのだ……。何かが動き出し、優子の学校生活は周囲との関わりに変わってゆく。

## プロローグ 第1話（前書き）

本作は意図的に情景描写を減らしてセリフや思考での表現を多くしていきます。

誰にでも読み易い趣向と、早いテンポを意識しています。

ダッシュ（）で始まるのは、全て主人公である優子の思考です。

## プロローグ 第1話

校舎の窓から午後の淡い陽差が注いでいた。

昼休みの喧騒が校舎内に響き渡り、行き交う生徒たちの隙間を満たしてゆく。

階段の踊場の窓から注ぐ光は、一日前にワックスをかけたばかりの床を虚ろに照らしていた。

キュッという音が微かに響いた。リノリウムの床に上履きの靴底が擦れた音だつた。

「きやつ」

五十嵐優子は階段の踊場から廊下へ出る角で、誰かとぶつかつた。人影が微かに見えて身をかわそうと身体を捻つたが、相手は余所見をしていたのか、彼女はまともに相手の肩の辺りに顔をぶつけて、手に持つていたものを床に落つことした。

ちよつと何処見でんのよ、まったく。ちゃんと前見て歩けつての。だいたいこつちは身体半分避けてんだから、あんたが残りの半分避けなかつたらぶつかるに決まつてるじゃないの。

お陰で、次の授業で使う教材、床に落としちやつたじやないの。もう、どうしてくれるのでよ。

しかし、彼女はそんな言葉を口には出さない。

優子は眉根を寄せて一瞬顔をしかめた。

それはほんの一瞬で、相手がその表情に気付く間もない。

「ごめん、大丈夫だつた？」

ぶつかつた相手は同じクラスの高森忍。学年イチの秀才にしてスポーツ万能。当然、モテ男度も学年、いや校内TOPレベルだつた。同級生に限らず、上級生や下級生からも憧れの的だ。

バスケ部では並外れた運動神経を駆使して、172センチの身長ながら周囲のノック連中を当惑させる。

忍は優子が落とした教材を拾う為に身体を屈めた。

「ううん。平気よ。あたしこそボーッと歩いていて……」

かがんだ忍を見下ろすように彼女が言った。

彼は拾い上げた教材を優子の手の上に乗せると

「はい。何処も壊れていなによつだね。よかつた

そう言つて目を細め微笑んだ。

スポーツをやっているにしては少し細い首筋……それに程よく尖った顎先。

笑うと出来る田尻の小さなシワ。たいした光源も無いのに輝く白い歯。

鼻の上で長い前髪がサラリと揺れる。

そんな笑顔があたしに通用するかしつうの。それで何時でも乗り越えられると思つたら大間違いなんだよ。

「あ、ありがと……」

優子は小さく俯きながら、小声で応えた。

「五十嵐は偉いな。何時も教材とか運んで、真面目だよ。うん」

「……クラス委員……だから……」

そう思つんだつたら、少しは手伝えつての。だいたいあんたに褒めてもらつたり哀れんでもらう筋合いはないんだよ。

「おい、忍、早く来いよ

廊下の向こうで声がした。クラスの男子が忍を呼んでいた。

「じゃあ、頑張つて」

忍は小さく手を上げると、小走りに仲間のところへ去つていぐ。

優子は一瞬彼を目で追つた、直ぐに視聴覚室へ向つて歩き出した。

## 五十嵐優子 16歳。

高校一年生の彼女は可もなく不可もないような普通の生徒だ。親しい友達があまりいないのは、彼女の存在感が薄いせいかもしれない。

話し声が小さい為、あまり人と話す事は得意ではない。いや、人と話すのが得意でない為に声が小さくなるのか、……

そんな彼女がクラス委員なのは、他薦による投票結果で、つまりどうでもいい奴がクラス委員になつたというわけだ。

当然のように男子のクラス委員もどうでもいこう的な奴だから、ほとんど話もしたことが無い。

しかも優子から見てもドン臭くて手際が悪いので、用事はほとんど彼女が一人でこなしていた。

もう一人のクラス委員である舟越を見ると、いつも優子は思つてしまふ。

つたく、使えない奴。いつもあたしが用事をこなしてるのに、お礼すら言つた事が無い。

6時間目が終わった時、世界史の教師は宿題のレポートを集めて後で職員室へ持つて来るようクラス委員に言つた。

レポートを集める優子は、結局男子の分も集めるはめになりながら自分の席でボケツとしている舟越を見る。

なにあいつ。どういう思考回路で生きてんの？ 自分がクラス委員だつて事解つてないのか？

優子はひと通りみんなの分を集めると、舟越に近づいて手を差し出した。

「レポートは……？」

「ああ、俺忘れちゃつてさ……」

舟越は完全に顔を上げようとはせず、少し太い声で言つた。

優子に視線を向ける事は無く、正面の壁の辺りを見ている感じだ。

つうか、あんたも集める係りなんだよ。気付けよウスラボケ。

クラス委員が一人いるのに、あたしだけがせつせと働いてるのが不自然だと思わないのか？

「そ、そう」

優子はそれだけ声に出すと、彼から離れて職員室へ向った。

優子は学校帰りも一人の事が多い。

もちろん全く友達がいないわけではないが……

「優子、先に行っちゃうんだもん。軽く探しちゃったよ」

「ああ、一葉」

「ああ、じゃないよ。どうしてそりゃって一人で帰っちゃうかな。

優子は

「だつて、ぱつと見たらいなかつたし」

「もう……」

一葉は息をついて肩をすくめる。

こんな具合に優子は一人でいる事に抵抗がないのか、自分から友達に声をかけて一緒に帰るような事もあまりしない。

「今日、お昼休みに高森とぶつかつたんだつて」

「な、なんで知ってるの？」

「男子が言つてたよ、優子が高森の肩にキスしたつて」

「だ、誰よそんな事いうのは」

優子の身長は156センチしかないので、あの時忍の胸板といっか、肩に顔がぶつかつたのは確かだ。

ただ、キスというよりは、顔がめり込んだという感じだが……

「ざけんじゃねえよ。誰があんなすかした男の肩にキスなんてするか。だいたい、何で一葉まで楽しそうにしてんの？ 全然わかんない。」

「ちょ、ちょっとぶつかつただけよ」

「でもさ、高森つていい二オイするよねえ」

優子のいいわけには興味が無いように、一葉は遠くの空を見上げ

て言った。

「そ、そう? 別に何も匂わなかつたけど」

そりや、あなたの思い込みだよ。なんでアイツだけいい二オイなわけ? もしそうだとしたら、こじやれた香水でも着けてるんでしょ。そんなの、アイツの匂いでも何でも無いじゃん。香水の匂いじゃん。

「あんた鈍感だから、匂わなかつたんじゃないの?」

一葉はそう言って、あははっと声を上げて笑った。

もちろん、本気で馬鹿にしているわけでは無いのだが……

なんで? なんであんたにそこまで言われなくちゃいけないの? この色ボケ女。

「あはは……そ、そうかな」

優子は困惑した表情を隠すように、軽く声を出して笑って見せた。

優子は自宅玄関のドアを開けると、静かにローファーを脱いだ。小さい頃から共働きなので「ただいま」を言つ習慣はない。

彼女の家は「よく普通の小さな一階建ての一軒家で、さほど大きくなない庭もついている。

父親は某乳製品メーカーで働き、母親は隣駅のスーパーでパートとして働いている。

「姉ちゃん、今晚は精のつゝもの頼むぜ。俺、明日はガツチリ決めなくちゃならないからさ」

茶の間、いやこの家族はリビングと呼んでいるが……そこから弟の直樹が顔を出した。

「き、決めるって、なによ……まさか……まさか、あたしがまだちやんと手も繋いだ事無いって言つのに、こんな弟に先を越されるつていうの。

「だつて、ち、中学生よ、まだ。いや、今時の中学生は進んでるつて言つし……えええ！ そりなのよ。あたし、弟に先越されちやつたのよ？」

「あ、あんた何言つてるの？ 気色悪いこと言わないでよね」

「何が気色悪いんだよ。俺、明日はシユートツ本決めるつてみんなに誓つてきたんだぞ」

「し、シユート？」

「明日は新人戦の初戦だからな。気合入るぜ」

「なんだ、サッカーの試合か」

紛らわしい言い方すんなよ、このガキ。

「他に何があるんだよ。ん？ 姉ちゃん、顔赤いぞ」

「うつさいわね」

優子は鼻を鳴らす勢いで直樹をひと睨みすると、階段を上がった。

彼女が内気なのは家の外での事なので、家族の前ではそんな素振

りは一片のかけらもない。

弟の直樹は中学2年生。つまり、優子の家族は全部で4人だ。それと、小さな庭に黒毛の柴犬が一匹いるが、最近妙に太ってきた為、だれもそれが柴犬だと気付かない。

優子は制服を脱いでジャージの上下に着替えると、ベッドの上に横になった。

「はあ……」

訳も無く深い溜息をつくと、一葉が言つた言葉を思い出した。

高森忍とぶつかった時の事を思い出してみる。

やつぱり何か匂いがした記憶はない。心の何処かが舞い上がり、匂いを感じる事が出来なかつたのだろうか……

思えばあんなに男子に接近する事なんて滅多に在ることではない。胸板と肩のゴツゴツした感触が蘇える。

ぜつたいたい氣のせいだよ。何にも匂わなかつたよ。

しかしその時、脳裏にほんのりとライムの香りがした。

穂のかに汗ばんだように火照つた爽やかで微かに甘い香り……

こ、これか？ これがアイツの匂いか？

優子は思わずベッドの上に飛び起きた。

「もう、どうでもいいや、そんな事」

大きく首を振つた彼女の頬に、肩につかないほど髪の毛が暴れてまとわり着いた。

窓の外が暮色に染まる頃、優子は夕飯の支度を始める。

母親の帰りが遅い時は、夕飯の仕度は彼女の仕事だ。中学の頃から自然にそういう役割になつた。

何となく何時の間にかそうなつたので、優子は文句をいつタイミングも外してしまつた。

ちょうどその時間になると、弟の直樹は佐助を連れて散歩に出かけた。

ける。

部活のある日はもう少し遅い日もあるが、彼は夕飯前に必ず佐助を連れて散歩に行くのだ。

佐助とは、黒毛の太った柴犬の名前だ。

小学校の頃はろくに散歩をしなかつた直樹だが、中学に入つて本格的に部活でサッカーを始めると、体力維持の為とか言って佐助の散歩をするようになった。

しかし、仕方無しに優子が散歩をしていた時に比べても走らせているはずなのに、どうして佐助が太るのかは家族全員の謎でもある。

母親は普段六時過ぎには帰つてくるが、父親が帰るのが八時頃なので、五十嵐家の夕食は自然にその時間になる。

「そうか、明日から中学総体の新人戦か

父親の孝之助がビールを片手に機嫌よそそつに言つ。といつても、彼の場合年がら年中機嫌はよく、のんびりしている。

「直ぐにレギュラーなんてすごいじゃないの」

母親の杏子はそう言つて笑うと「頑張つて、ホームラン打つてね

「母さん、直樹はサッカー部だよ」

父親が思わず笑う。

「あら、だつて前にグローブ買ってあげなかつたかしら」

直樹が箸を口に入れたまま、呆れた顔で「そりや、小3の時だろ

五十嵐家の会話はだいたいこんなものだ。

「ま、恥かかない程度に頑張るのね」

優子は味噌汁を啜りながら、ポツリと言つた。

### 第3話

夕食後、優子は勉強机に向かい、古文のノートを広げていた。

古文の教師は、今時？と思つほど小テストが好きで、度々自慢のマックで作った答案用紙で生徒たちに嫌がらせをする。

しかし、期末、中間考査のほとんどは同じ問題が出るので、考え方によつては楽な教科かもしない。

明日もその小テストがあるので、優子はノートの文訳を頭に叩き込む。

彼女が平凡なのはテストの成績もそうで、悪くも無く、良くもない。

200人ほどの同学年の中でちょうど真ん中辺りで、女子だけで見ても、やつぱり真ん中なのだ。

彼女にしてみれば意外と勉強している気がするが、それで成績が並みどいうのはもしかして自分の頭の構造がヤバイのか？と思つて見たりもする。

不意に携帯の着信音が鳴つた。

通話の着信は何週間ぶりだらうか……

優子は真つ先にそんな事を思いながら携帯を手にする。

一葉からはよくメールが来るが、電話はほとんどない。

もちろん、アドレスのメモリには十数人の番号が入つているが、滅多に着信が来る事はないのだ。

液晶モニターには相手の名前が出ていない……

チツ、イタ電か？ それとも間違い電話？

知らない相手から電話がかかるほど、自分が社交的で無い事くらいは、優子自身が一番判つてゐる事だ。

そう思つてゐる間に、ホール音は切れた。

「やつぱりね」

電話を何時までも取らないからホールが切れただけで、じく当たり

前の事なのだが、彼女は何となく声に圧してやつた。

しかし、再び携帯の着信音が鳴る。

な、なによ。しつこいわね。ふん、だったら相手になつてやる。Hロオヤジ。

彼女の中では、もはや勝手に電話の相手はHロオヤジになつていた。

「もしもし」

わざとぐぐもつた声で電話に出る。

「あれ？ あ、あの……五十嵐優子さんの電話ですよね」

聞き覚えの在るムカつくほど爽やかな声が聞こえて、優子は気が動転した。

「、」「、」「、」「、」「、」「の声つて……いや、似てるだけ？ それ

とも、電話機のせい？

「あの……もしもし？」

再び電話の声が聞こえた。

「五十嵐優子さんはいらっしゃいますか？」

「あ、あの……あたしですけど」

優子は何時のも学校での話し方に自然に切り替わる。

「ああ、俺。高森だけど。悪いね、こんな時間に」

電話の相手は間違いなく高森忍だつた。

「ううん、別にいいけど……どうしたの？」

ヤベHじやん。なになに。何で高森があたしの携帯知つてんの？ どうしてこんな時間にかけてくんの？ もしかしてあれ？ 実は前から好きでしたとか、そういうノリなやつ？ 困るよ、そんなの急に言われたつて。

「実はや……」

「マジで？」

「どうしたの……？」

「言ひ難いんだけど……」

ついにあたしにも春が来るの？ しかもこんなとびっきりの

春が、こんな秋晴れの夜に？

電話の向こうで彼は言った。

「明日、古文の小テストあるだろ」「はあ？」

優子は、思わず氣の抜けた声を出す。

脳内が一瞬真っ白になつて、大急ぎで思考を再構築する。  
「、古文のテスト？ つて明日の小テストだよね？ なんでそんな事であたしに電話するの？ 高森があたしに勉強の事で何の用？」

「俺、学校にノートを忘れて来たみたいでさ、いま気付いたんだ。  
出来たらコンビニでノートのコピーもらえないかな」

「な、なんであたしなの？ そんな事誰にだつて頼めるじゃない。なんでそんな事であたしに電話してくるのよ。」「で、でも……」

優子は何時ものように小さな声で応える。

「ああ、実はさ、五十嵐の家つて、ウチの一本先の通りなんだよ。  
大通りへ出る角にちょうどコンビニもあるしさ」

「な、なによ。ビックリするじゃないの、もう。ていうか、近いだけで電話よこすか？ 学校ではほとんど話した事もないのに。」「駅向こうに安西の家が在るけど、ちょっとアイツには声かけ難くてさ」

浮かない声で忍は続けた。

安西ひとみは同じクラスで、女子の中では学年トップの成績をとつていてる。

男女含わせても、何時も忍の次なのだ。

ただ、イマイチ性格はよくない。

しないよ、そんなの。あたしには声掛け易いっての？ 大人しくて影が薄いし、ちょうど近場で使い勝手がいいとでも言うの？

「うん……いいよ」

優子は再び小声で言った。

ああ、もづ。そう言つしかないじゃん。しょうがないじゃん。

「サンキュウ、助かるよ。じゃあ、これから五十嵐の家まで行くか

「えつ、今すぐ？」

「ああ、だつて歩いたつて5分もかからないぜ。すぐ行くよ」

忍は明るい声でそう言うと電話を切った。

「…………」雷語はせんせれでいた

なんで今あべなのよ。

優子は着替える為に慌てて携帯のボタンを押した。

だった……せっかく向こうから電話が来たのに。一葉に由慢できたかも知れないので。もちろん用事の内容は「まかしてね。

そう呟きながら、ジーンズに履き替える為にジャージを脱いだ。

そう咳きながら、ジーンズに履き替える為にジャージを脱いだ。

秋晴れの夜空に浮かぶ弦の月が、住宅街を明るく照らしていた。

優子はノートを手に門扉の前に出た。

一瞬黒い人影にギヨツとして息を飲む。が、それが高森忍の影と気が付いてホッと溜息をもらした。

「よお、悪いな。ちょっとそこのコンビニでド派手とつてくるよ」

「あ、あたしも……あたしも行つていい?」

「えつ? あ、ああ。もちろん」

優子は忍と一緒に大通りまでの距離を歩き出す。

大通りといつてもたいした通りでもないし、距離にしても200メートルもない所に在る。

高森忍は中肉中背だが、もしかしたら少し着痩せするタイプかもしれない。額にかかる黒髪はサラサラと風に舞つて、不良とかツッパッているとか、そんな感じは全くないのだが、何処か硬派な香りがする。

それで、成績優秀なものだから、周囲の女共は放つておかない。それにしても、高森忍の家がウチの近所だったなんて初耳だつたな。こんなに直ぐに来たんだから、近いのは本当なんだ。

「登校の時はあまり、ていうか会つたことないよな」

隣で自分を見つめる彼の瞳に、一瞬優子は魂が吸い寄せられるような気がして思わず目をそらした。

学校ではそんな事感じたことが無い。

優子は慌てて自分の心の中で小首を振る。

「えつ、うん。そうね……」

そうだよ。なんで会つた事ないんだ? あ、そうか、コイツは部活だから朝早いんだ。でも試験の時とか……あ、あたしが何時もぎりぎりに行くからか。

「朝は何分の電車に乗つてんの?」

「えつ？」

「電車さ、試験の時にも会つた事ないよな、五十嵐とは」

「あ、あたしは……7時58分のやつ」

「7時58分？ じゃあ、もうギリギリだな」

忍はそう言つて、笑つた。

学校は8時25分までが登校時間だ。7時58分の電車に乗つて学校まで20分弱。そこから学校まで足早に歩いて5分ほどだ。な、なによ、そんなに可笑しい事ないでしょ。あたしは低血圧で朝は苦手なのよ。

「高森くんは、何時も何分のに？」

「俺は6時45分のやつさ、何時もはね」

早ツ。あたし、まだ布団の中じゃん。

「は、早いのね……ずいぶん」

「朝練あるからな。試験の時はゆっくり行けるからいいよ。7時42分のに乗れば、充分間に合つしな」

なによ、58分のだつて小走りすれば余裕なんだからね。時間は有效地に使うべきじゃない。

そんな会話をしながらコンビニに着いた二人は、コピー機の前に陣取つて、忍はノートのページを台の上に合わせて機会に小銭を入れる。

3ページほどなので、コピーは直ぐに終わつた。

「五十嵐つて、意外と字がキレイなんだな」

忍はコピー用紙に転写された優子の文字を眺めた。

「そ、そりがな」

どういう意味よ、それ。いつたいあたしをどういイメージで見てるわけ？

「あ、ちょっと待つてろ」

忍はそう言つてレジの方へ行くと、缶コーラーとココアを買つてきた。

「ほら、一応お礼な」

彼はそう言つて、ホットココアを優子に渡す。

「あ、ありがとう……」

「でもよかつたよ。五十嵐つて、もつと話しこ��이のなかと思つてた。

意外と話すんだな

なんだ、そりや。あたしは根暗女じやないつーの。そりやあ、ちょっと気が弱いし、知らない人と話すのは苦手だけどさ。

「そう? 知らない人と話すのが、ちょっと苦手かな……」

「俺は知らない人じやないつて事か」

「えつ?」

「いや、ほら。あんまり教室でも話したことないし。でも、意外と

普通に話してゐるから」

「そ、そつかな」

そうかなつてなんだよ、もう、あたしつてば。こんな会話が普通か? 普通のあたしがどう映つてるんだ?

二人は店をでると、一緒に缶のプルタブを引いた。

「あつたかい……」

優子は思わずそう呟いてココアの缶に口を着けた。自然に笑みがこぼれる。

「五十嵐つて、ジーパン履くと意外にスタイルいいんだな」

優子は思わずココアを噴出しそうになつて慌てて飲み込んだ。

「な、なに? いきなり……」

どうこうタイミングで言つてんだよ、もう。それともなにか、あたしのお尻にムラムラしたりするのか?

「いや、何となくさ。五十嵐の私服つて初めて見た気がして」

「いいや。あんたが気付かないだけだよ。修学旅行は自由行動の日、私服だつたじやん。あんたの眼中にあたしがいなかつたつてだけでしょ。

「そういえば、修学旅行で見たか

み、見たのか?

「そ、そういえば、自由行動は私服だつたもんね……」

優子は俯いた顔を上げたが、隣に忍の姿はなかつた。

慌てて振り返ると

「じゃあ俺、こっちだから。ノート、サンキュウな」

直ぐ後で、忍が笑みを浮かべて手を上げた。

なんだよ、話し振つておいてほつたらかし？ 結局あたしは  
その程度の女か。

「うん、いいよ、こんな事くらい」

優子も慌てて笑顔を作つて「じゃあね」と小さく手を振つた。

月影に照らされる自分の笑顔は、何時もの2割増しのよひつな気が  
した。

カーテン越しに、微かな月明かりが透けていた。

小さな虫の声が、窓を通り抜けて部屋の暗がりに染み渡る。どうしてこんなに胸がドキドキするんだろう。

その夜、優子は布団の中で目を瞑つたまま、ふと考えていた。何時ものように瞼は重いのに、胸の奥がキュッと締め付けられるように苦しくて、何だか鼓動が早く感じる。

男の子と並んで歩いたのは、おそらく中1の時以来だった。中学校に慣れた頃になると、みんな形だけの彼氏彼女として付き合いだし、一緒に下校したりするのだ。

優子も他に漏れず、告白を受けて一緒に帰る彼氏を見つけた。しかし、外での優子の口数の少なさは今に始まつた事ではない。たいしたボキャブラリーを持っているわけでもない中学生男子と一緒にいても、盛り上がるどころか、何時も沈黙の嵐だった。

付き合いだして直ぐに遊園地へ行つたりもしたが、たいした会話もないまま適当に乗り物に乗つて帰ってきた。

男の子が何かを話しても、自分の事だつたり、リアクションに困る事だつたり。

もちろん、別に好きなわけでもないのでそんな相手の話に興味も湧かないし、なんだか疲れる男だと思った。

次の週、彼は人伝にとりあえず時間を置こうと言つて來た。

……それつて、あたしが振られた事になるの？

優子はこの頃から、男子に対しても不思惑を抱くようになり、会話さえあまり交わさなくなつた。

それは高校へ入つても同じで、今更男子生徒と楽しく話す事など出来ないと思つていた。

それでも、何時かはステキな彼氏が出来るだらうと、矛盾した期待を抱いたりもする。

でも、アイツといるのは、ちょっとだけ楽しかったな。

優子は田を閉じたまま、布団を引っ張つて頭まで被つた。

\* \* \*

「昨日は有難うな。おかげで汚点をつけなくて済んだよ。五十嵐の字も凄く読み易かつたしさ」

翌日の学校。4時間目の中古文が終わつた後、忍の方から優子に声をかけてきた。

周囲の視線が一斉に自分に注がれているような気がして、優子は思わず俯いた。

「ば、バカじゃないの。なんで、こんなにイッパイ人のいる前で話しかけんのよ。みんな見てるじゃない。判つたから、早くあつち行つて。

確かに珍しい光景を見る視線が周囲から注がれていたが、別に全員が見ているわけでもない。内気な優子の過剰反応だ。

「う、うん……」

優子はそれだけ言つと、一葉の方へ歩いて、一緒に教室を出た。

「何？ 優子、高森と何か在つたの？」

階段を下りながら一葉はすかさず訊いて来る。

「な、何でもないよ」

「ええ、だつて、じゃあなんで高森から優子に話しかけるのよ。しかも、何であんたが逃げるよう立ち去るわけ？」

彼女をよく知る一葉は、なんだか異常に興味を示している。

別に忍だってクラスの大半の連中と会話は交わすのだが、男子とはほとんど雑談なんてしない優子に声がかかつたと言うのが問題なのだ。

相手が高森忍とあつては、尚更興味を惹かれる。

ま、ままで。一葉は興味深々だよ。……なんとかしがみつくれて、この場の一葉の興味を他に逸らさなくちゃ。

「ああ、なんかお腹減ったね。やつぱりテストで頭使ったから、何時もよつお腹がへるのかなあ……何たべよつか」

一葉は何時で無く長澤リリフを吐く優子の顔をマジマジと横田で見つめた。

「あんた、昨日何があつたの？ 白状しなさい」

彼女はそう言つて優子の腕にガツチリと腕を絡めて密着してきました。

「ちょっと痛いよ。つていうか重いよ」

一葉は体重を優子に預けてもたれかかるように歩いた。

並んだ二人は自然に優子の方へ進路が傾くが、真っ直ぐ学食の購買へ進むには一葉を押し戻さなくてはいけない。

「じゃあ、正直に言いなさいよ」

「わかつたよ……もせ」

優子と一葉は購買でサンドイッチと飲み物を買つて、校舎と体育馆の間にあるベンチに腰掛けた。

優子はコーヒー牛乳のパックにストローを刺し込むと少しづつ吸いながら、昨日の出来事を一葉に話して聞かせた。

「へえ、高森の家つて、優子んちの近くなんだ」

1年の時からクラスが一緒の一葉も、優子の家には何度も行つた事がある。

そして一葉はサンドイッチを頬張つて、無言のままそれを飲み込むと優子の肩に手を掛けた。

「でもさ……期待は禁物だよ」

「はあ？」

「べ、別に期待なんかするか。だから言つたくなかったんだよ。

「高森がいくら普通の男子と違つと言つても、おかしな方向に違つとは考え難いでしょ」

そりゃ、どういふ意味だ？

「えつ？」

優子は一葉に向つて怪訝そうな笑みを零した。

彼女は少々哀れみの笑顔で、優子の肩を再びポンポンッと軽く一度叩くと

「あんたはただ便利に使われただって事。変な期待しちゃダメだよ」

「きいいいー！ なんて失礼なやつ。あたしだって薄々は気付いてるんだから追い討ちかけるなっつうの。

「わ、判つてるよそんな事。誰も期待なんかしないよ」

「でもあれか、優子は元々男に興味ないんだもんね」

「う、うん……まあね……」

優子は食べかけのツナサンドを口に頬張った。

放課後の喧騒に揺られていた優子は、一葉に手を振ると電車を降りた。

学校の在る最寄の駅から電車に乗つて一葉とは同じ方向になる。彼女はもうひとつ先の駅なので、学校帰りは何時も優子が先に降りるのだ。

駅の小さなロータリーには喫茶店とファーストフード店などが並んでいて、道路を渡ると中規模のスポーツ用品店。その隣には大型ドラッグストアーや大型書店、ドーナツ屋もある。

その周辺が新しい商店街だ。

駅前の国道に沿つて少し歩いてから通りを入ると、古い商店街を抜けて再び、今度は別の国道へ出る。

横断歩道を渡ると角には忍と来たコンビニが在り、優子はそのまま通りを住宅街へ入る。

家に着く手前の通りで、優子は足を止めた。

昨晚忍が手を振った場所だ。

そこから一本奥の通りへ抜けると、その何処かに彼の住んでいる家が在るのだ。

学校中の女子が何とか仲良くなろうとするほど人気の在る高森忍……もちろん、一部の女生徒は難癖をつけたり、または本当はもうタイプなくせに嫌いな振りをしたりもする。

優子はと言えば、別に何とも感じない数少ない部類に入っていたのだろう。

ふううん、相変わらず人気あるのね……くらいにしか思つていなかつたし、別に特別話をしてみたいなどと思つたこともない。

もちろん、一緒に歩きたいとも思つた事は無い。

そう、昨日までは……

彼女は通りの奥を少しの間見つめていた。

陽が短くなつたとはいえ、まだ夕暮れには時間があつたが、その通りは淡い琥珀色に染まつてゐるよう見えた。

家に着いて階段を上がろうとした優子に母親が後から声をかける。  
今日はパートが休みなのだ。

「優子、今日は直樹は疲れてるだらうから、佐助の散歩行つてあげたら」

「えええ、あたしも疲れてる」

優子は思わず振り返つて直ぐに顔を曇らせて肩を落とす。

「何言つてゐる、あんた部活もやつてないんだから、少し運動しないとそのうち太るわよ」

「あたしは平氣よ。お母さん似だもん」

優子の母親は確かに中年太りなど知らないかのよう、瘦せている。

「いいから、ね。後で行つてらつしゃい。佐助もあんたの事忘れちゃうわよ」

「わかつたよお」

優子はゆつくつと階段を上つた。

ジャージに着替えて部屋で「ロロロロ」と漫画を読んでると、窓の外は緋色に染まり、あつと叫ぶ間に暗くなつて行った。

「優子、散歩は？」

階段から、母親の声が聞こえた。

あつ、そうだ、忘れてた。

「今行くところだよ」

優子は慌てて部屋のドアを開けると、そう言いながらパタパタと階段を下つる。

ふと玄関先を見ると直樹のカバンが置いてあるのが見えた。

なんだ、直樹のヤツ帰つてゐるなら散歩行つての。

リビングのドアを開けると彼の姿が見えたので

「なんだ、帰つてるなら……」

しかし、彼女は言葉を飲み込んだ。

直樹はソファーの上で身体を投げ出すよつこいびきをかけて寝ている。部活の試合でだいぶつかれたのだらう。

台所からは母親が夕飯の仕度をする心地よい音が響いていた。

優子はそつとリビングのドアを閉めて玄関へ行つた。

ま、たまにはあたしがしてやるか。佐助はマジであたしの事忘れる恐れもあるしね。

下駄箱の上に置いてある散歩用のリードとビニール袋や小さなシヤベルの入ったお散歩セットを持って外に出ると、丸くなつていた佐助が彼女の気配に気付いて起き上がつた。

「散歩だよ、佐助」

喜んでパタパタと動き回る佐助を押さえ込みながら、首輪から鎖を外して散歩用のリードに付け替える。

「ほら、少しば大人しくしろ、もう」

佐助が待ちきれずに動き回るので、なかなかリードのフックが首輪に掛からない。

ようやくリードをつけて身体から手を放すと、佐助は一目散に門扉へ向つて走り出した。

口口口口してくるくせに、犬つてよく走るよね。

住宅街は意外と街灯も多くそれほど暗さは感じしない。近くの児童公園も水銀灯が何本も立つていて明るい。

住宅街をぐるりと回つて、公園の横まで来た時、正面から歩いて来た誰かが声を発した。

「五十嵐か？」

それは、明らかに聞き覚えの在る声。

ヤバッ、あたしジャージだよ。しかも上下……なんで？ どうしてこんな所であうかな、もつ。

「た、高森くん……」

「へえ、犬の散歩か」

「う、うん……」

「うわっ、あたし手に「ウン」持つてるよ……佐助の「ウン」持つて、高森と喋つてる……超最悪じやん。」

優子はさり気なく散歩用の道具を後ろ手に持つた。

「い、今学校の帰り？」

「ああ、週末から総体の新人戦が始まるからね、少し遅いんだ」「忍は優子に近づいて足を止めた。

彼はバスケット部に所属して、その中では身長は高いほうではないのだが、1年の時からレギュラー入りしている。

「へえ、珍しい犬だね。なんて犬？」

忍はそう言つて屈むと、人懐っこい佐助の頭を撫でた。

「あ、あの……これ柴犬よ……ちょっと太つてるけど」

「えつ、ああ、ごめん。黒い柴犬もいるんだね」

フフッ、気にしないで……佐助の犬種がわからないのは、別にあんただけじゃないから……

彼は後頭部をかきながら苦笑して立ち上がる。

「何時もこの辺散歩してんの？」

「ううん、何時もは弟が……」

「へえ、五十嵐つてお姉さんなんだ。ははっ」

「な、なにそれ。あたしがお姉さんじゃ可笑しいのか？」

「イメージじゃない？」

「まあね、五十嵐はお兄さんでもいそうだなって、思つたよ」「なんだよ、それ。あたしつて、そんな甘えん坊さんに見えるのか？」

「俺んちこの公園の先なんだよ」

「あ……そうなんだ……」

優子は思わず辺りを見渡した。

反対側からぐるりと回つて来たので気付かなかつたが、忍の家の通りを歩いていたのだ。

しかも、考えたら佐助の散歩をする時は何時もこのコースだ。

なんかやばいよ。まるであたし、高森の家の近くに来たくて佐助をつれてこの辺ウロウロしてるみたいじゃん…………ハツ、それってまるでストーカーじゃん。

「ぐ、ぐうせんよ」

優子は困惑した笑みで言つた。

あたしは中学の時からこのコースで佐助を散歩させてるんですけどからね。別に、あんたに会いたくてこの辺ウロウロしてるわけじゃないのよ。

「は？ なにが？」

忍は彼女の言葉の意味が判らなくて訊き返した。

「えつ、うつん。何でもない」

優子は思わず大げさに首を振る。

「そういえば、ここで中学の学区が分かれてるんだよな」「えつ？ そうなんだ……」

「そうか、どうりで高森とは中学が違つたわけだ。

中学の学区が「うつど」の通りを堺に別れている為、これだけ近い距離に家がありながら、優子と忍は違う中学に通つていた。

「じゃあ俺、行くから。じゃあな」

「うん……おやすみ……」

「うわっ、うつかり言ひちゃつたよ。あたしつてば何言ひてんのよ。おやすみつて言う時間じゃねえだろ。」

優子が思わず俯くと

「ああ、おやすみ、またな」

忍の声が聞こえて、彼女はハッと顔を上げた。

彼はもう後姿で、街路灯に照らされた背中はしなやかに、ちょっと大きく感じた。

「おい、姉貴、……何時まで豆腐もつたままボーッとしてんだ?」夕食時、直樹が言つた。

優子が味噌汁に入つていた豆腐を箸の上に乗せたきりピクリともせずに、正面とも天井ともつかない何処かを見つめていたからだ。優子は直樹に言われて慌てるようにその小さな豆腐の欠片を口へ運び込む。

「どうした、体調でも悪いのか?」

母親の杏子と話していた父親が、直樹の声に彼女を見た。

「えつ? べ、別に」

「姉ちゃんが体調悪いなんて無いよ。きっと頭の具合が……」

そこで直樹の後頭部は優子の手で叩かれた。

「痛つてえ、危ないだろ。箸が刺さつたらどうするんだよ」

「なんなら、グサッと刺そうか?」

「こらこら、優子もいい加減にしなさい」

父親が見かねてそう言つと、母親は

「そうよ、その箸漆塗りでけつこうイイヤツなんだから、壊さないでよ」

思わず直樹が箸で掴んだ肉じゃがの芋を落つことして  
「か、母さんそっちかよ?」

夜布団に入つても眠れるわけは無かつた。

今まで何とも思つていなかつた高森忍……

どれだけモテようが、どんな噂が立とうが、別に眼中に無かつた。

それは学校中の男子全てが優子にとつては同じで、興味を抱く異性などいなかつた。

それなのに、昨晩からこの胸の高鳴りが静まらない。

おやすみって言つたよ。あいつ。どうこうつもりだらう。いや、あたしの言葉にただ返しただけだよ。きっと、律儀なんだよ。でも……学校中であいつに「おやすみ」って言われた女は他にいるのだろうか……もしかして、あたしだけ？

優子は益々興奮して鼓動が高鳴ると、いくら目を開じても全く眠れる気配は無かつた。

\* \* \*

「もう、何で起こしてくれないの？」

朝、ギリギリに起きた優子は階段を駆け下りて台所へ行くと、荒い物をしている母親に言つた。

「起こしたわよ。あんたが今起きるつて言つから」

母親の杏子は苦笑した。

「姉ちやん寝言でもそう言つから」

「ウルサイ！」

優子に睨まれた直樹は、そそくさと鞄を持って玄関に向つた。

「『はん食べる？』

母親はのん気にそう言つて直樹の食器を片付ける。

「もう、そんな暇在るわけないでしょ」

優子はテーブルの上の牛乳をグラスに注ぐと、それを一気に飲み干して

「じゃあ、行くね」

「急ぐのはいいけど、気をつけてね。あんた、マヌケな所あるから玄関へ向う優子の背中に、穏やかな杏子の声が聞こえた。

マヌケじゃない。せめてドジつて言つてよー

優子は仕方なく自転車を取り出して駅までペダルを踏んだ。

駐輪所は有料だが仕方が無い。周辺に適当に置く連中も多いが何時撤去されるか判らないし、盗まれる可能性も非情に高い。

頬を撫でる乾いた風がちょっとだけ心地よかつたが、今の彼女にはそれを堪能する余裕など無い。

久しぶりに乗った自転車はさすがに早かつた。

何時もは急いででも5分ちょっと掛かる道のりをあつと詰つ間に駆け抜けた。

ロータリーの入り口に在るプレハブで作った倉庫のような建物が駐輪場だ。

有料だけあってなかなかハイテクな装置を用いており、上下二段に自転車が停められるようになっている。

優子は自転車を停めると、係りの窓口で105円を払ってチケットを貰う。

その時線路沿いに電車が来るのが見えて、優子は全力で駅の階段を駆け上がる。

スカートが捲くれるのなんて気にしちゃいられない。

改札を抜けて今度は階段を駆け降りると、ホームに着いた電車が見えてドアが開いたところだった。

よし、ギリギリ間に合うぞ。偉いぞあたし。よく頑張った。

階段はほとんど人がいなかつた。

優子は階段を下りる足を速めた……が、その時。

革が伸びて少し緩くなつたローファーの左が、突然足から脱げて宙に舞つた。

ギヤヤヤ ッ、なんでえええ？！

急に止まれない優子は、左足は靴下のまま階段を数段進んでから立ち止まる。

見事な弧を描いき、階段の傾斜に沿つて下まで飛んでいくローファーを、彼女は呆然と見つめていた。



学校では朝のホームルームが始まっていた。

「ああ、今日は休みはいるか？」

優子のクラス。担任の柳原が少しうつくりした口調で言った。

一応ぐるりと教室を眺めると

「みんないるな」

柳原が出席簿にチェックを入れようとしたその時

「先生、五十嵐が来てませんけど」

声を出したのは高森忍だつた。

「あつ、そうだ。優子いないや」

思わず気付かなかつた一葉が言つた。

教室は少しだけざわめきが起つた。それは、優子の席が空いているからではない。

最初にそれを指摘したのが、忍だつたからだ。

中には気付いていても面倒だから言わない連中もいたし、本氣で

優子のいない事に気付かない生徒もいた。

一葉は、窓際の列の丁度真ん中にいる忍を見ていた。

「おお、そうか。あいつどうしたんなんだ？ 誰か知つてる者いるか？」

？」

ざわめきは消えなかつたが、だれも優子がいない理由は知らない。

「まあ、いいか」

柳原はそう言つと出席簿を閉じて、連絡事項は特に無いからと教室を後にした。

丁度柳原が廊下に出ると、優子がこそこそと立つてゐる。

「なんだ、お前」

「あ、あの……駅で靴が……その……」

「五十嵐、遅刻1な。早く教室に入れ」

柳原は特に叱る様子も無くそう言つて、廊下を歩いて行つた。

はあ 遅刻だよね、やつぱり。理由言つても仕方ないしね。

優子は教室の後ろのドアをゆっくりと開けた。

一瞬クラス全員の視線を浴びる。

うわあああ！ だから遅刻なんていやなのよお。 もう……しかし、一部の生徒の視線は何かおかしかった。

何時までも優子を目で追つような姿は、今までにない事だ。

な、なに。この刺さるような視線は。別に朝はクラス委員の仕事なんて無いし……なんかあたしヤバイ事したか？

優子は視線を気にしながら、真ん中より少し廊下寄りの列にある一番後ろの自分の席に着いた。

さすがに一葉も近づき難いほど、幾つかの視線は優子を見ている。その中には安西ひとみの視線も含まれていた。

直ぐに1時間目の授業が始まり、それが終わつた休み時間、一葉が優子に近寄ろうとするが、それより早く安西が歩み寄つていた。

「珍しいよね、優子が遅刻するつてわ」

「そ、そう？」

「だつて、ギリギリでも何時もちゃんと来るじやん」

「今日は、たまたま……ちょっとね」

な、なんであんたがいきなり話しかけてくるわけ？ ほんと喋つた事ないじゃん。なになに、このクラスもいじめでも始めるのか？ 最初のターゲットはあたし？

優子は困惑して、座つたまま安西ひとみの姿を見上げた。

「忍と最近仲いいの？」

「はあ？」

なんだ、こいつ。なんていきなりそんな事訊くのぞ。

「ま、いいけど。少しぐらじ夢見れないと、学校も詰まんないもんね」

安西はそう言つてフフツと笑うと、自分の席に戻つていった。

「あれ？ 意味解んない……なんで、あたしが学校で夢とか見ちゃうわけ？」 1時間田はちやんと起きてた。

2時間田が始まつて直ぐに、優子に小さなメモが回つて来た。それは一葉からのものだつた。

優子は存在感が薄いだけで、別にみんなに嫌われているわけではないので、手紙やメモも普通に回つてくる。

優子は前に座る娘の背中に隠れるように、回つて来たメモを開いてみた。

『高森とはどうなつてゐるの？』

それだけ書かれていた。

「な、何だ？ みんな何か知つてゐるのか？」 昨日高森と会つた事を誰か知つてゐるの？

優子は首をすくめたまま、辺りを見回す。が、別にもう何時ものクラスの雰囲気だ。

ふと廊下側の列の真ん中辺りに座る一葉が振り返つて優子を見ていた。

目が合つたので、優子は肩をすくめて首を傾げるジョスチャーをした。

メモ用紙には『イミツ』と書いて再び一葉にまわしてもらつた。

その時前に座る武山睦実が振り返る。

「朝の出席の時さ、高森が、あんたがいなー事先生に報告してたよ。優子、最近高森と仲いいの？」

「そ、そんなわけないよ……」

「なんだ？ なんで高森が？」

「じゃあ、何で高森があんたがまだ来てないなんて言つのよ」

「そんなの……知らないよ」

つうか、そんな事他に誰か言つてくれる奴もいないのか？

そんなにあたしの存在は薄いのか？ でも、何で高森は言ってくれたんだろう……

優子は窓際の席にいる高森忍をこいつそり見つめた。

暗闇に消える彼の背中が蘇えた。

## 第9話（前書き）

遅い帰り道。

優子はまたもや偶然高森忍に会つ。

彼は信じられない言葉を口にするが……

放課後、家庭科実習のレポートを集めて職員室に持つて行った帰り、体育館寄りの階段を使って教室に戻るつとした優子は、一階の踊場で足を止めた。

この学校は、一階と二階の両方から体育館に出入りできる。体育館の一階には、女子用の更衣室が在るからだ。そして、その通路の先に妙な人だかり。

溢れるようなレベルではないが、なんだか黒や茶色の頭が扉の窓ガラス越しにうごめいている。

理由は判つていた。

バスケ部が紅白戦をするらしいといつ情報は、自然と優子の耳にも届いていた。

二年の相手は事実上引退した三年だ。

もちろん高森を見に来る連中も多いが、三年にもこの学校TOPレベルのモテ男が一人いる。

こいついう場では、普段そんな素振りを見せない連中もどりびりと彼らを眺める事ができるのだ。

どうせ、バスケなんてろくに知らないくせに……

優子は肩をすくめると教室へ向う。

正面から一葉が来て

「ああ、優子。試合もうやつてるのかな?」「もちろん、バスケ部の事だ。」「知らない」

「ちょっと見てくるから、待つててね」

「おいおい、これから一緒に買い物行く約束だろ。」

体育館に向つて走る一葉の背中を、優子は無言で見送った。

その日、学校帰りに久しぶりに一葉と買い物に出た優子は、日が暮れる頃に地元の駅に戻つて來た。

一葉がバスケ部の試合を20分も見ていたので、その分出かけるのも帰つてくるのも遅くなつたのだ。

小さな人波に紛れるように駅のロータリーを出て国道を渡ると、スポーツ用品店から忍が出てくるのが見えた。

一瞬足取りを緩める。

周囲の人の流れが彼女を追い越して四方に分かれてゆく。優子は何故かとつさに気付かない振りをして歩くペースを戻すと、そのまま歩道を進んだ。

うわっ、あたし何こそこそしてんの。でも、何て声かけたらいいか判らないし、こんな時は気づかない振りがいいよね。それがベストよね。

一緒に横断歩道を渡つた小さな人波は散り散りになつて、優子の前方に数人の人影があるだけで、彼女の周囲には誰の姿も無かつた。

「五十嵐い」

後から声が小走りで近づいて来る。

な、何であんたはわざわざ追いかけて来んのよ。別に一人で歩いて帰ればいいじゃん。

「あ、ああ。高森……今帰り？」

仕方無しに、優子は振り返つて微笑む。

あつ、あたし今高森つて呼び捨てにした？ でもいいよね。

同級生なんだしさ。

「ああ。五十嵐も今日は遅いんだな」

忍はそう言って、優子の隣に並んだ。

「うん、ちょっと友達と買い物」

「そうか」

そう言つた後、忍は少しの間沈黙する。

ほらほら、話す事無いならあたしに並ぶなよ。間が持たないんだからさあ。あんたが話さなきや、あたしは話すこと無いんだよ。

「あ、あしたから試合？」

結局優子は、沈黙に耐え切れず自分から声を出した。

「あ、ああ。見に来る？」

何であたしが区の総合体育館まであなたの応援に行くのさ。

「あ、あたし。あんまりバスケット解んないから……」

「そうか……」

優子が盗み見るように見上ると、忍は少し淋しげな笑みを零した。

な、なによ、それ。その哀愁を纏つた笑みはなに？ まさかあたしに応援して欲しいってんじゃないでしょ？

どうせクラスの何人かは応援にいくだらうし女バスだつているんだし、それにあんた、他の学校からだつて応援される事ぐらい知ってるんだからね。

「月曜は学校だろ？」

忍は正面に向き直つて言った。

「う、うん。何か火曜を振り替えにするんだよね……運動部の為でしょ？」

「ああ、そうだらうね」

月曜日は本来祝日で学校は土曜日から3連休なのだが、運動部は新人戦大会の為休む事ができない。

そこで、月曜日に一般生徒の授業を行い振り替え休日を作るという学校側の配慮だ。

優子は忍と肩を並べながら、何だかよく判らない気分に煽られて少々困惑していた。

忍が漂わせる雰囲気に何かを感じていたのだ。

なんだこの雰囲気は……何だか妙に気まずいような、甘酸っぱいような雰囲気……あたし超苦手なんですけど。

「火曜は、暇？」

「はあ？」

優子はあからさまに髪を振り乱す勢いで忍を見上げた。

が。 な、何いつての？ 何であたしにそんな事訊くわけ？ 理由を最初に言えっての。理由が解んないと、答えるのが怖いでしょう

..... ?

「暇だつたら、どつか行かない？」

忍は真っ直ぐ前を向いて歩きながら、サラリと言つた。

何言ひてんの「イツ 何でそんな事サ云々と言ひやうてるの？ 何だ、誰かを誘つたけど都合が悪かつたつて言うパターンか？ それとも完全にあたしをからかつてるのか？

「どう、何処かって？」

「ほら、お部活もないしさ、気晴らしだっていいか」「ま、ま、他の人誘えばいいじゃねー?」

(思考不能)

「そりなんだけど……五十嵐は忙しいの？」

答がおなじいが不思議なから、よしにてて作の妙を詰めなさい。

「べ、別に用事は、無いけど……」

うわ、言っちゃったよ。行きたいのかあたし。高森と出か

「じゃあ、決まりな

はあ?  
何が決まったの?  
何時決まったの?

「ううう、くまはーー時二尺四寸と

ええええええええ！！！ 決まったの？ そう決まったの？

「あなた、行きたいところ教えておけよ」

忍はそう書いて路地を曲がっていった。

何時の間にか家の近所の別れ道まで來ていたのだ。

優子はちゅうひり引き擎った笑顔で、反射的に手を振っていた。



「ねえ、明日里香たちと映画行くんだけど、優子も行かない？」

月曜日の学校。授業はあって無い様なものだつた。

へたに授業を進めると運動部の連中も後で困る為、毎時間自習と教材のビデオ鑑賞で午前授業は終わる。

終業のチャイムが鳴つて、一葉が優子に駆け寄つてきた。

「うん……えつ？ ダメだよ、あたし……」

「どうして？ 優子も観たいって言つてなかつた？ あの映画

「そ、そただけど、明日はダメ

「だからなんですよ」

「し、私用よ」

優子は机に手を突いて立つ一葉を見上げた。彼女は怪訝そうに優子を見つめる。

「最近、なあんか変よね。優子」

「そ、そうかな……」

なに、意外と観察されてんのか？ あたしの何が最近変なのかしら？

「まさか、高森と何かあつたりして」

一葉はそう言つて意地悪な笑みを投げかける。

「何かつて、何よ」

な、何気に鋭いのか、一葉。ここは何としてもシラを切り通さなくつちゃ。

「なあんて、そんなわけないよね

あたしの何処がそんなわけ無いのか。もつ、馬鹿にして。でも、明日だつてどうなるか判んないし、そう思われてた方がいいか。

「や、そうだよ。なんで高森が出てくるのよ」

「さうだよね。今頃試合は負けてんのに周囲にキャーキャー言われるんだもん。高森のヤツ

「そつなの？」

「ウチのバスケ部はそつらじいよ。試合に負けたくせに、『写真一緒に撮つてください』なんて事はしょつちゅうだつて」

一葉は空いている優子の前の席に腰を下ろすと

「3年の先輩たちも意外とモテてたもんね」

「そんなんにモテるんだ……」

「あんた、もしかして男に興味が湧いてきた？」

一葉は田をぱちくりとさせて優子を見る。

「な、何でそうなるの？」

「ま、それつていい事じゃん」

一葉はそつと立ち上がり、「あたしたちも帰らつ

日が落ちて、窓の外は暗がりが広がつていて。

優子はそわそわしながら、ジーンズに履き替えると佐助の散歩をしようと玄関へ降りる。

ちょうどその時玄関のドアが開いて直樹が入つて来た。手には佐助の散歩等リードが握られている。

「散歩、行つてきたの？」

「ああ、昨日で試合は負けちやつたから、身体もなまつてゐるしね」直樹はそつ言いながらスニーカーを脱ぐと、洗面所へ行つた。

せつかく佐助を連れて外を歩こうと思つたのに、ダメじゃん。

高森が帰つてるか調べようと思つたのに……

優子は高森から電話があるんぢやないかとそわそわしていたのだ。しかし、何時まで経つても電話は鳴らない。

普通、出かける前の日くらゐ連絡よこすよね。それとも、待ち合わせ場所は決めたから、それでお終い？ だつて何処に行くかも決めてないぢやないの？

優子は意味も無く玄関を出ると、門を出て通りを眺める。まるで高森の姿を探していくようにも見えるが、彼は普段この通りは使わ

ない。

一本奥の通りもそのまま国道まで延びているのだ。

な、何してんだあたし。別に明日が待ち遠しいわけでも高森に逢いたいわけでもないのに。

優子は急に我に帰つたかのよう庭に入ると、散歩を終えて満足顔でご飯を食べる佐助をチラリと眺めてから玄関のドアを開けた。

夕飯を終えて部屋に戻ると、優子はふと考へた。

そうだ、明日は何着て行こう？ 何処に行くんだろう。ジー  
パンがいいのかな、それともワンピース？ 意外とミニスカが好み  
だつたりして。えつ、何でアイツの好みなんて考へる必要あんの？  
ジーパンよ、動き易いジーンズに決まりじゃん。

その時携帯電話の着信が光つた。音より早くその光を確認した優子は、ワンコール目で携帯電話を掴んでいた。

電話を開いて液晶を見ると、着信表示は番号だけが出ている。  
高森に違いない。

ダメダメ、直ぐに出たらまるであたしが待ち遠しく思つてた  
見たいじやん。ここは少し引っ張つてから出るのよ。

彼女は5コール鳴つても出なかつた。

すると、電話が切れた……

な、なんですよ。あんた切るの早過ぎでしょ。女の子は色々あつて直ぐには出られない時があるのよ。10回はコールするのが普通でしうが。どういう神経してるのよ。

優子は着信番号を見て、リダイヤルするべきか悩んだ。

いやいや、何であたしから電話しなくちゃいけないわけ。誘つて来たのは向こうなんだからそんな義理ないでしょ。

すると再びコールが鳴る。

が、しかし、それは一葉からだつた。液晶に名前が出ていた。

どうしてこんな時に一葉が電話してくるのよ。何時もはメー

ルでしょ、あんた。

「はい……」

「ああ、優子？ 明日どうなった？」

「はあ？」

「いや、気が変わったかな。とか思つても」

「な、何の気？」

「本当は用事なんて無いんでしょ」

「あ、あるわよ」

「なあんだ、本当の用事なんだ」

なんで、いちいちウソの用事でもつたいつける必要があんのよ。あたしはそんな姑息じゃないっての。

「あ、あのさ、ちょっと人から電話入るから、切るね」

「うん、判つた。明日新宿で映画だからさ、時間できたら電話しなよ」

「う、うん。ありがとう」

優子はそれだけ言って、電話を切った。

ま、一葉も意外と友達思いなのかな。

## 第11話（前書き）

高森忍に突然誘われたテーート。

困惑しながらも優子は断る事は出来なかつた。

ついにその日の朝が來た……しかし彼女の体調は自身の邪魔をする

……

一葉の電話を切つて直ぐに、再度携帯が鳴る。

「こんなに連続で携帯に着信が来た事は初めてだ。」

「まだよ。もう少し待つてから出るんだから。でも、あんまり待つとやつきみたいに切れても困るし。」

優子は5回田の「一」ルを聞いて通話ボタンを押した。

「ああ、高森だけど」

直ぐに彼の声が聞こえる。

「あ、ああ、うん……」

優子はさり気ない電話の出方がよく判らなくて、一瞬あたふたする気持ちを何とか落ち着けた。

「明日、行きたい場所決めた?」

「えつ、ううん」

何であたしが行き先決めんのよ。あんたと行きたい所なんて判るわけないでしょ。だいたいあんたが何処か行こうって言い出したんだから、あんたが決めなさいよ。

「た、高森の行きたいところでいいよ……」

「じゃあ、映画でも行く?」

「え、映画?」

映画はダメよ。一葉たちとバッタリあつたらシャレにならな  
いじゃないの。

「映画嫌い?」

「う、ううん。嫌いじゃないけど、他のが……いいかな」

「あ、もう。これじゃまるで、何処でもいいって言つておき

ながら、相手が言つ事に反対するわがまま女みたいじゃん。でも、新宿じゃなければいいか。でも、新宿が嫌だって、なんか変だよね。

「し、渋谷なら映画でもこいけど……」

「ああ、別にこよ。渋谷でも吉祥寺でも」

「じゃあ、後はまかせる……」

新宿だけ避けられれば、何処でもいいや。

「わかった、じゃあ明日10時な」

「う、うん。それじゃあ」

おやすみつて言おうか。どうする? 言つてもいい時間だよね。でも何か、考えるとちょっと恥ずかしいじゃん。そんな事を考える優子だったが、しかし……

「じゃあ」

そう言つて、忍は早々に電話を切つた。

「あつ……」

優子は思わず携帯を見つめる。

「も、そんなにさつひと切らなくとも……まあ、いいか。

小さく肩をすくめると、今度は忍の番号をちゃんとアドレス帳に登録した。

\* \* \*

もう直ぐ10円と言つ事もあつて、空は晴れていだが風は心地よく乾いていた。

夏場に湿度の高い東京は、乾いた風が吹き始めると秋の香りを余計に感じるようになる。

窓から注いだ陽は、部屋の中を暖かく照らしてリビングのテーブルを白く光させていた。

そんな清々しい朝にも関わらず、優子の心中はどんよりとマジ

曇りだつた。

まるで、自分の中で灰色のブリキの太古が止め処なく音を立てているかのようだ。

「うううう。神様はあたしを見放したのね……やつとやつて違

いない。ただでさえイミフな緊張感があるのに、よつよつと何で……何時もなら後2～3日は後なのに……

優子はリビングのサイドボードの戸棚を開けて薬箱を取り出すと、

鎮痛剤を握り締めた。

ああ、もう行きたくないかも。なんで生理痛の酷いこんな日に出かけなくちゃいけないの。しかも、何で初日からこんなにスペシャルチックな痛みが襲ってくるの？

優子は薬をシートから取り出して口へ放り込むと、グラスの水で喉に流し込んだ。

うう、ヤバイよ。どうしよう……高森に電話するかな。でも次なんてあるのか？　だいたいアイツはどういうつもりでこのあたしを誘つたんだか皆目検討がつかないし……ただの気まぐれだったら、次は無い。

優子は深く息をつくとソファに横になつて天井を見上げ、少しの間瞼を閉じた。

下腹部のジンとした痛みを、頭のテッペンで感じる……

……

携帯電話の音で優子は目を覚ました。

一瞬何が起きて、今自分が何処にいるのか、朝なのか午後なのか混乱した。

混乱しながらも、テーブルの上で鳴っている携帯を掴む。

「よお、寝坊？」

爽やかな声だった。

あれ？　何だつけ？　……あつ、今何時？

優子は壁に掛けられた時計を見る。

10時30分になるところだった。

ああつ、薬飲んで、寝ちゃつたんだ……

「い、ごめん……今すぐ行くから

「ああ、急がなくていいよ。待ってるから

「う、うん……」

お腹はもう痛くなかった。

薬を飲んだのが9時過ぎだから、充分効いているのだろう。

優子は小さなバックと携帯を持って玄関に行くと、普段あまり履かないブーツを履いて外に出た。

今日履いたジーンズはこのブーツの踵に丈を合わせてあるから、他の靴では殿様のようになってしまいなのだ。

これなら少しは高森の背に近づくかな。

優子は9月の強い陽差に照らされながら、コツコツと小気味よい音を立てて駅まで急いだ。

渋谷で映画を観た後の少し遅いお昼時、ファーストフードの店に入ると、優子の中に不安の兆候が見え始めていた。

朝に薬を飲んでから、既に4時間以上経っている。

ヤバイ、薬が切ってきた。薬持つて来たっけ……？

席について直ぐ、優子はバックの中を漁る。

やつぱり持つて来てない……急いで出たからだ。どうしよう

めちゃくちゃベンチ。

不安の兆候は高まる一方だった。

とりあえずポーチを片手にトイレに立つ。

「ちょっと……」

「ああ」

優子が全てを言わないいうつこ、忍は声を返してくれた。  
ヤバイよ。薬……

不安と共に、痛みはあつと言つ間に身体の奥から湧き出でてくる。優子が席に戻つてくると、忍もトイレに立つて行つた。

周囲の席を埋め尽くすのは同世代が多い。誰もが楽しそうに話しこんでいるが、今の自分には無理な行為だと思つた。

この空間で自分一人が不幸に向かつて突き進んでいる気がする。彼女は既にメニューを見る余裕がなくなつていた。

お腹が痛くてテーブルに突つ伏すしかない。

どうしよう……お腹痛い……薬がないとヤバ~イ。

優子は何時も薬で凌ぐタイプだ。それでも何時も以上に痛みが酷いような気がするのは、何時もと違う環境のせいだろう。数分間がとてつもなく長い気がする。

薬のない不安が、余計に痛みを増幅させているかのようだ。

「おい、大丈夫か？ 具合悪いのか？」

トイレから戻つて来た忍が優子の様子に気づいて、席に駆け寄つ

てきた。

「「じめん……ちょっと……」

「どうしよう……生理って言えないよ……

「腹の調子が悪いのか？トイレに行つてきた方がよくなのか？」お腹を抱えるような彼女の姿に、忍は小声で言つた。

優子はテーブルに突つ伏したまま頭を小さく振る。

忍はほんの少し思案を巡らせるが、再び小さく声を出す。

「もしかして……あ、あれか？……あの日……つてやつか？」

優子は苦しそうにコクリと頷く。

もう何も思考する事は出来なかつた。

「どうすればいい？何時もは……学校ではどうしてるんだ？」忍はテーブルに顔を近づけて、優子を覗き込むように訊いた。ぎやあ、そんなに覗き込むな……

「薬飲んでる……」

「薬つて、正露丸か？」

馬つ鹿じやないの。正露丸でこのお腹痛が治るわけないだろう。それで、本当に成績トップなのか？

「鎮痛剤……」

消え入りそうな声で優子が応える。

「鎮痛剤か。今持つてないのか？」

優子は再び小さく頷くと「買つて来て……」

わああ、もうどうなつてもいい。この痛みが止まるなら、どうでもいいや。

「ああ。分かつた。ちょっと待つてろよ。そつきマツキヨが在つたから、俺行つて来るよ」

忍はそう言って立ち上がると、店を出て行つた。

「あ、いいや。早く買つて……」

来て……

その時、誰か女性の声が聞こえた。

「何処か具合が悪いのですか？」

優子はやつとの思いで顔を上げると、目の前には赤い帽子にHプロンの女性が立っている。この店の店員だ。

同じ女性なら話しが早い。

「生理痛が酷くて、でも、薬が無くて……」

「鎮痛剤ならどれでも大丈夫ですか？」

女性店員は優しい声で言った。

「と、とりあえずは……」

「ちょっと待つていて下さい」

女性の立ち去る足音が聞こえた。周囲の席が、少しだけざわめいているのが分かったが、優子はもう顔を上げる気力が無い。

少しすると、再び女性店員が近づいて来るのがわかつた。

「薬、お持ちしましたよ。お水もありますから、飲んで下さい」

「ああ、なんて優しい店員さん。渋谷の街も捨てたもんじゃないね。

優子はテーブルに手を置いて身体を起こすと、薬を口の中に入れてグラスの水を飲み干した。

「有難う御座います」

店員を見上げて優子は小さくお礼を言った。

周囲の視線を感じて辺りを見渡すのが怖かったので、再びテーブルに突っ伏した。

「少しの間こうしていいですか？」

「はい、よくならない時は遠慮しないで呼んでくださいね」

「はい……」

「ああ、なんていい人。今度このお店宣伝してあげるよ。

根拠の無い宣言を、心で呟く……

店員の立ち去る足音が聞こえて間も無く、誰かの足音が近づいて来た。

息が荒れているのが分かる。

「買ってきてたぞ」

忍の声だった。かなり走つてくれたのだろう、息が上がっている。

しかし優子は、既に薬にありつけた安堵で、危なく忍の存在を忘れかけていた……

優子の具合がよくなつて無事お昼を食べた後二人は、ファーストフード店を出た。

帰り際、もう一度あの女性にお礼をしなくてはと思った優子だったが、さつきの店員が見当たらない。

というか、はつきりと彼女の顔を覚えていないのも確かだつた。曖昧な記憶にある背格好で探してみるが、やっぱりない。

休憩にでも入つたのだろうと思い、結局改めて御礼は出来なかつた。

一人は駅前の百貨店に入り、展示場で開催されている絵画展を観る。

寄つていこうと言つたのは忍の方だった。どうやら、最初から予定に入つていたらしい。

「絵、好きなの？」

「何だか目を輝かせる忍を見て、優子が訊いた。

「ああ、意外か？」

「うん。自分でも描くの？」

運動と勉強のイメージは強いが、絵画のイメージは確かにあまり無いような気がした。

美術の時間彼がどうだったか……クラスの女子の半分はそんなことは知つてゐるのかもしれない。

しかし最近まで忍にも特に興味の無かつた優子には判らないのだ。考えてみると、忍に対しての予備知識が優子にはほとんど無い。他の女子ならば、ちょっととした好き嫌いの情報くらいは持つているのかもしれないが……

「残念ながら、そつちはからつきしでさ。だから、観るのが好きなのかな」

展示場内はヒロヤマガタや鈴木英人など、見覚えのある町のイ

ラストが原画サイズの版画で沢山飾つて在る。

「と言つても、普通のゴッホとかピカソなんかはよく解らないけど  
忍は笑みを浮かべて

「五十嵐は、絵は興味ないの？」

「う～ん。少しさ……落書きならするけど。でも、たまにはいいしてみるのもいいかも」

そう言つて身体を動かした優子の手が、忍の手に触れた。

ギヤツ！ て、手が……何だか一瞬暖かかつた気がする。  
ハツキリ言つて、優子が男性の手に触れたのはかなり久しぶりだ。  
もちろん意図的に触つたり繋いだりした事はない。

以前に偶然誰かの手に触れたのは何時なのかすら覚えていないのだ。

弟の直樹の手さえ、最近は触れた覚えはない。

ほんの一瞬だつたが、彼女は他人の体温に直接触れた感触が妙に  
生々しくて、相手も自分の体温を直に感じたのだろうかと思うと、  
とつやに声が出た。

「「」、「ごめん……」

「あ、ああ。別にいいさ」

忍はそう言つて笑うと

「五十嵐は、あんまり男の人と出歩かないのか？」

な……そんなこと普通訊くかあ。あたしつて、もしかしてそういうの丸出し？ それってヤバくない？

「あ、あんまり……」

はつきりつて中1以来あんたが初めてなんだよ。悪い？

「ま、そのうち慣れるだろ」

忍はそう言つて再び笑う。

何に？ 何に慣れるつて言つの？ 別にあんたになんか慣れ  
なくていいんだよ。それとも慣れて欲しいのか？

二人はぐるりと展示場を歩いて出口まで来ると、フロアのベンチ  
に腰掛けた。

優子はじぶし四つ分空けて忍の隣に腰掛ける。

「ここの後どうする？　帰る？」

「えつ？」

「もう、帰るの？　でもそんなもんか。別に行くとこないし。  
「また痛くなると、困るだる。とりあえず薬はあるけどね」

忍は優子を心配している様子だった。

身動き取れないほど苦しむ痛みが、あつと言つ間に引いてゆく優子の姿に不思議なイメージを抱いていたのは確かだつ。またあんな風に痛がられても、自分にはどうする事もできないと、いつ不安があるのかもしれない。

「もう、大丈夫だと思うけど……」

な、何言つてるの。まるで、あたしが帰りたくないみたいじやん。別にそんなんじやないのよ。高森ともつと一緒にいたいわけじゃないんだからね。

それともあれか？　めんべくさい女つて思われたのか？　高森がもう帰りたいのだろうか……

「じゃあ、少しブラブラするか。俺も暇だし」

「う、うん……」

優子は忍の言葉に、少しだけ安心する自分を感じていた。

彼が自分を邪魔くさいと思つていないと感じて、ホツと胸を撫で下ろす。

下ろす。

渋谷を暫くぶらついてから新宿へ出て中央線に乗つた。

後は家路へ向う一本道だ。

秋空は、火照つた夕映えに緋色の雲が波の様に浮かんでいた。暮色に近づく空を見上げて、優子の中に安堵が込み上げてくる。もう家に帰つていい時間のような気がしたのだ。

やつと今日が終わる……夕暮れまでいれば充分だつ。

そう思つと同時に、何だか短いような長いような不思議な一日が終えようとする景色に、ちよっぴり切なさを感じる。

電車の中ではあまり一人の会話は無かつた

丁度帰宅ラッシュの時間と重なつて下り電車は混んでいた為、二人共ドアの近くに並んで立つていた。

優子は隣で窓の外を眺める忍にチラリと視線を向け、それから窓の方を向いた。

ドア窓に映る忍の視線が優子を見つめていて、目が合ひつと彼は瞳を細めて笑う。

な、何？ その安堵に満ちたような優しい微笑みは。とりあえず何か喋りなさいよ。何だか意味深で分かんないよ。

優子も窓に映る忍に向つて、はにかむような笑みを送るだけだ。ビルの向こうに沈み切る夕陽は何だか物憂げに、ほんのりと優しく雲を照らしていた。

湯船のお湯が大きく揺れて波立ちバスタブの淵から僅かに零れると、流れるせせらぎが心地よく浴室全体に響き渡る。

排水溝に流れる水の音が心地いいのは、おそらく浴室だけだろう。

ああああ、今日は何だか疲れたあ……

優子は全身を湯船に浸けると、バスタブに背をつけて寄りかかった。

彼女はファーストフード店で的一件で、それ以前に見た映画の記憶がほとんど飛んでしまっていた。

もう、ほんと死ぬかと思った。体調の悪いときはデートなんてするもんじやないな。うん。……ていうか今日のはデートだったのか？ や、デートだよね。ま、あたしはただアイツに付き合つてあげただけだけね。

優子は中学以来のデートが、なんだかずいぶんバタバタした1日になつたものだと、今日を思い返した。

もちろん、バタバタしたのは自分のせいなのだが……

何だか妙に胸が苦しいし、あたし今日はずっと気を使いつぱなしだつたから、よっぽど疲れたんだ……

優子は再び息をついて天井を見上げる。

ううう、でもなんでこんなに胸が苦しいんだろう……身体の調子が悪い証拠なのかしら。ま、まさか、もしやこれって恋？ そうなの？ あたし恋に落ちてしまったの？

彼女は湯船のお湯を両手ですくって顔を潤す。

そして薄つすらと目を開け、どうにも苦しさを感じる自分の胸元に視線を下げる、思わず驚愕した。

淡いグリーンのレースつきの布地が、いやカップが胸を覆つたままだつたのだ。

ぎやあああああ！ あたしブラジャーしてるううう！ な、

なんで、どうしてブラ外すの忘れてんの？ こんな事つてあるか？

優子は思わず湯船から立ち上がった。

もちろん、下着はずぶ濡れだ。

パンツは脱いだのに、何故か上は着けたままだった……

ありえない……何やつてんだろう、もつ。

優子は慌てて下着を外すと、浴室の扉を開けて洗濯機の中にびしょ濡れのそれを投げ入れた。

再び湯船に浸かった優子は、今度こそ安堵の息をついて目を閉じた。

これよ、これ。気持ちいいじゃん。ぜんぜん胸も苦しくないじゃん。

しかし、何だが胸の奥で何かがキュッと萎むような、ちゅっぴり息が詰まりそうなもの苦しいに一瞬襲われる。

それは、高森と一緒にコンビニへ行った夜にも感じたものだった。優子はそつと自分の心臓に両手のひらを添える。

浴室の湯気と一緒にラームの香りが蘇えった。

翌朝学校へ行くと、何時もと変わらない風景が教室にはある。おはようと声をかけて来るのは一葉と里香くらいだし、いつもと代わり映えしない教師の授業時間が淡々と過ぎてゆく。

高森の様子も何時もと変わりない。

休み時間は男子の連中と親しく話して時折笑い声を上げる。

ただ、時折優子が視線を向けると、彼もこちらを見ているような気がした。

優子が視線を向けると向こうはそらすような気もするが、ただ偶然に自分の方角に彼の視線が向いただけかもしない。

だめだめ、過剰反応は禁物よ。昨日1回きりって事だつて在り得るんだし。だいたい、アイツだつて次の話なんてして無かつたじゃない。今朝会つても、別に普通だつたし。

も、もしかして、あたしは試されたの？ 自分にふさわしいかどうか試されたのだろうか……そして、めんどくさい女決定？ 薬買いにパシリとかさせちゃつたから？

そんな昼休みも大分過ぎた頃、後ろに人の気配を感じた。

「優子、ちょっとといい？」

後から声をかけてきたのは、安西ひとみだつた。

彼女に促されて、校舎裏の駐輪場まで二人は歩いた。

青空から注ぐ光は、聳える校舎に遮られて大きな日陰を作つている。なによこの女。どうも安西に声を掛けられると、不吉な予感がするのよね。

「あんたもずいぶん大胆なのね」

「はあ？」

駐輪場に着くと、知らない誰かの自転車の荷台に安西は躊躇無く腰掛ける。

背中まである長い黒髪が、風にはためいて揺れた。

「しらばっくれて……どういう手を使つてあんたが忍を誘い出したのかは知らないけど、彼に近づいても無駄よ」

優子は安西の言つている意味が判らなかつた。

「あの……よくわかんないんだけど……」

なんだ、この女。そんな訳のわかんない」と言つ為にこんな所に引っ張り出したのか？

「ボケ～つとしてるようで、けつこうしたたかなのね」

何いつてんの？ これだから勉強の出来るヤツはいやなんだよ。もつと率直に言つての。ていうか、あたしつてそんなにボケツとして見える？

「あたし、昨日見たのよ。あんたが忍と駅を出て行くのを」

ええええ！ な、なんでこんなヤツに見られちゃうの？ そ

う言えれば、安西の家はあの駅の反対側だつて、高森が言つてたつけ。

「いや、あれは……」

「ま。いいわ、別に。忍もたまには変わつたもの食べたくなつたんでしょ」

きいいいい。なにさ、人の事アボガドのサンドイッチみたいに言つて。だいたい、あんたは何 様なわけ。高森がいくら人気があつても、誰と出かけたつて彼の勝手でしょ。なんで、あんたがガタガタいうのよ。

「言つとくけど、あたし中学の時忍と付き合つてたんだからね。全てを知つてる仲なんだから」

安西はそう言つて自転車から降りると、そのまま校舎に向つて歩き出した。

安西つて、高森の昔の彼女だつたの………… ていうか、昔なら今は関係ないじゃん。一瞬ビビッて罪悪感湧いたよ。別にいいんじやん。でも、何よ、全てを知つてる仲つて……長い黒髪を揺らして歩く安西の後姿を見つめて優子は、何だか面倒な相手に最初に見られたものだと、深い溜息をついた。

「何よ、だいたい元カノに何の関係があるわけ。だいたいあなたの中学時代なんて興味ないっての……」  
「優子？ 何ぶつぶつ言つてるの。何だか考え方事が駄々漏れになつてるみたいよ」

一葉が優子の真剣な顔を覗きこむ。

放課後の駅までの道、一葉と一緒に歩く優子の口から思わず何時もの思考が言葉になつて漏れていた。

「えつ？ あ、あたし声に出てた？」

「何だか元カノとか、中学時代とか」

「あ、そう。あははは、何でもないのよ」

優子は声を出して笑つてみせると話をそらす。

「そう言えば、一葉つてブランドバック持つてたよね」

「うん、前に里香たちと一緒にバーゲンで買つたやつでしょ」

「いくらつて言つてたつけ」

「バーゲンだつたから、あたしのシャネルのバックは4万ちょいかな、里香が買つたのはもつと高かつたけど」

一葉は急にそんな事を訊いてくる優子に怪訝な笑みを見せると「確かあの時優子も誘つたけど、早起きがイヤダからつて来なかつたのよね」

そうだった。あたしは元々ブランドバックには興味がないから、早起きしてバーゲンに列ぶのがアホラシかつたんだ。ひとつくらい買つておけばよかつたのかな。そうだよね、今時の女子高生はブランドバックのひとつくらい持つてないと、イケてないよね。「どうしたの優子、ブランドバックでも欲しくなつた？」  
「つうん、何となくさ。一つくらい欲しいかも、とか」  
「優子もプラダのお財布持つてるじゃん」

あれは、お父さんがパチンコで取つてきた二セモノなんだよ

.....

「そ、そつだけど、財布は普段みえないしさ」

まさかバックでニセモノはイタイしね。

「最近円高とか言って、あんまり安くないからねえ」

「まあ別に、異常に欲しこうて言つわけじゃないけどさ。あたしの場合」

優子は早々に話題を切り上げると

「そ、そつ言えばそ一葉、高森にあたしの携帯教えたりした?」

優子はすつと疑問に思つていて。初めて忍から掛かつてきました携帯への電話。

彼はどうして自分の携帯番号を知つていたのか? クラス名簿で調べられるのは自宅の電話番号のみだ。

「ああ、そつ言えば携帯に高森から電話があつたんだっけ

「うん、それが何だか謎でわ」

「言われて見ればどうして優子の携帯知つてたんだろ。他の娘に訊いてみようか?」

「あ、いいよ別に。たいした問題じやないしさ.....」

アホか、そんな事みんなに訊きまわつたら、あたしがバカみたいじやん。全く事情を知らない連中は自意識過剰女つて思うだろうし、だからつて近況を説明するのは絶対イヤ。

「どうかで訊いたんだよ、きっと。それか、たまたま小耳にはさんで、それであたしにノート借りようと思つたのかも

「ま、そんなところうけどね」

な、なんだよ。少しほ否定とかしないわけ? 何が何でもあたしは、たまたまの存在なのか?

そして、優子は再び昼休みの出来事を思い出す。

「ねえ、安西つて中学の時高森と付き合つてたつてホントかな?」

「ああ、そつ言えば1年の時にはそんな噂あつたね」

「噂?」

チリリリン! と自転車のベルの音が聞こえて一人の視線は同時

に後へ向いた。

自転車に乗つた爺さんが、直ぐ後の路地をふらふらと横切る。とりあえず鳴らして走るタイプの爺さんらしい。

一葉は直ぐに視線を前に戻し、そして優子を見る。

「ほら、安西は私立の中学だつたでしょ。知つてゐる人いないのよ」「へえ、私立なんだ……でも普通そういう所つて中高一貫なんじやないの？」

「何か理由があつて、出たらしいよ。本人は家が引っ越ししたからつて言つてるけど、高森と付き合つてたならそんなに遠くに住んでたわけじゃないでしょ」「

「学校が違うのに、どうして一人は付き合つてたんだろ……」「

「塾が一緒だつたんだって」

「ふうん」

優子は鼻で頷いた。

一人で電車に揺られた後一葉と別れて駅を出た優子は、ドラッグストアの隣に在る大きな本屋に立ち寄つた。

雑誌コーナーを眺めていると、ブランドバックなどが掲載された雑誌を見つけて何気なく手に取る。

高つか。こんなのバイトでもしなくちゃ買えないよ。ていうか、あたしがバイトなんて、無理に決まつてるじゃん……

友達の一葉はファーストフード店でアルバイトをしている。だから自由になるお金もけつこうあるのだ。

しかし、優子は自分が知らない人だけの中でやつていけるとは、とても思えない。接客業以外のバイトも在るだろうが、他の従業員共々結局は知らない人たちの中に入るのだ。

絶対に些細なミスを繰り返してしまつだらつ……どう考へても自分が、みんなに認められる対応が出来るとは思えないのだ。

里香は家が金持ちなのか、バイトもしていないので何時も金回り

はい。

はあ、ウチのお父さんも株で一儲けくらうこじてくればなあ。  
データにブランドバックくらい持ち歩けるのこ……

優子は思わず雑誌のページをめくりながら溜息をもらした。

ハツ、あたし何考えてんの？ また高森が誘つてくれるので待ち望んで、今度はブランドバックでも持つてこじやれたカツコウでもするつもり？ そんなのムリムリ。

優子はパシッと勢いよく雑誌を閉じてそれを平台に戻すと、本来の目的であるコマックコーナーへ向った。

漫画の立ち読みに夢中になっていた優子は、ふと顔を上げて入り口のガラス戸に視線を向ける。外はすっかり暗くなっている事に気付いた。

腕時計を見ると、もう6時を過ぎてこる。

優子は本来買おうと想っていた本を手にとつて歩き出す。コミックのコーナーは店内の奥に在つて、小説や雑誌のコーナーを抜けてレジへ向う。

するとそこには忍の姿があった。

「あれ？ 五十嵐」

「あつ、い、今帰り？」

「ああ、練習再開だからな。五十嵐も今？」

「う、うん……」

優子は反射的に手に持つている本を後ろ手に隠す。

「うわっ、『トイ・トイ恋愛』コミック。どうしよう、今から棚に戻してくるわけにも行かないし……」

忍は袋詰めの本を受け取つて

「五十嵐も何か買つんだろ。レジ空いたぜ」

「う、うん……」

優子は出来るだけ手のひらで覆い隠すよつて、コミック本をレジカウンターへ置いた。

後に忍の気配を感じながら、それくわとお金を払つて商品を受け取る。

「帰るんだろ」

やつぱり忍は後ろで待つていた。

「な、なんでわざわざ待つてるわけ？ これって普通な事なのか？」

「うん……」

二人は並んで書店を出たが、忍が不意に立ち止まつたので優子も思わず立ち止まる。

「俺ちよつと、叔母さんの家に寄つてくから」ひげ回つていいか?えつ? それつて、あたしもつて事なのか? 何で他に寄る

といひあるのにあたしを待つてるんだよ。一人で行けばいいじゃん。

優子は一瞬返事に困つて、言葉を搜した。

「急いでる?」

「う、ううん。別に……」

「用事は直ぐだから、一緒に来いよ」

「、来いよつて何? それが寄り道に付き合つてもらつてどこ方か? 」

「うん、いいけど……」

結局優子は忍と一緒に何時もとは違う通りを入つた。

自宅の通りとは随分離れた路地だつたが、住宅街に沿つ通りはほぼ碁盤の目になつてるので、方角が一緒ならそう遠回りになるわけではない。

「直ぐ先なんだ。別に遠回りにはならないよ」

忍はさり気なくそう言つて微笑んだ。

どうこいつもりなの? 学校では相変わらずほとんど、いや全然話なんかしないのに、どうして外で会うと声をかけてくるわけ? もしかして、今流行りのシンデレラつてやつなのか?

優子はそんな事を思いながら「別に平氣よ」と笑つて見せた。

「今日、安西に何か言われてたろ」

忍は歩きながら優子をチラリと見て言つた。

「えつ、どうして?」

「なんか、声かけられてたからさ」

優子は苦笑して見せると「ちよつとね

「俺の事、何か言つてた？」

忍が再び優子をチラリと見る。

「何かつて？」

「いや、別に」

な、何よ。いつもがカマかけてやるかと思つたのに、もつ。安西と付き合つてたのって本当なの？

「な、なんですか……」

なんで、あんたは教室で知らん顔なの？ どうしてあたしに話しかけないの？

「何？」

「ううん、別に……」

そう言えば、前に高森が教室で声をかけて来た時、あたし逃げたんだっけ。だからか？ それとも、今日みたいに安西に睨まれるから？ だから、教室では控えてくれてるの？

優子はひとつ息をつくと、一端飲み込んだ言葉を思い切つて再び切り出そうとした。

「あのや……」

「ああ、ここだよ」

しかし、それを遮るようなタイミングで忍が声を出して、優子は結局何も言い出せなかつた。

「えつ、何か言った？」

「ううん。何も」

優子はブルブルと大きく首を振つて笑う。

「ちょっと待つてて、直ぐだから」

そう言つて、忍は旧家の渋い茶褐色の門を潜つて、中に入つて行つた。

優子は「ふうっ」と声に出して息をつく。

忍の入つて行つた旧家は、庭に大きな栗の木が聳えている、木造の立派な平屋だった。

庭の奥には石の塘路と小さな池が見える。

「こんな家、この辺にあつたんだ」

優子は独り語をつぶやいて、ふと通りを見た。

周囲には古い住宅が多いので、古くからある住宅街なのだ。

街路灯もまだ蛍光灯の明かりで照らすタイプだ。

しかし彼女はそこで目を留めた。

な、何やってんだ、アイツ。

彼女の視線の先に見えたのは、佐助を連れた直樹の姿だった。暗がりの街路灯で僅かしか見えないが、連れているあの不自然なシリエットの犬はどう考えても佐助だ。

直樹は旧家の家を塀沿いに覗き込みながら歩いていく。

優子はとっさに門扉を潜つて庭に入り、雑木の陰に身を隠した。少しして人の気配が近づいて来る。スニー カーの為足音はほとんどしないが、佐助の歩く爪音が僅かにカチカチという音を立てていた。

直樹は門扉の前まで来ると、首を伸ばすように中を覗いて再び歩き出す。

何やつてのアイツ……まさか覗き？

優子は塀際の雑木の陰から直樹の姿を覗いていた。直樹が歩き出したので、彼女も再び門の外へ出ると、旧家の先の路地を弟が入つてゆくのが見える。

めちゃくちゃアヤシイ……何やつてんのよ、アイツ。

「よつ、お待たせ」

優子が通りの向こうに立てて氣を取られているうちに、忍が外に出て來ていた。

「どうかしたの？」

「えつ、ううん。なんでもない」

あんな拳動不審な弟がいるなんて、知られちゃかなわない。さつさと離れよう。

忍が促すまま、優子は歩き出した。

旧家は敷地が大きい為、家の周りがぐるりと路地で囲まれてる。ちょうど、先ほど直樹が出て来た十字路へ一人が差し掛かると、再び直樹がそこにいた。

「直樹」

優子は思わず声を出してから、慌てて手で自分の口を塞ぐ。

「ね、姉ちゃん。何してんだよ、こんな所で」

「あんたこそ、何同じところぐるぐる周つてんのよ」

優子は弟の言葉に思わず返した。

「周つてないよ」

「周つてたね。あたしさつき見たもん。わざわざ通りの家の中覗いてたでしょ。イヤラしい」

「な、何で声かけないんだよ」

「あなたの拳動が異常だから、声も掛けられないじゃん」

「弟さん?」

忍が声を挟む。

「ああっ、そっだ、高森と一緒にたんだ。しまつたあ。

「うん、弟の直樹」

優子はそう言って、同じくらいの背丈の弟の頭を叩いた。

「ね、姉ちゃんの彼氏か?」

「ば、馬鹿。何言つてるの」

優子は慌てるように、再び直樹の後ろ頭を小突いた。

「ああっ、もう、この馬鹿ガキ。だから会いたくなかったのよ。なに直球な質問してんのよ。このよく解かない関係と距離を少しは感じ取れつつうの。

「あははは、面白い弟さんだね」

忍は爽やかに笑つて切り返す。いたつて平静だ。

「同じクラスの高森くんよ」

優子は直樹に向つてそう言つと、忍の方を振り返つて

「う、ごめんね、変な弟で」

彼に苦笑して見せると、再び直樹の方を見る。

「あんた、ここで覗きでもやつてんの?」

「ふん、わざわざの仕返しよ。こいつなつたら恥かかせてやる。

優子の中でも悪魔の囁きが聞こえた。

「ち、違うよ、覗いてたわけじゃないよ」

「じゃあ、なんでこの家の中覗いてたの？」

直樹は顔を赤くして、困惑して見せた。

「もしかして、舞衣？」

忍が言った。

「確か、舞衣は中学一年だけど、もしかして同じ学校とか？」

「誰？ 舞衣……ちゃんつて」

優子が目を丸くして訊いた。

「叔母さんの家の娘なんだ」

「何、あんたクラスメイトの家覗いてたの？ イヤラしい」

優子は目を細めて弟を睨む。

「そ、そういうわけじゃ……それに、同じクラスじゃないよ……今は」

「舞衣と親しくなりたいのかい？」

忍が再び言葉を挟んだ。

「親しくつていうか、1年の時は同じクラスでけっこつ話もしたんだけど……」

直樹は、2年のクラス替えで舞衣と離れてから距離が遠ざかり、話しをする機会も失つてしまつたのだと嘆いた。

「あんた、まさかずっと佐助の散歩の時はこゝでウロウロしてたわけ？」

直樹は頭をかきながら小さく頷いた。

「気持ち悪う。ストーカーじゃん」

「まあ、そんな気持ちも判らなくも無いけどな」

忍は笑つて直樹をさり気なく庇うと

「さり気なく、俺からも舞衣に声をかけておくよ」

「マジっすか？」

直樹の目が輝いた。

「あんたね、舞衣ちゃんがどう思つてるかで大分結果が変わるんだからね」

優子は直樹の腕を手の甲で叩いた。

「解ってるよ、そんな事」

それでも直樹は大分浮ついた調子で

「じゃあ俺、先に佐助と帰るから。姉ちゃんも真っ直ぐかえれよ。もう直ぐ飯だからな」

そう言って、駆け出して行つた。

街路灯の先で角を曲がった直樹の姿を最後まで見送る優子の表情が、何だか妙に頼もしい。

普段見せないような彼女の姿を、忍は静かに見つめていた。

「「」「めんね、変な弟で、  
ヤバイじゃん。高森に姉弟のアホな会話を散々見られちやつ  
たじやん……」

「いや、何だか頬ましいよ。やつはり五十嵐もお姉さんなんだな  
「そ、そんな事ないけど……」

優子は一瞬頬を紅潮させて俯いたが

「高森は、兄弟はいないの？」

「ああ、兄貴が一人いるけど、別に暮らしてるんだ」

「そう……」

「年が離れてるからな」

その後二人は少しだけ沈黙して歩いた。

高い塀に囲われた庭から柿木の枝が伸びているのが暗い街路灯に  
照らされている。

家の近所のはずなのに、あまり見覚えの無い景色は、何処か遠く  
へ来たみたいで不思議な感覚が彼女の心を満たしていた。

二人きりで知らない町を歩いているようだった。

優子は次の会話を探してみるが、自分から切り出すような話題な  
んて思い浮かばない。

な、なにか話しなさいよ。あんたが一緒に帰ろうって言い出  
したんでしょ。どうして時々黙るのよ。いつも間があたしは苦  
手なんだってば。

優子は、歩く度にサラサラと揺れる彼の前髪をチラ見した。

「た、高森ん家は、何時も何時ごろ夕飯食べるの？」

うわあ、めっちゃどうでもいい質問だよ。間が持たない適当  
加減がみえみえだつーの。

「俺が部活から帰ると直ぐかな。けつこつ時間はバラバラだけど、  
帰った時間には仕度が済んでるよ

「「」両親も高森を待つてくれてるんだ」

「いや、俺は何時も一人で食べるよ」

忍はそう言つて笑うと

「じゃあ、またな」

もう一人が別れる通りへ来ていた。

ぐるりと周つて違う路地から來たので、今日は優子が先に曲がる番だ。

「あ、うん。じゃあ」

優子は小さく手を上げて忍から離れようとした。

背を向けようとした彼女に忍が

「少し安心したよ」

「えつ？ な、何が？」

歩き出そうとした優子の足が止まる。

「男嫌いっていうか、恋愛には興味ないのかと思つてたからね」

「えつ？」

ポカんと彼を見上げる優子のカバンを、忍は笑顔で指差すと

「恋愛マンガ、好きなんだな」

「わつ、見られてたんだ……」「こんなコテコテの恋愛少女マンガ読んで、夢見てる女だと思われたのか？ 違うよ、こんな恋にこがれてなんて無いんだからね。

「ま、マンガはね……けつこう好き」

優子はそう言つてからもう一度「じゃあね

」

そう言つて小走りに家に向つた。

何時もの四人が集まつて和やかに、時には賑やかなのが五十嵐家の普段からの夕食の風景だ。

いがみ合つてゐるよう見えて、意外と姉弟は仲がいいし、夫婦は年中仲睦ましい。

高森は、何時も夕飯を独りで食べるつて言つてた。どうして

？ 父親は仕事で都合がつかないのかも知れないけど、お母さんは？  
高森って片親だけ？ いや、たぶん違うと思う。家に帰ると食事は出来るって事は、それを誰かが作って待ってるって事でしょ。共働きだとしても、夕飯を作った人が家にはいるって事よ……待つてるのは、食事だけなの？

優子はご飯を口へ運びながら、視線は中を舞つている。

「……ちゃん、姉ちゃんてば」

隣で直樹の声が聞こえて優子は慌てて視線を向ける。

「な、何よ」

「さっきの事、彼氏によろしく言つておいてくれよ」

「あんたつてば、他人を頼らないと彼女一人作れないの？ ナッサケナあ」

「ナンだよ、自分がたまたまいり男拾つたからつて」

「何よ、拾つたてのはあ」

優子はハッと気がついて

「それにね、高森は彼氏とか、そんなんじゃ無いんだよ」

「そうだよ。なんにも無いんだから、彼氏のわけ無いじゃん。向こうが口クつて来たわけでもないしさ。ていうか、アイツがあたしなんかに口クるかあ？」

だいたい、学校でほとんど話もしないクラスメイトと付き合えるほうが不自然だよ。確かにみんなの前で話しかけられても困るけどさ、例えば体育館裏に呼ぶとか、っていうか、それもいちいちウザいから……

「でも、よく言つボーカフレンドつてヤツだろ？」

「ナニ、レトロな事言つてんのよ。そんなんでも無いですか？」

優子は鼻の頭にシワを寄せて、憎たらしい顔で直樹に言つた。

「何だ優子、彼氏がいるなら隠さずに紹介しろよ」

父親の孝之助はそう言つて、わはははと笑つて見せた。

「そう簡単に親には紹介しないわよ」

母親は孝之助に向つて微笑む。

さすがお母さん、元乙女だつただけの事はあるね。

「だつて、何時別れるかも知れないじゃない」

杏子きょうこはそう言って優子ゆうこの方を見ると、穏やかな笑顔で

「ねえ」と言った。

な、なんて後ろ向き無な発想なの？ きっとあたしはお母さんのそんな部分を丸まるいこと受け継いだんだわ……だいたい、付き合つても無いんだから別れる事もないし、親に紹介するほど親しくもないんだから。

「ほんとに、そんななんじやないんだつてば」

優子は面倒くさそうに言つて、ご飯を口へ頬張つた。

翌日の学校。

優子は一葉と里香と一緒に教室の隅で雑談をしていた。  
優子が気軽に話せるのは、この一人くらいだ。

他のクラスメイトも女子とはひと通り片言の会話を交わした事はあるが、何となく仲良くなれない。

一葉や里香は、他の女子とも仲がよくて、特に一葉は社交的な性格もあって同性の間では人気が高い。

ただ、男子に対してもけつこうズケズケと言葉を発するタイプだから、中には敬遠する異性もいるようだ。

優子は彼女達と小さな笑い声を上げながら、対角状の片隅で他の男子と戯れる忍の姿を視界に納めていた。

日を追う毎に、いや彼と二人の会話を交わす度に忍への興味が増してゆく。

確かに自分をどう思っているかも気にはなるが、それ以上に彼がいつたいどういう環境で生活しているどんな人間なのか。

そんな事が気になるのだ。

それは、ある意味高森忍をもつと知りたいという欲求に他ならないのだろうが。

それでも優子は自分から忍に話しかける事はできない。

この内向的な性格が、急に変わるようならとつぐの昔に変わつているだろう。

優子にとつては、再び忍が声をかけてくる時、あるいは偶然一人きりで会う時を待つしかないのだ。

\* \* \*

金曜日の放課後、優子は図書室で古い書籍の整理をしていた。

本来図書委員の仕事なのだが、担任教師が図書委員の顧問で、人手が足りないと言うので借り出されたのだ。

珍しくモードには舟越の姿もあつた。

作業は単調だがなかなかはかどらなかつた。そもそも図書委員の仕事であるにも関わらず、肝心の彼ら彼女らはお喋りに夢中で大して手が動いていない。

不要な古い本を処分する為に紙紐で束ねて結わえるのだが、優子  
がもう10束も作っているのに、連中はまだ2~3束しか結わえて  
いないのだ。

つたぐ、何であたしが「こんな事しなくちゃいかないのよ。もうう。

近くにいる舟越は、話す相手がない為雑談には加わっていない

ものの、何だかボケッとして手が遅い。  
しかも結わえるのが下手で、彼が結わえた書籍の束は持ち上げた  
らいかにもほつれそうだ。

優子は気になりながらも、横目で見るだけで特に注意はない。  
関係ないよ。あたしは自分の仕事だけちゃんとやってればいい  
いんだ。舟越の面倒まで見れるかつての。だいたいコイツって、何  
考えてるのか全然判んないしさ。

「優子は高森と付き合つてゐるのか？」

な、何？ 誰？ 何処から声が？

一瞬、その声が何処からしたのか解らなくて、彼女は戸惑いながら図書室を見渡す。

「俺、見たぜ」

次の声で、その声が直ぐ隣にいる舟越が発しているのだと気付き、振り返った。

びつくりしたなあ、むづ。何処から声出しちゃんのよ、ロイッ。

腹話術でもやつたら上手く行くんじゃないの？」

「み、見たつて、何をよ

「み、見たつて、何をよ

「優子は怪訝そうに舟越を見た。しかし、彼は優子を見てはいなかつた。

いかにもとかしていない髪の毛。頬とおでこにさわらひと湧き出た二キビ。

優子はめつたに見ない、とこゝか別に見たくもない彼の横顔を仕方なく見つめる。

「この前の振り替えの休みや」

「それが、どうしたの？」

「ナニ、こいつ。ていうか、あたしに話してくるな！」つ向けよ。

「渋谷にいたる。高森忍とさ。俺、見たんだ」

「あ、あんたも渋谷にいたの？」

「なんだこゝへ、おかしな連中にまづかり見られるんだろ？……

「ああ、マツキヨにいたら、駆け足で高森が入ってきて、そのまま直ぐに出て行つたから後つけたんだ」

「なんで後つけんのよ。ていうか、マツキヨあんたは何してたわけ？」

「だ、だからどうしたつてのよ……」

「優子は少しだけ開き直つていた。もちろん、相手が舟越だからもある。

「……安西には気をつけた方がいいよ……」

「彼は、視線を下げたまま言つた。優子の顔は一度も見ていない。

「どうして？」

「俺、中学の時、あいつらと同じ塾だつたんだ……」

「へえ……て、答がおかしいだろ。安西に気をつける理由になつてないじゃん。あんたが何処の塾にいたかなんて、はっきり言つてどうでもいいんだよ。」

「そ、それが何の関係があるのよ

「高森と安西は付き合つてたし、安西はアイツに未練タラタラだから、逆恨みされるかも……」

「あの二人が付き合つてたのって、本当だつたんだ……でも、どうして別れたの?」

「安西が妊娠したのぞ」

優子はその言葉が聞き違ひであつて欲しいと思つた。聞きなれな言葉が頭の中をグルグルと取り巻いた。

「に、に、に、ニンシンつて、あの妊娠? 安西ひとみが

? 中学生の時に? それつて、た、た、た、た、た、た……

「それつて、た、た、た、た、た、た……」

「高森とじやないよ」

「? ? ? どういつ事? だつて二人は付き合つてたんでしょ? 」

「だつて、付き合つてたんじやないの?」

「俺も詳しくは知らないんだけど、高森の子供じやなかつたのは確かだよ」

「彼女が浮氣したつて事?」

「ち、中学生が浮氣相手の子供を?」

「さあね、判んないけど……でも、安西はまだ高森の事を好きだと思つよ」

「だから同じ高校へ来たの?」

「それは違うと思うよ。通つていた私立にいられなくて転校したのは確かだけど、この学校に来たのは偶然じやない」

「そ、そなんだ……」

何だかよく喋るわね。こんなに喋つた舟越なんて初めて見るわ。何だか氣味が悪いんだけど。

優子は手元の書籍にかけた紐を力強く引っ張ると

「どうしてそんな事、あたしに言うの?」

「べ、別に……何となく……」

「げつ、な、何赤くなつてんのコイツ。何照れてんのよ。キモ

いんだよ。

優子は小さなため息をつくと、舟越の手元を見て  
「あんたさ、もっと両側からちゃんと引っ張らないと結びが緩くな  
っちゃうでしょ、ほり」

そう言つて、書籍の結わえ方を結局教えてやつた。

優子が学校を出る頃には、既に外は暗くなっていた。

午後から曇っていた空は、何時もより早い時間に陽が暮れていたのだ。

気がついた時には舟越はもう帰ったようで、彼の姿は見えなかつた。いたとしても、絶対一緒に昇降口を出たくはないが……

街路灯に照らされながら、優子は駅までの道を歩く。

どうなつてんのよ、もう。部活の連中より帰りが遅いってどうこうことなの？

図書室での作業が終わつたのは結局5時半を回つていた。

部活は通常5時半までなので、運動部の連中も大半の生徒はひと足早く下校している。

まだ体育館には明かりがついていたのでこれから帰る連中もいるのだろうが、今現在優子の周囲に人影は無い。

さつきまで前方に見えたジャージ姿の二人組みの生徒は、路地を曲がつて見えなくなつた。

きっと、駅へは行かないのだろう。

途端に暗闇が荒涼な風景に思えて、ちょっとびり心細くなる。

その時、優子は不意に後ろから近づく足音を聞いた。

スニーカーのようだが、アスファルトを踏む足音が確かに近づいてくる。

何？ なんでそんな急ぎ足なの？ そんなに急いで何処に行くの？ 駅だよね、急いで電車に乗るんだよね。ただそれだけだよね。

彼女は心持歩くスピードを緩めて、後から近づく気配が容易に自分を追い越していくように配慮した。

さつさと追い越してもらって、足音の姿を確認したかった。

しかし、足音は優子の直ぐ後ろまで近づくと、スピードを緩める。

な、なんで？ どうしてあたしの後ろでスピード緩めるの？

なんてそのまま通り越して行かないの

従事する職業によって異なりますが、自然の風景

う、ウソ？ 何？ 通り魔？ 強姦魔？ 大丈夫よ、もう駄

は目の前だから。  
大丈夫。

優子は街の気配を感じながら、無意識に水ヶ原の挨拶言葉を握り締める。

後を歩く醍醐山の直ぐ後にはあつた  
二ノ丸の醍醐寺の山門の跡である。

た。

が立つのを感じた。

実際は握まれたどしより 軽く触れただけだったか……  
さやああああ！ やつぱり狙いはあたしなのね。

細い路地とかに連れ込まれるの？ いえ、このまま振り切つて逃げるのよ。駅までダッシュして、誰かに助けを求めれば助かるわ。ああ、でも、あたしの遅い足で振り切れるのか……？

「五十嵐」

しかし、それは聞き覚えのある声だった。

超ギガウたじゅなーの。運転席を離ナの前に車をかう

て。怖こじめなこのよ。

そう言つた忍の笑顔が、街路灯に照らされていた。

どうしてビックリして追いかけるの？意味解らない。

「ああ、『めん』『めん』。驚かす気は無かつたけど、暗いから、ギリギリ

りまで近づいて確認したかったんだ。もし人違いだつたらヤダる  
忍は相変わらず爽やかな笑顔で

「何でこんな遅いの？」

「うん、ちょっとクラス委員の用事で」

「本当はクラス委員とは関係ないんだけどね……」

優子はそこで、舟越から聞いた事を思い出した。  
横に並んだ彼から、思わず顔を背けるように歩く。

もう、目の前は駅だつた。二人は何となく黙つたまま駅の階段を  
上つてそのままホームへ降りる。

「なんか、機嫌悪そうだね」

「そ、そんな事ないよ」

この朗らかな笑顔が彼の全てを覆いつくして、全てを隠しているよ  
うな気がして、その笑顔の向こうが優子は気になりだしていた。  
彼は本当に見た目通りの人間なのだろうか……

もう、舟越のヤツ、微妙に詳しい情報をくれるもんだから、  
何だかギクシャクするじやないのよ。

「日曜は、暇？」

「えつ？」

「明後日、またどつか行かない？」

また、予想外の時に誘つて來たよ。相手の意表をつくのが趣  
味なのか？

優子は一瞬戸惑いの表情を見せたのだろう。

「なんか、予定ある？」

「な、ないけど……別に……」

優子は一呼吸置くと

「な、なんで……あたしを、誘つの？」

俯いたまま小さな声で訊いた。

「何でつて、いちいち理由が必要なの？」

「当たり前だ、バカ！ 何となく誘つてるのか？ 適当に誘つ  
てるのか？」

「そ、それって、誰でもいいんじゃないの？」

優子には勇気のいる言葉だった。

「こままだ何となく彼と過ごしていれば、自然に彼氏彼女の仲になる可能性だって充分あるのだ。

「誰でもよくな、無いよ」

だから、その理由を言えっての。

忍は一瞬置いて続ける。

「実はさ、お台場のホテルのホールでやる、ケーキ食べ放題のイベントチケット貰つたんだよ。他に行く人いなくつてさ」

なんだよ。今回は本当に他がいなかつたのか……ていうか、ケーキ食べ放題？ なんてステキなイベントなの。

「誰か誘つてみたの？」

「いや、誘えるような人が思い浮かばないし、ちょうど五十嵐がいたから」

「丁度なのか？ ていうか、ホテル？ も、もしや、その後は予約してるホテルに誘われるなんて事に……ダメよ、まだそんな事できなによ……」

優子の頬が思わず朱色に染まる。

しかし、食べ放題の後にホテルに誘つなんて事は、おそらく在り得ないだろう……

「か、考えておく……」

「な、なに勿体つけてんのよ。他の人誘われたらビリするの？」

高森と出かけたくないの？ あたし。

「ああ、明日は俺部活だから、夜にでも電話するよ。時間は確か……昼から3時頃までだつたと思つよ。かなり有名なパテシエも参加してるので」

「う、うん……」

二人はその後、何時もより混み合つた電車に揺られて地元の駅へ向づ。



車中の窓ガラスは、映りこんだ人混みでイッパイだつた。優子は焦点を遠くへ合わせて、外に浮かぶ住宅街の明かりに視線を移動させる。

その時電車が少し揺れ、優子の前方にいたサラリーマンがバランスを崩して彼女にもたれかかつた

「うわっ、オヤジ、ちゃんとつり革掴んどけよー。こつちはつり革に届かない位置なんだからさあ……」

優子はサラリーマンがぶつかつた反動で、後に身体を振られるが掴まるものが何も無かつた。

が、しかし、後から腰に何かが当たつて彼女を支えた。

「大丈夫か？」

優子を支えたのは忍の手だつた。

「きやつ、高森の手があたしの、こ、こ、こ、腰に……」

「こ、こ、こ、混んでるね……」

何時もの下校時間に比べて、会社帰りなどの客で車内は混雑していた。

「そうか、俺はこの時間に慣れてるからな

忍は優子に笑いかける

「俺に掴まれよ」

ええええ、そ、そんなラブラブ恋人同士みたいな事できな  
いよ。

再び電車が揺れて、腰に添えられた忍の手に身体を支えられる。

今日の電車はやけに揺れない？ スピード出し過ぎなんじやないの？ でも、ずっと高森に支えられてるのもなんだしつつ、これじや腰に意識が集中しちゃう。

優子は仕方なく忍の腕に掴まつた。

うわ、意外と硬いかも……ていうか、超ハズカシイ。

優子は周囲の客に埋もれるように電車に揺られながら、彼の腕が身体に当たる度、頬を紅潮させた。

駅に着いて電車を降りた時、優子は思わず大きく息を吸つた。混み合った電車の中は何時もより暑く感じたが、それは自分が火照つていたせいでもある。

「大丈夫？」

忍が優子の肩をポンと叩いた。

「う、うん。ありがとう、大丈夫」

そう言つた彼女だが、目の前の光景に思わず驚愕する。

一瞬頭の中がトリップして、何も考えられなかつた。

超ヤバイじやん。なんでこんな最悪のタイミングなの？

田の前に安西ひとみが立つていたのだ。

忍と優子が並ぶ姿を無言で見つめている。

長い髪が風に漂い、こつそりマスカラでも着けているような彼女の長い睫毛は微動だにしない。

その姿は、優子に得たいの知れないブレッシャーを『えた。

一瞬遅れて、忍も安西の姿に気付く。

「よう、ひとみ、何処か行くのか？」

彼は優子が思つていたよりも、ずっと気さくに声をかけた。

「塾よ。あたしはあなたみたいに優秀じゃないから」

ひとみはポツリと呟くように言つて、引き攣つた笑みを浮かべると

「ふたりでずいぶん楽しそうね」

忍に向つて言つた後、鋭い視線が優子を貫く。

あんたその視線、怖すぎなんだよ……

「帰りにたまたま五十嵐とあつてわ」

忍は何時もと変わらない素振りで安西に言つた。昔の彼女といふ雰囲気は全く感じない。

「そう、ずいぶん都合のいい、たまたまね」

再び安西の視線は優子に刺さる。

本当に偶然なんだってば。しかも声をかけて来たのは彼なんだよ……その敵意剥き出しの田は止めなさいよ。

「ほ、ほんとうに偶然だよ……」

優子は彼女の視線に圧倒されながら、力なく声を発した。  
「別に、どっちでもいいだろ。俺たちが一緒に帰つたつて、ひとみには関係ないんだし」

な、なんでそういう言い方するかな。誤解を大きくしてちゃうじゃないの。

優子は思わず忍の顔を見上げて困惑する。

「行こつ

忍は優子の手を取つて歩き出す。

ぎやああ、手え、繋いでる……あたし。

優子は忍に引っ張られるよつて歩を出すと、ホームの階段を上る。

「じゃ、じゃあね」

何とか声を発して安西に小さく手を振つた優子だったが、当然のように彼女は手を振り返したりはせず、刺さるような視線に変化は無かった。

忍は優子の手を掴んだまま、駅を出て通りを渡る。  
ちょうど横断歩道を渡り終えた所で、優子はさつ氣なく彼の手を振り解いた。

「あ、安西つて、高森と何があつたの?」

「どうして?」

「つ……べ、別に、何となく……」

誰がみたって、どう考えたつてあの視線は異常でしょ。何か限度を越えてるつていうから。

忍は何も言わなかつた。しかし、優子はそれ以上訊く事ができず、ただ忍と肩を並べて家までの道を歩いた。

家に着いて優子はふと思つた。

忍と繋いだ手の温もりを、思い出せなかつた……

低い空には雲が多く、その合間にから時々薄つすらと青空が覗いていふ。

10月に入つて雲はどんどん高くなる気がしたが、昨日と同じく曇り空は別だつた。

翌日の土曜日、優子は自転車に乗つて駅の反対側へ来ていた。クラス名簿の住所を頼りに、安西ひとみの家を訪ねてみようと思つたのだ。

いや、実際に彼女に会つて話をしようとは思つていないが、とにかく彼女の住んでいる場所を把握しておこうと思つた。

もはや、彼女の存在を意識しない事は不可能だ。

国道を少し走つて、駅に一番近い踏み切りを渡ると、見慣れない住宅街が広がつてゐる。

駅の反対側は、商店街の開発もあまりないので滅多に来た事が無い。

中学の頃は何人か友達がいたが、みんな違う高校へ行つてしまい、今では行く用事が無いのだ。

安西の住所は駅から少し離れた場所だ。

少し広い通りから路地へ入ると、一軒家の合間にアパートや小規模マンションが目立つ。

住宅街としては、優子が住んでいる場所より古いのだろう。かなり寂れたアパートも所々に目に付いた。

住所だとこの辺りなんだけど。なんかぼろい家が多いような

ふと辺りを見回した時、後に立つてゐる人影に驚いて振り返つた

優子は、思わず声を失つた。

「あ、安西？ な、なんでメガネしてるの？」

「な、何してんのあんた」

安西は黒い上下のジャージを来て、買い物袋を手に持つていた。  
そして、学校ではかけていない黒縁のメガネ。

黒い雲が低く空を覆いつくしていた。僅かに見えた青い空は何処にも無い。

「あ、あの……さ、昨日の事は、ほんとに偶然つていうかさ……」

「そんな事言つ為にあたしの住んでる家をわざわざ探してたつてわけ？」

メガネ越しの安西の目は、いつも異常に険しく感じた。

「べ、別に探してたわけじゃないけど……」

空からポツポツと小さな雨粒が落ちてきた。

それはバタバタという民家の屋根を叩く音と共に、あつと呟つ間に周囲の景色を飲み込む。

安西の立ち止まっている横に立つオンボロのアパートの石の門柱には、住所録に載つっていたコープ飛鳥という小さな札が掲げられていた。

忍もそうだが、安西ひとみも勉強が出来る割に、いかにもガリ弁といった風貌ではない。

確かに清楚で上品な装いだが、スカートはけつこつ短いし、どうやらマスカラや色つきリップもこつそり塗つていそうだ。さすがに髪の毛は黒いが、艶やかなそれを何時も揺らしながら歩く姿は自信に満ちている。

親しい友人は何人かいるようだが、独りでいる事も多い彼女は、あまり誰かと戯れるのは好きではないのかもしれない。

「う」「めんね、なんか、お邪魔しちゃって」

外は激しい雨音だけが響いていた。

急に振り出した雨に、安西は仕方なさそうに「入る?」 そう言つて優子をアパートの自室へ案内した。

赤く錆びきつた鉄の階段を上がつて通路を進むと、一階の真ん中に安西の表札が出ていた。

安西は優子にタオルを渡すと自分は風呂場で着替え、その後台所から熱い紅茶を持って来てローテーブルの上に乗せる。

六畳の和室が一間と小さな台所。そして小さな風呂場の隣にトイレがあつた。

台所の片隅に洗濯機が置いてある。

「家の人は、留守なの?」

優子は髪の毛にタオルを当てながら言つた。

「家の人なんていないわ」

「えつ?」

はき捨てるよつに言つた安西に、優子は怪訝な表情を隠せなかつた。

「「」は、あたし独りよ」

「ひ、独りで住んでるの？」

優子の問いかけに、安西は小さく頷いてカップの紅茶に口を着け  
る。

間近で見るメガネの奥の睫毛は、何時もより元気は無い。  
やつぱり普段はマスカラ塗ってるんだ……

優子は思わず関係ない思考が頭を過って、それを振り払う。

それにしてもどういう事だろう。なんで高校生のあなたがこんなアパートで独りで住んでるわけ？

しかし、優子はそんな疑問を訊く事ができない。

そもそも私立中学に通っていたか安西が、こんな絵に描いたよ

な古いアパートで暮らしている事自体に、大きな訳ありを感じたの

だ。

その訳は判らないが、わざわざ不幸話を聞きだそうなんて思わないのだ。

「ひ、ひとり暮らしなんて、すごいね……」

彼女はそう言つて苦笑しながら部屋の中を見渡した。  
言われて見れば家族で住んでいるにしては家具が少ない。と言つ  
か、家具らしいものなんて無いに等しいのだ。

普通は茶の間に在つていいサイドボードが無い。

在るのは小さな台座に乗つたテレビと、引き出しありのカーテンのつ  
いた幾つかのカラーBOX。

それと、いま紅茶の入つたカップが乗つているローテーブルだ。  
奥の部屋にも、ベッドと小さな鏡台意外は何も見当たらない……  
しかし、小さな鏡台には幾つかのコスメと無造作に置かれたコン  
タクトのケース。それとビューラー。

こいつビューラー使つてるし……

「目、悪いんだね……普段はコンタクトなんだ」

優子は間が持たないので、話題を変えようと思つた。

「今時、普通でしょ」

「安西は視線を下げたまま、紅茶を啜る。

「うわあ、話しの続かないヤツ。だから自分から話しかけるのは苦手なんだよ。」

一階の窓にもベルランダは無かった。窓際の雨樋を伝う水の音が、やたらと響いていた。

「な、なんだか凄い雨だね……」

「天気予報見てないの？ 毎から雨の確立70%よ」

そういう答を求めて言つてゐんじゃないっての。

優子は非情に居心地の悪い思いだつたが、今のところ外から聞こえる雨音は止まる気配は無い。

少しの間、沈黙と降り注ぐ雨音だけが部屋の時間を埋め尽くす。

「忍と付き合つてゐるの？」

唐突に安西が言つた。

顔は少し笑つてゐるが、目が全然笑つてしない。

優子は大きく首を横に振つて、それを否定した。

「そんなんじやないよ。たまたま会つただけだよ」

「そつ……別にいけど、親衛隊もいるから気をつけのね

親衛隊がいるつて、本当なのか？ ていうか、お前は違うのか？

「あ、安西は、どうして高森と別れたの？」

安西は静かに紅茶のカップに口をつけると

「そんな事、あんたには関係ないでしょ。男と女の間には、いろいろあるから」

そう言つてフツと笑つた。

「な、なんだよ、それ。関係ないならいちいちあたしを睨むなつての。ていうか、あたしをバカにしてんのか？ なによ、フツて？」

「に、に、妊娠した事、あるの？」

「誰に聞いたの？」

安西の表情が険しく変わつた。

優子はつい口から出た言葉に自身で戸惑つた。

「え、えと、誰だっけ……」

「舟越ね？ そうね？ そんな事ヨリのはアイツしかいないし、学校で知つてゐるような奴で思い当たるのもアイツだけだわ」

安西は再びカップの紅茶を飲むと、乱雑にそれをテーブルに置き

「あの木偶の坊でく……友達なんていないようだから油断したわ……あなたと繋がつていたとはね」

いやいや、全然。あんな男とは何の繋がりもないつてば……なんで勝手に繋げちゃうの。

「ほ、本当なの？ その話……」

「あんたはどう思う？」

し、知るか、そんな事。

「さあ……」

優子は少し俯いて首を傾げる。

すると、安西は少しだけ腰を浮かして

「あつ、そろそろ帰つてくれる？ 雨上がつたわ」

何時の間にか外の雨音は止んで、雲間から微かに陽が差していた。

玄関先で安西は優子に言った。

「覚えておいてね、これからあなたはあたしの一番の敵だから」

「ど、どうして？」

「決まつてゐるでしょ。三角関係なんだから」

れ、三角関係？ それって、よくドラマや漫画にあるあれか

？ そうなのか？ ていうか、どうこ<sup>ト</sup>うベクトルの三角なのよ……さつきあんた、別にいいけどつて言つたじゃん。

優子は言葉が出ないまま外通路に立つてゐたが、安西は容赦なくドアを閉めた。

バタンッと言つて、我に帰る。

まるで魔法の国にでも行つてゐたような気分だった……

何しに来たんだ、あたし。

結局何の成果も無いまま、後味の悪さだけを残して優子は安西のアパートを後にすると、自転車のペダルを踏んだ。

何が三角関係よ。冗談じゃないっての、もつ。

踏み切りを渡つて、元来た国道に沿つて駅前に向づ。

ついでだから、気晴らしに駅前の本屋へ寄つていつと思つたのだ。

しかし、横断歩道を渡つてドリックストアの前まで来た時、彼女は慌てて自販機の並んだ影に自転車ごと身を隠した。顔を覗かせて本屋の通りを見る。

直樹がいた。しかも、女の子と一緒にだ。

黒い髪を肩まで伸ばした、色白で小柄な娘だった。

何あれ？ ま、まさか彼女？ もしかして、この前言つてた高森の親戚の娘？

優子がコソコソ覗いている視線の先を、一人は仲良く歩き去つて行つた。

少しだけ射し込んでいた陽差は陰つて、再び雨雲が空を低く覆つていた。

夕方まで降つたり止んだりしていた雨は完全に上がり、雲間に小さな用がくつきりと浮かんでいた。  
優子は部屋のベッドに身体を投げ出したまま、天井を見上げていた。

三角関係といつ言葉が頭を埋め尽くす。

なんだか超めんどくさい。恋愛つてこいつのものなの？ ていうか、あたし恋愛してなつて。やうだよ。安西が勝手にどう思おうと知るか。

だいたい誘つてくるのは高森の方なんだから、あたしのせこじやないじやん。



翌日の日曜日。

優子は普段あまり履いていない白コットンのワンピースに、膝丈のレギンスを履く。

上に羽織ったピンクのカーデiganは、口の前一葉に薦められて買ったものだ。

こんな感じなか……

優子は、姿見の細長い鏡に掛けられたバスタオルをじけて、自分を映してみる。

スタンドの着いた姿見は滅多に覗かないので、何時の間にかタオルや制服の上着が掛かっていて用途をなさない場合が多い。

彼女は昨夜忍から掛かってきた電話に、結局OKを出した。

……別に断る理由も無い。優子はそう思つたのだ。いや、思う事にしたと言つた方がいいのかもしない。

優子は結局ピンクのカーデiganを脱ぐと、ライトグレーのZipパークーを羽織つて、小さめのメッセンジャーバックを肩に掛けると部屋を出た。

\* \* \*

「今日は、部活は無いの？」

「ああ、今週は意外と緩いんだ。練習試合が決まれば、また少しハードかな」

けつこう練習してんのに、なんであんまり強くないんだろう。他は、よっぽど練習してんのかな？

優子は忍と一緒に電車に揺られながら、お台場に向つていた。

「け、けつこうう頑張つてゐるのに、なかなか勝てないね」

優子は苦笑しながら言つ。

「そつだな、けつきょくウチなんかは凡人の集まりだしな。TOP レベルの高校は他県からも選手を寄せ集めるから、素質が違うよ」

「ああ、そうなの……」

「でも、凡人仲間じや、けつこう強いんだぜ。ウチの学校も」

まあ、それだけ練習してりやあね。少しほ勝てないと救われないじやん。

やたらと混雜したゆりかもめに乗ると、優子の身体は終始忍に密着しつばなしだた。

うわっ、混んでる……きつとじつ密着した中で、一人の関係は深まつてゆくのかも……

しかし、優子は火照つた自分の顔となんとも言えない息苦しさに耐えるので精一杯だ。

やつと少しば喋れるよつになつた忍とも、再び口数少ない時間を過ごす。

目的のホテルに着くと、一人は天井の高いロビーを抜けて3階にある大ホールへ向う。

同じエレベータには、いかにも「喰つぞ」という意氣込みを感じる豊満な女性が数人乗り合わせた。

優子のすぐ横に立つおたふく顔の女性は、微妙に汗ばんで何故か鼻息が妙に荒い。

この人たち絶対ケーキだ。それしか考えられないよ。絶対食べ放題だ。

優子が思つたとおり3階で彼女達も降りると、一回散にホールへ向う。

優子は思わず笑いが込み上りたが、忍がいる手前それを必死で堪える。

「高森は、甘いもの平氣なの?」

「ああ、俺は意外と好きな方かな」

二人は女性たちに続いてホールへ入ると、入り口で忍が一人分のチケットを切つもらひ。

大きな丸や四角のテーブルの上には、幾つものケーキが綺麗に配置されて、シャンデリアの明かりに照らされていた。テーブルもケーキとのコントラストを考えた色合いになつて、ホール全体が甘い香りに満たされている。

な、なんかお菓子の国に来たみたい……

ふと見ると、さつきエレベーターで一緒だつた女性数人は、もう皿イッパイにケーキを取り始めている。

いつぺんにどんだけ取るんだよ……

「何処から行く？」

忍が優子に小皿を渡す。

家の皿とは白の種類が違つよつな、スノーホワイトの皿だ。

「う、うん。何処でも」

優子はそう言いながらホールの中を見渡した。

一応、好きなケーキがあれば皿を付けておかなければと思つたのだ。

そうは言つても、どれも美味しいそうでただ目移りするばかりなのが……

ケーキの飾られた大皿の横には制作したパテシェやお店の名前が書かれたカードが置かれている。

ドリンクコーナーではバー・カウンターが設けられてワインやシャンパンも配られているが、もちろん優子たちは酒は飲まない。

大きな窓際には休憩用と思われる赤いソファが1列に並べられて、優子はアイスティーの入ったグラスを片手にその一角に腰を下ろした。

忍はコーラを持つて、隣に腰掛ける。

窓は大きなカーテンで閉じられているが、おそらく3階と言つてもあつてたいした景色で無い為だらう。

来た時にはそれほどでもなかつたが、何時の間にかホールは人で

溢れていた。

当然だがそのほとんどは女性だ。

女同士の連れや母娘らしい感じが目立つ。中には小ジヤレたカップルもいるが、男性は「ここ」でドリンクを片手に退屈そうにしている。

「満足した？」

忍が「コーラのグラスを傾けて言った。

「う、うん。かなり……」

もう当分はケーキ食べなくとも平気かも。

「ここにいる人たちは、みんな招待客なの？」

「いや、有料で入っている一般の人の方が多いと思うよ」

「高森はどうしてこんな所の招待状持ってるの？」

「ああ、親父に貰ったのさ。仕事の接待で貰つたらしく」

「そつなんだ」

優子はアイスティーを口にしながら、昨日弟が女の子を連れた姿をふいに思い出す。

「そう言えば、直樹に舞衣ちゃんの事紹介したの？」

「ああ、紹介つてほどじゃないよ、一人は元々知り合いだからね」

忍は氷を鳴らしながらコーラを口にして笑うと

「直樹くんが仲良くしたがつて、舞衣に言つただけだよ」

「ふうん、そんで上手くいつちゃうんだ」

「あれ、どうして？ あの一人上手くいつてるの？」

「あっ、うん。昨日一人で歩いてたよ」

「そうか、舞衣も少し意表をつかれた顔をしてたけど、嫌そうではなかつたからね」

忍はそう言つて「コーラを飲み干した。

「これからどうする？」

「き、キタつ！ ほ、ホテルの中でどうする？……なんか、異常に緊張するんですけど。どうするの？」

「ぶらつと、ショッピングモールでも見ようか？ それとも、観覧

車にでも乗る?」

「なんだ、やっぱホテルは直ぐに出るんだ。でも、えつ、観覧車?」

「か、観覧車?」

「ていうかそれって、ふ、二人きりの完全密室じゃない。ヤバイ、かなりヤバイよ。もつか、あたしの精神力……」

「とりあえず出る?」

「う、うん……」

優子はソファから立ち上がると、忍について出口へ向かった。  
ふと最初に会った豊満な女性たちが気になつてホール内を見渡す  
と、ちょうど人混みの外れに、まだ元気に食べているのが見えた。

第23話（後書き）

次回はいよいよ、優子の危機か……

外へ出ると、少し風が強くなっていた。

浜風が吹くので内陸部より冷たい感じがするが、昨日とは打って変わつて青い空が頭上高く広がつてゐる。

忍はさり気なく優子を観覧車の乗り場へ促して歩く。

か、観覧車いくのか？ 何気にあるた、乗りたいのか？ そ、それとも一人の密室で何かたくらんでいるのか？

か、観覧車に乗るの？

「ああ、せつかくだし。高いところ苦手？」

「ううん、そんな事ないけど」

まあ、いいか。観覧車なんて何時ふりだらう……確かに小学校の時に西武園の観覧車に乗つたよね。

観覧車のり場には行列が出来ていた。

意外に女同士もいるし、中には男の三人、4人組もいる。制服姿は、何処かの修学旅行生だろうか。優子から見てもなんだか初々しい。

列に並んで暫く待つと、優子と忍に順番が回つてきた。

ゆつくりと動くゴンドラに、忍は優子を先に促すと彼も乗り込んだ。

ドアが閉まつて乗り場から浮き上ると、もう誰も手が届かない完全な二人だけの密室が出来上がる。

優子はシートに腰掛けたまま地面が遠のくのを見て、奇妙な浮遊感に比例するように微かな不安が広がる。

はあ、これで二人は宙に浮いてるのね……何も無いよね。まさか、こんな爽やか男が突然襲つて来たりはしないよね。

優子は袈裟懸けにしたカバンのベルトを思わず掴んだ。

「何だよ、大丈夫か？ 高い所大丈夫なんだろ？」

忍は向かい側の席で微笑んだ。

窓から入る陽差が彼の頬を照らして、何だか少女コミックの表紙のようだ。

「う、うん。でもさ、この観覧車大きいよね」「ちょっとぴり引き攣りながら、優子も笑う。

「そうだよ、これデカくない？」

しかも、高度が上がる度に風が勢いを増しているのか、心なしゴンドラが揺れる。

地上はどんどん遠ざかって、少し離れた場所にさっきまでいたホテルの全貌が見えた。

そして、南側の青海の先には東京湾が広がってる。

小波が午後の陽差を受けてキラキラと輝いていた。

「キレイ……」こうして見ると東京湾も綺麗なんだ。

水平線には何隻かの貨物船が小さく浮かんでいる姿が見える。

「ていうか、何か話した方がいいのかな。でも、何を話そうか。あ、そうだ、昨日の事。安西の事訊いてみよっかしら……」

優子はチラリと忍の顔を見た。

すると、彼も優子を見つめていた。

「なあ、そつち座つていいか？」

「ええええ？！ そんなのダメに決まってるじゃん。なんでこ

つちに来たいの？ 充分声も届くし、会話には問題ないでしょ。

「い、いいけど、こつちに一人じゃあ、ゴンドラ傾かないかな？」

「大丈夫だよ一人くらい。合わせても100キロくらいだろ」

忍はそう言って席を立つと、優子の隣に移動して腰を下ろす。ゴンドラがゆっくりと小さく揺れた。

「こいつ、あたしの体重何キロあると思つてるんだろ……」

「ゆ、揺れるよ……」

「そりや、揺れるさ。支点がひとつだからな」

忍はそう言って微笑む。

「そんな物理的な回答は要らないんだってば。」

風が強いのか、僅かなゴンドラの揺れは少しの間続いた。

優子はお互いの肩がギリギリで触れなによつて、元の位置をやりす。

「優子は、好きなヤツとかいるの?」

「べ、べつに、いないけど。そんなの」

何? どういう意図の質問? あなたの事が好きだつて言つて欲しいのか?

「じゃあさ、とりあえず付き合つ?」

なんだ、そりや? 何サラッと言つてんのよ。口くるわけでも無く、どうしてあたしに同意を求める? こいつヤツパリ自信家なのか? しかも、とりあえず、なのか?

「そ、それつて、あたしたち……て事」

他に誰がいるんだよ。なに訊いてんだよ、あたし。

「ていうか、ここ俺たちしかいないし」

忍のあまりに普通な笑顔が、優子をより困惑させる。

「そ、そんなこと急に言われても……」

優子は少しだけ忍から身体を離すが、ゴンドラの中は意外と狭く直ぐに壁が在る。

「つか、あんたはあたしと付き合いたいわけ? そこん所をハツキリしなさいよ。とりあえずつて何よ……超失礼なんだけど。」  
「た、高森は他に好きな娘とか……いないの?」

「何だかさ、いないんだよなあ」

忍は両手を頭の後ろに組んで、天井を見上げる。

少し長い前髪が、鼻の頭から耳に向つてサラサラと零れるようになに落ちた。

だから、あたしの事はどうなんだよ。

「あ、安西は? 彼女の事、昔は好きだつたんでしょう?」

「ああ……」

忍は不意に悲しげな顔をして、反対側の窓から見える景色に視線を移した。

な、なによそれ。まるであたしがタブーな質問したみたいじ

やん。ていうか、訊いちゃいけなかつたのか？

「あいつ、昔はもつといい奴だつたんだ……」

「でも、別れたんでしょ……？」

「ああ、いろいろあつてさ」

忍は小さく微笑むと、優子の手をそつと掴んで振り返る。

「ず、ずるいよ。そんな悲しい笑みで迫るなんて……て、手が

温かいじゃん。ヤバイよ。

優子は身体の力が引き潮のように抜けてゆく気がした。

忍の顔が近づいてくる。

生まれて初めてのシチュエーションに彼女の鼓動が跳ね上がる。全身の力が抜けて、身を引くことが出来ない。いや、もう既に壁イッパイに背を向けていた。

それでも忍との身体の間に、無意識に手を挟みこんだ。

彼の息使いを、優子は鼻の頭で感じた。特大の瞳に虹彩の輝きが見える。

「、着いちゃうよ、口が。あたしの口に着いちゃうつてば。

優子は忍の胸に当たた手のひらを小さく握りこむと、目を強く閉じた。

超ヤバイ。でも、そろそろ経験時だよね。いい加減経験していくいいよね。これくらい、今時誰でもしてるよね。たいした事じやないよね。ね。ね。ね。

心の中で観念した気持ちが期待の波に漫食されるのを、優子は感じた。

唇に唇の気配が近づく。

と、その時突然、ゴンドラが停止した。

停止した慣性で、ゴンドラはゆっくりと、しかし割りと大きく揺れる。

「きやつ、何？」

優子は思わず、目の前の忍に抱きついた。

「何？この流れ。ていうか止まつてない？ これって止まつてな

い？ なんで……？

「な、何だろ？……」

忍も優子に抱きつかれたまま思わず呟いて、窓の外の様子を見下ろす。

下のゴンドラも小さく揺れているのが見えた。確かに観覧車は回転していない。

『ただいま強風の為、観覧車を一時停止します。慌てずそのままお待ち下さい』

天井に着いた小さなスピーカーから、明るいのにぐぐもつた奇妙な声のアナウンスが流れた。

ゲツ、これって強風で停止するの？

## 第24話（後書き）

沢山のアクセスをいただき、大変嬉しい限りです。  
お話はこれから少しづつ動いてゆきます。

## 第25話（前書き）

今後少し、学園モノらしく、学校行事のエピソードなどが入ります。

それは何処から降つてくるのだらう。それとも、地雷のように自分でも氣付かないうちに踏んでしまうものなのだろうか……

もしかしたら、相手の心が自分の心を空気感染のように少しづつ侵食して、潜伏期間を終えると、突然症状が現れるかもしない。それでもこれは違うのだ。そんな類のものではないと必死で否定する自分がいる。

夜空には銀色の欠けた月が煌々と輝いて、辺りの雲を照らしている。

優子は「ふうう」と息をついて湯船に身体を沈めた。今日はしつかり下着も脱いでいる。

ああ、もう。今日も疲れたあ。あたしつて、意外と母性本能強いのかな……ヤバかつたあ。でも、もうちょっとで初体験だったのに……あと5センチ無かつたよね。

優子は自分の指をそつと唇に当てた。

あんなに澄んだ悲しい瞳は始めて見たと思った。

優子は忍の悲しい虹彩の瞳に魂が吸い取られるような、微かな恐怖すら一瞬感じたほどだ。

それが彼を受け入れようとした意識のカケラなのかは判らない……揺れも風も収まつたゴンドラは、その後通常に動いて無事下まで到着した。

いちど邪魔の入つた甘い空気は、再び復活する事はなかつた。

それでも、帰り道に暗がりで再びキスでも迫られたらどうしようか、優子は氣が氣でなかつた。

が、何時ものように笑つて別れるだけで、何も無い。

そう、次の約束もないのだ。

あいつ、どういうつもりなんだ？ 全然読めないヤツ。

そして優子はふと思い出す。

あいつ、そう言えばあいつ何時の間にかあたしを優子って呼んでた。……えつ、何時から？ 何時から名前で呼ばれてたっけ？

「まあ、いいか」

優子は少しだけ浮ついた気持ちでシャンプーのボトルに手を伸ばした。

駅から学校までの歩道で見かける銀杏の葉が、心なしか色を変えている。

明け方少しだけ降った雨も上がり、青い空には高々と雲が流れている。

優子が教室に入ると、一葉が手を振つてきた。

さり気なく周囲を見渡す振りをして忍の姿を探すと、彼もじらりを見ていた。

優子は小さく笑つて、直ぐに田をそらす。

一葉が近寄つて来たからだ。

何時ものようにたわいの無い話などを直ぐにホームルームが始ま。

優子は一時間田の授業が始まつてから、思い出したよつて安西ひとみの姿を見た。

昨日は見られてないよね。大丈夫だよね。

彼女が言つた「敵」という言葉がどうにも不快だった。

誰かの敵になるのが平氣なら、もつと自分を出して社交的になれるのだ。

内向的な性格というのは、周囲の田を過剰に気にしたり、相手の反応を気にするあまり自分を出せない場合が多い。

そんな優子を明確な「敵」と呼ぶ安西を、彼女は不快に思つた。

6時間田のロングホームルームは学園祭でのクラスの出し物を決める。

もちろん、クラス委員の優子が議長で、とりあえず舟越は書記だ。そして、なんだかどうでもいいような連中のどうでもいい発言がクラスの適当な賛成意見を呼び込んで、優子のクラスはメイド喫茶を模擬店としてやることになる。

つか、いかにも流行りに便乗した安易な出し物なんだけど……まあ、喫茶店は定番と言えば定番か……つて、ええつ。なんで？

優子は黒板の文字を見て目を丸くする。

イベントの責任者が優子になつてているのだ。

「とりあえず、クラス委員に責任者をお願いしたいと思います」

最初にそう言つたのは安西ひとみだった。

誰もそんなものやりたくないの、直ぐに賛成意見でいっぱいになる。

その後に安西は再び声を出した。

「部活のやつていないうちが中心になるべきだと思います。文化部の人はもちろん忙しいし、運動部も準備の為に休めるとは限らないんだし」

な、なんて差別的な意見なの？ ていつか、安西だつて部活なんて行って無いじゃん。

優子は思わず安西に視線を送るが、それに答えるよつて安西は言う。

「あたしは手芸部の企画で忙しいし、手芸部？ コイツそんなおいしい帰宅部に所属していたのか。普段速攻で帰つて塾に行つてるくせにいい。

結局メイド喫茶の模擬店運営メンバーは優子をはじめ、一葉、斎藤美菜、谷脇みちる、千葉鈴香、稻本由香、その他3名の全部で8名だ。

親しい里香は部活があるので加わっていない。

それと、舟越は雑用係で加わっている。クラス委員だから。人選は極めて簡単で、他の人はみんな何らかの部活に入っているのだ。

もちろん当田や準備に参加できるものはできるだけ参加する。などと言う極めて曖昧で、いかにも参加しなくて誰も文句を言わない取り決めでホームルームは終了した。

「ねえ、メイド服つてどうするの？」

一葉が声を出す。

放課後、自然と模擬店メンバーが集まる。

「今ならこいつでもコスプレ用の服が売ってるけど、買つと高いでしょ」

みちるが加えて言った。

「やっぱ作るしかないでしょ」

美菜がそう言って笑う。

彼女はそれほど嫌そうな素振りは無い。話を聞くと、洋裁が得意なのだそうだ。

「じゃ、じゃあ洋服は美菜が中心だね」

優子は小さい声でまとめる。

「予算つて、どうなつてるの？」

再び一葉が言った。

「予算によつて、洋服も、飾りの具合も変わるでしょ」

「そつか…… そうだね」

優子は思いもしていなかつた事を言われて、少々動搖する。

「まだ日があるしさ、また明日考えよう」

鈴香がそう言って、もつ自分はカバンを持っている。よつほど帰りたいのだ。

「そりだね、予算計いておくから」

優子はとりあえずみんなを見渡すよつと言つた。

各自にカバンを手にすると、教室を出てゆく。

はあ……なんであたしが責任者なの……ていうか、やっぱあたしもメイドになるんだろうか……

重苦しい溜息を零す優子に、意外と楽しそうな顔をした一葉が

「帰る」

「イツ、意外と乗り気だな。

翌日、模擬店を出すクラスや部の集まりがあった。

完全なバッティングを防ぐ為の配慮だが、喫茶店、クレープ屋、カフェ等が全部で10店もある。

メイド喫茶、メイドカフェ、萌えカフェとの中の半分はメイド系を思わせる企画だ。

その他にも占いカフェやお絵かきカフェ。不思議カフェ？ なんてモノもある。

パソコン研究会ではネットカフェを持ち出してきた。  
学園祭に来てまでネットカフェに入り1日を潰してしまひ密は、  
なんだか悲しい……

模擬店などの出し物は文化部が中心で、クラス単位で出すのは全  
校内で6クラスのみ。

各学年2クラスと割り振られている。

その中でどうして優子のクラスは参加なのか？

答えは簡単。くじ引きで引き当ててしまつたのだ。

しかも、それを引いたのは優子本人だから、もはや文句も言えな  
い。

逆に責められなかつたのが不思議なくらいだ。

そんな中で、優子が少しホッとしていたのは、やはり同業種が多  
い事。

当日はメイドの姿がけつこつ多いから、自分たちもたいした目立  
ちはしないだらうと一安心した。

学園祭までは2週間ある。

まだ2週間もあると、誰もが楽観的だつた。

しかし、準備は進まないまま最初の土曜日まではあつとまづ間に

過ぎてゆく。

優子は模擬店のメンバーに仕方なく声をかける。

「あ、あのさ、今日詳しいこと決めないとヤバくない……かな」

「ええつ、あたし今日彼氏と出かけるんだけど」

鈴香が言った。

みんなの知るか。あんたも決められたメンバーなんだから少しは考えろっての。

もちろん他のメンバーも多少はやらなければという気は在るのだが、作業は面倒というパターンだ。

「でもさ、あたし洋服なんて作れないよ」

一葉が困惑して言つ。

彼女の指先が異常に不器用な事は、優子も知つていて。

前にデコレーションケーキを家庭科で作つたとき、彼女がスポンジに下地のクリームを塗つたら、それだけで妙に不味そうに見えた。「あ、あたしさ、みんなの分作ろうか？」

そう切り出したのは斎藤美菜だ。

彼女の母親は縫製工場で働いている。小さな工場だが少量生産のデザイナーズブランドを作る隠れ工場だ。

その影響か知らないが、美菜は洋裁が得意で手作業も早い。家にはロックミシンも在るという。

「ほ、ほんと？」

「うん。じゃあさ、こんな感じでどう？」

美菜は携帯デジカメで撮つたサンプルの写真を見せる。

モノトーンのシンプルなメイド服だが、エプロン部分の淵や衿と裾にレースを使つてているのでいかにもそれらしい。

美菜は自分で一着すでに作つてているらしいのだ。

「いいじゃん」

一葉が言つた。

ていうか、いつの間に作つてんだよ。もしかして美菜つて、コスプレの趣味でもあるのか？

優子も写真を見て、笑顔で頷いてみせる。

みんなもそれで納得しているようだ。

中には早く決めたくて適当に頷いている者がいるのも確かだが……

そんな感じで美菜が衣装を担当、他の連中は週明けから教室の飾りを放課後作る事で話はまとまった。

「ねえ優子、さつそく生地買いたいんだけど。そうすれば週末でかなり造れるから」

みんながバタバタと帰る中、美菜にそう言われた優子は彼女に付き合つて、さつそく帰りに生地屋へ寄る事にした。

バイトがあるといつ一葉と駅で別れて、優子は美菜と一緒に吉祥寺まで行く。

大きな専門店があるのだ。

店内に入ると、二人は生地コーナーへ向つた。

黒い生地、白い生地といつても何10種類もある。

しかし予算が少ないから選択肢は限られている。

優子がただ眺める横で、美菜はあれこれ手触りや光が当たった時の見え具合などを丹念に吟味して選んでいた。

買い物が終えた帰り、駅前のファーストフード店でちよつとだけお茶をする。

「ねえ、優子。最近高森があんたの事よく見てたりするけど、気付いてる?」

「えっ? そ、そうなの? ゼンゼン、気付かなかつた」

そ、そうなのか? あいつ、時々視線は感じるけど、やっぱり見てるんだ。あたしの気のせいじゃないんだ。

優子はさり気ない笑顔を維持しながら、バジルポテトに手を伸ばす。

ていうかあんた、そんなにしょっちゅう高森の事見てるんだ。

「高森つて、安西と噂あつたけど、どうなんだろ?」

美菜がカップを手にして言った。

「ど、どうつて?」

「今は全然一人で話してる事なんてないし、本当に昔付き合ってたのかな？」

「ああ、どうだろうね」

「いや、昔付き合ってたらしよ。ホント。

「み、美菜も高森の事、好きなの？」

美菜は両手でココアのカップを持って、虚ろな視線で何処か上方を見上げると

「好きっていうかさ、あいつ見ると何かこう、カッコイイ服とか作つてあげたいなあ。なんて」

そっちかよ。ていうか、あんたの趣味って何？

「美菜つて、よっぽど洋服作るの好きなんだね」

「あたし、洋裁の学校に行くんだ。そして将来コスプレ用の洋服メイカーを作れたらなあって」

そういう方向か……でも、将来の目標がちゃんとあるんだ。

あんたスゴイよ。

「へえ、すごいね」

優子は美菜に笑顔を送ると、一階の窓から見える駅周辺の雑踏に視線を移した。

空が緋色に染まつて辺りが暮色に変わる頃、二人は電車に乗った。美菜が電車を先に降りるので、「じゃあ、お願ひね」と手を振つて別れる。

修学旅行のグループ以来、普段あまり話もしない美菜だが、改めて一緒にいると何だか気も使わないしけつこう楽だつた。既に将来の目標が在ることに、ちよつぴり衝撃を受けた。

将来どうしたいかなんて、優子はほとんど考えた事もない。

それでも来年の今頃には少なくとも高校卒業後の進路は決めているのかと思うと、何だか気持ちが鬱屈する。

高森は、やっぱ大学行くんだろうな。しかも、あたしが行けないようなところ。

美菜と別れた後、再び学校最寄の駅を通りて優子の家まで向う。電車が減速してホームに進入すると、複数の学生の姿が見えた。もちろん、優子の学校の生徒が多いが、他の学校や中学生、サラリーマンやオーラの姿もチラホラいる。

そんな景色の中で、優子は忍の姿を見つけた。

周囲の顔なんて全然見えてないのに、不思議と彼の顔ははつきりと見えた気がする。

電車の風圧を受けて、パタパタと髪の毛やボタンを開け放したブレザーがはためいていた。

あつ、そうか部活が終わつた時間なんだ。

優子は改めて腕時計に視線を向けたあと、ドアに顔をくつづけて通り過ぎた彼の姿を探した。

完全に停止した電車のドアが開く。

忍がいたのはホームの中央だった。降りる駅の改札口へ上の階段がその場所に在るからだ。

優子はさつきまで一緒だつた美菜に合わせて先頭車両近くに乗つ

てた為、だいぶ距離がある。

彼女は忍が乗り込むある二つ車両中央に視線を向けるが、人混みで見えない。

な、なに探してんだる、あたし。別にいいじゃん、どうでも。優子はふと自分の行動が恥ずかしくなつて、閉まつたドアの窓から再び真正面の景色を眺めた。

電車の風圧で髪をたなびかせる忍の姿が、ちょっとぴり凜々しく感じたのは事実だ。

電車が走り出しつゝ少しすると、乗客を搔き分けて誰かが近づいてくる気配がある。

「よお、何処か行つて來たの？」

手前の学生とサラリーマンの隙間から忍が姿を見せて声をかけてきた。

あたしが見えてたんだ……動体視力つてやつか？

優子は思わず心中が軽やかで晴れやかになるのを感じて、再びそんな自分が恥ずかしくなる。

少し俯いたまま上目遣いで忍を見ると

「うん、模擬店の買い物」

「ああ、そうか。やつぱメイドの格好するの？」

そ、そんな嬉しそうに言わないでよ。

「うん、とりあえずね」

「服は？」

「美菜が作るつて。彼女洋裁得意だから」

あんたにカツコイイ服作りたいつてさ。

「そりや、ちょっと楽しみだな。遊びに行くよ」

「う、うん……」

ていうか、あんまり来て欲しくないっていうか……メイド服の自分が想像出来ないんだけど。

空は紺青に変わり、駅前周辺は連なる店頭の明かりが煌々満たして、住宅街には街の灯<sup>ひ</sup>が燈つている。

優子は忍と一緒に駅のロータリーを出ると、何時ものように通りを渡つて帰り道を歩く。

「ね、ねえ。あのや、どうして」飯は何時も独りなの？

「えつ？」

「ほら、夕飯は何時も独りだつて」

「ああ、夕飯以外も独りだけど」

「そうじやなくて。家族でいるのに不自然でしょ。て訊いてんのよ。

「な、なんで？」

「ああ、ウチ、今の母さんは後妻だからな。話すと長いけど、母親は俺の事を息子とは思つてないんだ」

「最初のお母さんは？」

「さあね。俺が小さい時に出て行つたよ」

忍はわりと明るい口調で言つた。

「な、何よその超ヘビー級な話は……やっぱり訊いちゃいけなかつたのかな。ていうか、そんな事全然知らなかつた……

「そ、そんなんだ……」

優子はそれつきり口を閉じた。下手な事は訊かない方がいいのだと思つた。

下手に相手のことを知つてしまつと、その人の重荷を自分で背負い込んでしまいそうな気がして怖いのだ。

安西の事だつて事情はよく判らないが、独りで暮らす姿を見て以来、彼女に微かな哀愁さえ感じてしまつ。

「そう言えばさ、日曜日空いてる？」

国道の歩道から住宅街に入ると忍が口を開いた。

「ま、まだ。どうして急に誘つてくるかな。しかも空いてる

? とか言つて、あたしがこいつも暇なの知つてるくせに。

「べ、別に予定は無いけど。でも、学園祭の準備で用事が出来るかも」

「ま、たぶんそれは無いけどね。」

「じゃあさ、暇だったら朝電話くれよ」

「わわわわわ、そんなの出来るわけないだろ。あたしから電話なんて絶対ヤダ。」

「で、電話は……高森がよこしてよ」

「やうか、じゃあ明日の夜に電話するよ」

「う、うん……」

「はあ、それならいいや。」

優子は安堵の思いで忍に手を振つて別れた。

第28話（前書き）

少しづつ、高森忍という人間が明らかになります。

「あたしに触らないで！」

母親は少年に言った。

少年は差し出した小さな手を慌てて引き戻す。

……僕はお母さんと手を繋いだ事が無い……僕はお母さんに抱きしめられた記憶が無い。

少年は困惑した。

母親は拒絶を繰り返した。

自分の子供を抱けない。

自分の子供に触れられない。

自分の子供を愛せない……

愛する事は努力で補えなかつた……それは、こここの奥底から自然に湧き出るものだから。

いくら義務感や責任感で後押ししても、どうにもならないのだ。

少年が5歳の時に母親は家を出て行つた。

……僕は人に愛される人間になりたかつた。母親が僕を愛せなかつたのは、きっと僕のせいだ。

だから、誰にでも愛される人間になる必要があった。

勉強も運動も誰よりも優れた完璧な子供。誰からも好かれる清い子供。

小学校も中学も、みんなが少年を見ていた。

……みんなが僕を見ていた。担任も学年主任も、友達の親さえも

中学の時に最愛のパートナーを見つけたと思った。

純真無垢な彼女を僕は愛し、彼女の愛を求めた。

でも違っていた。

彼女は恋という感情に溺れるだけで、愛は無かつた……  
そして周りの人間は本当の自分を見ようとしない。  
そんなものには興味はないのだ。

少年は再び優等生の仮面を被った孤独という塊の生き物になった。  
周囲から注目される視線だけが、密かな彼の心の癒しとなっていた。

実際自分でも、何処からが仮面で何処からが生身なのかもう判らない……

しかし、高校へ入るとみんなが自分を見ているわけでは無い事に気づいた。

自分に興味を示さない連中がいることを知った。  
……何も感じない彼女の心に、俺は入り込めるのだろうか……彼女は本当の俺をどう受け止めてくれるだろうか。

\* \* \*

結局日曜は暇だったので、優子は忍と出かけた。

まだ美菜が洋服を縫っている状態だから、自分たちには特にやる事がない。

本当は教室の飾りつけなども考えないといけないのに、あと一週間で何とかなるだろうとみんなが思っていた。

忍が行きたいと言つたのに付き合つて、表参道の古着ショップへ二人は入つた。

「古着好きなの？」

忍の小奇麗なイメージからはあまり想像できないが、よく見ると

ジーンズは古着っぽい。

「ああ、けつこつ買うよ、古着」

忍はそう言つてジーンズの山となつた棚を抜けてハンギングのロナーを物色する。

優子は初めて入つた古着専門の店内を珍しげに眺める。薄つすらと洗剤か何か薬品のような匂いが店内を埋め尽くしていた。

奥の方には、意外とレディース商品も多い。

彼女はラメの入つたセーターなどを手にとつては、元に戻す。

ブラブラしながらキディーランドにも入り、久しぶりに竹下通りなども通つてみる。

相変わらず人の頭が凄い。

途中で路地へ入ると、忍に促されるまま雑貨店に入つた。

なんでこんな路地裏の店知つてんだけ……？

とある売り場に行くと、忍は迷いもせずに商品を手に取る。

「お、お香好きなの？」

「ああ、けつこつ買うかな。部屋で焚くと意外と落ち着くよ」

最近はお香といつても、フルーツ系など甘い香りも多い。優子も彼につられるように何点かお香を買つてしまつ。

こんなの部屋で焚いたら、煙くならないのかしら……

店を出ると、正面で誰かが声を上げた。

「あつ、優子じやん」

優子は田の前の二人を凝視した。

分黒く見えた。

「す、鈴香……」

クラスメイトの千葉鈴香は、全体的にひょう長い彼氏と一緒に歩いて来た。

「何？ なんで高森と優子が一緒なの？」

鈴香の瞳は興味と驚きでイッパイの輝きだ。

学校内で男女が付き合つ場合、一通りが存在する。

一つは自他共に認める公認カップル。この場合は違うクラスや違う学年同士が付き合つ場合が大半だ。

そしてもう一つは、お忍びカップルだ。

これは周囲の連中には内緒で付き合つパターンで、同じクラスや、その他知られたくない立場同士の場合が多い。

何気なく何時の間にか付き合つ出すパターンも、このケースになる事が多いのは確かだ。

「あんたたち、何時から？」

「ち、ち、違うんだよ。あたしたち、そんなんじゃないのよ」

「じゃあ、どうして一人でこんな所歩いてるのよ」

ああ、こんなメジャーな場所には来るんじゃなかつた。ついでか、東京はこれだけ人口がいるのにどうして知り合いにバッタリ会つちゃうかなあ、もう……

「これは、その……」

「まあ、いいじゃん。そんな事」

忍が笑つて言つた。

「別に悪くは無いけどさ、高森つて変わつた趣味なんだ」

鈴香がそう言つてクスリと笑う。

そりやあ、どうこう意味だよ。

「そんな変わつてるかな？」

「変わつてるよ。先週だつてD組の佳穂にコクられたんでしょ？  
彼女だつてけつこう人気高いから、かなりイイ線いけるつて噂だつたのに」

なんだそれ？ 全然知らなかつた。こいつ、そんなに頻繁にコクられてんのか？

優子は思わず忍を見上げる。

もちろん彼が校内で人気の在る事は充分知つてゐるが、まさかコクつて来る勇者がそう頻繁にいるとは思わなかつたのだ。

いつの間にコクられてんの？

つまり、安西が言った親衛隊とは過去忍に振られた連中を指すのだろう。

親衛隊と言つよつは、彼と一線を越えて親しくする連中を妬む輩だ。

「へえ、優子がいるから断つたんだ」

鈴香は薄つすらと笑いを浮かべて二人を交互に眺めた。

忍は意味深な笑みで「さあ、どうかな

ど、どうかなつて、なに？ でも、確かにあたし、まだあんたと付き合うか決めてないんだよね……

優子は忍から視線を離せなかつた。

少年は自分がみんなに好かれる人間になれば、母親は戻つて来る  
と信じていた。

学年でトップの成績を取つたのは小学3年生の時だ。

その後はずつとトップを取り続けた。

5年生の時には副会長、6年生の時には生徒会長にぶつちぎりで  
当選した。

しかし、母親は戻つて来てはくれなかつた。

中学二年の時に、父親は再婚して、本当の母親には一度と会え無  
い事を知つた。

新しい母親はいい人だつた。

しかし、彼女は父親の妻あつて自分の母親ではないと思つた。

それは、彼女がもたらす雰囲気からも何となく感じた。

父親は仕事が忙しかつた為に、自分の息子の面倒は見なかつた。  
母親がいないうまはずつと家政婦がいた。

給料の要らない家政婦。

それが今の、母親と言う肩書きの女性だ。

習慣と言うものは恐ろしい。

もう誰からも好かれる人間になつても仕方がないと知りながら、  
他の自分が見つからない。

自分はいつたいどんな子供だつたのかなんて忘れてしまつた。

いや、物心ついた時にはもう、人に好かれようと努力していたの  
だ。

だからきっと、今の自分が本当の自分で、それ以外には何もない  
のかもしねりない。

……俺の内側って、空っぽなのかな……

\* \* \*

裏路地とはいって、そこは店舗が軒を連ねて度々人が交差する。少し入り組んではいるが、表参道に抜ける事ができるのだ。コツコツと石畳を打つヒールの音が通り過ぎていった。

鈴香は再びフフッと笑い声をあげると

「優子じゃあ、内緒にもしたいよね」

なつ、どういう意味よそれ。どうしてあたしと付き合つのは内緒にしたいのさ。内緒にしたいのはこっちだよ。へんなどばっちり受けるのはあたしなんだから。

ていうか、付き合つてなんかないんだつてば。

「そんな事はないけど、優子が周りに知れるのは嫌かと思つてさ」

忍は鈴香に向つて言った。

「確かに沢山妬まれそうだもんね。あたしもショックだけど」

鈴香はそう言つて直ぐ

「じゃあ、とりあえず頑張つてね」

「人と一人は路地で場所を入れ替わるようにすれ違つ。

鈴香の隣にいたひょろ長い彼氏は、最後まで一言も声を発しない。

「あ、あ、あのね、鈴香……」

「判つてるよ、内緒にしておいてあげる。こんど何かおじれよ」

鈴香はそう言つて優子に笑顔を送つて立ち去つた。

彼女はある意味、何処かで優子を馬鹿にしていた。

暗いといふか存在が薄くて、クラス委員のくせにいてもいなくてもクラスは変わらないし、普段からそんなに親しくしていたわけでもない。

嫌いなわけではないが、まったく目立たない彼女を何処かで見下

していた。

しかし、忍と二人で歩く彼女の姿を見て、素直に女として認めたのだ。

どういう経緯があつたとしても、自分で見た光景は眞実なのだ。

優子は忍と二人で出かける間柄なのだ。

「そういうんじゃ……」

そういうんじゃないんだよ。ていうか、そう見えて当たり前なのか？

優子が困惑して忍を見上げると、彼はいたつて平然と鈴香に軽く手を振つていた。

少しカーブした路地の先に鈴香の後ろ姿がまだ見えたが、優子と忍は歩き出した。

こうして見ると、高森忍は校内で人気の在るのは確かだが、誰もが自分の彼氏にしたいと思つてゐるわけではないのだ。

ある者は憧れの眼差しで、ある者は知り合い、又は友達で在る事で満足している。

確かに出来れば付き合つてみたい男なのかもしれないが、校内生活を楽しくする為のアイテムなのかもしれない。

鈴香のように、他に彼氏のいる女子が「高森好き」と公言する様は、まさしくそうなのだ。

しかし、中には安西のように本氣で忍を好きな女子がいるのは確かで、優子は何時そんな連中から目の仇にされるかわからない。

そんな中、優子の心は迷つていた。

忍の心が判らないから……

自分をどう思つてゐるのか明確に判らないまま何となく時間だけが過ぎてゆく。

自分が彼をどれだけ好きなのかも判らないし、本当に好きかも判らない。

そんなものは形や量がはつきりと示されるものではないから、もしかしたら永遠に判らないままかも知れない。

みんなは、何を基準に好き嫌いを測るんだ？「……」  
なつたら好きだって証になるのかしら……

## 第30話（前書き）

中間あらすじ

忍に誘われるまま、彼との時間が増えてゆく優子は、自分の気持ち  
が解らない。

人を好きになるのに、度合いの基準はあるのだろうか……

そんな中、安西ひとみの一言で、優子は学園祭で出す模擬店の責任  
者になってしまった。

大きな平屋造りの軒先には、空っぽになつたツバメの巣がひつそりと残つていた。

縁側の長い廊下に置かれた丸い金魚鉢に朝の光線があたつて、熟した鬼灯（ほおづき）のような魚たちの背はウエットグロスのように輝く。

母親は何故か金魚鉢で金魚を飼うのが好きで、今時の水槽を使おうとしない。

「週末、学園祭ですって？」

「ああ、僕はあまり関係ないけど」

「やっぱり見に行つた方がいいのかしら」

「別にそんなのいいんじゃない」

靴を履いてから、振り返つて応える。

「……今まででだつて、來た事なんてないじゃないか。

「でも、他のご父兄とかは見に出かけるんでしょう？」

「みんながみんな、親が來るわけじゃないし」

「……どうせ、たまたま同じ学校の父兄にでも会つて情報を聞いたんだろ。」

「昨日、久しぶりにほら、安西さんのお母さんと駅で会つてね……」

忍は母親に向つて微笑むと、彼女の話の続きを遮るように

「そんなの気にしなくて大丈夫さ。そういうのに来ない親はたくさんいるんだから」

彼は玄関の引き戸を開けると、外へ出て陽差を頬に浴びた。僅かな開放感が、心の中に薄く漲る。

\* \* \*

週明けの月曜日。

美菜は早速自分で作ったメイド服を学校に持つて来ていた。

既に3着が出来上がっているらしい。

とは言つても、これからレースの部分など飾りを各自で着けるのだ。

放課後みんなが帰った後で、美菜は大きなカバンを開けて係りのみんなに衣装を披露した。

シンプルだが、確かにメイド服だ。

みんな珍しがつてとにかく手に触れてみる。

黒い部分はサテンを使つてるので、材料費の割りに高級感がある。

早速衣装の飾り付けが始まった。

レースは作り売りのモノを利用してスカート部分の裾、そしてエプロンになる部分の淵に取り付けるだけだ。

美菜に教えられながら優子と一葉など最初に充てられた連中が家庭科室でミシンを踏む事に。

「ねえ、ボビンケースって、どうち向きだっけ？」

ふと声の方を見ると、鈴香がいる。

「鈴香、今日はデートじゃないんだ」

一葉が皮肉を込めて言つた。

いつもさつさと返りたがるのに、珍しく残つてしているからだ。

「まあ、何だか自分の男が急にショボく見えちゃつてさ」

そう言つて鈴香は優子を見る。

な、なんであたしを見るのよ。ていうか、それってどういう意味？

「鈴香の彼つて、北高でしょ。けつこう背が高かつたよね」

一葉の作業を手伝う美菜が会話に入る。

「背は高いけどね、顔が負けるよ」

「負けるって、だれに？」

美菜がそう言つて鈴香を見ると、彼女は再び優子を見ていた。

だ、だからなんでこっちを見るの。自分の彼氏と高森を比べてるのか？

優子はそんな視線を返しながら、ボビンの向きを彼女に教えてやつた。

優子たちは毎日居残りで模擬店に使う衣装を作ったが、他にもやる事があった。

教室の飾り付けだ。

自分たちだけメイド服なんかを着て教室がそのままでは、余計に浮いた存在になってしまつ。

教室内を見合う飾りで覆う事で、何とか恥ずかしさも凌げるというものだ。

この週になると、どこも居残りして自分たちの模擬店の準備に掛かっていたので、放課後の校舎は何時に無く賑やかだつた。

廊下に出ると、何時もは閑散としている風景に明かりが灯つて笑い声などが聞こえてくる。

一つ隣のクラスは季節はずれのお化け屋敷をやるらしい、何だか妙に騒々しい。

向こうは男子が多いようで、どうやら客の脅かし方の練習をしているようだ。

男女を交えた大きな笑い声が、時折響いてくる。

優子たち衣装が完成した連中は、大きな看板の制作に取り掛かっていた。

ポスターカラーで模造紙に文字や絵を描いて木の板に貼り付け、周囲には色とりどりの飾りを立体的に着ける。

「ねえ、あんた高森とはもうしちやつたわけ？」

筆や絵皿を洗いに洗面所へ一緒に行った鈴香が、優子に小声で訊

いてきた。

優子は洗つていた絵皿を思わず取り落として、それに当たった水道の水が大きく跳ね上がる。

「きやつ」

優子は急いで絵皿を拾うと、顔にかかつた水滴をぬぐつて  
「そ、そんなの何もないってば。そんなんじやないんだから……」

なんていきなりヤッタ話に飛ぶんだよ。

鈴香は確かに日曜日にバッタリ会つた事を誰にも言つてないよう  
だつたが、こうして一人の関係に興味深々だった。

「しつかし、高森の趣味があんたとはねえ」

な、なによ。まるで高森がゲテモノ好きみたな事言つて。あ  
たしだつてあんたと比べたつてそんな変わらないレベルでしょ。ち  
ょっと影は薄いけど……あたしだつてちょっと氣の効いたボキヤブ  
ラリーを覚えた日にはね……まあ、いいか。

「だから、この前はさ、たまたま一緒にいただけなのよ  
「たまたまつて、何よ」

「いや、だからたまたまお互い暇だつたつていうか……」

優子は何枚かの絵皿を洗い終えて、水道の蛇口をひねつて水を止  
めた。

「暇だつたら一緒に出かける仲なんですよ

「いや、でも何時もつてわけじゃ……」

どうしてそんなに突つ込むのさ。どうだつていいじやない人  
の事なんて。あんたは彼氏がいるんだしや。

鈴香は洗つた筆を何本か纏めて手に掴み、シュッシュ一振り空を切  
つて水切りすると

「そういう一人を世間では付き合つてゐつて言つのよ

「そんなの、おかしいよ

洗面所を出る鈴香を優子が追いかけるように言つた。

「なに？ 優子は高森の事嫌いなの？」

「そ、そういう事じやなくて……」

「じゃあ好きなんでしょ」

「そ、そんなのまだ判らないじゃん……」

「なに中学生みたいな事いってんの?」

「鈴香は少し苛立つたように鼻で笑うと

「でもさ、何気に安西とかが知つたら、あんた睨まれるだろ?」  
「ど、どひじて?」

優子はわざとじりばつられて応える。

「だつて、昔噂だつたじゃん。安西が高森の元カノだつてさ。同じ

クラスだとキツイね」

「そ、そういうえば、そんな噂あつたね……」

「いや、どうか、とつくに睨まれてんだよ。

「数日は毎日6時頃まで残るのが当然で、優子たちは暗い中を帰るのが当たり前になっていた。

もう明日が学園祭初日の校内公開。明後日は一般公開だ。

「もう準備万端だね」

一葉がそう言って、当田は廊下に立てる予定の大きな看板を教室の壁に立てかける。

室内は色画用紙で作った飾りでいっぱいになり、けっこう華やかだ。

テーブルは机をくっつけて使うが、その上にはギンガムチェックの布が掛けられているので、かなり可愛らしい装飾になっている。

「食材は明日の朝届くんでしょう？」

一葉は優子に確認する。

「うん、一日分届くから」

「しかし、ウチの男共は薄情だよね。全然手伝わないじゃん」

結局模擬店関係者以外は度々様子は見に来るものの、ちゃんと手を貸す生徒はいなかつた。

確かに運動部は今日も練習があつたようだし、文化部は各部の出し物でバタバタしている。

それだけに、各学年6クラスあるにも関わらず、クラスで模擬店を実行するのは全部合わせても6つなのだ。

他の模擬店は部活単位で出すと言う事だ。

それでも一般教室を使う部が入り込んできた為、今日は何時もに増して放課後の校舎は賑やかだった。

一葉がふと視線を下げる時、もくもくと輪飾りを作る舟越が教室の隅にいて、彼女をチラリと見た。

「な、なによ。あなたはクラス委員なんだから、やつて当たり前でしょ」

同じ存在感が無いにしても、今となつては舟越が優子を完全に上回っている。

「ちょっと、輪の大きさが全然違つてるじゃない」

舟越の作った輪飾りを見た一葉が再び声を上げる。  
今まで彼の存在同様、その作業に誰も注意を払つていなかつたのだ。

かなりの量の輪飾りを舟越が作つたが、大きさが全部バラバラだつた。

「ほんとうだ、ちょっと笑えるんだけど、これ  
鈴香もその飾りを手にとつて見る。

「自分だつてたいしたもの作れないくせに……」

舟越がぼそりと言つて、一葉が作った色画用紙のいびつな花飾りに視線を向ける。

「あ、あたしはそれなりに頑張つてんのよ。あんたみたいにボケッ  
とやつてるわけじゃないし、他にも忙しかつたんだからね」

「まあ、もう時間ないしさ、これはこれで大丈夫だよ」

優子が仕方なく割つてはいる。

「そうね、こんな輪飾りもいいかも」

美菜も飾りを見て言つた。

つうが、もう充分足りてるのに、なんであんたは輪飾りしか  
やらないの？ しかもまだ作つてゐし……

優子は思わず息をつくと

「舟越も、もう帰る準備しよう」

彼女にそう言われた舟越は、よしやく作業をやめて辺りを片付け始めた。

「優子、最近ちょっと強くなつた？」

そんな光景を見た一葉が、優子の肩に手を置く。

なによ、その強くなつたつて表現は？ じゃあ、今まであた  
しは弱かつたのか？

優子は苦笑しながら「な、何がよ……」

「優子は弟さんいるから、元々はお姉さんなのよ」

美菜がほのぼのと笑つて、最後まで舟越が作つていた輪飾りを壁に貼り付けた。

優子たちが校舎を出る時、もつほんどの準備は終わつてゐるようだつたが、1年と3年のクラスにまだ明かりが着いていた。途中で別れる連中に手を振ると、優子と一葉と美菜、それと鈴香が同じ駅まで行く。

美菜と鈴香は優子たちとは逆方向に向かう電車に乗り込んだ。優子は車内の一葉に手を振つて別れるとホームに降り立つて、何時ものように駅の階段を上る。

この駅は、階段を上り切つて少しで改札口があり、その先が左右の出口に向かつて分かれている。

優子は改札を抜けてふと反対側の出口へ向かう通路に田中が留まつた。

安西だ……どうしたんだろ。ひ。

安西ひとみは年配の女性に腕を掴まれて何かを言い合つてゐる。補導か？ いや、まさかね……もしかして、お母さんとか？ そう考えて見れば、二人の骨格は何處と無く似てゐる気がする。一人が何を言い合つてゐるのか声は聞こえてこなかつた。ただ、引っ張る女性の手に、安西は首を大きく振つたりして拒絶を露にしてゐる。

おかしな勧誘つて事はないよね。安西がそんなものに引っ掛けつて立ち止まるはずないもんね。

優子が思わず立ち止まつて見つて見つて、安西は年配女性の手を強く振り解いて駆け出し、そのまま階段の先に消えていつた。

残された女性は安西の消えた先を何時までも見つめている。

その眼差しと装いに、彼女が安西の身内の人間だという事が確信できた。

人それぞれいろいろあるんだな……

優子はこの前見た、安西が独りで住む淋しげで殺風景な部屋を思い出した。

確かに安西は好きではない。

クラスでも表向きは親しげに会話を交わしているくせに、彼女に嫌悪を抱いている女子は多い。

でもそんな安西の孤独な暮らしひ一面を見た優子は、どうしても彼女を本気で嫌う事は出来なかつた。

安西の荒々しい気性の影には、どうしても悲しい過去が……何か大きな影が見え隠れしているような気がした。

それはなんだか、忍の笑顔の裏側に見え隠れするものに似ている気がして、胸の奥がほんの少しだけキュッと締め付けられる。

安西と絡んでいた女性がふいに振り返つたので、優子は慌てて自分が降りる方向へ歩き出した。

学園祭初日。

身体にムチ打つ思いで何時もより大分早い時間に学校へ来た優子は、届いていた食材を受け取つて教室に入り、今日のチェックを済ませると校舎の外を眺める。

校舎の端にある正門から入つてくる生徒の姿が、なんだか虫の大群のようだ大勢見えた。

何時もは自分が誰かに見られているのかと思うと、何だかその光景に優越感が湧く。

「おはよう」

教室の戸を開けて入つて来たのは美菜と一葉だった。

今日は体育館で直接朝礼の後3時まで解散になるので、教室へ来るのは模擬店係りの連中だけだ。

一葉はカバンから大き目の化粧ポーチを取り出して、テーブルに置く。

今日明日は、いくら化粧してもお咎めがない。

「あたし、優子にいいもの作つて来たよ」

美菜が近くのテーブルに荷物を置くと、笑顔でカバンを開けた。ゴソゴソと彼女の取り出したモノに、優子は軽い衝撃を受ける。

なつ、何……それ……

美菜がカバンから取り出したのは、カチュウシャニニ角の生地が肉厚で二つ着いたモノだった。

そう、それは世間ではネコ耳と呼ぶ。洋服に合わせたのか、クロネコ風だ。

昨日みんなで頭につけるレースのカチュウシャニニ作つた。

白い清楚な、いかにもメイドが着けるやつだ。

優子も自分のを作つている。

「優子は責任者だからさ、何かみんなと違うしがあつた方がい

いかと思つて」

美菜はのほほ～んと、いかにも平和な笑みを浮かべる。

な、なんで責任者の印がネコ耳なのよ。ネームプレートとかでいいじゃん。腕章とかでもいいじゃん。ていうか、別にそんなの無くていいじゃん。

「ああ、なるほど。シャアザクの角みたいなものね」

一葉が言った。

「何でよ！ 例えがおかしいだろ。あれは土官の印だよ。それが何でネコ耳になっちゃうわけ？ どういう発想なんだよ、それ。ていうか、あたしらの世代でその例えはおかしいつづーのーで、でもさ。これつて、なんか恥ずかしくない？」

優子は苦笑することしかできない。

「何いつてるの？ だいたいメイド服着ること自体恥ずかしいんだから、別に今更変わんないじゃん」

一葉がそう言つて、美菜の手から奪つたネコ耳カチューシャを、優子の頭に取り付ける。

「ああ、似合うじやん」

なら、あんたが着けろつての。

「じゃあ……一葉に譲つてあげるよ。これ

「だつてえ、あたし責任者じゃないじゃん」

んなの知るか。だからどうしてネコ耳で責任者を識別する必要があるのよ。それが無くても誰も困らないでしょ。

「でも優子、思つた以上に似合つてるよ。カワイイし。うん。夜中までかかつて作った甲斐あつたよ」

美菜の長閑な微笑みに、何だか優子も気が抜ける。

いや……そこまでして作つてくれなくとも……ていうか前から思つてたけど、美菜の笑顔つてちょっと卑怯だわ……

になる。

体育館ではベタな演劇公演やバンドコンクールも行われて異常な盛り上がりを見せ、映像研究会はチープな自作の映画などで微妙な人気をとっていた。

模擬店の出し物は何処もそれなりの入り具合で、本番は日曜日の一般客をターゲットにしているので、それ 자체は仕方がない。

ましてや、優子にしてみればメイド服姿など同じ学校の連中にはできるだけ見られたくないというのが本心だ。

「なんかさ、みんなんでここにいなくてよくない？」

不意に鈴香は言った。

優子のクラスのメイド喫茶はポツリポツリとお客様がくるもの、たいしたものではない。そこに5人のメイドがいるのだ。

優子と一葉、そして美菜と鈴香、由香だ。

自他共に吟味した容姿の結果、自然に彼女達にメイドが決まったのだが、もちろん優子は責任者という事で例外だ。

とはいっても、優子もそれなりの容姿でなかつたら、裏方にまわされていたはずだろう。

本当は全員分のメイド服を作る予定だったが、生地が足りなかつたし時間も無かつた。

特に一番ウエストの太い娘は、最初に除外されたほどだ。

午前中はマンツーマンで対応してもいいほど、みんなが手持ち無沙汰になっている。

しかし、当然のように形だけのメイド喫茶。

そんな気の利いた対応など思いつかないというか、だれもやりたくないのが本音だ。

だいたい来るお客様といつたら、同じ学校のはずなのに妙に馴染みのない連中だつたりする。

他にも裏方のみの娘が3人ほどいるが、はつきり言つてやることが無い。

「そうだね、手分けして遊んで来てもいいんじゃない？」

優子が仕方なく言つと、結局手分けして遊んでくる事が決まった。そもそもこの場を一番抜け出したいと思っているのは優子自身だった。

こんなネコ耳なんて着けてるのがあまりにも情けない。

しかしせっかく作つてくれた美菜の手前、せめて今日は着けなくいいんじゃない。とも言えないのだ。

「じゃあ、あたし出かけてくる」

最初に手を上げたのは鈴香だった。

チツ、先越された……でも、あたしは出かけ難くない？

応責任者だし。

鈴香やみちるの他全部で4人が最初に抜ける事になつて、早速教室を出て行つた。

「大丈夫かな」

一葉が少し不安げに言つ。

「何が？」

「あの娘たち、ちゃんと戻つて来るんでしょうね」

一葉の言葉に優子も思わず不安が広がる。

「大丈夫でしょ。校内にはいるんだしさ」

美菜の言葉に優子は胸を撫で下ろすが、とりあえずこの店が繁盛しない事を密かに願つていたのは言つまでもない。

午後一になつて、優子にとつて来て欲しくない相手がやつて來た。  
忍もそうだが、もう独り逆の意味で関わりたくない人間がいる。  
「あら、似合つてゐるじやない。アホっぽくて」

窓際のテーブルに着いた安西は、優子を見上げて言つた。  
少し前からお客の出入りが増えて他の連中は手がいっぱいの為、  
優子が来るしかなかつた。

「ふん、どうせ笑いに來たんじょ。

「「」、ご注文は？」

「どうして優子だけそんな変なもの頭に着けてるの？ もしかして  
意外と趣味？」

安西は普ッと笑つて黒髪をかきあげる。

趣味のわけないだろ。ていうかこのネコ耳つて、誰にたいし  
て責任者を識別させてるんだ？

確かに考えて見ると、優子のネコ耳姿に責任者を認識させる要素  
はない。

「一応、責任者つて事で……」

「ノリノリでいいじゃん」

あたしの何処がノリノリに見えるのさ。コンタクト忘れたの  
か？

「あ、あたしは嫌なんだけど……」

安西はチーズケーキと紅茶を注文する。

「そう言えは、ご主人様とかつて言わないじゃん。あんたたち、メ  
イドなんじょ？」

間違つてもあんたにだけはゼッタイ言いたくない。

「あ、ここは形だけだから……」

「なんだ、もつとちゃんとしてるのかと思つたわ」

知るか、だつたらあんたがこの服着てみろつての。

「な、なかなかまとまりがなくてそこまでは……」

優子は苦笑して安西のテーブルを離れた。

その後も最初に出て行つた鈴香たち仲間が戻つて来ず、昼過ぎには意外とお店は込み合つて優子たちはかなり忙しい思いをした。教室の出入り口付近でやるはずだったクレープの販売は、結局出来ずに終わる。

ケーキや飲み物は既製品だが、クレープだけはその場で焼いて販売する予定だつたのだ。

店内の注文だけは、美菜が何とか焼いていた。

2時過ぎになつて店も空いた頃、先に出て行つた連中の内で鈴香だけがようやく戻つて来た。

一葉は何か文句を言つていたが、優子はもちろん強く言つ事など出来ない。

「ていうか、舟越は何処？」

鈴香はそんな言い訳をして、一葉の言葉を回避していた。確かに鈴香の言葉でみんな思い出したが、舟越の姿は見ていない。帰りの点呼の時に担任に訊いたら、風邪で休みだそつだ。きつと明日も風邪は治らないのだろうと、優子たちは顔を見合わせた。

帰りの点呼の後、優子たちは直ぐには帰れない。今日の後片付けと、明日本番の準備があるので。

そう、学園祭のイベントは一般公開が本番で、前日の校内公開は練習のよつなものだ。

そこに忍がふらりと顔を覗かせる。

「あら、どうしたの？」

一葉が声をかける。

「いや、どんな様子かなつて思つてさ」

「優子なら明日の食材の確認に行つてるよ」

鈴香がうつかり声を出した。

その場にいた全員が振り返る。

もちろん、どうして優子？ という眼差しで忍を見る。

「いや、別に用はないから」

忍は軽い笑顔で手をあげると「じゃあ、頑張れよ」

そう言って、教室から出て行った。

……高森、優子に会いに来たの？

一葉は彼が立ち去った出口の先を、少しの間見つめていた。

陽が大分短くなつて、5時を回ると空は暮色に染まつて微かに星が瞬きだす。

優子は電車を降りると雑踏に混じつて駅の階段を上る。改札を抜けた通路で、小さな子供が駆け足で彼女を追い越す際に転び、弹ける様に泣き出した。

「ほら、泣かない、泣かない」

優子は反射的に子供の腕を掴んで起こしてやる。

彼女もしゃがんで彼と目線を合わせ、膝の辺りなどを見るが擦りむいたりはしていなかつた。

「男の子でしょ。痛くても少しくらい我慢しなさい」

「うるせえ、ブス！」

子供はそう叫ぶと、優子の手を振り解いて再び駆けて行つた。

親何処だよ？ ていうかあのガキ、今度会つたらゼッタイ殺す。

優子は溜息まじりで立ち上ると、ロータリー下りの階段に向つて再び歩き出した。

階段を下りて駅を出ると彼女の前に影が立ちはだかる。

「よお

「た、高森」

「1本前の電車だったから、待つてたよ。学校の前だと一葉とかが一緒だと思ってさ」

「な、何？ 何かいかにも突然でちょっとビックリ。

「か、一葉は用事があるって、途中で別れたよ」

「そ、うなんだ」

「部活あつたの？」

「ああ、ランニングだけ」

優子はどうして忍がわざわざ待っていたのか訊きたい気持ちでイッパイだったが、何故か訊けなくて違う事ばかり声に出す。思つた事を言葉に出来ないのがとてももどかしい。

「明日で終わりだな」

「うん。何かやつと終わるつて感じ」

さり気ない会話と共に、一人は自然に歩き出す。

「明日も朝早いのか？」

「まあ、準備があるから」

「帰りは？」

「えつ？」

横断歩道の信号は青なのに、思わず優子は立ち止まる。

「青だぜ、渡ろう」

忍に促されて、優子は慌てて歩き出す。再び肩を並べる彼女に忍は再び訊く。

「明日の帰りや。遅いの？」

「き、今日より早いのかな……片付けは用曜だし」

「じゃあ、たまには帰りに何処か行かないか？」

「か、帰り？」

「こ、これってもしや、せ、制服『アート』ってやつか？ でも、

「そ、んなのなんだか恥ずかしい……ていうか、どうしよう。

「べ、別にいいけど」

「じゃあ、明日はこここのホームで待ってるからや、電車乗る頃、メー

ルくれよ

忍はそう言つて別れ道で手を上げた。

優子は明日もメイド姿をする事に重い気持ちでいたが、放課後のことを考えると途端に心は軽くなつてふわふわと浮き上がるような高揚感を僅かに感じる。

込み上げる笑顔を抑えながら、家までの路地を何となく足早に歩いた。

第33・5話（前書き）

今回のほとんどは、優子の友人である一葉の視点です。後半の一部のみ、普段の描写に戻ります。

……なんか、最近優子の様子がおかしいぞ。  
あんなにハキハキ喋つてたか？

そりや、あたしとか里香とはそつだつたけど、他の女子とも何だ  
かけつこう喋つてるし、鈴香とも何だか妙に仲良さそう。  
だいたい、高森がわざわざ優子に何の用で教室を覗くわけ？

帰り道、学校近くの駅前で

「今日、ちょっと寄る所があるから」

そういうつて優子と判れた一葉は、彼女に気付かれないように同じ  
電車に乗り込んだ。

隣の車両の連結部の窓から、一葉は人混みに隠れて優子を観察し  
た。

そんな優子は別に変わったところも無く、自分がいない為一人き  
りで窓の外を眺めたりしている。

優子が降りる駅に着くと、彼女の後についてこつそり一葉も電車  
を降りる。

微妙な間隔を開けて後ろからゆづくりと優子の後を追うようにホ  
ームを歩き、誰かの人影に隠れながら観察を続ける。

……ほら、なんだか足取りが軽いじゃん。絶対おかしい。

それはたぶん一葉の思い過ごしだろうが、優子は少しだけ自分に  
自信を持ち始めているのは確かだらう。

異性と自然に話せる習慣がつくとこつのは、自分を確立させる事  
に役立つ。

男性は男性として、女性は女性としての自己を認識するのだ。

もちろん、優子本人はそんな自分の小さな変化に気付いていない  
し、忍と自然に話せるかと言えば、まだまだ未熟だ。

しかし優子の中で何かが変わり始めているのは事実で、それは本  
人も認識しないまま、歩き方ひとつにも微かに現れるのかもしけな

い。

一葉はホームの階段を上りきると、突然足を止めた。優子が小さな男の子を助け起こして何かを話している。

男の子はどうやらべそをかいている様子だ。さしづめ転んだのうづかと一葉は思った。

……そう言えば、彼女弟がいるんだよね。こうやって観てるとなんかそんな感じしてきた。意外とお姉さんなんだな、優子。すると「うるせえ、バス！」という子供の大きな声が聞こえた。もちろん、優子に言つた言葉で、子供はそのまま走り去る。

……ゆ、優子……子供に馬鹿にされてるよ……それで大丈夫なのか？

そんな事を思いながらも、一葉は思わず声を殺して笑つた。  
それは何だかよく判らないが、暖かな笑いだつた。

優子が再び歩き出したので、一葉も慌てて後を追う。

駅の階段を彼女に続いて下りようとした時、優子が立ち止まつているのが見えて、一葉は再び足を止める。

踏み出した足を引っ込みて、階段を下りる手前からひそり下を見下ろす。

と、優子の傍に黒い人影がひとつ見えた。背丈からして男だろう。  
……た、高森だ。アイツ、優子を待つてたんだ。何で？ あの、  
二人いつたい何時からそう言う仲なの？

いや、何か用事が在るだけかもしれないじゃん。そうだよ、家が近所つて言つてたし、また用事でも頼もうと優子を待つてたのかも。優子と忍が歩き出すのを見て、一葉は急いで階段を駆け下りる。

日曜日の朝も優子は予定通り、何時もよりだいぶ早い時間に学校

\* \* \*

に着いていた。

野球部が校庭で今日のイベントの準備をしている。

よく在るマス田を抜くピッチングゲームだ。

そんな校庭を横目に昇降口へ入り下駄箱を開けた彼女は、一瞬息を飲んだ。

上履きを掻もつと伸ばした手が硬直して止まる。

校庭の方から、野球部員たちの高揚した笑い声が微かに聞こえていた。

「、こ、こ、こ、これって、まさか、もしゃ……アレか？」

上履きの上には封筒が置いてあつた。

優子は思わず周囲に人影が無いか見渡す。

下駄箱の並んだ昇降口は見通しが利かないが、自分の他に人の気配は無かつた。

その時、生徒が一人入つて來たので、優子は動作を止めて固唾を呑む。

1年生らしい彼女達の話し声に混じつた笑い声は、靴を履き替えるとそのまま廊下を去つていく。

優子は封筒に手を伸ばして、それを掘んで取り出した。宛名も差出人もない、青い横型の封筒だ。

「今時こんなのがつて、あるのか?」

優子は思わず呟いた。

いや、誰かの悪戯だ。そうだ、安西かもしねれない。

優子はとりあえず中を確認しようとした。

「優子、おはよう」

その声で、優子は慌てて封筒をカバンのポケットに無理やり突っ込む。

「あ、ああ。おはよう」

昇降口に入つて來たのは一葉と美菜だつた。

学園祭の一般公開は、それなりに人が来る。

他の学園祭とも日程がバツティングしているが、若い連中などはハシゴも当たり前なのだ。

「ていうか、ここ、客層おかしくない?」

一葉が不意に言った。

見渡せば何だかリュックを手にした男が多いし、何処で買ったのか丸めたポスターなんかも持っている。

何より、いつの間に妙な臭いが立ち込めて、さり気なく窓を開けたところだ。

「やっぱ、一部の客層に支持されるのかな……」

美菜が呟くように答えて、苦笑する。

「なんかさ、よそよそしい振りして、何気に写メとかイッパイ撮られてんだけど……」

「仕方ないよ。スカートの中だけ気をつけよう」

一葉は美菜の言葉に小さく肩をすくめると「あの手に持つてるのは何かな？」

「あれ、きつとアニメ部で売ったポスターだよ」

「みんな持つてない？」

「何か人気アイテムなんでしょう」

「アニメ部なんて在つたっけ？」

一葉と美菜の会話に優子が声を挟む。

「同好会から、先月部に昇格したんだって」

趣味の関連か、美菜はその辺の情報に詳しかった。

別に、アニメ部もポスターにも罪はないんだけど……あんたら、とりあえず髪とかせて感じ……

空いたテーブルを片付けに行く優子にも、携帯カメラのレンズが向けられていた。

うわあ、撮ってるよ。思いつきり撮ってる。あたしも、とりあえず撮られるレベルなのか？ ていうか、このメイド服がそんなにいいのか？

優子のクラスの模擬店も、客層こそ片寄ってはいたがそれなりに繁盛して、廊下際で販売したクレープもずいぶん売れた。

お昼休みは面倒なので販売用のケーキやクレープでみんな腹ごなしをして間に合わせる。

そのうち、優子はカバンのポケットに入れた手紙の事もすっかり忘れていた。

簡単な後片付けが終われば今口はもう下校だ。

イベントに参加していない連中は点呼も終了して、一足先に下校している。

優子は売り上げを持つて職員室に行つた帰り、一階の階段上り口で男子生徒にぶつかりそうになる。

「あ、すいません……」

ギリギリで避けた優子は思わず反射的に謝る。

あぶなっ、なにこの人……なにヌボ～っと突っ立つてるの？

その男子生徒は、俯き加減で優子を見ていた。

といつても、彼の方が背は高いから、結局優子が見下ろされいるのだが……

なんともいえない平凡な男だ。頬とおでこに僅かなニキビ跡がある。

なんでじつと見るのよ。あたしだけが悪いわけじゃないし、ぶつからなかつたじやない。

優子は彼の視線が気味悪くて、足早にその場を去つて階段を駆け上がつた。

背中から「あの……手紙……」と微かに聞こえた。

手紙？ 何の事だ？ なんだあの人？

大掛かりな後片付けは、明日できるのでとりあえず模擬店の連中

は解散した。

「ちょっとトイレに寄る

一葉にそう言つた優子は、カバンを抱えたままトイレに入った。さつき1階でぶつかりそうになつた男の言葉を後で思い起こしたら、心当たりがある。

手紙……そうだ、今朝手紙もらつてたんだ。えつ？ あの人なの？

彼女はカバンのポケットからあの青い封筒を取り出す。ラブレターなのだろうか……だとしたら彼女はそんなものは初めて貰うので、少しだけ心がはしゃいだ。

いつたい何が、どんな事が書いてあるのか……？ 優子は封筒を開けて中の手紙と取り出して聞く。

『キタ

な、なにコレ……？

びんせん便箋には、ちょうど真ん中辺りにそれだけが印刷されている。おそらくパソコンのワープロで書いて印刷したものだろう。

周囲に他の文字は無い。

優子は思わず深い溜息をついた。

少しでも高揚した気持ちで手紙を開いた自分が、バカみたいに思えた。

なんなのコレ……何を意思表示してんだよ。いたずらなのか？ ていうか、あの男の仕業なの？

優子は一階でぶつかりそうになつた男を再び思い出す。

足早に階段を駆け上がる優子には、背中から確かに「手紙」という言葉が聞こえた。

そして、模擬店に来ていた連中からぼんやりと彼の姿が浮かぶ。それは、驚くほど掠れた記憶だが、僅かに放課後ぶつかりそうになつた男と重なつた。

あの人、そう言えばお店に来てたかも……

便箋に注いだ視線を下げるが、末行には杉浦健也と名前が書かれ、携帯とPCのメールアドレスが記載されていた。

この難解な言葉だけで、何をどう対処したらいいか判らない。

乱雑な手つきで手紙を封筒に戻しながら、優子は思わず  
「メールなんてするか」

「どうしたの？ 優子」

駅へ向う帰り道、何時に無く無口な彼女に一葉が声をかける。

「うん。なんでもない」

優子は何だか奇妙な憂鬱に囚われながら、とりあえず笑みを浮かべた。

はあ、こいつのひでどうなんだひ。一葉に話して笑い飛ばしてもらつた方が気楽かな……

そう思いながらも、何だか手紙の事はいえなかつた。

一葉と別れて電車を降りると、優子は思わず立ち止まつた。身体に電気が走るよう、一瞬寒気が走りぬけた。

ヤバイ！ 高森にメールするの忘れてた。

走り去る電車の音が遠ざかってゆくホームで、人の流れに逆らつようになに彼女はその場に佇んだ。

優子が気配に気付いて振り向くと、ホームの階段の下から忍が姿をみせる。

「ごめん」

もう、あの変な手紙を見たせいで記憶飛んでたよ。

「別にいいよ」

「け、けつこう待つた？」

「いや、電車3本くらいかな」

忍はそう言つて涼しい顔で笑つた。

なんだか微妙な数……

して、デパートの屋上なんかもぶらついた。

やはり学園祭や文化祭だった学校が多いのか、田曜日にしては制服姿の連中が田に付く。

ただグラグラと歩くよつた夕暮れの時間だったが、制服姿で歩く自分達に優子はなんだかドキドキした。

女子高生だけの集団に遭つと、つい注目されているよつた気がする。

高森を見ているのは判る。

ただ、自分が周りにどう映つてゐるのか考えると、浮ついた気持ちの中に緊張感が過るのだ。

デパートの屋上からの帰り、一人は階段を下りると最上階のエスカレーターを使わずそのまま何となく階段を下り続けた。

裏陰の荒涼な雰囲気がなんだか一人きりの時間を強調させて、忍も優子も口数は少なかつた。

話し声が周囲に反響して響くせいもあるのだ。

しかし、3階分ほど下った踊場の手前で思わずものを見て立ち止まる。

そこでは、制服姿の男女が濃厚なキスを交わしている真つ最中だった。

ぎやつ、な、なんでこんな場所でしてるのよ。

優子は思わず忍の腕を掴んで後戻りした。

忍も一瞬固まっていたのは確かで、あの場を平氣で通れる雰囲気ではなかつた。

「ビックリしたな

足音を忍ばせながら小走りに階段から離れてフロアにすると、忍が声を出す。

「う、うん……」

あれつてどう考へても高校生だったよね。あんなに……いうか、あんな場所でおかしいって。でも、確かにひと氣は無いか。いやいや、もう少し場所選べよ。

優子が忍を見上げると、彼は再び固まっている様子だ。

なんだ、コイツも意外とウブなのか？ こんなに固まらなくつてもさ……

優子は視線を不自然に下げる忍を見て、自分たちの辺りを見回す。すぐ横にいたショッピング店員と田が在つて思わず愛想笑いを浮かべる。

しかし、視線をちょっと動かすと、何時何処で着けるか疑問なほど派手な下着がずらりとハンギングされていた。

うわっ、ここって、女性用下着のフロアだ……しかも勝負下着？

二人は足早に通路を駆け抜けて、エスカレーターの在る場所へ急いだ。

しかし、気が焦つて降り口が見つからない。

通路の両サイドに流れる、下着、下着、下着。

派手なショップより、シンプルで実用的な売り場の方が余計に生きしくて、思わず優子も頬を紅潮させる。

ようやく辿り着いたエスカレーターに足を乗せると同時に、忍が小声で

「なあ、優子もこいついう所で買つのか？」

「あ、あたしは通販が多いかな」

て、何答えてんの、あたし。ていうか、そんな事訊くな。

\* \* \*

なんか、高森と歩くと疲れるよ。今日はまた変な事あったし。だいたい周りの視線が妙なのよね。不釣合いな女だと思われてるのかな。

優子は夕食後の自室でベッドに横たわると、ファッショング雑誌を

手に取る。

読者モデルが煌びやかにページを占領していた。

「こんなの、プロのヘアメイクとかスタイリストが付いてるんだから、可愛くて当たり前じゃん。」

その時携帯メールに着信が入った。

一葉からだつた。

優子がメールを開くと、何かのサイトのアドレスが書き込んで在る。

『学校裏サイト』 そう書いてあつた。

「学校裏サイト？」

思わず声が出る。

優子もそれ自体はうわさで聞いたことも在るし、テレビで時々取り上げられて問題視されている事も知つていて。

一葉は何処かの学校の裏サイトを見た事が在るといつていたが、優子自身は覗いた事は無い。

単純に興味が無かつたから。

だから、メールに書かれているアドレスにも直ぐにアクセスしてみようとは思わなかつた。

一葉のやつ、あたしがこいつの興味無いって知つてるくせに。

すると、再び携帯が鳴つた。今度は通話の着信だ。

「あ、優子。メール見た？」

「うん、見たけど、何、今度は何処のサイト？」

「ウチの学校だよ

「ウチの学校？」

思わず優子の声が1オクターブ上がる。

「見てみなよ、凄い事かいてあるよ」

「いいよ、どうせ誰かの悪口とか、在ること無い事書いてあるんでしょ」

優子は携帯を手にしたまま、再びベッドに横たわる。

「安西の事が書いてあるのよ」

「安西の？」

「アイツ、中学で凄い事になつてたんだね」

一葉はいかにも人の不幸を喜ぶワイドショーのレポーターのよう  
に声を荒げて

「優子も見てみなつて」

「安西がどうしたつて書いてあるの？」

「自分で見てみなよ。じゃあね」

一葉はそう言って電話を切つた。

一葉は新しい事を発見して高揚した気持ちを、単純に誰かに伝えられたかったのだろう。

優子は仕方なく、一葉がくれたアドレスにアクセスしてみる。ダウンロード中の表示が一瞬出て、すぐにそのサイトは表示された。

確かに自分の通う学校だ。実名がしつかりタイトルに出ている。モノトーンの殺風景なトップページだった。

管理人の名前は『モギヰ』と書かれている。

BBＳの項目をクリックして、画面を開くと最新記事を見て優子は息を飲む。

『一年のA西は、私立M中学の時に高校生に集団レイプされて妊娠した。

子供は直ぐに中絶したが、それが表沙汰になるのを恐れてエスカレーター式のM学園を断念した』

「誰……誰がこんな事を書き込んでるの？」

優子は思わず声に出した。

書き込み記事を投稿したのは『ヤギヰ』と名乗られていた。

『A西は妊娠がキッカケで、当時付き合っていた彼氏と別れた。

当たり前だよね。他の男の子供を妊娠した女なんて付き合ってられないよな』

これって、高森？ の事？

『A西はいきなり五人とヤツタから、どいつの子供を妊娠したのか判らなくて裁判起こしたくても立証できないらしい』

優子は胸の奥がムカムカして、ページを閉じた。

部屋の蛍光灯が少し暗いような気がして、思わず天井を見上げる。ハツと気を持ち直すと、優子は急いで一葉に電話をかけた。

『ああ、優子。サイト観た？ あれって安西だよね。あいつ……』

「一葉、このアドレス誰から聞いたの？」

優子は一葉の言葉を遮るように言った。

「他の学校の友達。こういうの好きな娘がいて、あなたの学校が出てるって教えてくれたんだ」「誰か、他に教えた？」

「里香と美菜に……」

「どうしてよ」

「え？ だって……どうして……なんであなたがそんなに怒るの？」

「だ、だってデタラメかも知れないじゃん」

「いいじゃん、デタラメでも別にわ」

「よくなじじゃん」

「ど、どうしたの、優子？ あんた安西と仲良くないじゃん……」

「それとコレとは関係ないよ」

優子はひとつ息をつくと

「いい、一葉。もうだれにもこのアドレス教えてダメだからね」「そんな事言つても、どうせそのうちみんなに知れるし、もう知つてる人もけつこうつくると思つよ」

「それでも一葉は黙つてて」

「わ、わかったよ……今日の優子、なんだか怖いよ……」

いつたい誰があれを書き込んだのか……優子はそれが気になつていた。

確かに安西はみんなに好かれている娘ではないし、少々高飛車なところを気に入らない連中もいるようだ。

しかし、いまま大きなイジメも裏サイトなどの噂もないところがこの学校のいいところだつた。

少なくとも優子はそう思っていた。

舟越のような何だかよく判らないキャラも誰にイジメられる事も無く、平穏に生活している。

舟越？ そう言えば、あたし、安西の昔のことと舟越に聞いたんだ。

優子は舟越に聞いた言葉を思い出すと同時に、それを知った安西が彼に対して激怒していた事を思い出す。

ま、まさかね……あれで、安西に何か言われた舟越が頭に来て……でも、なんか考えられる……

月曜日の片付け清掃は当然全員登校で、教室以外の各場所も掃除分担される。

しかし、こんな日にはこない連中は必ずいるのだ。

「ねえ、あれって本当なのかな？」

清掃中、美菜が不安げに一葉に聞いている。

あれといつのは、裏サイトに書き込まれた「A西」の事だ。

「さあね。でもあれってBBSの割には外部からの書き込みが出来なかつたよ」

一葉が自在ボウキを片手に言つた。

他にも3年生の記事が幾つか載つていたが、それらは一葉たちの興味の対象にはならなかつた。

「一葉、書き込みしたの？」

優子が割つて入る。

「うん……本当のかつて、問いただしの書き込みしようとしたら、受け付けなかつた

「じゃあ、管理人だけが書きめるの？」

「管理者と書き込みの名前が違うから、あとは、パスワードを知つてる者だけとかね」

一葉は教卓によりかかると

「なんにしても、あのヤギヰていう書き込み者が誰かって事。それと、管理者も近い人間でしょ。同一かもしれないけどね」

優子は思い当たる人物の名前を、この場では言わなかつた。

もし彼がモギヰかヤギヰだとしたら、3年生の記事がどうしてあるのかが解らなかつたから。

しかし、今日も舟越は学校を休んでいる。

安西は別の掃除区画の為離れているが、周囲の彼女を見る目が何となく以前と違うような気がしたのは、優子の気のせいだろうか。大っぴらには反応を露にしない。

それが、学校裏サイトを覗く者のルールでもあるのだ。

「」の日は学園祭の後片付けだけが目的なので、掃除が終われば帰るだけだ。

優子は一葉と一緒に昇降口で靴を履き替えていた。すると、後に何か気配というか殺氣を感じて振り返る。

ビックリしたあ。

杉浦健也が立っていた。

しかし彼は何も言わない。優子は杉浦の襟章を見て彼が3年生だと気付いた。

彼はモジモジした表情で、薄つすらと笑みを浮かべたまま優子を見つめていた。

その視線というか、そんな空氣に耐えられず彼女は声を出す。

「あ、あの……」

キモいんだよ。なんで黙つて立つてるわけ？

「」の前の手紙は……

優子がそこまで言つと、杉浦は踵を返すように身体の向きを変えて歩き去つてゆく。

はあ？ な、なに？ 何なの？ ビックりんだよ、あの3年。

「優子、知り合い？」

横にいた一葉が怪訝そうに訪ねる。

誰がどう見てもおかしな状況だつた。

「う、うん……ちょっとね

「ちょっとって……？」

「う、うん

優子は口となく手紙を貰つた事を言い出せなかつた。

「ねえ、舟越つて、本当に風邪なのかな？」

優子と一葉はプラットホームで電車の来るのを待っている。

午前中で作業は終わってみんな帰宅なので、駅には彼女たちの学校の生徒がほとんどだ。

運動部はもう活動を始めたが、文化部は逆に一大イベントも終わってしばらく休みのところが多いだろう。

「なんで？」

一葉は優子の意外な質問に怪訝な笑みを浮かべる。

「うん……」

優子は少し思案を巡らせると

「ねえ、舟越の家って何処か知ってる？」

「知らないよ、そんなの」

一葉はそう言って笑うと

「何、あんた舟越なんかが気になんの？」

「べ、別にそういうんじゃなくてわ……」

「優子も何気に男好きなのかな」

一葉がボソッと言つた。

「えっ？」

「ううん、何でもないよ」

一葉は優子と忍が頻繁に会つてている事を既に知つている。

それでも何も言わなのは、友達として優子が何も言わないからだ。

だから、知らないふりをしてやるうと思つていてる。

ただ、男に興味がないような素振りだつた優子が、忍と肩を並べて歩く姿は、一葉に僅かな衝撃を与えたのは確かだ。

「実はさ……」

優子が躊躇しながら渋々口を開く。

「裏サイトつて、舟越かもしれないんだ」

思いかけない彼女の言葉に、一葉は振り返る。

「どういう事？」

優子は舟越が中学時代、忍や安西と同じ塾へ通つていて一人の事

を思いの外知つてゐる事を一葉に話して聞かせた。

「でも、今まで黙つてたのに、どうして急にそんな暴露しちやうの

1

## 話を聞いた一葉が訊く。

「判らないよ。安西に何かされたのかも」

「でも、舟越つて、何だかんだみんなに邪険にされてない?」

その時電車が到着して、二人はそれに乗り込んだ

「意外とあんたが一番仲がいいのかもね」

やうなぐまに、た一葉の言葉は特に何の意味も無かった。もいた

なんてあたしか仲いのよ。

日本は最も遠く住む方に一言で「お前」の言葉が起る。

卷之三

それはあの男が何時もホグ、としてるからよ  
ていシカ あ

たしたやるした無いしやん

「元談ごよ」

一九四一

一葉がそう言つて優子の肩に手を乗せると、その話題は終わった。午後の陽差を受ける家並みがゆづくと過ぎてゆくのを、優子は車窓から眺めた。

以言図書室の作業で升起力辨を示す力場を思ひ出していた。

ま、まさかね……そんな事ないよね。だって、今まで何も無く過ごしてきたのにどうして急にそんな人に好意を持たれるの?

「ねえ、ちょっと新宿行かない?」「一葉が声をだした。

「別にいいけど」

「暇だしさ、あたしバイト夕方からだから、少しブリーフしようよ」

優子は「つん」と頷いて、自分の降りる駅を通過した。

日を追う毎に夕暮れ時は早くなって、5時を過ぎると夕闇がすっかり夕闇に包まれる。

一葉と別れた優子は、独り電車に揺られていた。

あと一駅で地元の駅に着くところでふとホームを見ると、舟越の姿が見える。同じ電車に乗っていたようだ。

あいつ、何やつてんだ？ ていうか、やっぱ風邪とかじやないじやん。こんな所ウロついて

直ぐにドアが閉まって電車は走り出し、優子はホームを歩く彼の姿をもう一度確認する。

ここが、アイツの乗降駅なのかな？ だとしたら意外と近くに住んでるんだ。

優子は隣駅とは言え、再び駅名を確認した。

雑踏に溶け込むよつて駅階段を下りてロータリーに出た優子は、本屋に寄り道した。

何となくあれこれ物色して結局何も買わずに店を出ると、何だかふと思い立つて以前忍と回り道した通りに日が留まり、吸い寄せられるようにそこに足を向けた。

彼の親戚の住んでいるという通りだ。今は、弟の直樹の彼女が住んでいる場所……

何故かは判らないが、何となくその通りを懐かしく感じたのだ。

暫く行ってそのまま国道を渡ると、古い住宅街の庭木から早々と落ちた枯れ葉が、歩道の隅に溜まっている。

なにやってんだ、あたし。

そんな事を思つても、もう引き返す方が遠回りになるので、次の角を曲がつて行こうと思つた。

その先には忍の親戚の家がある。

そして優子は、その家の前に佇む二つの影を見た。

少し離れた街路灯の光が微かに届いて、二人の人影を映し出していく。

あれつて……

優子は通りの角を曲がろうとして思わず足を止めた。

通りの先に二つの影が、薄つすらと街路灯の光を浴びている。確かにそこは忍が以前寄り道した家だ。

優子が静かに見つめる中で、二つの黒い影は重なった。

ぎえ……ち、ち、ちゅーしてゐ。こ、こんなとこうどちゅーしてゐよ、アイツ。ありえない……

視線の先にいたのは、紛れも無く弟の直樹だ。もちろん相手は苑部舞衣だらう。

二人の影が重なる時間は妙に長く感じて、優子は奇妙な感覚でそれを見ていた。

当たり前の事なのに、弟は男なのだと今更ながらに思つた。

二人の影が離れると、舞衣は何事もなかつたような素振りで手を振つて家の門扉を潜り、それを直樹が見送る。

優子は角を曲がつて路地を歩き出していた。

いかにも慣れてたよね、あれ……けつときよく先越されたんだなあ……あの二人はきっと、本気でお互いの事が好きなんだ。だからあんなに自然にキスを交わせるんだ。

優子は自分と忍の関係が余計に判らなくなつて、それ以上考えるのが苦痛だつた。

思わずトトロの歩くマーチが頭の中に流れ出して、自分の歩調に合わせて何となく口ずさんだ。

夕飯時、優子は直樹を何度もチラ見する。

あの唇が？ あれが既に女の子のそれに吸い付いてる……信

じられない。まさかその先も？　いやいや、それはないだろ。

でも……考えてみたら安西だつて……

「何？」直樹が優子に言つた。

「はつ？　何つて、何が？」

「なんかやたらといつち見てるかひれ」

「み、見てないよ別に」

「見てたよ

「見てない」

「はいはい、もう一人共そんな子供みたいな事でいちこち言い争わないで」

母親が穏やかな口調で割つて入る。

優子はフンと鼻をならして味噌汁のお椀を手にした。

「ていうか、ウチらまだ子供だと思つんだけど……

直樹は再びご飯を口へ頬張る。

「あんた、舞衣ちゃんと上手くいってんの？」

優子が気を取り直して訊いた。

「な、なんですか？」

「別に。ただ訊いてみただけ」

「姉ちゃんはどうなんだよ」

「あ、あたしは、そんなんじゃないし」

「あんまりボケツとしてると、何時の間にか年といぢやうぜ」

なつ、なによコイツ。自分が彼女とラブラブだからって、急に悟つたような事言つて。

「ボケツとなんてしてなわよ」

優子はそう言つて、味噌汁を啜つた。

「母さんお茶くれ

父親の孝之助がそつまつのが早いが「ハイ」と杏子は湯飲みを差し出す。

ウチは平和だな。高森はきっと今日も独りでご飯を食べてるんだ。そして、安西も。アイツは自分で料理もするのかな……

優子は自室へ戻ると、パソコンをインターネットに繋いで、再び学校裏サイトを見た。

パソコン用の画面は紫色だった。

濃い紫色の壁紙に、白色の文字で学校名が書かれている。丁寧にダークグレーの影が作ってあった。

BBＳをクリックすると、更新記事は特に無かつた。

もうあまり記事は読みたくない。しかし、何か投稿者の手掛けたりも欲しい。

安西はこの事知ってるのかな……

ふと見ると、記事が最初に書かれたのは、学園祭の1週間前だった。それから毎日更新されて3日間はモギヰという名が3年生の事を書き込み、その後ヤギヰと言つ名で4日間書き込まれている。安西の事を書いているのはヤギヰで、モギヰは書いていない。

二人は別人なのだろうか。

ただ、どちらも同じ学校の生徒だという可能性は高い。そして、少なくともヤギヰが舟越だという可能性はなお高いだらう。

誰も直ぐには気付かなかつただらう。

しかし今、どれだけの生徒がこの記事を目にしているのだろうか。ふとトップページの横に設置されたカウンターが目に入る。

102528！ ジュ、ジュうまん？ そんなに沢山の人人が

見てるの？

幾つかリンクは貼つて在るようだが、それすら優子には聞き覚えがない。

クリックしてみると、そういう類の噂話や中傷を扱つたホームページが山のように集めてあるサイトだつた。

幾つか開いてみると、他に聞き覚えのある学校裏サイトも存在している。

似たようなヤツって、何処にでもいるんだ。でも、ウチの学

校はかなり平穏だったのに……

優子の周りにはそれほどネットにハマるような連中がいないので、安西の事が書かれた記事をどれほどどの連中が目にしたか、どうにも計り知れない。

一葉だってそれほどハマってるわけではない。

ノートに書かれた落書きのようになにか、破り捨てたら消えてなくなるものではない……

優子はふとと思い立つて部屋を出ると、隣に在る直樹の部屋のドアを叩いた。

「何?」部屋の中から、彼の声がする。

「あたし。入つていー?」

「ああ」という声で、優子は弟の部屋のドアを開けた。

## 第三回話（後書き）

『アートの歩いマーチ』と記載しておつますが、本当の歌のタイトルは『セコセ』です。『歩いマーチ』の方が、優子が何を口ずさんだのかわかり易いと思つたので、いつ書きました。

優子は静かにドアを開けると、弟の部屋に足を踏み入れた。

「何？ 何か用？」

「う、うん。ちょっとと訊きたい事あつてわ」

「あつ、こいつ煙草吸つてるな。

ベッドに寝そべつて漫画を読む弟に、優子は近づいた。さり気なく周囲を見渡すが、煙草を吸つた形跡は見当たらない。それでも、微かに臭いはしたのだ。

直樹は急に起き上ると

「なんだよ、改まつて。まさか近親相姦狙つてんじゃねえだろうなバカか！ なんでそんな言葉が出るんだよ。つていうか、あたしはそんなに飢えて見えるのか？」

「ば、バツカじやないの。なんでそつなるのよ、気持ち悪い」「だつて飯の時、姉ちゃんの視線が変だつたからさ」

ええつ、あたしの視線変だつた？ そ、そつかな……あたし、そんな変な目で弟の事見てたのかな？

「そ、そんなんじやないよ。舞衣ちゃんと上手くいつてそつだなあ。て、見てただけじやん」

「それにしちゃ、へんな目つきだつたぜ」

こいつ、女の味を知つて、感性鋭くなつたのか？

優子はベッドの横に在る勉強机の椅子に腰掛けると

「あんたさ、パソコンけつこつやつてる？」

「ああ、まあ人並みだと思うけど。3日坊主の姉ちゃんよりはね」「大きなお世話だつての。あたしだつて週1回くらいはネットに繋ぐわよ。

直樹はベッドの上で胡坐をかくと、手に持つていた漫画を横に置いた。

優子は椅子の背もたれに肘をかけて寄りかかる。

「学校裏サイトって、見たことある?」

「ああ、前に何度かね」

直樹は足を組み直すと

「でも、なんだか陰湿でさ。俺はあんまり見る気にならないけど」  
よく言つた。いかにもあたしの弟だよ。あんた。

「じゃあ、最近は覗いてない?」

「うん。全然見てないよ」

「友達は?」

「そうだな、見てるヤツもいるんだろうけど、あんまり話題にならないかな」

直樹は胡坐を組んだ自分の足首を掴むと

「ほら。なんか、ああいうの面白がるヤツって、人の不幸を楽しんでるみたいで信用できないじゃん。だから、観てもあんまり言わないんだよ。でも、なんで?」

「う、ううう。別に」

優子はそう言つて立ち上がる

「この近辺の学校の話とかも聞かない?」

「別に聞かないけど、何で?」

「ううん、いいの、別に」

「変なの…」

直樹はそう言つて再び漫画を手に取るが

「あつ、まさか姉ちゃん。裏サイトでイジメにあつてるのか?」

「ば、バカね。そんなわけないでしょ」

優子はそう言つと、足早に出口へ向かうが、一端足を止める。

「そう言えれば、よくあるアクセスカウンターって、あれ、正確なの?」

「正確なんじやないの? アクセスに対してただカウントするだけ

でしょ。でも、確かスターの数字は好きなところから始められるから、桁は当てにならないんじゃない」

「何? その好きなところからって」

「カウンターを設置して1000からスタートさせれば、アクセス履歴が10でもカウンターは1010を表示するんだよ」

「えつ、カウンターって必ずゼロから始まるんじゃないんだ」

「そりや、だつて。アクセスの少ないサイトで何時までもカウンターの累計が10とか20だつたら悲しいじゃん」

「ああ、そなんだ」

「レンタルのカウンターは確かにそんのが多いよ」

「ああ、そなんだ」

「レンタルのカウンターは確かにそんのが多いよ」

優子はそれは別に訊かなくてもいいやと思いつつ、そのまま部屋のドアを開けると

「あんた、運動部なんだからタバコは止めなさいよ」

\* \* \*

優子は携帯電話メールの着信音で田中が覚めた。

今日は学園祭の代休で、忍との約束も無いので寝たいだけ寝ていた所だ。

「ああ、誰からだろ?……ていうか、今何時だろ?」

優子は布団から腕だけを伸ばして充電器に置いた携帯を掴むと、布団に入ったままの状態でそれを開く。

『昼飯一緒にどう?』

高森からのメールだった。

時間を見ると、11時半になる所だった。忍はおそらく午前中の部活が終わった所なのだ。

「ギョえ、もつこんな時間なんだ。」

優子は仕方なしに布団から出ると、洋服に着替える。ふと鏡に映った顔は、寝過ぎの為に田中が腫れている。

「あ……寝過ぎた……」

彼女は忍にOKの返信をしてから顔を洗うと、濡れタオルで瞼を冷やす。

待ち合せは1時にしてもらった。そうすれば忍も一度家に帰れる時間だ。

家の中は誰もいなかつた。

父親はもちろん仕事だし、母親もパートだ。そして弟は普通に学校へ行つている。

優子はリビングのソファに横たわつて、瞼に濡れタオルを当てたまま、再びウトウトしていた。

見慣れない時間のテレビ番組の音声が、何となく部屋に流れている。

そうしてどれくらい経つたのか優子にはよく解らなかつたが、庭先で物音が聞こえた。

佐助が小屋から出て、動き回つている氣配もある。

何だ？ 誰か来たのかな。直樹か？

優子はリビングの窓からレースのカーテン越しに外を覗いた。

うわっ、た、高森。な、なんで直接来てんの？ 待ち合せは駄つて……しかも時間、早つ。

優子がリビングから外を覗くと、忍が庭に入つて来ていた。

普段黒々とした髪が陽差を受けて、やたら艶やかだった。

優子は慌てて窓を開けると

「ど、どうしたの？」

「帰りに駅向こうのたい焼き屋が始まつてさ、買つてきたんだ」駅の階段を向こう側に下りてすぐ、秋冬だけ営業するたい焼き屋が在る。かなり人気があつて、店が始まると連日客が列んでいるのだ。

佐助がやたらシッポを降つてゐるのは、たい焼きの匂いを嗅ぎ付けたのかもしれない。

「ち、ちょっと待つて、今玄関に行く」

優子は慌てて玄関に回ると、髪の毛を指でササッと直して壁掛けの鏡を覗いてから一息ついてドアを開けた。

「いま、帰り？」

「ああ、今日は午前中だけの練習だからね」

「なんであんたは、何時もいきなりなのよ……」

優子はこの状況でどうしたらいいのか、思案を巡らせる。

や、やつぱり家に上げるべきよね。せつかく来たんだし。でも、どうするの？ 一緒にたい焼き食べてくつろぐの？

「あ、上がつてく？」

優子は少々、きこりなく笑つて言つた。

「家の人は？」

「み、みんないないよ」

「ヤバッ、それってヤバくない？」

「そうか、沢山買つてきたから、後でみんなにも食べてもいいってよう言つて忍は玄関に入ろうとする。

「や、やっぱり上がつてく……よね。」

優子は一瞬氣後れしながら、彼が入り易いように促した。

「お茶？ 紅茶？ 何がいい？」

優子は台所からリビングにいる忍に声をかける。

忍はソファに腰を下ろすと、少しだけ辺りを見回して

「あ、お茶でいいよ。たい焼きには日本茶がいいだろ」

「そ、そうよね。日本茶ね」

優子は普段お客用にしか使わないお茶の葉を取り出して急須に入れた。

自分の生活空間に異性が入り込むと言つのは、何だか妙な気分だつた。

別に見られて困るものもないはずなのに、家中何処を見られてもこそばゆい。

「なんだか、妙に落ち着く家だな」

優子がテーブルにお茶を差し出すと、それを手にした忍が言つた。

「そ、そうかな。中古住宅だけどね」

そんなの関係ないつづうの。何言つてんだあたし。

テーブルの皿には、まだ暖かいたい焼きと日本茶。それを挟んで、優子と忍がソファに腰掛けている。

何だか奇妙な光景だと優子は思つて、喋る話題が思いつからない。

「なんか、これ食べたらお昼食べられ無そうだね、あははは」

「そうか？ これくらい平氣だろ？」

正解です。全然平氣で食べられます……でも一応話題つてやつよ。

「そうだね、大丈夫かな……」

優子は再び笑うと、掴んだたい焼きの尻尾を小さく齧つた。

うわっ、久しぶりで食べたけど、超おいしいじやん。

ふと窓の方を見ると、佐助が窓の下部分からレースのカーテン越しにこちらを覗いて鼻をピクピクと動かしている。

たい焼きの甘い香ばしい香りを必死で嗅いでいるのだ。

彼がせっかく買って来てくれたものを直ぐにイヌにあげるわけには行かないの、優子はサイドボードの戸棚からビスケットを2枚取り出すと、窓を開けて佐助に与えた。

窓を開けると、外の空気が庭の青臭い木々の香りを運んできた。佐助が鼻を鳴らして喜んでいるが、直ぐには口へ与えない。

「お座り」そう言って、彼を座らせると「お手」「御代わり」

佐助もそれをやつたら貰えるのを知っているので、急いで順番に前足を差し出す。

佐助は変な癖があると言うか、よほど人に足を触られたくないのか、手のひらの寸前で自分の前足を止める。

普通の犬のように、相手の手のひらに乗せないのだ。

優子は何時も、ちょっと意地悪をして佐助が寸止めしている前足をムギュッと掴んでやる。

そうすると、ちょっと彼は困った顔をするのだ。それが何だか可愛いくて好きだ。

お預けをさせた後に初めてビスケットを『え』

こんな動作をしていれば、会話が少々滞つてもあまり苦にならない。

ビスケットを『え終えた優子は、再びソファに戻つて腰を下ろす。

「ゆ、優子さ……」

再び目の前に腰掛けた彼女に、忍が改まつた声をだした。

「ハイ?」

忍の視線は何処か泳いでる感じで、優子の姿を僅かに避けていた。

「い、言い難いんだけど……おまえ……」

な、何? 何改まつて、しかも照れくさそう。ついに告白か? ちゃんと言つ気になつたか? それならあたしも真剣に考えるよ。

ていうか、たい焼き食べながらなのか? それってどうなの?

「な、何?」

優子の鼓動が心なしか早くなつて、胸の内側を叩いた。

忍ば、意を洪したるハシマリ

「ジ、ジーパンのジッパー、半分開いてるよ……」

優子は咄嗟に立ち上がり、後を向くと、急いでジップバーを上げる。確かに丁度半分くらいの所で、ジップが止まっていた。

なんてこゝなの……………でいシカ  
あんたかしきなり説ねてく  
のが悪いんだよ。もう。

「でも、別に中は見えてなかつたぜ」首をうな垂れる優子の背中に忍は

そんな変な慰め要らないの！」……

「それでも優子は忍の方に振り返ると、紅潮させた顔で確認する。「ほ、本当に見えなかつた？」

「ああ、内側のワラップが

忍は笑つてお茶を口にす

ほとんど見て何?  
見えたのか? 少しは見えたのか?

「な、何か作る？」「

優子は間が持たない事もあって、いやジッパーの中を少々見られたかも知れないという恥ずかしさを取り繕う気持ちもあってか、ついそんな事を言つた。

「えっ？」

忍は優子を見つめると「料理できるの？」

失礼な。これでもちょくちょく夕飯の仕度はあたしがやってんのよ。

「あ、在り合せでよければ」

「へえ、そりやあ、食べてみたいな」

忍は、優子が注ぎ足したお茶を笑顔で啜つた。

冷蔵庫をあさつて直ぐに出来そつなのはチャーハンだった。これなら味付けも簡単だし文句もでないだろう。

「チャーハンでもいい？」

「ああ、いいよ。チャーハンなんてできるんだ」

フフッ、バカね。チャーハンは簡単なのよ。

優子は台所に立つて忍と少しの距離ができると、気持ち的に余裕が出る。

忍はいつの間にかリビングの窓を開けて、佐助の頭を撫でていた。

「たい焼き喰うかな？」

「えっ、もつたいないよ」

優子は、彼が佐助を構いたいのだろうと思つて、さつきもあげたビスケットを数枚忍に手渡す。

「あんまりあげると、太っちゃつから」

手遅れだけどね。

「ああ、そうか」

優子は再び台所に戻った。

なんかこれって、ちょっとぴり夫婦みたいなやり取りだよね。優子は少しだけ心が躍るのを感じながら、何時もは少々重く感じる中華なべを小気味よく回した。

忍は美味しい美味しいと言しながら、優子の作ったチャーハンをたいらげた。

考えてみれば、家族以外に自分の作った料理を食べさせたのは初めてだった。それを美味しいと言つてもらえるのは、素直に嬉しい。しかも、忍に手料理を作つてあげた女性が校内にいるだらうか……もしいるとしたら、安西くらいのよつうな気がする。

安西つて、料理はどうなんだろう……

優子は元々そだつた事もあつて、忍の容姿に特に惹かれるといつう感覚は無い。

確かに鼻筋は通つてゐるし、少し切れ長で一重の目は、澄ました時と笑つた時の表情にギャップが出て魅力的だ。

しかし彼といて緊張するのは、別に忍の容姿が影響してゐるわけではないのだ。

男慣れしていないと書つのが正直一番の原因だといつ事を、優子自身も判つてゐる。

それでもやつぱり、彼の顔立ちは整つてゐるなと思つ。

そう言えば、あれどうじよつ。まだ答えてないんだよな。ていうか、答が出ないんだよ……

観覧車で忍に言われた、付き合つとこいつ間に彼女は答えていい。

さつきこひどい思い出したが、小さな混乱で再び何処かへ飛んで行つた。

「そう言えば……」

忍がお茶を飲んで一息つくと、言葉を発した。

「きたか？ こんどこそ高森も思い出したのか？」

「文化祭で使った服って、どうしたの？」

「えつ？ ふ、服？」

「メイドのやつ」

それかよつ。

「あ、あれは記念にみんな持つて帰ったよ」

忍とはそれからもたわいも無い話をしたが、あの事には触れる様子が無い。

「犬つて、なんかいいな。俺も欲しくなつたよ」

「そ、そう？ 散歩とか面倒だよ」

「ランニングとか一緒に出来そうじゃん」

「直樹もそんな事言つてた。狙いは舞衣ちゃんだったみたいだけどね」

もつ、どうでもよくなつたのかな……あの事。

優子は忍があの観覧車で言つた事に触れない事が逆に、不安でならなかつた。

アレが、あの時だけがチャンスだつたのかな。高森はあたしに一度だけチャンスをくれたの？

いつの間にか、住宅街に小学生の声が響いてきた。小学生が下校する時間になつていた。

「あ、俺そろそろ帰ろうか？」

忍が笑つて立ち上がり「家の人は、まだ帰つて来ないの？」

「えつ、うん。ま、まだ……」

優子はそう言つたが、忍の身体はソファの前から横に動いていた。

「えつ、本当にもう帰るの？」

優子は忍に並ぼうと慌てて足を踏み出しが、そこにはまだテーブルがあつた。

彼女はテーブルの角に左の脛を引っ掛けた躊躇と前のめりになつた。

て、焦つてバランスをとろうとするが、そのまま右足だけでつんのめるように前に飛び出す。

テーブルが大きく動いて、乗っていた湯飲みが倒れた。

「きやあ！」

忍はまだ身体を半分だけ出口に向けていたので、躊躇した優子が視界に入つて慌てて手を差し伸べる。

優子は躊躇した反動とバランスをとろうとした反作用で、勢いよく忍の胸に飛び込んでしまう。

忍の腕に両脇を抱えられる形で、彼女は体制を持ちこたえた。  
「うわっ、超危なかつた……

が、その次の瞬間優子の唇には何かがくつついて来てそれを塞いだ。

？？？

あまりに突然の出来事に思考は働かなかつた。

ただ、自分の唇に柔らかくて暖かい何かがくつ付いた瞬間、鼻孔にライムの香りが入り込んで、身体中に細い電気が素早く走り、全身の力が抜けた気がした。

第41話（後書き）

優子の胸に触れた何かは、やつぱり……？

優子は我に帰るよつて、顔を後へ引いて自分に起つた事を認識すると、顔中が熱くなつた。

全身を駆け巡つた電気が、頭の中でシートしたようだ。

「な、な、なんでこんないきなりなの？ しかもこんな拍子に？」

「な、な、な……」

「ご、ごめん。なんか咄嗟の事で俺もよく判らないんだ」

忍は優子を抱かかえたまま言つた。

優子が忍に抱きついた拍子に唇が重なつてしまつたわけではない。顔の角度が違つていたにも関わらず、忍は彼女を支えた直後、故意に唇を押し当てて来た。

しかし、まるで自分の意に反してついやつてしまつたといつ感じだ。

優子は彼に支えられた状態で、何処を向いたらいのか判らなくてただ俯く。

身体の力が抜けて、忍が支えていないと崩れ落ちそうになつた。

ひつくり返つた湯飲み茶碗から、残つていたお茶がひたひたと床に零れている。

「お、お茶、こぼれるよ」

忍の声で優子は慌てて身体の向きを変えると忍から離れてテーブルの布巾を掴む。

頭の中が真つ白になつていた。

何だかとにかく違う何かの動作をしようと思つた。

優子は床より先にテーブルの上を拭いている。

「絨毯を拭いた方が、よくない？」

忍に指摘されて、慌てて布巾を絨毯に置く。

そんなに多い量ではなかつたので、直ぐに水滴はふき取つたが、

その後も何だか訳が判らず優子は絨毯を布巾で軽く叩いていた。

「だ、大丈夫？」

「えつ、う、うん。平気よ。別に、そんな…も、もう高校生だしね。

全然大丈夫」

「いや…絨毯のお茶…」

「えつ？ お茶？ そう言えば、の、のど渴いたよね

「いや、零れたお茶で濡れた絨毯…」

「あ、ああ。絨毯は平気よ。どうせ安物だし」

優子は完全に舞い上がっていた…

\* \* \*

「じ、じゃあ、気をつけて帰つてね」

「ああ、じゃあ…な」

玄関を出て門扉の所で振り返る忍に、優子は再び笑顔で手を振つた。

見送りが終わると、玄関ドアを閉めて急いで洗面所へ向う。ど、どうしよう。あれってどうなの？ どうって何が？

思わず意味不明の自問自答をしていた。

優子は洗面所の鏡に向かつて前かがみになり、何も変わりないその姿を見つめる。

そつと唇に触れてみるが、別に朝見たものと何も変わっていない。なんの変哲も無い、何時もの自分の顔とそこに在る唇。

なんか、あつという間だったけど、こんなモノなの？ これが、あたしのファーストキスなんだよね…

あんないきなり不意をつくよつな、そんなんでいいの？ 自分が想像していたものとはかけ離れていた。

彼女はもつとムードに溢れて酔いしれた中で、お互いの瞳を見つ

めながらそつと交わされるのが初めてのそれだと思っていた。

しかし実際は気付いた時にはもう、彼の脣は自分の脣にくつ付いていた。

そのインパクトの瞬間がよく判らないまま事が運ばれて、それが無念で仕方がないのだ。

こんな事なら、この前の観覧車の方がムードあったよね……それでもリビングでの出来事は現実だ。しかも、これで弟に肩を並べた気がする。

優子は鏡に向つて一息つくと

「ま、いいか」と、声に出して言つてみた。

その時家の電話が鳴り出す。

リビングまで小走りに戻つて電話を取つた。

「ああ、優子いた」

それは母親だった。パート先からかけて来たのだろう。

「どうしたの？」

「洗濯もの外に干してきちゃつたから、取り込んで置いてくれる？」

優子はコードレスの電話機を持ったまま、和室の縁側を覗いた。物干しはその前に在るのだ。

玄関ドアを開けると、物干しが在る場所は死角になるから、優子は気付かなかつたのだ。

しかし、門から出入りした忍の視界にはしつかりと映つただろう

ぎやあ、あたしの下着外に干してあるつ。いつも中に干してつて言つてゐるのに……ていうか、高森にモロ見られてるじやん

……

優子は思わず受話器を掴みなおすと

「お、おかあああああさん……」

優子は安西の事を忍に言えなかつた。

彼が裏サイトの事を知つてゐるかは判らない。

しかし、彼に言つた所でどうにもならない事は明らかだ。モンモンとしたやり切れなさが、忍との行為に浮ついた気持ちをかき消す。

その夜、一葉から電話が来た。

「ああ、舟越つてあたしと一緒に駅だつたよ。全然気付かなかつたけど」

たまたま見つけたのか調べてくれたのか、彼女はそんな情報をくれた。

「あ、うん。あたしも昨日の帰りにあいつ見かけた。やっぱりあの辺に住んでるんだ」

そうだ、そう言えば一葉が使つてゐる駅じゃん。

「ねえ、あんた本当は安西の何か、知つてゐるんじゃないの？」

「ど、どつして？」

「うん……別に」

優子は自分の知つてゐる一部を話そつと思つた。

「実はさ、安西の家に前に行つた事あるんだ」

「ああ、安西つて優子のウチに近いんだつけ？」

「うん……駅向こう」

安西の住んでゐる様子くらい、一葉に話してもいいだろつと思つた。他にも知つてゐる人がいるかも知れない。

いや、もしかして学校にだつて独りといふのは内緒なのかも……優子は一瞬の戸惑いを感じた。

「それで？ 何を知つてゐるの？」

再び躊躇する優子は、一葉の問いに促されて言葉を発した。

「うん、たいした事じやないんだけど。安西つて、独りで暮らしてゐる知つてた？」

「独りで？ 初めて聞いたよ。独り暮らしなんだ」

「なんかさ……」の前駅でお母さんみたいな人と揉めてて、やつぱりつぽい

「ふうん。あたしなら、大喜びで独り暮らしするけど」

一葉は明るく言った。

確かに高校生の独り暮らしなんて、誰でも一度は思い描くかもしれない。

全てが自由で誰にも束縛されない生活。

気ままな時に好きなものを食べて、夜更かしそうが外泊しそうが誰にも咎められないし、自由に友達も異性も呼べる。

「でもや、いつも独りなんだよ」

「いいじゃん。友達呼べばさ。でもあいつ、本当の友達いないのかな？」

「何時でもは無理でしょ？ みんなだつてそれぞれ用事だつてあるし。夜とか毎日独りでご飯食べるんだよ。夜中体調悪くても熱があってフラフラしても、独りで乗り切るんだよ。洗濯だつて掃除だつて……」

「判つた、判つた。確かに本当に独りだと、いろいろ大変なのは確かかな」

一葉は一息つくと

「だから、優子は安西に同情してるんだ」

「別に同情とかはしてないけど……」

「うそ、だから安西に何か言われても黙つて我慢してるんでしょ」

「いや……それは、言い返せないだけっていうか、基本アイツ苦手なだけ。」

「そう言つわけじゃないけど……」

「だから、裏サイトの犯人を捕まえたいんだ」

一葉が言つ事は、少しだけ当たつているような気もした。

しかし、あのサイトを見た時の不快感は、もつと違う何かのような感じも優子はするのだ。

それが正義感だと誰かを思いやる心だと、そんな偽善つぽい

表現では表せない何かだと思った。

「なんかさ、卑怯じやん。ああいつのつて」

一葉は電話の向こうで大きく息をついた。

「まあ、確かにね。じゃあ、明日舟越捕まえてみる?」

「えつ? 明日?」

「また学校来なかつたら、放課後アイツの家に行つてみようよ」

一葉は何だか急にやる気まんまで、電話を切つた。

大丈夫なのかな……でも、一人より一葉がいてくれた方がいいかな。

久しぶりの曇り空は、朝から陽差を遠ざけて街並全てに影を落としていた。

翌日、舟越は学校へ来た。もともと存在感が薄いから、彼がいようがいまいが誰も気には留めない。

考えてみれば、学校やクラスにそんな生徒はいくらでもいる。見る方向を変えれば、全ての生徒はただの一生徒に過ぎないのだから。

しかし、この日は違っていた。

放課後、何時の間にか帰るのとする直前のところ、一葉が声をかける。

「舟越、ちょっとといい？」

「な、なに？ もう学園祭も終わったし、関係だいだる」

一葉の不適な笑みに、舟越は警戒心を露にする。

「学園祭だつて、けつときょく休んだくせに」

一葉は思わず腹に据えかねていた事を声にだした。

「おつ、舟越が女にいじめられてるぞ」

男子の誰かが声を出した。

一葉も思わず振り返つて教室を見渡す。

もうクラスの半分は教室から出ていなくなつていた。

誰が声を出したかは判らなかつたが、今の声で教室に残つている連中の大半が一葉と舟越を見ているのは確かだつた。

もしかして、声の主は同時に廊下へ出たのかかもしれない。

窓際ではバックを肩に掛けた忍が一葉を見て、優子の方にも視線を送る。

彼と目があつた優子は、なんだか忍に後押しられるように声をだす。

「か、一葉……」

彼女に近づいて、腕を掴んだ。「教室じゃあ、ちょっとそれ……」

その隙をついて、舟越が足早に教室を出て行く。

「あっ、ちょっと」と一葉は声を上げるが、まさか校舎内で追いかけっこなんてするのも何だか人目を引きすぎる。

ふと見ると、安西も教室にはもういなかつた。

「どうかしたの？」

忍が出口へ向う途中でさり気なく声をかけてきた。

それは、優子に言つたとこより、一葉と優子の二人に言つたと  
いう感じだ。

「うん……ちょっとね」

優子が先に応える。

「ほ、ほら。アイツ学園祭の係りサボったからぞ」

一葉がそう言つて「高森は今日も部活？」

「ああ、何時もと変わんないよ」

一葉は忍が優子を見るかどうか、彼の視線に注意を払つていた。  
「でも、一葉は元気いいから、舟越もタジタジだな」

忍は明るく笑うと「じゃあ」

そう言つて優子の肩にポンッと触れて歩き出した。

「う、うん。じゃあね」

優子は片言で返す。

教室で触れられると心臓は一気に跳ね上がって、自然な素振りをするだけで精一杯だつた。

一葉の視線を感じていたせいもあるのだろう。

一人きりで作つた時間が多すぎて、他の友人と一緒の時にどうし  
たらいいのか判らなくなつていた。

どうしたらいいのか判らないから、教室では余計素知らぬふりを  
する。

これから先も、あたしたちつてこいつなのかな……

相変わらずの曇り空は、午後になると少しずつ邊りを薄暗くしていった。

通りに立つセンサー式の街路灯には、既に燈が灯っていた。

「ねえ、優子

「なに？」

二人は仕方なく何時もの帰り道を駅まで歩いていた。

「裏サイトの事、高森には言つてないの？」

「な、なんで高森に言つのよ」

「だつて、前に付き合つてたかも知れないんでしょ？ あの二人。あれに書いてあつた別れた彼氏つてそななのかな？」

「そんなの、解なんないよ」

「安西には訊いてないの？ 家に行つたんでしょ？」

「訊いたけど……何だかよく解なんない」

優子の少し投げやりな応えに一葉は軽い溜息をついて

「でもさ、少しさは力になってくれるかも」

それは優子も考えなかつたわけではない。

ただ、どういう理由で一人が別れたのかはつきりしない以上、安西の事を忍に言つのは気が引ける。

「でも、なんか部活とか忙しそうだし、言い難いのよね」

「ていうか、どうしてそんな事あたしに言つんだ？ まるで

たしが高森と親しいの知つてゐみたいに……」

「それに、ほら。高森つて話し難いし……一葉が言つてみれば？」

「ええつ？ あたしはだつて、安西だつてどうでもいいし

なんだよそれ。

「でも、舟越を問い合わせるの手伝つてくれるつて」

「それは、優子の為じゃん。それに、なんか面白そうじゃん」

「本音はそれね。まあ、手伝つてくれるつて言つのはありがたいけど。

「でもさ、ヤギヰが舟越だとして、モギヰは誰なんだ？」

何となく一葉が呟くように言った。

「3年の事を書いてたから、やっぱ3年生つてことかな？」

「3年の記事は確かめようがないしね。舟越のでっち上げかもしないし」

「だいたい安西の事だつて、本当がどうか解んないじやん」

「ま、ここで言つても仕方ないって事かな」

そう言いながら駅の階段に足をかけた一葉が、思い立つたように

「ねえ、舟越の家に行つてみようよ、これから

「でも、住所録見ないと」

優子の言葉に一葉は得意げに笑みを浮かべて

「住所録、携帯のテキストに入れて来たよ」

第43話（後書き）

裏サイトの犯人は誰なのか?  
その目的は?

優子は一葉と一緒に駅を降りると、見慣れない駅前商店街の前に立っていた。

実は同じ駅を利用する一葉もあまり見慣れていない景色は、彼女が降りる反対側の町なのだ。

舟越の住所は判つても、それが何処に在るのかはよく判らない。一葉の住む地域とは駅を挟んで反対側なので、よく知らないらしい。

駅前にある住宅地図を一人で眺め、一葉が携帯に記録して来た住所を探した。

二人共地図を見るのは苦手というか、普段見慣れていない住宅地図に四苦八苦する。

「無いね。たぶん商店街よりけつこう先だと思うけど……」  
一葉が視線を地図に這わせながら言った。

「うん……」

優子も同じく地図を眺めながら応える。

悪戦苦闘の結果、ようやく位置を確認した二人は住宅街に入った。

「ここの辺なんだけどな」

一葉が周囲を見渡しながら、電柱の番地を確認してゆく。すると、少し先の家から自転車がふらりと出てくるのが見えた。

「あっ、舟越だ」

一葉が思わず声を出したので、向こうも一人の姿に気付いた。彼は一人の方向に自転車を出したが、ぐるりと向きを変えて反対側に走り出す。

「あっ、こら、待て！」

一葉は自分のカバンを優子に押し付けて走り出した。小気味よい足音が一瞬で遠ざかり、短いスカートがパサパサと風で捲くれ上がる。

舟越はよたよたと自転車のペダルを踏んだが、自転車は加速するまで若干間がある。

その隙に一葉は舟越の真後ろに追いついて、その後も自転車に負けないスピードで走ると、彼の襟首を後から掴んだ。

「か、一葉……足、超速つ……なんで？」

「待てよ、何で逃げるの？」

一葉に襟首を掴まれて仕方なく舟越は自転車を止めた。

「な、何なんだよ。こんな所まで」

優子も小走りに駆け寄った。

「ちょっとや、訊きたい事があるのよ」

「てこつが、なんで一葉、そんなに俊足なの？」

直ぐ横に小さな児童公園が在ったので、優子と一葉は舟越を挟む形でそこのベンチに腰掛けた。

砂場しかないところを見ると、住宅地の規定で無理やり作った形だけの公園なのだろう。

「あんた、学校裏サイトの事、何か知らない？」

一葉の言葉に、舟越は顔色を変えた。

「あんたなの？」

優子にも彼の表情の変化は見て取れた。

舟越は一度上げた顔を再び俯かせて黙り込んでいた。

「ちょっと、何とかいいなさいよ。知ってるの？ 知らないの？」

一葉が彼の腕を掴んだ。

「お、俺じゃないよ」

舟越は俯いたまま言った。

「じゃあ、どうしてそんなにビビッてんの？」

一葉の言葉は少し威圧感がある。

「ねえ、何か知ってる事あつたら、教えてよ。安西の事つて、あんた意外に誰か知ってるの？」

優子は必然的に優しく言つた。一人共ガミガニ言つても仕方ないと思つたのだ。

曇り空の夕暮れはやはり早くて、辺りはすっかり暗くなつていた。小さな公園にひとつだけ立つた街灯がぽつかりと三人の周辺だけを照らしている。

「センパイが……」

舟越は重そうに口を開いた。

「センパイ？」

「センパイが、面白い事しようつて」

舟越はポツリとポツリと言葉を発する。

「センパイって誰？　ウチの学校の先輩？」

優子の問いに、舟越は小さく頷くと

「でも、もういいんだ。センパイまで五十嵐がいいつて言い出して……」

その言葉に優子も一葉も一瞬ギョッとして息を呑み込むと、一人で顔を見合わせる。

「い、五十嵐つて、優子の事？」

舟越は再び小さく頷いたので、一葉は続けた。

「どういう事よ。優子がイイつて。しかも、センパイもつて？　『も』つてなに？」

舟越は親しいセンパイに、学校裏サイトの立ち上げを持ちかけられた。

立ち上げ 자체はそう難しいものではないが、センパイはパソコンでゲームはやるものその他はからつきしなのだと言つ。

舟越は丁度書きたいネタもあつたので同意した。センパイとは、よく行く秋葉原のショッピングで知り合い、同じ学校という事で意気投合したらしい。

3年生の彼もまた、クラスではパツとしない目立たない存在だつ

た。

「二人は何故か学校では接点を作らなかつた。外でしか会わなかつたらしい。」

一葉は思わず溜息をつくと

「どうして安西を標的にしたの？ 別に今まで黙つてたじやない」

「黙つてたつていうか、話す相手がいなかつただけさ」

「あれつて、本当の事なの？」

「半分はね。でも、半分は他のヤシラの当時の噂だよ。眞偽なんて知らない。」

舟越は少しだけ顔を上げると

「それに、安西は五十嵐に何時も意地悪するだろ。学園祭だつて無理やり係りにして」

「じゃあ、なに。あんた、優子の仕返しのつもりで安西の事をサイトでバラしたつての？」

「機会が出来たからさ。それに実名は伏せただろ……」

「ウチの学校の一年にA西で当た嵌まんのは、安西だけだつつの」

一葉が再び声を荒げた。

「じゃあ、なに？ つまり、あんた、優子が好きなわけ？」

一葉の率直な言葉に、優子は全身に悪寒を感じた。

以前、彼の態度でまさかとは思つたが、それが事実だと知つて眩暈がした。

暮色にぽつかりと照らされる街灯の光が霞んで見えた。

舟越は同じ学校の先輩と共に謀して学校裏サイトを立ち上げて、安西の過去を暴露した。

確かに半分は真偽の判らない話だ。

しかし、中高一貫の私立を途中で辞めて都立の高校に来た安西には、忘れない過去が在るのは事実なのだ。

共謀したそのセンパイなる人物は、学園祭で優子のメイド姿を見て気に入つたらしい。

「そのセンパイって、誰よ？」

一葉の問いに舟越は「言つても知らないよ」

「知らなくても、名前言えつての」

一葉が舟越の一の腕をパンチと叩いた。

「ていうか、優子の何処に惚れちゃつたの？ 何処がいいの？」

「おいおい、それって超失礼だろ……あたしだつて……ていうか、あたしの何処がいいんだろ……」

「そ、それより、センパイでしょ？」

優子は一葉の質問の主旨がずれているのを指摘した。

「あはは、『メン』『メン』」一葉が苦笑する。

「杉浦健也……」

舟越は一葉の声に被せるよう、「ぼそりと言つた。

優子は一瞬その名前でピんと来なかつた。一葉と一緒に何となく頷いて彼女と顔を見合わせる。

「その、杉浦つてのがモギヰなの？」

一葉の問いに舟越は、コクリと頷いた。

「ていうか、見覚えのある名前だぞ。杉浦健也？」それって、なんかすゞく聞き覚えあるつ

「とにかくさ、あのサイト閉鎖してよ」優子が言った。

「どうして？ 五十嵐には関係ないってていうか、別にキミらに被害

はないだろ？」

あんな手段で、こそそ人を貶めようとする根性が気に入らないんだよ！ 誰かに喋る勇氣がないなら、ずっと心にしまつとけ！

「いいから閉鎖しなさい」

優子はそう言つて舟越のベージュのジャンパーを千切れるくらいギュッと掴むと「するの？ しないの？」

「ゆ、優子、落ち着けって……」

優子と一葉は舟越の家に上がりこんでいた。

彼の部屋のパソコンから今すぐサイトを閉鎖する為だ。ベッドと机の間には何だかよく解らないものがごちゃごちゃと置いてある。

「何これ？ ていうか、これエロゲーじゃん」

一葉が声を出すと、舟越は慌ててそれらにバスタオルを被せた。とにかく机の前に座らせて、パソコンを立ち上げさせる。サイトを開いてパスワードを入力してログインし、削除モードをクリックするだけで簡単に全ては消えてなくなる。

当事者が操作すれば、それはあまりにもあつけなく消えてなくなるのだ。

「これでとりあえず、さつきの約束通りあんたの仕業つて事は内緒にしといてあげるよ」

一葉はそう言つて舟越の肩を軽く叩いた。

「前に、校庭の裏で死んでたネコのお墓、作つてたろ？」  
舟越がパソコンの画面を見つめたまま呟きつづけた。

「ネコのお墓？」

一葉は怪訝な表情で復唱したが、優子はピンと来た。

以前、まだ夏休みに入る前くらいの頃、校庭の裏の片隅でネコが死んでいたのだ。

気付いた連中もいたが、みんな気持ち悪がつてだれも知らないふ

りをした。

放課後たまたまクラス委員の用事で職員室へ行つた優子は、余計な雑用を言いつけられて焼却炉に不要品を捨てに行つた。

その帰りにネコの死骸を見つけたのだ。

可哀想だとは思つたが、別にお墓を作つてやつたつもりは無い。土に埋めてあげただけだ。

「五十嵐だけは、黙つてお墓を作つてゐるの見て、ちょっと萌えたんだ……」

「な、なんだよ、モエタつて？ ていうか、あれはお墓じゃな  
いって。土に埋めただけだよ。ほつといたら腐つちゃうでしょ。」

「いや、あれはさ、お墓つていうか……」

「なんか、けつこう地味だけど、なんかかわいいかなつて」

「あんたに地味つて言われたくないよ！」

「へえ、そんで優子に惚れちゃつたの」

一葉が楽しそうに言つた。

「でも、杉浦センパイが目をつけちゃつたし……」

舟越は真顔でそう言つと、パソコンの電源を落とした。

「あ、あのね。その杉浦センパイだけど……あたし、よく知らない  
し、話もした事ないし」

「でも、この前告白したつて」

「はあ？ 告白つて、もしかしてアレか？ あの暗号文か？」

「バカだね、優子はもう……」

一葉がそこで言葉を飲み込んだ。

「判つてるよ。高森の事も先輩に言つたんだ。でも、そんなの関係  
ないつて」

「うわわわわわ、あんた何いつてんの。あいつとは何でもないつて

「あれ？ そうなの？」

舟越が振り返ると、一葉も優子を見た。

彼女は優子がどう切り返すのか、少し興味が湧いた。

「そ、そうだよ。高森とは別にたいした仲でもないし。それに、そ

の杉浦つて人もよく知らないし……」

優子は何とか話題の焦点を変えようとした。

「そ、それよりさ、あんたがサイトを消したら、センパイに何かされるんじやない?」

「ああ、仕方ないから学校側が調査を始めたから止めたっていうよ……どうせ長くやるのはヤバイから、暫くしたら止めようって話だつたんだ」

「それがいいかもね」

一葉はそう言ってから

「でもさ、あれって本当に10万ヒットもアクセスあったの?」

「ああ、あれは最初から10万スタートだよ。そんなにアクセスあるわけないだろ」

「なあんだ、そうなんだ」

優子も気にかかっていた事が判つてホッと息をつく。

「そ、それじやあさ……」

舟越は電源の落ちたパソコンの黒い画面に再び視線を向けると、唐突に改まった声をだした。

「お、お、俺とじや……ダメかな」

「はあ?」

唖然とする優子を横目に、一葉は思いつき手のひらで舟越の後頭を叩いた。<sup>あたま</sup><sup>うしろ</sup>

「ありえないんだつづつの。ていうか、ナーフいでにゴクつてんだ

「ア

外の景色はもう真っ暗だつた。

闇の中に住宅街の明かりがポツポツと輝くのを、優子と一葉は駅のホームに佇んで眺めていた。

一葉は電車には乗らないが、優子をホームまで見送りに来たのだ。

「なんか疲れたね」

一葉がポツリと言つた。

「う、うん。そうだね」「う、うん。そうだね」

優子はひとつ息をつくと

「一葉、足速いんだね。ビックリしたよ」

「ああ、あたし中学の時、陸上で短距離やつてたんだ」

彼女は優子を見て笑いを浮かべると

「これでも一年の時には国体行つたんだよ」

「へえ、じゃあ、高校でもやればいいのに」

一葉の笑みが一瞬雲つて、視線を遠くに向ける。

「膝がね、もうダメなんだって」

「膝が？」で、でもさつき走つてたじやん

「あんなちょっとくらいは平氣だよ。でも、本氣でやつたら毎日何十本も練習で走るでしょ。それには耐えられないんだって」

一葉は軽く屈伸しながら自分の太ももを叩いて

「あああ、明日は筋肉痛かな」

優子は何時も通りに明るいその横顔を見つめていた。

誰にでも隠し持つた苦惱が在るのだと思つた。

こんなに常日頃明るい彼女にそんな挫折があつたと知つて、正直ショックを受けた。

いつつも元氣な一葉にそんな苦惱があつたなんて……

優子は一葉と同じに漠然とした夜の景色に視線を向ける。

少しでも、彼女と同じ景色が見たかった。

何だか自分がいかにも世間知らずで、あまりにもお気楽な人間に思えた。

普段誰にでも明るい一葉の方が、よっぽど深刻に生きているような気がしたのだ。

反対向きの電車が着いて、降り立つた人の波が同時に作り出した喧騒を持ち去つてゆく。

再びホームに静けさが漂う。

「これで、安西も救われるってわけね」

一葉は、わざと明るい声をだすと

「あたし、知つてゐるよ」

「な、何を？」

「優子が高森とけつこう親しいつて事」

「うわ、やっぱり知つてたんだ……何処かで見られたのかな……」

「あたし、この前少し後つけたんだ」

一葉は少しだけすまなそうにそう言つと

「ほら、学園祭の終わつた日」

「ああ、あの日」

優子は、一葉と駅で別れて同じ電車に乗らなかつた事を思い出した。

もちろん、実際は乗つていたのだが……

「別に隠す事じゃないんだけど……」

優子はどう言つていいのか判らなかつた。

「まあ、周りに反感買つちゃ いそ うだしね」

「ていうか、まだ、関係がよく解んない……ていうか、なんていうか

優子は一葉に視線を向けずに、住宅街の明かりを見つめて言つた。

「コクつてないの？」

「向こうがね」

「向こうが？」

怪訝そうに優子を見て一葉は笑う。

「おおおい、あたしがめちゃめちゃ プッシュしてるとでも思つ

てるのか？

「た、高森が？」一葉が確かめるように優子の顔を覗きこんだ。  
「もしかして、高森の方が優子を……？」

一葉は目を丸くしている。

ていうか一葉、それ驚きすぎだつて。

「うん……向こうが誘つてくるから、断る理由も見つからなし、  
何となく誘いに乗つてゐるうちに、一緒にいるようになつて……」

「で、今は？」

「えつ？」

「最初にどつちが誘つたかより、今のあんたの気持ちはどうなの？  
好きじゃないの？」

優子はそんな事を訊かれて、改めて困惑した。

自分は高森忍を好きなのだらうか……それが解らない。

だからきつと、忍が自分をどつ思つてゐるかの方が気になつてしまつのだ。

自分の気持ちがどつこつよりも、彼の気持ちが一人の関係をリードするのだと勝手に決めてゐる。

周囲の田から見た位置関係が、自然と優子にそういう思考を『えたのだ。

しかし、今更積極的に相手との関係を築けと言われてもどつしていいのか判らないし、そう簡単に行動にも出せない。

「解らないよ……」

優子は力なく答えた。

学園祭が終わって間も無く、中間考査が始まる。

優子は意外と試験前、試験中には勉強する方だ。

その割には中盤の順位から上にはいかないのだが、下にも行きたくないのでマイペースで試験の時くらいは勉強する。

一葉は優子と大差なくて、上に行つたり下に行つたり、美菜は何時も優子より少し上で、里香は少し下のようだ。

とは言え、試験の成績順位というのは上位20位以外は個人にしか知らされないから、それぞれの詳しい試験結果は解らない。

ただ、忍が何時も1番なのは確かで、今回もそれを追いつくように安西が2位だろう。

「この日、優子は1本早い電車に乗る為に、足早に家を出る。もう直ぐ試験なので、今日から忍は朝練が無いはずだ。

駅までの道のりも、何処かで彼と出くわすのじゃないかと気が気がしない。

しかし、優子は忍の姿を見かけないまま、駅の改札まで辿り着いてしまう。

こんな時に限って、逢わないもんなのかな。

優子は改札口を抜けると、振り返つて周囲を見渡した。

忍どころか、知った顔なんて何処にもいない。

べつにいいじゃん。何時でも会えるんだし。

彼女は何時もよりゆつくりと階段を下りた。

後からO-L風の女性が「シコツヒールを鳴らして追い越してゆく。

サラリーマンも一人追い抜いていった。

電車の到着アナウンスが流れている。

ホームに電車が入つてくるのが見えて優子も少しだけ足早になるが、そんなに焦らなくても乗れるタイミングだ。

万が一逃しても、次がある。

その時ポンと肩に誰かの手が触れて慌てて振り返った。

「急がないと乗り逃がすぞ」

た、高森。

忍だつた。

思わず立ち止まる優子を、追い越した忍が振り返る。

「どうした？ 早く行こう」

「う、うん」

優子も忍について小走りに駆けると、彼と一緒に電車に乗り込んだ。

ふうっと軽い息をついて忍は

「今日は早いんだね。珍しい」

そう言つて笑う。

朝つぱらから、爽やかな笑顔だ。

あ、あんたに会う為にね……なんて言えるわけないじゃん。

「う、うん。たまには気分転換とか思つて」

なんだそれ。そんな理由あるか？ ジやあ、今まで一度も気分転換してないって。

「へえ、よかつたよ。今日から朝練無かつたからさ」

忍はそう言つて、優子を見てから窓の外に視線を移した。

フフ、情報収集済みよ。ていうか、よかつたつて、どんな意味なんだろう……

優子は忍の横顔を見てから窓の外に顔を向ける。

胸の内側で温かい泉が湧き出るような気持ちになった。

やつぱりそうだ。高森といふとワクワクするよ……これって

そういう事なの？

でもどうして？ 彼の何にこんな気持ちになるんだろ……

優子は流れる景色の中で、何度も忍をチラ見していた。

何時もは何も感じない電車が奏でる千分の1の振動音が、やけに心に響く。

「試験勉強は、してる?」

「え? うん。少しね」

と思いつながら、たいしたやつてないんだよ。

「高森は? やっぱりかなりやつてる?」

訊いてどうすんだよ。レベルっていうか、次元が違うっての。

「いや、今日からやるうと思つての」「どうして」

「今日から?」

「ああ、何時もそんなもんや」

それって、さり気なく自慢か? そんなんで学年トップ?

そりや、塾通いの安西も怒るよ。

「やつぱり頭の出来が違うんだ」

「そんな事無いさ。昔は俺もかなりがむしゃら頑張つてたよ。でも、だんだん短時間で集中すればかなりの量を習得できるようになつてや」

忍はそう言つて再び笑う。

ステンレスのドアに跳ね返つた陽差が白い歯を照らしている。

それを世間じや秀才とかつて呼ぶんだよ。

「試験が終わつたら、また料理食わしてくれよ」

「えつ?」

「家で誰かと食事する事無いからや、俺」「ドアが開いて忍が足を踏み出したので、優子も反射的に駅へ降り立つた。

「優子の家でも俺んちでもいいから、また一緒に食事したいし、お前の料理つて家庭的な味がするんだよ」

「そ、そうかな……」

優子が思わず俯いた瞬間、前方の車両から降りた一葉の姿が見えた。

彼女に声をかけようか迷つたのだが

「よひ、忍」

後からは忍の部活仲間が声を駆けてきた。

チツ、少しば空氣読めよ。

忍は一言二言その友人と話すと優子を見て

「じゃあな」

そう言つて軽く手を上げ、友達の方に身体を寄せたので

「うん」

優子はわざと足並みを崩してそこから離れた。

「あああ、せつかくあたしが氣を使って声かけなかつたのに  
横から小走りに身体をぶつけて来て一葉が言つた。

「知つてたの？　この電車に乗つてた事」

「うん、乗るのが見えたもん」

「べ、別にそんなの、氣とか使わなくていいよ」

優子はもう言つて、足早に歩き出した。

「ねえ、雑誌で見たセーター探したいんだけど、優子今日暇？」

放課後声をかけて来たのは一葉だ。

舟越を追い詰めた一見と、忍の事を知つてゐるといつ事から、人は以前に増して親しくなつた氣もする。

「あつ、あたし行く」

声を出したのは近くにいた里香だ。

彼女は小走りに一人に近づくと

「最近一人でばっかずるいよ」

「そんな事言つて、あんた最近彼氏見つけたつて噂じやん」

一葉がそう言つて笑うと、里香も笑う。

「あつ、ばれてた？」

「そ、そつなの？」

優子が目を丸くする。

ほんと、一葉つてあなどれないよ。ていうか、あたしが疎いのか？

「今日は暇でや。付き合つよ」

里香がそう言つながら優子の机に腰掛けると

「優子も行くでしょ？」

「ええつ？ あさつてから試験だよ。少しやらないとなあ

「そんなの夜やればいいじやん」

あたしは机に向つてから、エンジンかかるまで1、2時間はかかるんだよ。

「でも、いま欲しいものないしなあ

「欲しいもの持つてゐるつて噂だしね」

一葉がわざと嫌味つぽい口調で言つと、里香がそれに反応する。

「ナニナニ？ 優子、何手に入れたの？」

「何でもないよ。なんにも手に入れてない」

そう言って一葉を軽く睨んで「変な事言わないでよ」

優子と忍は相変わらず学校ではほとんど話はしない。

前よりはほんの少しだけ喋る機会も増えたような気もするが、変わったところほどではないだろ？

安西とはまるつきり会話する事もなく、向こうも突つかかってく るような感じではない。

優子はさり気なく安西が会話を交わす連中などに視線が行つてしまつ。

あの娘たちはあの学校裏サイトを見たのだろうか……あの記事の事を知つていて、あんな風に普通に安西と話してるの？ それとも、意外とみんな知らなかつたりして。

そんな事を考える事多く、クラスみんなをおかしな目で見てしまつ。

優子は結局一葉と里香に誘われるまま買い物へ出かけた。前なら平氣で断つていたのに、何故か断りきれなかつた。別に一葉は気が置けないと思つてはいるはずなのに、どうして断れなかつたのか自分でよく解らない。

付き合いが増えるといつのは、こうこう事なのかとも思つてみると、一人と別れて駅に着いたのは、もう夜の8時を過ぎていた。途中でお茶なんでしたから、余計に時間をくつた。

はあ、昨日もほとんどやつてないから今日は少しでも数学やつといつと思つたのになあ。まあ、少しは時間あるか。

優子が駅のホームに降りると、ひとつ後の車両から安西が降りてくるのが見えた。

彼女も優子に気付いたようだ。おそらく塾の帰りだら？  
相変わらず綺麗な黒髪が、弱い風に揺れていた。

優子は何となく足を止めて彼女が近づくのを待つた。  
前々から彼女に訊いてみたい事があつたから。

「なに？ 何があたしに用？」

安西は近づいてくると、木で鼻を括るような表情で優子を見た。

優子は少し俯いてしまつが

「あ、安西はさ、高森の何処が好き？」

「はあ？ な、何よいきなり」

「どうなかなあ、て思つて」

「ど、どうしてあんたにそんな事言わないといけないの？ それにこんな所で話す事でもないでしょ」

「それはそうなんだけど……」

優子は少し俯いた視線を上げて、安西を見た。

安西は、優子の視線の真剣さに少しだけ心がたじろぐ気がした。

優子は安西の瞳の奥を覗いていた。ホームの明かりが溶け込んで、思つた以上にそれは澄んでいる。

虹彩が綺麗に見えるコンタクトを使つてゐるのかもしれないが……

安西は思わず先に視線をそらす。

周囲に視線を巡らせたあと、再び優子を見る。ゆつくりと、困惑の視線で。

「あんた、忍の事好きじゃないの？」

「解んない……」

優子は俯いて小さく首を振つた。

「高森が解んないのよ。何を考えているか、全然わかんない……」

「そんなの、本人に訊けばいいじゃない。男の考えなんて、あたしら女には理解できるわけないじゃん」

「じゃあ安西は？ あんたはどうなの？」

「あたしは、訊いたつて仕方が無いのよ。話は既に完結してるんだから」

「それでも、高森が好きなの？」

「そうね……初めての人だから……かもね……」

安西はポツリと言つた。

その瞬間、優子の胸の中にイナズマが走つて、冷たい氷の柱がせ

り上がった。

それは驚くほど透明で、硬質で鋭く、心中を一瞬でズタズタに切り裂いた。

何となく解っていた……安西と高森がそういう関係だった事は、心の何処かで気付いていたはずなのに、面と向かって聞く言葉がいかにも生々しくて、一瞬で思考力を奪った。

「だから、あたしはその後に他の連中に乱暴されても、立ち直る事ができた。それが初めてじゃなかつたのは、精神的救いになつたから……」

安西は優子を見ると「知つてるんでしょ。学校裏サイト」

「やつぱり……やつぱり安西も、サイトの事は知つてたんだ。じゃあ、アレに書き込まれた事は本当なの？」

「さあ、どうかしらね。読みたいヤツには読ませてあげるよ、別にやる」

安西は空を仰いで少しだけ涼しげに笑つた。

その姿は羨ましいほどに毅然としている。

肩に乗つっていた黒髪が、ゆるりと後へ落ちた。

「あのサイトは、もう消えたよ。犯人突き止めたから」

少し冷たい夜風が一人の間を吹きぬけた。

安西は再び優子を見つめると目を細めて

「突き止めたつて？ どうやつて？」

「それは言わないし、犯人も言わない」

優子は安西を見つめたまま「でも、完全に消去されたから。もう、何も残つてないから」

安西の左の細い眉が、ピクリと動いた。

「そんな事して、あたしに恩義を着せる気？」

「別に……そんな事思つてないよ。ムナクソ悪いから犯人を捕まえただけ。それだけだよ」

「どうせ、舟越とかじゃないの。あんなの書くヤツなんてさ」

再び空を仰いだ安西は、紺青の中に小さく浮かんだ月を見つめる。

「あんたに礼なんて言わないわよ。別に頼んでないしわ  
「いいよ別に。そんなの欲しいわけじゃないから……」

安西は優子を一瞥して、先に階段に向かつて歩き出した。  
流れる雲に月が覆われて、照明の届かない場所は闇に包まれた。  
同じ電車から降りた人影はもう無くて、ポツリポツリと次の電車  
に乗る人影がホームに降りてきた。

安西は振り返つて優子を見ると、わざとらしく冷酷な笑いを浮か  
べて

「あんた、あたしが思つてた以上にバカかもね」  
その残像だけを残して彼女の足音が階段を上つていくと同時に、  
雲に隠れていた月が顔を覗かせて、フッと辺りに月影が注いだ。  
安西の靴音が階段の先に完全に消えてから、優子はようやく静か  
に歩き出した。

中間考査も終わって忍は当たり前のようになり、やはり安西ひとみは2位。女子では1位の成績だった。

11月になると校舎裏の雑草も褐色に変わつて景色全体が冷涼なものに変わる。

花壇に咲いていたコスモスも、気付けば何時の間にか枯れ草になつて干枯りていた。

優子は放課後、クラス委員の雑用で教材の用具室を片付けていた。それは職員室と保健室に挟まれた小部屋で、スチールの棚が幾つも並ぶだけの殺伐とした場所だ。

窓はあるが、陽の入りが悪くて薄暗い。

ちょっとびり環境に変化のあつた優子も、クラス委員としてのこんな立場は変わらない。

「ちょっと舟越、ボケッとしないで早くそれしまつよ」

「ああ、ごめん。でもさ、この漢字表記のパネルスゴイよ。知つてた？ 凸凹つて正式な漢字表記だつたんだね」

「はあ？」

「ていうか、んなの今はどうでもいいんだよ。

「じゃあ、あたしゴミ捨ててくるからね」

優子はそう言つて教材部屋を出る。

なんだかなあ。独りのほうがかえつてやり易いよ。あいつなんでもかんでも興味示しちゃうし、手は遅いし全然はかどらないよ。優子が廊下に出ると、保健室の先に在る生徒相談室から一人の男子生徒が出て来た。

「うわっ、金髪だよ。あんな生徒ウチの学校にいたつけ？  
彼は室内に向つて一礼していた。

優子はこんな時の予測が足りない。

その生徒が振り返つたら歩き出す事を予測して、少し離れてそこ

を通るべきだったのだ。

しかし、彼女は彼の直ぐ後ろを通り去った。

「きやつ

「あ、つと、わりい

振り返りざまに歩き出そうとした生徒と優子はぶつかった。

彼女は、抱えていたダンボールは落とさなかつたものの、溢れるほどに入つていた中身が少々こぼれ落ちた。

古い黒板消しやボロボロのジャンボ三角定規などが床に落ちて音を立てた。

「ああ、」めん

もう、後見てから歩き出せよ。

「あ、うん……」

男子生徒は、両手の塞がつた優子の変わりに落ちたものを拾つてダンボールに入れてくれた。

「重くない？ 手伝おうか？」

ダンボール越しに微笑む男の髪が、サラサラと黄金色に揺れていった。

うわっ、完全金色だよ。これはいくらなんでもヤバくない？ ていうか、だから相談室だつたのか？

生徒相談室は普段、生徒の個人指導などにもよく使われるのだ。

「あ、だ、大丈夫よ。平氣」

あんまり関わりたくないわ。早くここから離脱しないと。

「いいからいいから、俺が持つてやるよ。何処に運ぶの？」

彼はそう言つて、優子の手からひょいとダンボール箱を奪つた。

「えつ、いや……あの……」

いいつつて言つてゐるのに、何でだよ、もう。何だよコトヤツ。

「あ、あの……焼却炉のところに……」

うわ、言つちやつた。この金髪と歩くのか？

「焼却炉は？ 何処？」

「あ、この先の方」

優子はそう言いながら先に歩き出して彼を促す。

仕方がないので、箱から著しく飛び出しているジャンボ定規とジャンボコンパスを手に取った。

なんだ？　どうして焼却炉判らないんだ。きっと、「ミミ捨てなんてしたこと無いんだ。そうだ。

優子が歩き出すと、それについて彼も歩き出します。

「キミ、何年生？」

「えつ、えつと、一年……です」

「俺も一年なんだ。B組に明日から入るんだよ」

「ああ、転校生？　なるほどね。でも、いきなり金髪か？」

「俺、篠山雄一郎。キミ、何組？」

「あ、えつと……じだけど」

「あ、じゃあ隣なんだね」

雄一郎はそういうて優子に笑いかける。

だ、だから何？　同じクラスじゃないんだから全然関係ない  
し……

優子は無意識のうちに足早になつて行った。

「なあ、名前は？」

「えつ、あ、い、五十嵐……」

「ゴツイ名前だな」

雄一郎が笑つた。

ほつとけ。

「ねえ、下は、下の名前」

「ゆ、優子よ」

「そ、ゆうの字は衣偏の裕？　それともこんべんの優しいって字？」

そんなのどうでもいいじゃん。何であたしなんかに興味示してんだよ。ていうか、初対面でどんなだけ喋るんだよ。

「や、優しいに子よ」

「ああ、そなんだ」

雄一郎は終始明るく笑つて、相づちを打つた。

焼却炉の横には不用品置き場がある。コンクリート剥き出しの小さな建物は言い換えれば粗大ゴミ置き場だ。

優子は鉄の扉を開けると、持っていたものを小分け用の箱へ投げ入れる。

雄一郎は床に箱を置いて「これ、分別要らないの?」  
「い、いらないと思つた

こいつ、意外と細かいのか？

優子はよくここへ来るが、分別なんて考えた事もなかつた。考え

てみれば、金属も木製も「ラスチックモード」や「セラミックモード」に置いてある小分けの箱も実際は意味がないのだ。

しかし、業者が引き取りに来るのか、時折綺麗になくなっているので、特に問題は無いのだろう。

焼却炉は校舎の裏側にある。

て いる。

もつと先には学校の裏門が在る。  
優子が雄一郎と並んで校舎へ戻ろうとした時、裏門からロードワ  
ークに出たらしきバスケ部の連中が戻つて来た。

その中には忍の姿もある。

「どうしたの？ 早く戻らひがせ」

ל' ע' ע' ע'

て、どうかあんたと一緒に戻る筋合いはないし、あんたとあた  
しは行き場所違うでしょ。

優子が忍を見ていると、彼も気付いたらしく小さく手を上げた。

優子は体育館の出入り口へ向う忍に向つて小さく胸の辺りに手を上げて、微笑んで見せた。

「なに? あれって、彼氏とか?」

雄一郎は少し先からわざわざ優子の所へ戻つて来て、彼女の視線の先を覗き込む。

「えつ、い、いや。別にそういうんじゃ……」

優子はそう言って

「あ、ありがとう。助かったわ」と校舎の中へ足早に歩き出した。

翌日、優子はブラウスの上に学校指定のマネックのセーターを着てからブレザーを羽織った。

窓の外に広がる水色の高い空は、いかにも寒空だった。

そろそろブラウスとブレザーだけでは風が肌に沁みてくる。

バニッシュはまだ早いよね……でも、そろそろ出しておくが。 チェストの中を覗き込む。冬物が入った場所なので、久しぶり開けた引き出しだった。

「きやあ、か、カビが生えてる……なんで？

白と生成り色は平氣なのに、何故か黒と紺色のヤツには白い斑点が出来ていた。

優子は慌ててそれらを掴んで階段を下りると、洗面所へ駆け込んで洗濯機へ放り込む。

あたしの箪笥つて、そんなに不潔なの？ ちゃんと洗濯してから入れたよね……

「どうしたの？ バタバタして」

母親の杏子が洗面所に顔を覗かせた。もうパートへ出かける準備をしている。

「な、なんかさ、あたしのシャツにカビが」

杏子が洗濯機を覗き込んで

「あら、これ洗剤の残りじゃないの？」

そう言つて、指で白い斑点をなぞる。

「なんだ、なの？」

「うう。そそかしいわね」

杏子は軽い声を出して明るく笑つた。

ていうか、その前にちやんと濯いでよ……バシクリするつひ。

優子は朝食のパンを齧つて、早々に家を出る。

何時もの事だが、直樹はもう家を出た後で、彼女は駅まで小走りだ。

駅の階段を駆け上がって改札口の手前まで行くと、前から来た男に突然声を掛けられる。

「あつ、優子じやん」

優子はビックリして一瞬立ち止まつた。

この時間、今まで知つた顔になんて会つた事がないのに、確かに同じ学校の制服の男だ。

それでもパツと見誰だか判らない。

それは、金色だつた髪の毛が真つ黒だつたからだつ。

優子はほんの少し彼を凝視して

「あつ、あんた……」

髪の毛真つ黒！ ていうか、何であたしを下の名前で呼ぶんだよ。

声をかけて来たのは、昨日の放課後に会つた篠山雄一郎だつた。金髪だつた頭は染めたのだろう。不自然なくらいに真つ黒だ。時間が無いので二人共改札を抜けて足早にホームへ降りると、一度電車が入つて來た。

「か、髪、染めたの？」

電車に乗り込んでから直ぐ、優子が訊いた。

「ああ、昨日相談室でグダグダ注意されたからね」

「そんな真つ黒じゃなくても、大丈夫よ」

「でも、駅前の薬局に行つたらこの色だけ半額で売つてたから

そういう問題か？」

「そ、そう……」

優子はとりあえず頷いて見せる。

「この電車で間に合つの？」

「え、ええ。一応は」

おいおい、転校初日だろ。もっと余裕もつて登校しろよ……

優子は窓の外を眺める雄一郎を見上げた。

「ちよつど忍と同じくらいの背丈だろ？ そんな事を思つ。

しかも、よく見るとちよつとイイ顔だ。一重の目は涼しげでいかにも今風だし、眉はカットしているかのよう、きつりと整つている。

いや、あの眉は絶対カットして整えてるよ。

喉仏が妙に遅たくましく見えて、優子は小さく頭を振つた。

高森は意外と中性的なのかな……

「よかつた、優子がいて。昨日一度行つてゐるけど、初日の登校は緊張するしね。かといって一緒に登校する知り合ともいもないし。ていふか、駅同じなんだな」

なんだか男のくせに朝からよく喋るなあ。だからもつと余裕持つて行けつて……ああ、この男と駅同じなんだ……

「そ、そうね……」

優子は短く応えて小さく笑つた。苦笑と語りれないような微妙な苦笑いだった。

駅を降りて足早に学校へ向つ。

「なあ、優子は部活とか何かやつてるの？」

「べ、別に何も」

「そつかあ、同じのがよかつたなあ」

「はあ？ 同じつてなんだよ。女と男じゃあ文化部しか一緒に出来ないだろ。

優子は教室に入つて自分の席に着くと、思わず息をついた。

なんか、面倒なのと知り合つちゃつたなあ。今までなりゼッタイあんなのと知り合わなかつたのに……どうなつちゃつてんの？ しかし、それだけでは終わらなかつた。

三時間目が終わった休み時間、一葉が声をかけてきた。

「ゆ、優子、誰かが呼んでるよ

「何？ 誰？」

「知らない……見た事無い人」

「見た事無い？」

優子が教室の出入り口を振り返ると、そこには雄一郎がいた。  
な、なんだよアイツ。なんなの？ ナニ休み時間に顔出して  
んのさ。

雄一郎は優子と目が合つと笑顔で手招きする。

優子は仕方なく彼に駆け寄ると、小声で

「なによ、何の用？」

「ああ、悪いけど現国の中教科書ある？」

「はあ？」

「なんか俺、忘れたみたいでさ。借りられるような人、優子しかい  
ないし」

雄一郎がそう言つて笑う。忍に負けないほどの爽やかスマイルだ。  
優子は溜息をつくと、自分の机から教科書を取り出して雄一郎に  
手渡す。

「サンキュー」彼はそう言つて足早に戻つていった。

ヤバイよ。なんでいきなり懐かれてんの？ あたしつてそんな声掛け易いタイプじゃないだろ……

「ちょっとちょっと、今の誰？ 一年生？ 見た事ないんだけど」  
一葉がさつそく寄つて来た。

周囲にいた女子も、一葉の問いに密かに聞き耳を立てる様子が判  
る。

「て、転校生だつて」

優子は出来るだけさり気なく言つ。

「転校生？ 何組？」

「B組らしいよ」

「なんで優子つたら、もつ仲良しなの？」

「な、仲良じじやないよ。昨日ちょっと話しただけ」

優子は忍の視線が気になつてさり気なく見るが、彼は全然興味が

無い様子で、他の男子と笑つて何かを話していた。

「なんか、意外とイイ男っぽいじゃん」

一葉の瞳が何時に無く輝いていた。

「そ、そう?」

さすが田嶋といよみんな。だから興味深々なのね……でも、  
アイツの正体はパッキンヤンキーってカンジよ。  
授業が始まつて少しすると、優子の所に小さな手紙が一回つて  
きた。

ひとつは一葉で

『さつきの男。名前教える!』と書いてある。

優子は一葉をチラリと見て、もうひとつを広げる。

『あんたも、じつさい男好きなのね』

うぐつ……このいかにも硬質な筆跡……安西だな。

優子は、一葉とちよど教室の真反対にいる安西を見る。

向こうはチラリと視線を交わして嘲るような笑みを零した。

あの女、あたしのおかげでちよつとは助かったのこ、マジで  
なんとも思つてないな……

優子は仕方がないので、一葉には雄一郎のフルネームを書いた手  
紙をまわした。

安西には半ばヤケクソで『モテル女は辛いよ』と書いてまわして  
やる。

「ねえ知ってる? 駅向こうに大きな家が出来たって  
夕飯を食べながら、母親の杏子が言った。

優子の家の食卓は、今夜も家族揃つて平穏そのものだ。

「何だ、金持ちでも越して来たか?」

孝之助が箸を動かしながら応える。

「それがハンパじゃない大きさなのよ。みんな公共施設ができると  
思つてたくらいなんだから。それが出来てみたら個人の自宅なのよ」

「そんな、デカイのか?」

「庭にこの家がすっぽり」

「そんなに?」

「しかも、二つは入りそう」

それを聞いて、孝之助の箸がさすがに一瞬止まる。

「わざわざ見に行つたのか?」

「だつて、どれだけ大きいか気になるし、私もあそこには何か施設  
か公園が出来ると思ってたんだもの」

「ま、金持ちは何処にでもいるさ」

孝之助はそう言つて、味噌汁をガブリと飲んだ。

「何処かの組長さんの自宅らしいわよ」

母親の杏子は続けた。

「ぐ、組長つて、ヤバイ組の方の?」

優子が思わず口を挟む。

杏子は頷いて笑うと

「優子も気をつけてね」

何をどう氣をつけんのさ。

「ほら、姉ちゃんトロイから、ぶつかつて因縁つけられたりとかさ。  
ついにラチられてどつかに売り飛ばされたり」

直樹が面白そうに横から口を出す。

まるで思考を読み取ったかのような言葉は、やっぱり姉弟といふ事か……

「バカね、そんな漫画みたいな事がそつそつあるわけないでしょ」

優子は肘で弟の脇腹を小突いてやつた。

「何処見てんだ、こらあ！ ああ？」

朝の喧騒に包まれた駅構内に、いかにも下品な声が轟いた。

うわ、何だあれ。あれがそうなのか？

優子は階段を上ったところでそれを耳にして、思わず通路の先を見た。

大柄で長いコートを羽織った後姿は、脚を大きくがに股に開いている。オールバックの髪は整髪料でエナメルのようだ。

その隣には少し小柄の、金髪で坊主頭の男。これまた凄いがに股だ。

いかにもガラの悪そうな男が一人、誰かに絡んでいる。

しかし、二人の男が少し動くと、その先には見慣れた制服……

ていうか、あいつ篠山？

絡まれているのは、どうやら篠山雄一郎のようだ。

優子は雑踏に紛れながら出来るだけ彼らに近づく。

「ああ、ごめん。ちょっとと考え事してたもんで」

篠山は何時もの笑顔だった。微かに話し声が優子に届く。

「考え方だ？ 兄貴の肩はなあ、めちゃくちゃ外れ易いんだ。どうしてくれんだコラ？」<sup>ああ</sup> 嘴呼？

小柄な男がガ一股の足を揺らしながら、篠山に顔を近づけて怒鳴る。

篠山は顔色一つ変えずに、制服の内ポケットから財布を取り出した。

あいつヴィトンの長財布？ ていうか、ああ……お金払っちやうの？ それってどうなの？

優子は柱の凹凸の影に身を寄せて様子を覗っていた。

しかし篠山は自分の財布から取り出した、何か名詞のよつなものを差し出して

「ああ……じゃあ、後でここに連絡くれる?」

そう言って再び笑つた。

なんだか知らないが、全く動じる様子は無い。

「ああ? どつかの坊ちゃんか?」

小柄の男はいかにも不服そうにそれを受け取り、大柄の男が覗き込む。

が、急に直立した姿になった。

その時、構内放送が流れ、彼らの話し声はかき消された。  
しかし小柄な男も遅れて直立している。かなり慌てた様子だ。

そして、二人一緒に足早に向こうの階段を下りてゆく。

何度か篠山に頭を下げたように見えたが、優子にはどういう事が全く理解できなかつた。

な、なんだ? 何だつたんだろう。

優子が通路の中央へさり気なく歩き出すと、篠山も彼女に気付いた。

「ああ、優子。 おはよ!」

「お、おはよ!」

なんだよ、もう……高森とだつて滅多に朝の挨拶なんて交わせないのに。

「相変わらず優子はギリギリなんだな」  
あんたに言われたくないつての。

優子と篠山は電車を降りて駅を出ると、朝の風を切つて学校までの道を足早に歩いた。

学校の最寄駅を出ると、意外に自分たちと同じ制服姿は目に付く。  
学校周辺に住んでいる連中ほどギリギリに来るので。二人の横を、

何台もの自転車が追い越してゆく。

「ねえ、この前の彼、高森忍だろ？」

篠山はポケットに手を入れたまま、優子を覗き込む。

「えつ？ う、うん……」

なんだコイツ。早くも対抗意識でもあるのか？ 確かにあん

たの見栄えもなかなかだけど、高森は特別だよ。

「そうか。やっぱり忍か」

彼は歩きながら、軽く空を仰いだ。

優子は思わずそんな篠山を見る。

「し、知ってるの？」

「ああ、ちょっとね」

篠山は意味深に笑つて見せた。

「俺、来週転校するんだ」

「そうなの？」

「親父が九州に転勤でさ」

「ヤクザに転勤なんてあるの？」

「遠征とかって言つてた。お袋が付いて行きたいらしくてさ」

「そうか……」

「半年しかこの学校にはいなかつたけど、忍に会えて楽しかったよ」

「いや、俺の方こそ楽しかった」

夕焼けが辺りの景色を琥珀色に染めて、二人の少年の影は空き地の隅に長く伸びていた。

「他の連中には言わないで行くよ

「なんで？」

「何か、わざわざ伝えたいヤツもいないし。男子の半分は殴つちまつたしな」

「俺だつて殴られたぜ」

「その分、殴り返したろ」

二人の少年は顔を見合させて同時に笑つた。

暮色に染まる空に、子供らしい高らかな笑い声が響いていた。

\* \* \*

優子は一葉と学食のテーブルで弁当を食べていた。

かなりの席数がある学食は、持参した弁当を食べに来る生徒も意外といふ。

風が冷たくなると屋上や校庭には行き難いので、教室とは別の場

所で食事をしたい生徒が、必然的にやつて来るのだ。

もちろん、その場で好きな飲み物をチョイスできる利点もある。横のテーブルにいた連中がいなくなると、少し離れた場所に篠山の姿が見えた。

「一葉さ、B組に親しい娘いる?」

優子が訊いた。

「いたら篠山の事もつと情報収集できるよ」

一葉はそう言ってペットボトルのお茶を口にした。

優子も何度か篠山に声を掛けられて話はしているが、実際彼がどんな男なのかはよく判らなかつた。

「ここ、いい?」

声を掛けられて優子と一葉が見上げると、忍が立つていた。  
な、なんでここで?

「いいよ」と言つたのは一葉だ。

忍は優子の隣に腰掛けると、割り箸を小気味よい音で割る。

正面にいる一葉が気になつて、優子は忍に話しかけられない。

忍は天ぷらうどんを一口啜ると

「一葉は知つてるんだろう?」

「な、何を?」

「前に優子をつけてたじやないか」

「えつ、き、気付いてたの?」

「ああ、一応ね」

忍はそう言つて再びうどんを口へ運ぶ。

優子は思わず忍を振り返つた。

な、なんで言わなかつたのよ。あたしは全然気付かなかつた  
のに。

「別に無理に隠す事でもないし、わざわざ言つ事でもないからな」

忍は視線を食事に向けたまま言つた。もちろん、一葉に向つて。

「うん、それは判つてる。あたしも別に誰にも話していないし。あたし自身が気になつただけ」

なによ、一人で意氣投合して。あたしと高森の事なのにおかしくない？ それって、おかしくない？

「で、二人は結局付き合つてるわけ？」

一葉、調子に乗りすぎだよ。

忍は冷たい水を一口飲むと、チラリと優子を見て「さあ、それはどうかな？」

「へえ、二人は付き合つてるわけじゃないの？」

えつ、やつぱりあたしたち付き合つてるわけじゃないの？ しかし、今の声が自分たちの後ろから聞こえた事に気づく。優子と忍は振り返り、一葉は視線を上げた。

そこには篠山雄一郎が立っていた。

忍は彼の姿をマジマジと見上げると、少し不安げに、いかにも自信なさそうに眉を潜める。

「おまえ、雄一郎か？」

それを聞いた篠山は「やつぱ、忍か」

二人は本人だと確認し合つと、お互に何度も肩や腕を叩きあって笑つた。

「ちらつと見た時からそつじゃないかと思つてたんだ」

「B組の転校生つて、お前か。全然判んなかつたよ」

転校生だった篠山は小学校3年生の時に半年間忍と同じクラスで過ごした。

その後彼は再び転校の為、遠くへ行つた。

みんなに好かれようとあらゆる努力をしていた忍と自由奔放な篠山は、学校では全く相反した立場にいた。

しかし、何故か二人は気が合つた。

心の中の何処かに同じ匂いを感じたのかも知れない。

それは微かな孤独と、僅かな物悲しさ……

だが篠山は喧嘩つ早い為、転校早々クラスでトラブルを起こした。止めに入った忍も何度も彼に殴られ、そのうち何回かは殴り返している。

しかしそんな篠山の校内での暴走を止められるのは、何時の間にか忍だけになつていった。

型破りで自由な篠山雄一郎の姿を、忍は心の何処かで羨ましいと思つた。

誰からも好かれ、尚且つ行動力のある忍を、篠山も密かに羨んでいた。

そんな二人は、お互いを認めていたのかもしれない。

こ、この金髪男と高森が友達？

優子には俄かに信じがたい事実だつたが、一緒にいた一葉には美男一人の輝かしい姿だけが瞳に焼きつくほどに印象的だった。

天窓から入る陽差と水銀灯の緩い明かりが全てを照らし出し、通路のドアを開けた瞬間、独特の不慣れな匂いが彼女を迎える。

木の香りとゴムが混ざったような、ビニールレザーにも似た匂い。優子は、放課後珍しく体育館を覗いていた。

二階の校舎通路から入つてギャラリー通路の柵越しに見下ろすと、直ぐ下ではバレー部が練習している。

手すりに両手を着いて視線を横に動かすと、体育館中央がバスケットの練習コートになつていた。

部活の際、体育館はネットで3分割され、バレー部、バスケ部、体操部が分けて使う。時々バドミントンや卓球部も使っているが、バレーバスケ部以外は週決で変わるらしい。

もちろん、優子には詳しいローテーションなんて解らない。

彼女はあえて中央へは足を運ばずに、端の方からバスケ部の練習を見下ろして見えた。

ネット越しになるので、尚更見難いが、あまり存在が目立つのも嫌で、バスケ部の真上には近づけない。

それに、中央には女子バスケットの娘が一人、休憩がてらに男子を見下ろしている。

忍がボールを取つたのを見て、優子は反射的に目で追つた。

奥のゴールへ走る彼の姿が防球ネット越しに、コマ送りの映像のように細切れに動いて見えた。

忍がスリーポイントを打ち込んだ所で、笛が鳴つて休憩に入る。ちょうど見学していた女バスの連中も下へ降りてゆく。

それを目で追つていると、何時の間にか下のコートに忍の姿が見えなくなつていた。

あ、あれ？ 何處いったんだろ……外に出たのか？

すると背後に気配を感じると同時に声がした。

「よお、珍しいな。優子が見に来るなんて  
忍がすぐ後についた。

「う、うん……」

「うわ、あたしに気付いてたのか？」

「どうしたの？ 何か急な話とか？」

「べ、別にそういうわけじゃないんだけど」

優子がそう言つて手すりに背を着けると、忍は彼女の正面に立つて壁に寄りかかった。

正面に向き合つて話す事はあまり無いので、彼女は思わず俯き加減で視線を泳がせる。

天窓から注ぐ光の柱が、彼の身体の左側だけを細く照らして、その情景に優子は思わず胸の奥がピリピリと痺れる感じを受けた。

「し、篠山つて何時の友達？」

「ああ、小学校3年の時にちょっと」

忍は彼との経緯を簡単に話して聞かせると

「どうして？ 篠山の事気に入った？」

な、なんでそういう言い方するかなあ。それに、その逆だってば。

「そんなわけ無いじゃん」

「優子こそ、なんで雄二郎の事知つてたの？」

「うわっ、そうだよね……ふふ、気になる？」

しかし、忍は直ぐに「まあ、別にいいけど

な、なんで？ 何で別にいいの？」

「いや、あの、仮登校日に廊下でぶつかりそうになつて……」

優子も篠山との経緯を話した。そして、彼が使う駅が自分たちと一緒にだつて事も。

「ああ、そんなんだ」

忍は嬉しそうに微笑んだ。

「あれ？ 忍は何処行つた？」

下のコートからそんな声が微かに聞こえると、忍は小走りに通路

を真ん中まで移動して

「おお、今降りるから」

「何やつてんだ？」

「ああ、ちょっとな。直ぐ降りる」

忍はコートの仲間と言葉を交わすと、咄嗟に屈んだ優子の前まで駆け足で戻つて来た。

「今度の土曜日、映画でも行こうよ」

「えつ、う、うん」

「じゃあな」

そう言って2・3歩駆けて再び彼は振り返る。

「雄一郎はさ、基本イイ奴だから心配しなくてもお前に手は出さないさ」

忍は軽く手を上げると、再び駆け出して階段の在る先へ姿を消した。

き、基本って何？

手すりの隙間から下を覗くと、彼が直ぐに走つて来るのが見えて、仲間と共にコートへ散つて行つた。

4時過ぎだと呂のひに、外はもう暮色で西の空には雲に隠れた夕陽が僅かに空を染めていた。

優子はひとり校門を出て駅へ向つ。

最近は以前に比べても一葉などと一緒に帰る事が多いが、それでも何となく一人の時はあるし、それをなんとも感じないのは今も変わらなかつた。

駅の入り口に数人の高校生の姿が見える。

女子は優子と同じ制服だが、男子はまったく知らない制服を着ている。

階段の脇に股を広げてしゃがむ連中の姿は、ビリビリにも威圧感がつて通る人にはいい気分ではない。

それでもよく見る光景なので、優子もさり気なくその前を通りうとした。

「おい、あの女じやね」

「ああ、かなりたいした事ねえじやん」

そんな話しそと共に嘲るような笑い声が聞こえた。  
なになに……まったく、こいつ連中つて不愉快なのよね。  
それでも、優子の視線は駅の階段。彼らと田を合わせるのは危険だと知つている。

「五十嵐優子」

三人の男の誰かがそう言つた。

優子も思わず振り返る。

「あんた、五十嵐優子なんだ」

三人の真ん中男だつた。

「ほら、やつぱりそ удар」

「意外とブスじやね？」

「高森忍つて、趣味変わつてるらしいからさ」

三人が交互にそんな会話を交わしている。

な、なにこいつら。あたしに絡んでるの？

足を止めた優子の前で、三人の男はゆっくりと立ち上がつた。

「なあ、俺たちと遊ばない？」

左の男が優子の腕に手を伸ばしたので、彼女は反射的に振り払つた。

「あれえ？ なんだよ。内氣でシヨボイから楽勝だつて言つたの、誰だ？」

「千賀子じやねの？」

「誰よ、チカコつて？ あたし知らないよ。

「いいじやん、ちょっとぐらい遊んでくれたつてさ。若いうちにいろんな経験積んでおいた方がよくね？」

今度は右端の男が優子の腕を掴もうとして、それも払いのける。しかし、三人は確実に優子を階段の上り口から遠ざけてゆく。

な、なに？ もしかしてあたし超ピンチってやつ？ こいつ

ら何？ 高森を知ってるの？ ていうか、あの女は何？

男の後ろに視線を向けると、最初からいた女子2人はずっと同じ位置に立つたままこちらを見ている。

どう考へてもこの事態に関係無くはないだろう。

優子は暮色の空の下で、できるだけ彼女らの姿を記憶した。

「ちょっと、向こうに行こうよ」

階段の上り口は何時の間にか遙か遠く見えた。

それは、実際の距離だけでなく、危機的状況から来る距離だ。

「ちょっと、やめてください！」

優子は三人の手を何度も払いのけた。

線路沿いのフェンス横にある物置きの壁に優子の身体は追い詰められていた。

なんかあたし超ヤバくない？ どうしよう……ここからどうやって逃げよう……

優子は線路沿いのフェンス横にある物置きの壁に身体を押し付けられた。

どう考へても横に飛び出て逃げ出す隙はなさそうだ。

優子はカバンの中の携帯電話を掴もつとしたが、逆にその右腕を思い切り掴まれた。

イツタアイツ

しかし、彼女は声に出さなかつた。代わりに「止めて下さい！」

そう言つて、男を睨んだ。

超ヤバイよ。あたし、やられちゃうの？

優子の脳裏に一瞬安西の姿が浮かんだ。

安西もこんな目に遭つたのだろうか……いや、もしかしてもつと恐ろしい目に遭つたのかもしれない。

中学の頃の安西は知らない。それでもあれだけ毅然とした彼女の事だ。何があつても誰にも屈しないだろう。

そう考えると、優子の心にほんの少しだけ勇気が湧いた。

彼女は思い切り男の手を振り払つと、一か八か横に飛び出した。

しかし、残念ながら優子の運動神経はさほどよくは無い。

一瞬だけ男と距離が離れる気がしたが、直ぐに端の男に肩を掴まると、そのまま物置の影に連れて行かれそうになつた。

やつぱ、ダメじやん。

その時パツと一瞬、周囲の景色が白い閃光に包まれた。

何かが強く光つて三人の男は振り返る。

「ちょっと！ あんたたち、そこでなにやつてるの？」

優子は何が起こつたのか判らなかつたが、その声が何処かで聞き覚えのある誰かだという事は判つた。

「離しなさいよ。今写メ撮つたよ。警察呼ぶよ

三人の男が僅かにバラけると、少し離れた場所に声の主が立っている。

優子は正面から光を浴びたので、目が眩んでよく見えなかつたが、視線の先には間も無くその姿が浮かんだ。

「あ、安西……」

「優子？」

安西は誰かが絡まれているのを見て止めただけで、それが優子だとは知らなかつた。

「おい、携帯取り上げろ」

三人のうち二人が素早く安西に駆け寄つて掴みかかつた。

「ちょっと、離しなさいよ」

二人がかりでは、安西も身動きとれない。

携帯を取り上げようを腕を掴まれ、もう一人の男は彼女の髪の毛を掴んだ。

「ほら、さつさと携帯離せつて」

「やめてよ。離すか、バアカ」

「指折つちまうぜ」

男の一人は、力ずくで安西の指から携帯を剥ぎ取ろうとする。

しかし、安西は携帯を離さなかつた。

直ぐ先で安西が揉みくちゃにされながら、堪えている。

「安西！」

優子が駆け寄ろうとするが、残つた一人が立ちはだかる。

「彼女は関係ないでしょ」

「写メなんかとられたら、洒落になんねえし」

男は優子に再び詰め寄ると

「どうせ女一人じや、何もできねえよ」

そう言つて気持ちの悪い顔で笑つた。

坊主頭で眉は薄く、左耳に二つもピアスをしている。

「何が目的なの？」

「さあね」

再び男は優子に近づく。彼女は反射的に後ろへ下がった。

「これって、やっぱ引き続きピンチ？」

「女」「入つて？」

その時、男の背後で再び聞き覚えのある、誰かの声。優子が男越しに覗くと、そこには篠山が笑っていた。見方よっては爽やかだが、優子にとっては何だか気の抜けような微笑。

さらにその後には、アスファルトに這いつぶばつてピクピクしている男が二人見えた。

既に篠山にやられたのだ。

その場にしゃがみ込んだ安西は無事のようだった。

「篠山……」

優子は思わず安堵の笑みを零した。

優子の前の男が、不意をつこうと振り返りざまに篠山に飛び掛る。「てめえ、誰だよ」

優子は篠山の危機を感じて、一瞬息を呑んだ……

が、篠山はスルリとそれをかわし脇腹に容赦の無い蹴りを一発、そのまま顔面を一発。

ボクサーのような綺麗なワン・ツウだ。

そして再びボディーに膝蹴りを喰らわす。

「別に、普通の友達だけど」

篠山が手足を止めると、男は崩れるように倒れた。

な、なに、コイツ。漫画みたいに強いじゃん。

優子は一瞬篠山に見入るが、直ぐ我に帰ると急いで安西に駆け寄る。

「大丈夫？」

「だから忍に関わるなら気をつけるって言つたじゃん」

そ、そんなの知るか。こんなリアルな出来事だなんて思わないよ。

「で、でも。」「入つてそつなの？」

優子は思い出したように、駅の階段入り口にいたはずの女子を探すが、もう何処にも彼女たちの姿は見えなかつた。

「何で安西がこんな時間に？」

三人は駅のホームに降りて同時に息をつくと、珍しく優子が先に言葉を発する。

「手芸部の部長になつちやつてさ。今日は引き継ぎがあつたのよ。まさか男に絡まれているのが優子とはね」

安西はわざと大きく溜息をつくと

「そうと知つてれば、知らん顔して通り過ぎたのに。ああ、損した」  
なつ、ムカツク。でも、携帯は離さないでくれたじやん。  
「で、でも、ありがとう。証拠の携帯離さないでくれてさ」  
「バツカね。落としたら壊れるでしょ。だから離したくなかっただけじやん」

「む、ムカツク。超ムカツク！ マジ、ムカツクつ！」

しかし、それが本心でない事は、もちろん優子も判つていた。

「二人共凄いんだな」

二人の横で、篠山が他人事のように言つた。

まるで、何も無かつたかのような笑顔だ。

「ていうか、あんたが一番凄い」と思つただけど……

「し、篠山はどうしてこんな時間に？」

「ああ、転入試験の補習でさ」

「ああ？ そんなの聞いたこと無いんだけど……転入試験に補

習なんてあるか？ 普通は転入できないんじや……

「ところで、この人誰よ？ もしかして隣のクラスの？」

安西が怪訝に篠山を見て言つた。

優子が紹介しようとするが、篠山は握手を求めるように右手を出

して

「俺、B組の篠山雄一郎。B型。ヨロシク」

なるほど、B型なのね。言われて見ればお氣楽か……ていうか、血液型なんて誰も聞いてないって。

安西は篠山の差し出した手を一瞬眺めたが、軽く彼の顔を見上げると

「さつきは有難う、助かったわ。あなた、凄く強いのね」

そう言って、篠山の手を掴む。

そうだ。篠山つてめちゃくちゃ喧嘩慣れしてるよ。やっぱ、

元ヤン?

「まあ、それぐらいしか取り得がないし」

篠山がそう返すと、二人は思わず笑顔を交わした。優子は、そんな安西の笑顔を始めて見た気がした。安堵に満ちて、少し照れたような優しい笑顔だった。

ていうか、安西……あたしが助けてあげた時はお礼が言えなくて、コイツにはそんな笑顔で言えちゃうのね……

「なあ、夕飯ウチで食わない？」

土曜日、優子と忍は銀座マリオンに映画を観に行つた帰り、電車の中で揺られていた。

「えつ？ ゆ、夕飯？」

「ああ、たまにはいいだろ？ まあ、ウチのお袋の料理は、家庭的な感じはあまりないけど」

中間考查が終わつた日、忍は再び優子の家へ来た。彼女は忍にオムライスを作つて食べさせた。

それは優子の得意料理の一つだが、ごく一般的なものだ。

それでも手料理と言うのは各家庭で独特的の味付けがあつたりして、他人には新鮮に感じたりする。

忍の母親の料理はレストランのような安堵な味付けを得意とする。だから余計、ちょっとびり癖の在る優子の料理に家庭感を感じるのかもしれない。

「で、でも、急にお邪魔しちゃ……」

「大丈夫さ。ウチにはお袋しかいないし、ほとんど顔だつて合わせないよ」

夕飯なのに、顔を合わせないって……ああ、そうか。高森は何時も独りで食べるんだつけ。

「うん……」

優子は小さく頷いた。

既に、緊張から来る動悸が始まつていた。

大きな檜の門を潜ると玄関までの石畳が続いていた。

両脇は綺麗な玉砂利で、その上に突き出た小さなランプが石畳とその周囲を軽々と照らしている。

明るい時にこの家の前をあまり通らない優子は、忍の家の詳細な姿を知らなかつた。

家の回りは高い垣根と塀で覆われているので、平屋作りの家は外からほとんど見えない。

麻布に在る料亭のような、大きな引き戸を開けて玄関に入る。靴を脱ぐ上がり口の先に、年配の女性が立つていた。

「いらっしゃい」

そう言つて微笑む女性は、十中八九忍の母親だらうと優子は感じながら頭を下げる。

「こ、こんばんは。は、はじめまして」

「こんばんは」

そう返した忍の母親は

「お帰りなさい」と忍の方を向く。

優しそうな笑顔だが、何となく旅館の女将のようだなと、優子は感じた。

「ただいま」

「珍しいのね、忍さんがお友達を連れてくるなんて」

優子は一人の会話を聴きながら、聞こえないふりをした。

し、忍さん？ 親子なのに『さん』付け？ 確かに生みの親じゃないけどや……

優子は忍と一緒にキッチンまで歩く。

洋風のキッチンテーブルに、装飾のある背もたれの高い椅子。家の造りは純和風だが、所々に洋風の匂いがする大正時代のよつな雰囲気は、何処かで見覚えがある。

なんか、はいからさんが通る。みたい……

忍と向かい合わせに座るが、テーブルの幅が広いので妙に彼が遠くにいる。

と、遠くない？ 何だか向かいの高森が遠くない？

「俺、優子の隣にいこうか？」

優子の不安な視線を感じたのか、忍はそう言つて笑つた。

「あ、大丈夫よ、別に」

何が大丈夫なんだよ。

母親はどんどん料理を運んでくる。

どうやら今晚は中華のようだ。

これって、まさかフカヒレ？

優子は最初に運ばれたスープを覗き込む。

「食べよう

忍に促されて、優子は小さな声で「いただきます」と言った。その後に運ばれてきたマーボやエビチリは解<sup>は</sup>るが、中央に置かれた大皿に乗る鳥を薄く切つた料理に優子は否応無<sup>いやおうな</sup>く視線が行く。

ペ、北京ダック？ これって北京ダックか？ 家の夕飯に出るか？ 普通。

夕飯の最中、料理を運ぶ以外で忍の母親が顔を出す事は無かつたし、もちろん同じテーブルには一度も着く事も無かつた。

まるで給仕さんのようにだと優子も思つてしまつた。

確かに終始笑顔で愛想はいいのだが、やっぱり母親の匂いはしない。

何故そう感じるのか、優子は考えていた。

母性……そう、母性の愛を感じないのかもしれない。義務感やサービス精神から来る類の笑顔なのだと思つた。

食事の後、忍に促されて優子は縁側の長い廊下を歩いた。

ガラス戸の向こうには間接照明で照らされる小さな庭園と池がみえる。

廊下の突き当たりのドアを開けて、忍は優子を促す。

彼女は少しだけ躊躇した。

男の子の部屋なんて、弟の直樹の部屋以外に入つた事はない。

入つた瞬間、予想通り爽やかなライムの香りがした。彼のイメージ通りだ。

これつてお香？ ロロン？ それとも高森本人の匂い？  
部屋の中は妙に片付いて、直樹の部屋とは大分雰囲気は違つてい  
た。タバコの臭いもしない。

弟の部屋にもベッドは在るのに、何だかクラスメイトのベッドを  
田の辺たりにするのは不思議な気分だ。  
この部屋の中には、高森忍のプライベートがギッシリと詰まつて  
いる。

優子はあまりジロジロ見てはいけないと想いながらも、周囲を盗  
み見る。

「座れば？」

「う、うん」

ていうか、何処に？ テーブルのどつち側に座るうか……ま、  
まさかベッドについてわけにはいかないよね。それ、ちょっと危ない  
ゾーン？

優子は小鼻が膨れるのを堪えながら、テーブルを回りこんでとり  
あえず窓際にペタリと腰を下ろした。  
意味も無く、今日着けている下着はどんなものだったか、半ば反  
射的に記憶を巡らせた。

## 第55話（後書き）

申し訳ござりません…

多忙の為、次回の更新は週明けになると想っております。

優子は低い視線から、忍の部屋を軽く見回した。

もつとマジマジと眺めたいが、なかなかそんなマネはできない。大きな本棚には小説とか新書の学術的な書籍などがビッシリと入っている。

あたしの本棚とは大違いだよ。あれ、全部読んだのかな。逆に、漫画本は無いのかと視線を巡らすが、何処にもそれらしき物はない。

「高森つて、漫画とか読まないの？」

「いきなりそんな話題かよ。

「ああ、押入れに在るよ」

自分のベッドに軽く腰を下ろした忍は、直ぐに立ち上がって押入れの片側の戸を開けて見せた。

下の段に小さな本棚が在つて、漫画の単行本が並んでいる。

「安心した？」

忍は戸を閉めながら、そう言って笑う。

「えつ？ う、うん。漫画も読むんだね」

ドアが外からノックされて、忍が応えると母親がコーヒーを運んできた。

それらをテーブルに乗せる給仕のよつた母親に、優子は作り笑顔で軽く頭を下げる。

忍の母親は、柔らかく微笑むと

「どうぞ、じゅつくり」

優子にそう言って、部屋を出て行つた。

優子は忍をチラリと見る。

母親との関係は、想像以上におかしなものとして彼女の目に映つた。

「学校でさ、みんなと話が合わないだろ

母親がドアを閉め終えると、忍は先ほどの続きを話し始めた。

「みんなと？」

「漫画とか、アイドル雑誌とかさ。そういうの見てないと友達と話が弾まないじゃん」

תְּנִינָה

そんな事考えて本とか買った事ないよ。やっぱり、高森もち

「…と変わってる？ でも確かはこんな薫しい本を読んでるナシ  
なんて、なかなか高校生にはいないよね。

「いつかに飲もう」

忍はそう言いながら、今度は彼も床に腰掛ける。

け  
た。

「この前、篠山くんに助けられちゃった」

「お父の前で泣くのは二裕くらいだよ、

優子はこの前の出来事を簡単に話した。

黙つておこうと思つたが、篠山から話が通るかもしれないのに言つておいた方がいいだろうと思つたのだ。

ただ、女生徒がいた事は話さなかつた。

「そつか  
近くこ誰かいなかつた?」

「だ、誰かつて？」

いや、いいんだ。別に」

「誰一郎は意外と一マシだね」と

「ま、まあね……意外とね」

優子は思わず苦笑した。

「安西が？」

それも言つておいた方がいいと思つた。彼女が苦手だからと言つても、やはり感謝の気持ちはある。

相手を知らずに助けた事自体、彼女には普段見せない確かな正義感があるのだ。

忍は身体をズラしてベッドに寄りかかると

「そつか……」

そう言つて微かに笑う。

それだけ？ 安西に意外な正義感が在るのを高森は知つてゐる。 そうだよね、きっとクラスの誰も知らない安西を、高森は知つてるのよね。

「安西は何か言つてた？」

「えつ、何かつて？」

優子には忍の意味深な問い掛けが判らない。

「何処の学校の連中だつた？ 優子に絡んだやつら」

「判らない……この辺では見ない制服だつたよ」

「たぶん、吉祥高校かも」

忍は僅かに天井を見上げた。

学校名は聞いたことが在る。しかし、他校と全く交流の無い優子には、その学校の制服を思い描く事はできなかつた。

「何で吉祥？」

「前に……ちょっとあつてさ。トラぶつた人と親しい連中が吉祥高校なんだ」

「トラぶつたつて？」

「そのうち話すよ」

忍はそう言つて優しく笑うと、コーヒーカップを手に取つた。何だかその笑顔につられて、優子はそれ以上訊かなかつた。

「本当に、送らなくて大丈夫？」

「うん。だつて直ぐそこじやん」

優子は結局何も無いまま忍の部屋を後にした。長い廊下を歩いて玄関を出ると、大きな門扉まで来た。帰りの際

は、母親の姿は何処にも見かけなかつた。

まるで忍が独りで住んでいるようで、この家屋は優子の家のよう人に人の気配で満たされてはいない。

門の外まで見送りに出て来た忍が笑顔で手をあげる。

「じゃあ、おやすみ」

「う、うん。お、おやすみ」

優子は小さく手を振ると、頬が熱くなるのを感じて少し足早に歩き出した。

はあ……なんか、変にドキドキしたよ。何も無かつた……でも、何があつても困るけど……でも、キスぐらいいいのに……空を見上げると、頭上に満月が輝いていた。

岩群青のよくな雲が浮かぶ沈黙した景色は、まるで時間が停まつてこるようだ。

彼女は通り道の公園の横まで来た時に、ふと視線を止める。小さな公園のベンチに直樹と舞衣が座っているのが、僅かな水銀灯に照らされて見えた。

何かを話しながら笑みを浮かべる2人の肩と肩の間にほ、僅かな空間がある。

優子は何故かその隙間に安堵した。

横に佐助がいる所を見ると、散歩がてら家を出たのだろう。

そう言えば、この頃直樹は土曜日になると夕飯の後などに佐助の散歩に行つてゐる。

彼は、食後の運動などと言つていたが、……

そつ言つう事か。アイツもよくやるよ。

優子は自然にこぼれる笑顔で2人を見ると、声をかけるでも無く素知らぬ顔で通り過ぎた。

相変わらず時を止めるような印象が、辺りを静かに囁いていた。

11月も下旬になると、朝に頬を叩く風がいつそう冷たく感じるようになり、駅までの徒歩がやけに遠く感じるようになる。

それでも優子は、玄関から出た瞬間の張り詰めたような冷たい空気が少しだけ好きだった。

暫く経つとやっぱりただ寒いだけなのだが、家を出た一瞬の冷たい風は何処か清楚で、自分の心までもがちょっと清められる気がする。

\* \* \*

優子は一葉と学食へ行つた帰り、二つの校舎を繋ぐ渡り廊下で一人の女生徒とすれ違う。

一瞬自分に視線が刺さつた気がした。

あの女、前に駅で絡まれた時に一緒にいた奴。のような気もするんだけど……

既に優子の記憶は曇になつていた。

優子は振り返つて彼女の後姿を見つめるが、やはり今ひとつ確信が持てなかつた。

あの日他校の男子生徒に襲われた事は一葉にも話していない。

安西も篠山もその辺はおそらく誰にも言わないだろうと、根拠の無い確信があつた。

以前なら想像するだけで面倒くさうな出来事が、今は優子に降りかかるてくる。

しかし、実際その場に立つてみるとどうと言つ事はない。

その証拠に、彼女はあまり深くは考えていなかつた。

いろいろ気になる事は多いが、それを常時考へるよつた事はしないのだ。

それは優子の単純さなのか、十代である為の柔軟性なのかは判らない。

少し先で、隣にいない優子に気付いた一葉が振り返る。

「どうしたの？」優子

「つうん、何でもない」

彼女は小走りに一葉に追いついた。

5時間目が始まる直前、教室のドアから篠山の顔が覗いた。優子は何だか久しぶりに彼の姿を見た気がする。

それに気付いた忍も軽く手をあげたが、立ち上がったのは安西ひとみだつた。

手には数学の教科書。

な、なんで？ どうして安西が篠山に教科書貸してるの？

安西に手渡された教科書を手に篠山は頭をかく仕草をしてくる。いかにも安西に何かを言われている様子だ。

安西が誰かに教科書貸すの、初めて見た。

「ねえねえ、安西が篠山に教科書かしてるよ」

口の中で飴玉を転がしながら一葉が言つた。

「う、うん……」

優子は頷く事しか出来ない。

な、何かあつたの？ あの2人。どうしちゃつたんだね。

「あああ、今度はあたしが安西に睨まれるのかな」

一葉はそう言つて、座つっていた優子の机からポンと足を着いた。

「えつ？ どうして一葉が睨まれるの？」

「バカねえ、あたしだつて篠山ちょっと狙つてるよ。優子と並ぶにはそれしかないじゃん」

な、なんであたしに対抗すんのさ。ていうか、そんな理由で

相手選ぶなよ。

「そ、 そつなの？」

「うん」

一葉が明るく応える。

それが「冗談なのか本気なのか、 優子には判別できなかつた。

それにしても、 篠山と安西……普通だつたら教科書なんて、 昔なじみの忍に借りるのが自然の姿だろう。

もしくはやつぱり、 この学校で最初に知り合つた優子。 一度貸している事もあるし。

それなのに安西に教科書を借りるといつのは、 やはり何か在るような気がした。

確かに安西が篠山と上手くいけば、 忍とのしがらみも消えるかもしない。

しかしそんな事よりも、 何処か孤独な安西に微かな光が注いだような気がしたのは確かだ。

放課後、 一葉は掃除当番だつたので優子は先に独りで昇降口まで来ていた。

「一緒に帰る?」

背中から声が聞こえて優子が振り返ると、 篠山が立つている。

まあ、 暫くほつといったから、 たまにはいいか。

しかし、 その隣には安西ひとみの姿があった。

ゲッ、 な、 なんで安西が? て、 やつぱそう言つことなの?

思わず視線を泳がせる優子に安西は

「無理やりよ。 別にあんた達と帰りたいわけじゃないからね」

うわっ、 別にそこまで言わなくてもさ……

何だか判らないうち、 優子は安西と篠山と一緒に駅まで歩いた。三人は違和感丸出しで歩く。

「一人つて、 もしかして仲悪いの?」

篠山が何でもない事の様に明るく訊く。

「な、なんどよ」

安西が振り返った。

「いや、さつきから2人は会話しないからさ」

「別に仲良くないだけよ。話す事もないし」

あたしだって、別に話す事なんてないさ。ていうか、仲が悪いんじやなくて、相性が悪いんだよ。

「じゃあさ、これから俺んちに来ない? 一人共」

な、何でそうなるんだよ。どうして安西と一人で行くの? アンタと安西だけでいいじゃん。あたしいらないじゃん。

「な、何であたしも?」

優子はとりあえず声を出した。

「あれ? 優子はこの後何か用事とかある?」

どうしてそんな訊き方するの? そういう用事のある日常な  
んて送つてないつつの。そんな訊き方されたら断れないじゃん。

「いや、別に……ないけど……」

「じゃあいいじゃん。暇なんでしょう」

まるであたしが暇人みたいじゃん。

「あたしは塾があるから……」

安西が言葉を挟んだ。

チツ、自分だけ忙しい人生送つてると思つなよ。

「じゃあさ、また今度つて事で……」

そう言いかけた優子の声に安西が声を被せる。

「だからちょっとだけね」

行くのか、安西……行きたいのか? 今こそあたしを邪魔に  
しろよ。あたしは別に行きたくないんだよ。

## 第57話（後書き）

大変申し訳ございません。  
多忙と体調不良の為、少々更新ペース遅れます。  
それでも読んでくださる方に大変感謝いたします。

優子は安西と篠山と一緒に何時もの駅で降りるが、出口は何時もとは別だ。

自分の家とは逆方向だが仕方がないと、半ば観念して歩く。階段を下りて駅を出ると直ぐ、見慣れない風景の横にたい焼き屋が在った。

「あ、ここにのたい焼きだろ？」

「そうよ、買つてく？」

「安西……なに、気のきく事言つてゐるのさ。あんた、直ぐ帰るんだい。

安西と篠山の会話は、どう考へても以前に交わしている話しの延長線上にあつた。

優子は周囲の景色を眺めながら、古びた小屋の前で一人が買い物するのを待つた。

駅の反対側は特にロータリーなどは無く、三人は線路沿いに少し歩いて住宅街に入る。安西の家の方角とはまた逆方向だつた。

駅からは少し歩くが、そういうした距離ではない。しかし三人で歩く道のりは、優子にだけは遠く感じた。

左に一回、右に一回曲がつて少し行くと、立ち並ぶ住宅の向こうに大きな屋根が見えた。

あ、あれつてお母さんが言つてた大きな家かな。てことは、篠山の家はヤクザの近所？

家並みの向こうに見えた屋根が次第に近づくと、通り沿いの塀は何時の間にか統一されたモノに変わつてゐる。

その塀の向こうは既に、大きな屋敷の敷地なのだ。

本当だ。お母さんが言つてた通り、嫌味なほどデカイよ。

優子はさり気なく塀の向こうに微かに見える建物の屋根を見つめた。

不意に篠山は立ち止って

「ここ」そう言った。

「ここ? ここって? ここって、ここ? 」

田の前には大きな門扉。電柱のような門柱には、確かに『篠山』の苗字が掲げてある。

優子はさらにその上に視線が停まった。

なんだアレ……あれって、防犯カメラ?

大きなボックス型の屋外用監視カメラが、ゆっくりと首を振つている。

ハリウッドスターの豪邸紹介みたいなテレビ番組で、優子は同じようなものを観た気がする。

篠山は大きな扉の横にある小さな、と言つても普通の大きさのドアを開けて2人を促した。

優子は思わず安西と顔を見合わせる。

安西も篠山の家を見るのは初めてなのだろう。

し、篠山……あんたいつたい何者?

「ずいぶん大きな家なのね。お父さんは何か事業でも?」

安西が訊く。

バカッ、どう考へても普通の大きさじゃないだろ。カタギの大きさじやないつて……安西、気付けよ。

優子が躊躇するのを横目に、安西は門扉の敷居を跨いだ。

「ああ、親父の会社が成功してさ。昔住んでいたこの地に引っ越して来たってわけさ」

篠山はそう安西に微笑んでから

「どうしたの? 優子も入りなよ」

会社つて何よ? キヤバクラのシノギか? そ、それともまさかヘルスか?

「う、うん……」

優子は多少引き攣つた笑顔を篠山に向けると、清水の舞台から飛び降りるような気分で、彼の家の敷居を跨ぐ。

こんな時になつて、直樹の言つた『売り飛ばされる』なんて言葉が頭を過つた。

「いくらなんでも、それは無いよね……

「さあ、どうぞ」

篠山は一人の後に門を潜つて一人を奥へ促す。  
門を抜けると芝生と玉砂利が敷かれた、大きな庭園が広がつている。

左右には石の大きな塘路。

左の奥には大きな池と何だか解らない岩のようつに見えるやたらと大きな庭石。

隕石でも落ちたのか？

安西は軽く辺りを見渡しながら歩くが、優子は思わずその景色に立ち止まる。

竹を連ねた仕切りの向こうには、テレビでしか見た事のないような大きな外車が停まつてゐる。

あれって、リムジン？ ていうか、駅前の角曲がれるのか？  
優子と安西は少し、いや暫く歩いて玄関へ辿り着いた。

ふと見ると、右の奥にも玄関のような物が在る。

優子がそれをジッと見つめていると、篠山が気付いて

「ああ、アレは親父専用なんだ」

「ああ？ お父さん専用の玄関？ 何だよそれ……」

「お、お父さん専用のが在るの？」

「ああ、親父は仕事に行くときと帰る時はあそこから出入りするんだ」

篠山はそう言つて笑うと

「ゴルフに行く時は、こここの玄関を使うけどね」

「何それ？ 意味判らない。やつぱ普通じゃないよ。

「へ、へえ、そうなの……」

優子は不可解な気分で、とにかく笑つた。

安西が先に玄関の前に立つと、いきなり戸がガラリと開いた。

ま、まさか、じ、自動？

しかし、さすがにそんなわけは無い。

妙に背の高い女性が出てきて、思わず安西も見上げる。

「デカツ！ て、誰？ 女性SP？ 今時は女性もありえるよね。

戸の高さが180センチだとすると、それよりほんの少しだけ低い感じか……黒いミニスカートに白いフュイクファー、いや本物のファーのボレロを着ている。

モールのカットソーの胸はV字型に大きく開いていた。

「あら、お帰り」

背のデカイ女性がそう言つて笑い、優子と安西に視線を這わせる。「ああ、ただいま。姉さん、また出かけるの？」

「うん。ちょっとね」

僅かに篠山を見下ろす。もちろん、ヒールを脱げば篠山より少し背は低いのだろう。

「ね、姉さん？ お姉さんなの？ デカくない？」

優子は盗み見るように彼女を何度も横目で見上げた。

「あんまり遅くになるなよ」

「あんたに心配されたら、あたしも終わりだね」

石畳に小気味よくヒールが鳴る。

やたらに色気のある足取りを優子は視線で追つたが、安西の視線は家の中にあつた。

玄関の敷居を跨いで優子は思わず頭上を見上げた。天上が高かつた……6角形に組んだ小さな簾の傘を持つ照明が3つ釣り下がつていて、天窓から注ぐ明かりに浮かんでいた。優子の部屋ほどある広い玄関の隅には、トラの剥製が置いてある。動物園では見かけるが、個人では剥製であつてもそう簡単に入手出来る物ではない。

「ちょっと、アムールトラつてワシントン条約で規制されてなかつたつけ？ 剥製なんて作れないはずよ」

安西が篠山の肩を叩いた。

「ていうか安西……何だよアムールトラつて……なんで、コレがアムールトラだつて判るの？ あたしにはトラなんてみんな同じに見えるつづつの。普通はトラで括るだろ？……だいたいアムールつて何処よ。アンタの知識もおかしいって。

「ああ、それはここに建築祝いに貰つたみたいでさ。貰つたわけじやないんだよ」

篠山はそう言つて笑つと

「親父が寅年でさ」

とりあえず優子は、二人の会話を素通りさせた。

トラの剥製くれる知人で何者……？

廊下を一度曲がると庭が見える廊下が続いていた。庭が見渡せる長い廊下は純日本家屋の基本なのだ。

よく見ると、池の中央に踏み石が置いてあつて渡れるようになつてている。

篠山が促すまま、優子と安西は一階に上がる階段まで来ていた。

「あら珍しい。お友達連れ？」

三人の背中から声が聞こえる。

「ああ、ただいま母さん」

篠山がそう言いながら振り返ると、その先に人の姿が見えた。

和服？ 何で和服？ 極道の妻だから？

篠山が母さんと呼んだその女性は、黒地に丹頂鶴の舞つた着物を纏つていた。

日本髪を結わえて背は高く、柔らかい物腰で立つていて。歳は優子の母親と変わらないくらいに見えるが、何処か修羅場を潜り抜けたような独特の臭いというか雰囲気を醸し出す。

鼻筋がツンと高く通つて、僅かに瞳が茶色い。しかし、優しい笑顔だ。

ていうか、外人？ いやハーフ？ じゃあ、篠山はクウォーター？

「ああ、学校の同級生。安西さんと五十嵐さん」

篠山は二人を母親に紹介した。

優子は俯き加減で小さな会釈をするが、安西は

「はじめまして。お邪魔します」

そう言つて頭を大きく下げる。

長い黒髪が背中で弧を描いてしなつた。

おいおい、安西……超礼儀正しくない？

優子はいかにも自分が粗雑に映るような気がして、せめてもつと深く頭を下げればよかつたと思つた。

ビックリしたのは篠山雄一郎の部屋だけが完全な洋間だった事。いや、おそらくあの姉の部屋も洋間だろう。あの姿に和室は想像できない。

一重サッシの外側は濃いブラウンだが、内側は白かつた。床一面のフローリングに、黒革のソファ。壁際には古いコカコラの赤い冷蔵庫が置いて在る。

「うわっ、部屋に冷蔵庫？」

優子は自然に田に入るモノにいちいち驚く。

田の前に在る木目調のテーブル。その天板は中央がガラス面で、その中にジッポライターが売り物のよう並んでいる。やたら古びている物はベトナムジッポだらう。

何でこんなに沢山ライター？

優子が思わずテーブルを覗き込む。

「それ、俺のコレクション。ほとんどがビンテージや限定品なんだ」

「あんた、タバコ吸つてるの？」

安西が言葉を挟む。

「いや……まあ、人並みかな」

人並みつてなんだよ……そんなにみんな吸つてるのか？ あつ、直樹も吸つてるか……

「ダメよ。これからは国際的にも喫煙者は肩身が狭くなるんだから」安西はそう言って、ソファのひとつに腰掛ける。

問題はそこじゃなくない？

「優子も座れば」

篠山に促されるが、彼女は「こ」でも何処に座らうか迷つてしまつ。

安西の隣？ まさか篠山の隣は無いよね。

「ほら、なにモサッと立つてるの？ 座りなよ」

安西がそう言って自分位置を少しずらしたので、優子も仕方なくそこへ腰を下ろす。

篠山は壁に設置されている電話の受話器を手にすると

「飲み物何にする？」

「な、内線電話で注文？ ていうか、じゃあアノ冷蔵庫は何？

篠山の家は一般庶民には驚く事ばかりだった。

優子から見れば忍の家も充分驚いたが、篠山の家はその次元を超えていた。

そして何より落ち着かない。

それは忍の部屋にいる時のドキドキ感とは違つて、何だか自分が場違いな所にいるような、そんな気分だつた。

「篠山の家つて、何だか凄いね」

篠山の家を出た帰り道、優子は仕方なく安西と歩いていた。

「成功者の家つて感じね」

安西はポツリと応える。

「や、やっぱ、あれかな……親分とかだからかな?」

「親分?」

「だつて、アイツのお父さんヤクザの組長なんじょ」

優子は胸の内に据えかねていた事を思わず言つた。

安西は意外なほど穏やかに笑うと

「昔はね。そうだったらしいよ」

「昔?」

「あんた知らなかつたんだ。篠山のお父さんはシノテックの会長よ」

「シノテックつて……格安パソコンの?」

「今は液晶テレビやブルーレイディスクもやつてるし、今度携帯電話に手を出すらしいよ」

あ、安西チョウ詳しそぎ……じゃあ篠山は、今はヤクザの子供じゃないんだ。ていうか、前はやっぱりそつたんだ……

「なんか、凄いね……商才があるんだ。篠山のお父さん」

「ほら、大企業の幹部なんてみんな黒い繋がりがあるのが普通だから、有利なんじょ」

「有利?」

「だつて、もともとその黒い側で権力があつたんだから」

「それってどうなの?」

しかし、優子はとりあえず篠山の家が現役のヤクザで無い事に安

堵した。それでもやっぱり、あまり来たくはないと思つた。

## 第60話（前書き）

中間あらすじ

優子は忍に誘われるまま、その仲を特別なものへと変えていった。  
そんな時に転校生に気に入られて付きまとわれる。  
しかも、彼は忍の知り合いで、元ヤクザの息子？  
優子の周りは、喧騒に満ちていた。

優子はバーバリーのマフラーを首に巻いて、学校指定のPコートを羽織った。

玄関を出た瞬間、吐いた息が白く凍つた。

昨日とは次元の違つた冷たい空気に思わず肩をすくめる。この冬一番の寒さだつた。

12月に入り、今日から期末試験。

そしてもう直ぐ優子の誕生日もある。正確には明後日。12月6日が彼女の十八才の誕生日だ。

試験の真っ只中に誕生日を迎える彼女の場合、翌日のテストの事で頭がイッパイで誕生日を堪能する余裕が無い。

母親は去年もケーキを用意はしてくれたが、それらを半ば義務的に食べたら後は勉強だ。

学年で真ん中をキープする為には、それなりに頑張らなければいけない。

中学の期末試験はもう少し後なので、直樹は優子以上に料理を堪能しているようだが……

そして試験が終わればもう学校は休みだ。

憂鬱な要素はまだ在る。

休みになつたら、なかなか忍とは会えないかもしさないと優子は思つていた。

教室にいれば必ず彼が視界の何処かに入つてくる。

言葉を交わす機会もあるし、彼から誘われるチャンスも多い。何も無くとも自然に存在する空間は何時も共有しているのだ。

しかし休みに入つたら……もちろん、忍はメールもくれるだろうし、何処かへ行こうとも誘つて来るだろう。

しかし、それ以外は顔を合わせないので。

意味も無く彼の顔を見る事ができないし、自分の姿も彼の瞳には

映らない……

優子はそんな事を考えるのが嫌だった。

今までは学校が休みになればそれだけで嬉しかったはずなのに、何時の間にか忍の姿を見ない日は何だか物足りなくて、ちょっぴり淋しがつたりする。

恋人同士なら……休みの日も毎日会いつのかな……

優子は門扉を出てひとつ白い息を吐くと、何時ものよつと歩き出した。

「ねえ、高森は知ってるの？」

早々と試験が終わって帰り支度の中、一葉が優子に声をかけて来た。

「何が？」

「アンタの誕生日よ。もう直ぐでしょ」

それなんだよ。 アイツ、 あたしの誕生日知ってるのかなあ……でも、自分から言いつのも変だよね。 もつと前に言つておけばよかつたのかな。

「さあ、知らない」

優子はサラリと応える。

「あたしがさり気なく言つてあげようか？」

何処がさり気なくなんだよ。 一日前にわざわざアンタが言つたら、何だかこんたんミエミエじゃない？ そんなの絶対イヤつ。

優子はカバンを手にして「い、いいよ別に」

さり気なく忍の姿に視線を送ると、彼は男友達と何やら盛り上がりっていた。

「 アイツ、男連中と何楽しそうに話してるんだろ……」

優子と一葉が教室の出口に向つて動き出ると、忍はそれに気付いたらしく一人に軽く手を上げて見せた。

「何か、それらしい素振りとか見せた？」

階段を下りながら一葉が言つた。

「素振りつて？」

「だから、何か欲しい物ない。とか訊かれてない？」

全然訊かれてないよ。……そんな気配があれば苦労しないって。

「別に、そんなのないよ」

「じゃあさ、やっぱ知らないんじゃない？」

「いいよ、知らなかつたらそれで」

「あんたも素直じゃないね」

一葉はそう言つて笑うと、軽く身体をぶつけてきた。

昇降口で安西を見かけた。

アイツ、篠山と待ち合わせだな。

優子はわざと素知らぬ振りでそこを通り過ぎる。もちろん、向こうも素知らぬ振りだ。

「ねえ、安西つて本格的に篠山に乗り換えたの？」  
昇降口を出てから、一葉が身体をくつつけて来た。

「何でよ？」

「だつて今のアレ、どう考へても帰りの待ち合わせでしょ？」

「知らない。それに何よ、乗り換えたつて」

「だつて、ずっと高森忍に一途だつたんでしょう？」安西はさ

「一途……そう……なのかな。でも、気の合つ入つて一人じゃないしさ。それに……高森と安西は一度別れちやつたわけだし」

優子は何となく無理に安西を庇うみたいで、何だかうなじがこそばゆかつた。

「あれかな？ 優子にかなわないとて思つたのかな？」

一葉は楽しそうに笑つた。

えつ？ そ、そうなのか？ でも、そつ言つ事なのかな？

「まさかあ。あの女があたしに叶わない事なんて無いじゃん」

優子は冗談ぽく笑つて「まあ、笑顔はあたしが上かな

「アンタ、安西の弱み握ったとか？」

「まさか。アイツ弱み見せないじゃん。びいせ篠山の押しのが強かつたんじゃない」

優子は、じうじか零れそな含み笑いを堪えて、空を仰いだ。  
篠山といふ時の、安西のちょつぱり優しい笑みは、優子から見れば少し滑稽なのだ。

一葉は少々残念そうに「篠山って、変わり者だしね」

肩に掛けていたカバンを背中に背負い直した優子は

「安西も変わってるからちよどいいのかもね」

一葉もカバンを背中に背負うと、ストラップをパチンと弾いて

「アンタと高森も充分変わってると思つけどね」

夕飯はケーキ。いや、ケーキ以外の料理だつてもちろんあつた。フライドチキンにお寿司。

18本のローソクに火を燈して部屋の明かりを消すと、食卓は淡いオレンジ色に染まる。

父親の孝之助が、自慢のクラシックハーヴで短いハッピーバースデーを奏でる。

この時ばかりは、彼が家族からちよつぴり脚光を浴びるひと時だ。何処か懐かしく、何故か胸の奥がキュンとする瞬間。いろんな事があつた十七歳が終わつた……十八歳……ほんの少しだけ大人の仲間入り。

さり気なく男の子と出かけるようになつた日常は、ふと思つと自分的に何処か現実離れしているが、重ねたデートは紛れも無く現実だ。

夏までは思いもしなかつた日常。

少し大人になつた自分には、これからどんな事が待つてゐるのだろつ……

そんな思いが優子の心中を通り過ぎる。

「姉ちゃん、早く火消せよ。俺、腹減つたよ」

直樹が言つた。

つたぐ、人がせつかくちよつぴり感傷に浸つてゐるのに。

優子は18本のローソクをほぼ一気に吹き消した。

みんなで拍手をすると、父親の孝之助がすかさず電気を点ける。この瞬間、何時もの食卓に帰る。

「優子も、もう18かあ」

孝之助が目を細めて、しみじみと言つた。

「何だか小学校から変わらないわよね、この娘」

母親の杏子がそう言いながらケーキを一端テーブルから退ける。

小学から？ せめて中学頃からって言つてよ。ていうか、胸  
だつてちょっとは大きくなつたし、身長だつて伸びてるつて……  
「そんな事無いよ。あたしだつて、いろいろ成長してるんだから」  
「そつ言えば、最近ちょっと女っぽくなつたな」

孝之助は茶化すように言つて、軽い笑い声をたてた。

直樹はテーブルの料理を次々に口へ放り込む。

「まあ、姉ちゃんにとつては怒涛の年だつたしな」

なんだよ怒涛つて？ 確かに男の子とこんなに接近して田常  
を送るようになつたのは初めてだけさ……ていうか、アンタに言  
われたくない。

「何？ 怒涛つて？」

杏子は少しテーブルに身を乗り出し、興味に満ちた視線を優子に  
送つた。

何処か見透かしているような母親の視線……何も言つてはいない  
が、はたして何処まで知つているのだろうか。  
お母さんは、何か気付いてるのかな……お父さんは全く知ら  
ないだろうな。あたしが高森とキスした事とか……  
「な、何も無いよ。別に怒涛な事なんて無いんだから」  
優子はそう言つてフライドチキンに齧りついた。

直樹はジュースを飲みながらまだケーキを食べている。

優子はあまりお腹をイッパイにしてしまつと眠くなるので、そこ  
そこで部屋へ戻つた。

明日の分のテスト勉強が残つている。

机の前に座つて息をつくと、つい携帯電話を掴んで着信を確認す  
る。

何も無い……そんなの着信ランプで直ぐ判るのに、わざわざ携帯  
を開いて確認する。

やつぱり一葉にそれとなく言つてもうればよかつたかな……

あたしの誕生日。

その時、携帯にメールが着信した。

き、来たっ！ て、何コレ……

着信は忍ではなかつた。彼からの着信は液晶に名前の表示が出るのだ。

メールを開くと、篠山からバースデーメールが入つていた。

なんで篠山？ ていうか、どうしてアンタがあたしの誕生日知つてゐるのさ。意味ないんだよつ！

優子は思わず深い溜息をついて、仕方なく教科書を広げた。ノートを広げてテストに出る箇所をチェックするが、どうにも身が入らない。

すると、再びメールの着信だ。

た、高森だ！

液晶に忍の名前が表示された。優子は急いでメールを開く。

『誕生日おめでとう！ 今、ちょっと時間ある？』

あるある、めちゃくちゃ時間作るよつ

優子は思わず、主人を待ちわびたビーグル犬のよつなスピードで返信してしまつた。

しまつた……何時も3分以上経つてから返信してたのに……まあ、いいか。

再び返信が届く。駅前の公園で待ち合わせをする事になつた。忍は最初、裏の小さな公園を待ち合わせに選んだが、あそこは直樹が舞衣と会うのに使つてゐる。

姉弟そろつて同じ公園では、何だか情けない。

優子はジャージから急いで私服に着替える。一瞬下着をチェックする自分に、思わず呆れた。

下着は関係ないつうの……

そう思いながらも、結局お気に入りの物に着けかえる。

時計を見ると九時半を過ぎていた。

足音をけして素早く階段を下りると、玄関へ出る手前で母親に出

くわす。

「あ、ああ……ちょっと出かけてくるよ。直ぐ戻るから。勉強もあるしさ」

「こんな時間にスカートで？ 外寒いわよ」

「あ、そ、そうね。でもタイツ履いてるし……」

優子は思わず苦笑すると「コート着てるから、これで平気」

杏子はたたんだ洗濯物を抱えながら目を細めて笑う。

「ゆっくり出てらっしゃい。勉強なんて徹夜でもすれば何とかなるんでしょう」

「いや……徹夜はしたくないけど……」

「う、うん」

優子は玄関のドアを開けると小さな声で「行つて来ます」父親には気付かれたくなかつた。

小走りに国道へ出て、後は普通の歩調で歩きながら息を整える。息切れさせて彼と会うのはみつともないと思った。

普通に歩いているはずなのに、早い鼓動が収まらない。

ヤバイ。めちゃくちゃドキドキする。

優子は歩きながら、何度も深く息を吸つた。

駅前の国道まで来て横断歩道を渡ればもうロータリーだ。その向こうに公園が在る。

水銀灯に照らされた公園に佇む人影が既に見えていた。

優子は忍の影を見て、久しづりに緊張した。

横断歩道の信号が青に変わると、優子は思わず小走りに駆け出す。

ロータリーを横切つて公園の入り口まで来ると、彼女の息使いに気付いた忍が振り返つて軽く手を上げる。

優子は白い息を吐きながら自然に笑みを零した。

「そんなに急いでこなくても大丈夫だったのに」

彼女を見て忍が笑う。

だつて、待つてるのが見えたらしい若いじゅうじゅん。

石畳の敷かれた公園の四方には木製のベンチが幾つも置かれている。

そのひとつに一人は腰掛けた。

肩と肩の間には、やつぱり微妙な距離。

「これ、プレゼント」

忍が紙袋からそれを取り出して優子に差し出す。

彼女が異性からプレゼントを貰うのはコレが初めてだ。しかも、

相手は高森忍。

心の準備はしていたが、胸の鼓動は再び跳ね上がる。

「あ、ありがとう……別に、よかつたのに……」

「そんなわけにはいかないだろ。でも、危なく知らないまま通り過ぎるところだつたよ」

「や、やつぱり知らなかつたのか？ じゃあ、一葉が？」

「だ、誰かに訊いた？」

忍は鼻の頭を人差し指で軽く撫でると

「安西がさ……メールで教えてくれたよ」

「あ、安西が？」

「ああ……でも、コレで貸し借り無しだ。って言つてたけど。何？」

「えつ？ 貸し借り？」

あれか？ 学校裏サイトの時的一件か？

優子はわざと首を傾げて笑つた「さあ……な、何かな？」

ベンチに座つて何分過ぎただろうか……

二人はポツポツ話をしては短い沈黙の繰り返しだ。忍も少しだけ何時ものリズムでないような、そんな感じは優子にも判つた。

ど、どうしよう……何だか何時もと違つ雰囲気……これつて、何だらう。

身体がわけも無く火照つていた。

冷たい夜の空気に微かに香る忍の爽やかな匂いに、優子は何時もより何故か敏感に反応した。

電車が到着して、駅から人波が流れ出るのを背中で感じながら会話を続けるが、優子自身も何かを待つている。

な、なに……あたし何を待つてるの？ これ以上何を期待するのさ。

「そろそろ帰つたほうがいいかな？」

忍がそう言って立ち上がつた。

「う、うん。そうだね。勉強しなきゃ

優子もはにかんで立ち上がる。

「寒くないか？」

忍は自分が首に巻いた赤いフリースのマフラーを取ると、優子の首に巻いた。

よかつたあ、マフラー巻いてくるの忘れて。

「あ、ありがとう……」

二人は静かに歩き出した。

駅から出て来た人の波は消え、穂のかに街路灯の明かりだけが辺りを照らし出す。

本屋の隣のレンタルショッップの明かりだけが煌々と街の灯を残していた。

「今度また、映画行く？」

横断歩道を渡りながら忍が訊く。

「うん。いいよ

「じゃあ、試験が終わつたら」

「うん」

「少し先だけど、クリスマスはどうある？」

「どうするつて？ 何？ 何するの……？」

「う、うん。どうしようっか……」

「何処か行く？」

「う、うん。いいよ

クリスマスつて、普通何処行くの？

優子は唾を呑み込んだ。

「じゃあさ、考えておいて」

「えつ？ あたしが？」

「たまにはいいだろ。優子の行きたい所へ行こつよ

そ、そんなの判らないよ……やっぱあれ？ デイズーリゾ

ートか？ それともお台場？

「判つた。じゃあ考えておくね」

歩きながらの方が少し話し易かった。が、しかしその分時間は早

く過ぎてゆく。

もう何時もの別れ道まで来ていた。

「マフラー有難う」

優子がそう言いながら自分の首に手を掛けると

「ああ、いって。これはお前にやるよ

忍は優子の手をそつと押された。

彼の冷たい指が優子の手を刺激して、低アンペアの電流のよひに  
それが全身に行き渡る。

その瞬間、彼の唇は優子の唇を捕らえた。

フレンチな一瞬のキス。

しかし、優子はあまり驚かなかつた。何処かでこんな瞬間を待つ  
ていたのかもしない。

鼻の奥にツンと広がる微かな甘い香りは、高森忍の唇の匂い……  
伏せた視線を上げて、忍を見つめると

「あ、ありがとう」

忍は何時もの笑顔を優子に注いで

「じゃあ、また明日な」

そう言いながら少し後ろへ下がると、優子が手を振るのを確認し  
てから踵を返して歩き出した。

はあ……緊張した……

優子は自分も向きを変えてから、深く息を吐いた。

静寂した清らかな空氣の中で、心の真ん中がジンと熱くなつた。

低い灰色の空が頭上に広がり、今にも氷雨が零れ落ちそうな気配があつた。

テストも今日を含めてあと二日。

優子は休みに入つたら忍とあまり会えない憂鬱から僅かながら開放されていた。

触れ合つ身体の一部は、何日分もの彼を心に貯蓄できる事を知つた。

その分また会いたくなるけれど……

しかしこの日、高森忍は学校に来なかつた。

「高森どうしたんだろうね」

一葉が声をかけてきた。「優子、何か知つてる?」

「ううん、知らないよ」

テストの日に休むなんて……昨日、寒空の下で待たせちゃつたから、風邪でもひいたのかしら……

「昨日会えたの?」

「うん……夜に会つた」

優子は昨夜の事を、ごく簡単に一葉に話して聞かせた。

「そう、よかつたじやん」

一葉はそう言つて笑うと「やつぱりちゃんと知つてたんだね」

「いや、知らなかつたらし」。しかも、安西に救われちゃつたよ……

「いや……うん。そうだね」

優子は少し曖昧に応える。

「ねえねえ、何貰つたの? 高森ん家つてけつ」いつお金持ちなんじよ

「いや」

一葉はそれが訊きたかったのだろう。興味深々だ。

「そ、そんなの、内緒だよ。それに、お金持ちなのは、親だよ」

「まあ、さうだけどさ」そう言つて一葉は

「昨日は、何でもなかつた？ 彼」少し怪訝に言つ。

「別に、普通だつたよ」

優子のほうが、よほどわけが判らない。

「でも変ね。高森が試験日に休むなんてぞ……安西なら、何か知つてるかな？」

一葉は真顔で優子の机に寄りかかつた。

「どうだらう……」

優子もチラリと安西を見る。

そうしていろいろうちに、一時間目のテストが始まった。

優子は何度も忍の机に視線を向けたが、いなのは確かだ。いくら見つめたつて変わりはしない。

ホームルームの時に担任が高森の欠席を告げた。

今回のテストはついに一位の座を降りるのかと、僅かに教室はざわめいた。

女子の口からは、微かに心配の声が聞こえた。

しかし何故？ 優子の頭を疑問だけが過る。

今まで優子が知る限り、彼がテスト中に休んだ事はない。いや、普段でもほとんど病欠などないと記憶している。

もちろん、以前は彼の事など全然気にかけてはいなかつたが、クラス委員の仕事をしていると欠席者に気を配る事も多いのだ。

考えても仕方ないよ……

優子は小さく息をついて、答案用紙に目を移した。

\* \* \*

三時間のテストが終わつて優子は帰り支度をしていた。  
ふと人の気配を感じて顔を上げる。

「忍、何か言つてた？」

安西が田の前に立つていた。

「はあ？ どうして？」

昨日のアレの事か？

優子は笑顔を作つて「あつ、昨日の事……ありがと」  
「そつじやないつてば」

安西は眉間にシワを寄せて、少し険しい表情をした。

「今日の事よ。忍、優子に何か言つてた？」

「今日？ な、何も」

優子はカバンのジッパーを閉めながら「風邪かな？」

「あんたつて、ほんつとお氣楽でのん気に生きてるのね」

安西は髪を振つて優子の前から立ち去ると、そのまま教室を出て行つた。

なによ……なんであたしがお氣楽？ それと高森の休みと何の関係があるの？

安西が教室から出たのを見て、一葉が寄つて來た。

「どうしたの？ 久しづぶりに安西になんか言われてたね」

「しらないよ。生理じゃないの？」

優子はそう言つて立ち上ると「帰ろ」

駅で電車を待つ間のほんの少しの間、優子はやまつ安西の言葉が  
気になつていた。

なんであたしがお氣楽でのん気なの？ 確かに当たらずも遠  
からずだけど……それと、今日高森が休んだのと何の関係が在る  
つて言つて？ 意味わかんない。

「優子、高森にメールしてみた？」

隣で一緒に電車を待つ一葉が言つた。

「えつ、ま、まだしてない」

「してみなよ」

「うん、判つてるよ」「

ホームに入る電車の騒音にかき消されながら、彼女は応えた。

優子は地元の駅で降りると直ぐに、忍宛にメールを打つ。

しかし、家に帰るまでに返信は無かった。

途中、直接彼の家に寄つてみようとも思つたが、結局真っ直ぐ自宅へ帰つてしまつた。

近いからと言つて、直ぐに家を訪れるのは何だか馴れ馴れしいような気がした。

優子は部屋に上がりベッドに腰掛けると、暫くそのまま彼からの返信を待つ。

風邪、酷いのかな……あのお母さんはちゃんと看病してくれるのかしら。あたしたちの関係は、何処まで馴れ馴れしくできるんだろう。

優子は立ち上がると制服を脱いでジーンズに着替える。

一度ベッドに横になつたが、とりあえず机に向つて教科書を広げた。

ジャージではなくジーンズを履いたのは、何時でも外に出られるように。

優子は忍の家を見に行こうかと何度も思つたが、結局口が暮れるまで机に向つていた。

「忍、何処に行つてたの？」

田の前に忍が立つていた。

「ああ、悪い。ちょっとハワイまで用事でさ。急用だつたんだ」「忍は何時のも爽やかな笑顔だ。黒髪がそよ風ではためいている。何故か風景は真っ白に飛んで、優子自身も何処にいるのか判らない。

「急用つて……期末試験は？」

「一度ぐらい出なくとも平氣だろ。今までずっと一番だつたんだ」

「それもそうね」

優子は何故か納得して笑つた。

……  
……

頬に冷たいモノを感じて優子は田を覚ました。

しばらく気が散つて手のつかなかつた勉強も、二次関数を解き始めるとな不思議に集中できるようになつた。

公式さえ頭に入れれば、たいがいの問題は解ける。

ただ、応用問題の場合、どの数値を何処に当てはめるか間違えると、全く違う答えが出てしまう。

授業でチョックした応用問題を何度も繰り返し読み返す。が、しかし……何時の中にか寝てしまつていた。

早い時間に勉強を始めるが、何時もの事だが……

「ぎやあつ」

慌てて顔を上げる。

「うわあ、ヤバイ。教科書にヨダレが……」

優子はティッシュを取り出して、教科書の開いたページをふき取

つた。なんだか、ふやけてしまつている。

ふと顔を上げると部屋の中は暗かつた。

机は専用のスタンド照明が燈してあるので、暫く気付かなかつた。外から入る陽の光は全く無くて、窓の外は漆黒だ。

立ち上がつて部屋の照明を点けると、ガラス窓の中には部屋と自分がもうひとつ浮き上がる。

カーテンを捲んで窓の外を見ると、どの家も台所の電気が点いている時間で、何時もより住宅街が明るく見えた。

再び忍の事が頭を過る。

変な夢見た……高森は、明日は来るのかな……明日も来なかつたら、家に行つてみよう。

優子は行動予定を明日に先延ばしする事で、今日の不安を吹つ切れうとした。

明日行こう……そつ思つ事で、今日はこのまま家にこよつと思つた。

後でもう一回メールしとこ。

優子はそんな予定を頭の中で組み立てると、少しだけ気持ちが楽になつた。

カーテンを閉めて机に向つと、再び数学の問題を解きだす。

その時、ガチャリと部屋のドアが開いた。

「姉ちゃん、タカノモリ開発がM&amp;Aだつてさ」いきなり優子の部屋のドアを開けたのは、弟の直樹だつた。何だか異常なほど慌てた様子で、いかにもただ事ではない。

しかし優子は

「ちょっとあんた、ノックくらいしなさこよ。なによM&amp;A、Mつて」

「M&amp;Mじゃねえよ、M&amp;Aだよ。吸収合併だよ。M&amp;Mはチヨコだる……」

優子は椅子から立ち上がつて、入り口に立つ直樹に歩み寄る。

「それが何？ 何の吸収合併よ。あたし忙しいんだから

優子は高森の事で何とか平静を保っていたものの、言葉を交わせばつい不機嫌になつて弟に当たつてしまつ。

「タカノモリ開発つて、高森さんとこの親父さんの会社だぜ」

直樹は一步踏み出して言った。

高森の父親は、輸送からファンドまで取り扱う大手総合商社タカノモリ開発の社長だ。

直樹は忍の親戚である舞衣から聞いて、ある意味優子以上に彼の父親の仕事を知つてゐる。

「そ、そうなの？」優子は思わず立ち止まる。

「姉ちゃん知らないのか？」

「し、知らないよ、高森のお父さんの事なんて」

「でも、買収だぜ」

「買収？ 合併でしょ？」

「たいていは、強い方に買収されるから合併するんだよ」

直樹は唾を飛ばす勢いで話す「株式の強制獲得だから、ヤバいぜ」なんでコイツこんな詳しいの？ スポーツ馬鹿かと思つてたのに、現社が得意なのか？

「そ、うなんだ……でも、それが何よ」

優子には直樹が慌てている意味が判らない。会社の吸收合併なんて、最近よく聞く話だが、だから何だというのか。

株がどうのと言われても、彼女にはピンと来なかつた。

「バカだな、吸収されたらそこの幹部はたいていクビか降格だろ」

「クビ？」

「当たり前じやん。トップは一人なんだから」

「じゃあ、高森のお父さんは？」

「会社が乗つ取られるんだぞ。失業じやねえの。それこそ、元社長の居場所はないだろ」

苛立つた直樹は、優子の横をすり抜けるように部屋へ入り込んで、小さなテレビを点けた。

少し遅れて報道が始まつたチャンネルを探す。

「こら、勝手に入るな」

優子はそう言いながらも点いたテレビに視線を奪われる。

『大手タカノモリ開発がシノテック社に買収！ 既に70%の株取得！』

そんなテロップが出ている画面の向こうで、ずらりと並んだスクリーンの大人たちが何かを話していた。

「なに？ どういう事？」

優子はテレビの画面に近づいた。

シノテック？ シノテックって……篠山のところの会社だ。

どうして？

「合併とか提携とか言つても、結局は乗つ取りだよ」

直樹がテレビ画面を見つめたまま

「シノテックは今年になって、やたらと他社を吸収して膨れ上がってるんだ」

乗つ取り……

直樹は優子を振り返ると「高森さんは、大丈夫なの？」

優子は応える間も無く白いダウンを鷲掴みになると、部屋を飛び出して階段を駆け下りる。

「優子、出かけるの？ もう直ぐご飯よ」

今日は母親のパートが休みだったので、夕飯の仕度を全てこなしていた。

「ちょっと出てくる」

優子は台所に向つて声をかけると同時に玄関を飛び出した。

重圧な凍て雲が空を覆つていた。

彼女は路地を走つて忍の家に急いだ。冷たい空気の壁が頬を叩く。小さな公園の向こうに確かに在るはずの忍の家を見つめて優子は走る。

胸の奥がドキドキした。

それは、昨日の高鳴りとは全く別の種の物だつた。真っ黒な不安と恐怖が全身を包み込んで背中がゾクゾクした。

なんで？ どうして……？ いったいどうこう事なの？

優子の足が停まつた忍の家の前。

門扉の明かりは消えていた。

優子は恐る恐る大きな扉を開けた。

そこには一切の明かりは無く、人の気配も感じない。その先の奥行きに向つて静寂と闇だけが静かに佇んでいる。

そこには誰も住んではいない……

家屋はただの黒い塊になつていた。

優子の荒い息使いだけが響き渡る闇に冷たい雫が零れ落ちてきて、あつと叫づ間に彼女と地面を濡らしていった。

## 第64話（後書き）

春企画参加のため、更新ペースが多少落ちます事をご了承下さい。

最低でも週1～2回は更新予定です。

琥珀色の風は後半へ入ります。

ドライヤーから煙が上がった。

「うわっ」

優子は慌ててそれを洗面所に放り投げる。

な、なにコレ？ 壊れた？

まだ半分しか寝癖を直していないのに、ドライヤーが突然白い煙を吹いて停まった。

優子は寝癖直し用のミストを多めに髪の毛に撒布すると

「もう……ついて無い事ばっかり……」

大きな溜息をついた。

電車に乗り込んでふと時間が空くと、頭の中を埋め尽くすのはやはり彼の事。

また明日つて言つたくせに……また明日つて言つたよ。

最終日のテストはボロボロだった。

昨晩は、あの後ほとんど勉強が手に付かなかつた。

早い時間にやつた数学以外、比較的得意な現国が日程にあつたのは、少しだけ幸いしていただが……

テストが終了した教室では、帰りのお茶する場所やカラオケに行く算段などの会話が飛び交つていた。

明日からはもう学校が休みだから、みんなの気は一気に緩んでいる。

忍の父親の仕事を知つてゐる者で昨夜のニュースを観た者は、忍が休んだ理由を察しているだろう。

しかし、その誰もがそんな話題は口にはしなかつた。

優子は気を使って近寄る一葉を振り払つように廊下に出ると、隣の教室に向つた。

それを見た安西が、小走りに後を追いかける。

優子はB組の戸を開けると、無言で教室へ足を踏み入れた。見知らぬ連中の視線が、彼女を追つた。

優子は脇目も振らず篠山雄一郎の席を目指す。彼は丁度カバンを手にした所で、優子に気付いて軽く微笑んだ。

「優子、どうしたんだ？」

優子は硬い表情を崩す事は無かつた。

「どういう事？ どうして高森のお父さんの会社を買収したのよ」「そ、それは俺の関知する事じゃないぜ」

篠山は困惑した笑みを浮かべる。

「高森は何処？ アンタのせいで高森がいなくなつたじゃないの」

優子は篠山の両肩を強く掴んだ。

「そんな事言われてもな……俺にはオヤジの会社の事は判らないから……」

篠山は苦笑するしかない。

「ちょっと優子。何やってるの？」

後から安西が駆けつけて、優子の肩を後から掴んだ。

優子はそれを振り払う。

「アンタ、高森の親友じやなかつたの？ 小学校からの友達でしょ。親友の家族を路頭に迷わせるような事をして、平氣なの？」

「優子！」

安西は、さらに強い力で彼女の肩に手を掛けて、振り返らせる。

「篠山だつて、ただの高校生なんだよ。高校生の子供が父親の会社の買収事に意見できると思う？ それで何かが変わるとと思う？」

優子は唇を噛み締めた。

「そんな事、言われなくとも解つてゐるよ。解つてゐるけど……誰に何を言えばいいか判らないじゃん……」

「判つてゐるよ……あたしはどうせギリギリまで何も知らなかつたお氣楽者だよ」

優子は安西の手を荒っぽく振り払うと、小走りに教室を出た。

教室に戻ると、ひと氣はほとんど無かつた。

一葉が優子の席で彼女を待つてゐる。

しかし、優子はそれを無視してカバンだけを掴むと廊下に向つて歩き出した。

一葉は黙つて優子を見送つた。

「優子……」

優子が昇降口へ降りると、一人の女子生徒が彼女の前を塞いだ。俯いて足早に歩いていた優子は、誰かの足元が視界に入つて慌てて立ち止まる。

顔を上げると、前に会つた女だつた。

駅前で他校の男子に絡まれた時、そこにいた女。間違いない。何故だか、今回は確信できた。

あの時男の誰かがいつた『千賀子』とこいつ名前も思い出した。「忍もこれで終わりね。もう、だれも彼の傍にはいられない」女は冷ややかに笑う。

優子は困惑した視線で彼女を見ていた。

「あなた、千賀子さん？」

「あら、あたしの名前知つてるんだ」

彼女は白い歯を見せて笑つた。

「高森に恨みでも在るの？ 今度の事も何か関係が？」

「まさか、会社同士の事でしょ。そんなのあたしに何とかできるわけないじやん」

彼女は冷ややかで鋭い視線を優子に浴びせると

「あたしを振つたバチが当たつたんでしょ」

「そんなの逆恨みでしょ」

「逆恨みでも何でも関係ない。上級生であるこのあたしがコクツた

のに、それを断つて……だから、その後忍に近づく奴はあたしが壊してやるんだ」

千賀子はそれまで自分からコクツた事などなかつた。

何時でも男が寄つて来るだけの容姿は持つてゐる。

だけど、高校入学当初から飛びぬけた輝きを見せる忍に惹かれて、自分から言い寄つた。絶対の確信を持つて。

しかし、その確信は碎かれた。千賀子は自分のプライドを傷つけた忍を許せなかつたのだ。

だから、中学の時の男友人達に頼んで忍に近づく女の子に密かに嫌がらせや乱暴をしたりしていた。

それは、忍と上手く行きそうな娘ほどエスカレートする。

なにこの女。オカシイんじゃないの？ そんな事して虚しくないのか？

「どいてよ。アンタなんかに構つてる暇ないから」

優子は千賀子の横をすり抜けて、下駄箱の靴を取り出し履き替えると、足早に昇降口を出た。

「篠山、忍に連絡は出来ないの?」

「ああ……」

「心当たりも?」

「ああ、俺だつてニュースを見るまで知らなかつた。お前の方が気付いてたんだろ?」

「あたしは、もしかしたら。つてお母さんに聞いていただけだし、こんな急に事が運ぶとは思つてなかつたよ。もつと前振りとかがあると思つたし、忍までいなくなるとは内心思つてなかつた」

安西は篠山を見上げて「電話とかしてみた?」

「直ぐにかけてみたけど、アイツの携帯は通じないんだ」

篠山もさすがにどうにもならないと言つた様子で、両手を軽く上げて見せた。

「何処に行つたのかしら……忍」

「さあな……一家心中はないだろ」

安西は篠山の脇腹を肘で突いて睨む「縁起でもない」

しかし彼女も実際そんな事はないだろ?と思つた。

あの家族には絆を感じない……中学の時に会つたきりだが、今もそれは変わらないだろ。

そういう家族は一家でどうにかなる物ではない。

あの父親なら、おそらく家族がバラバラになる事はあっても、誰かを道連れにはしないだろ。そして、あの母親も。

篠山も安西もそんな考えは同じだつた。

安西の家庭もバラバラだ。

それは自分が原因なのだが、自分に非が在るわけではない。

父親は彼女の妊娠を許さなかつた。相手が乱暴した犯人連中だという事で、尚更安西をせめた。

安西ひとみには居場所がなかつた。

だから家を出た。

あの親の傍で暮らすより、全てを一人で迎える独りの生活の方がいくらもましなものだった。

母親は今年の夏<sup>ひ</sup>から彼女と連絡を取つてくる。時には家の近くまで来て、会つこともあった。

母親は帰つてきなさいと言ひ。

しかし安西は知つてゐる。父親は自分を許していなし……「わべは家族を装つても、そんな家に帰るのはまつぶらだつた。どうつて事ないわ……家族と離れて暮らす事なんて平氣よ。忍だつてきつとやつて一ける。

そんな安西でも、忍の居場所だけは気がかりだつた。

\* \* \*

腐食したコンクリートのよつな空。

重圧のある雲が頭上を埋め尽<sup>つく</sup>して、匂過<sup>くわ</sup>になると由<sup>ゆ</sup>て雪が舞い降りてきた。

弱い風に煽<sup>うな</sup>られて、ヒラヒラと揺りこだ幾つもの雪輪<sup>ゆきわ</sup>が地面上に落ちては消える。

試験休みに入つて一週間。

忍の居場所は判らないままだし、優子にはそれを調べる術も無い。

何度か一葉に誘<sup>いざな</sup>られて街へ買い物へ出かけたが、どこか気乗りしないまま虚ろ<sup>うろ</sup>くなつた。一日を彼女に付き合わせるのは悪いと思つた。

アレから何度も忍の家に行つてみた。

優子にはそんな事しかできない。もしかしたら、ちょっと出かけただけで、あの家に忍が戻つて来るような気がしたから。

しかし、彼の家は明かりひとつ燈る事も無い黒い塊のまま、何も変わりはしない。

やつぱり、そうだ……お母さんが言つた通りだつた。何時どうなるかなんて判つたもんじゃない。傍にいると思つても、何時それが無くなるか判らないんだ。

優子は薄暗い部屋の中から、雪の舞う窓の外を眺めた。

向かいの家の屋根が、ほんの少しだけ白くなつていた。

よかつた……お母さんに紹介しなくて。告白とか、付き合いつとか、曖昧なままでよかつたんだよ。どうせ、消えてなくなるんだから……

彼女はアスファルトに落ちて消える雪を見つめていた。

車通りのない裏路地はすっかり白くなつていた。

昨日から降り出した雪……12月にこんなに雪が降るのは珍しい事だ。

うわあ、何でよ……ウンコふんだ……雪でわからなかつた……ていうか、誰だよもうつ！ 犬の散歩の後始末しろつつの……

優子は歩道脇の積もつた雪に、お気に入りのブーツの踵を何度も擦り付ける。

よかつた、雪があつて。キレイにとれそうだ。

靴底を丹念に雪で拭うと、彼女は思い出したよつて田舎の場所へ向つて歩き出した。

優子は踏み切りを渡つて駅向こうへ来ていた。

図書館の近くにある喫茶店の隅で、人を待つ。

入り口ドアの開く音がして、彼女が視線を注いだ先からその相手は現れた。

ハードウォッシュのジーンズにブラウン系のショート丈ダウンを羽織った安西が、足早に近づいてくると無言のまま優子の席の正面に座る。

「「」、「」めんね、何か呼び出して」

優子はそんな彼女を上目遣いでチラ見した。

「別に、暇だからいいけど」

安西はそう言って、カカオカフュを注文すると、黒縁のメガネを指で軽く触った。

休みの日は篠山と出かける事でもないと、相変わらずコンタクトはしないのだろう。

優子は結局諦め切れないでいる。

今更諦める事は出来なかつた。

何か忍に関する情報はないか、我慢できずに安西に連絡をとつた。

「忍の居場所は？」

安西が短く問いかける。

「やつぱり……判んないよね」

優子は視線を下げた。

「何？ あたしに訊こいつと思つてたの？」

「だつて、何かあたしより知つてそうな気がして……」

「あたしが知るわけないでしょ」

「な、なによ。こいつが下手に出でると思つて、高飛車な……」

ていうか、もともとか。

「連絡くれるとしたら、あたしよりアンタよ」

そう言つた時、安西にコーヒーが運ばれて來た。

優子は視線を上げて、安西を見つめる。

安西は自分の言つた言葉が当たり前だといつよつて、出されたばかりのカカオコーヒーのカップを手にすると、そつと口に着けた。

「高森つて、よくハワイに行つたりしてた？」

優子は唐突に訊く。

「ハワイ？」安西は口からカップを放して、眉を潜めた。

「なんでハワイ？」

訊き返す安西に、優子は思わず言葉に詰る。

居眠りしてたら夢に出て來た。なんて言えないよね。

「いや……何となくや」

「行つた事はあるだろうけど……まさか、海外に行つてないでしょ

安西は思わず苦笑する。

な、なによそのバカにしたような笑いは……あたしだつて実際そつは思つてないつつうの……

「そ、そつだよね。それは無いよね」

一瞬の沈黙が流れた。

窓の外の景色は白さを増す一方で、図書館の敷地のポプラの枯れ枝も白樺も、既に雪を被つていて。

「篠山にも訊いてみたよ」

安西は、再びコーヒーを口にして

「何だかんだ言つても、男同士だからさ。連絡取り易いと思つて」

「そ、そつなんだ……」

優子は再びテーブルに視線を下げると

「あたし、篠山に酷い事言つちゃつたのかな」

安西は小さく声を出して笑つた。

な、なんでそこで笑うんだよ。あたしだつて反省くらうする

よ。

相変わらず上田遣いにチラ見する優子に安西は

「大丈夫よ、篠山はそんな事気にしないでしょ」

優子は少しホッとした。

「こま篠山に一番近いのは、安西だ。彼女が言つただから、間違いないような気がして、気持ちが安らぐ。」

「篠山の家つてね、自分が干渉を受けない代わりに、親の事に口出しするのも」法度なのよ

「そ、そりなんだ……」

「でも、さすがにアイツも何か言つたらしいよ」

安西は水の入ったグラスを揺すつて氷を鳴らした。

「気付かなかつた？　あの日、篠山の左の頬に痣があつたの」

「き、気付かなかつたよ」

「お父さんに利き手で殴られたつて、ブツクサ言つた」

「そりなんだ……」めんつて、言つとこて

優子は再び視線を落とす。

「だから、アイツは優子の事は気にしてないって」

安西は再びグラスの氷を揺らすと「とにかく、待つしかないよ」

そう言つて水を一口飲む「退学届けは出でないし、学校へ戻る気はあるんだろうから」

「でも、期末試験の半分休んで大丈夫かな……」

優子の心配を他所に、安西は再び笑つた。

「ずっとトップだったのよ、彼。追試でも何でも直ぐに受けさせてもらられるよ」

雪は少し小降りになつたようだ。

かなり水を含んで、もう時期雨に変わりそうな気配がする。

「転んで怪我しないでよ。あんた、そそつかしいんだから」

傘を広げながら安西が言つた。

そんな事、言われなくたつて判つてるよ。変なもの踏んだけ

ど……

安西は雪雲を仰いで「ちゃんと前見て歩きなさい。今のアンタは下ばかり見てるからさ」

そ、それって励ましてるのか？　でも、下も見た方がよくな  
い？

「うん。ありがと。じゃあ」

優子も傘を広げた。

二人は一緒に喫茶店を出ると、お互に別々の方角に向って歩き出した。

\* \* \*

翌日、優子は一葉と里香の三人で久しぶりに映画を見に行つた。帰りは買い物などもして、少しだけ有意義な一日を過ごす。

安西に会つて、何だか心が安堵した。

ちょっと悔しいけど、忍をよく知る安西と話して、彼女の言葉で何となく勇気付けられた気がする。

優子が電車を降りて、駅の階段を下りると、外の景色にふと視線を止めた。

階段のロータリーに面した壁面ははめ殺しの窓ガラスになつている。

その先に見える人混みの中に、あまりに待ちわびた姿を見たのだった、高森だ。

ロータリーを行き交う人波の向こう。その姿は既に国道の横断歩道を渡つていた。

後姿だったが、優子にはひと目で判つた。

彼女は反射的に駆け出す。

階段を上つて来たサラリーマンと危うくぶつかりそうになつて、避けた拍子によろめいた。

体勢を整えながら急いで階段を駆け下りて、駅を出ると彼の姿を探した。

ロータリーを駆けて、国道に出て再び周囲を見渡す。胸が高鳴っていた。

息切れ以上に、心臓の鼓動は胸を叩いた。

確かにいたよ。あれは高森だ。絶対彼の姿だった……

優子は白い息を吐きながら、暮色の中で彼の姿を探した。しかし、それは何処にも見えない。

錯覚？ あまりの思い込みで錯覚だったのか？ そうだよ、もしいたとしても暗くて見えるはず無い。あたし、ヤバくない？ 優子は肩を落として国道を渡ると、力無い足取りで家に向った。歩道の隅に残った雪解け跡が凍つて、踏みしめるとバリバリと音を立てた。

夕飯の食卓は明るい。

自分の家では何事も無く時間が過ぎてゆく。優子の心を疊り重ねる全てが、家の外での出来事だ。

「最近ずっと元気ないようだけど、何かあった？」

茶碗を持った母親の杏子が、少し心配そうに優子に訊く。優子はハツとして笑顔を作ると

「別に。なんで？」

「そう。だつたらいいけど」

「なんだ、何か悩み事があつたら言いなさい。お父さんたちだって、伊達に親をやつてるわけじゃないんだから」

父親の孝之助は少し真顔でそう言つと

「まあ、少しは伊達だけどな」

「かなり伊達じやねえの」

直樹が味噌汁を啜りながら言つ。

「こら直樹、それは言い過ぎよ。お父さんだって、何かの役に立つかも知れないじゃない」

杏子が笑う。

「何かって、なんだよ……」

「大丈夫よ。あたしは別に何でもないんだからさ」

優子はムリにご飯のお代わりを要求した。

直樹はそんな姉の姿をチラ見するが、何も言わずにご飯を口に頬張つた。

\* \* \*

冷たい空は澄み切つて、窓の外に明るい月が大それて浮かんでいた。

小さな星の瞬きが見える。

優子がベッドに身体を投げ出して漫画を読んでいた、部屋のドアを誰かがノックした。

「姉貴、起きてる?」直樹の声だ。

「うん。起きてる?」

優子は返事と同時にベッドの上に起き上がった。

直樹は静かにドアを開ける。

「どうしたの?」

「今、ちょっと出れる?」

「今? 何処に?」

直樹は少し息を呑むと「ここから、出れる?」

「もう、11時だよ

「とにかく、出れる? ダメ?」

何だか直樹の目が真剣そのものだ。

な、なによ。あたしを何処に連れて行く気なの? 行き先ぐらう言えよ。

「わ、判ったよ、行くよ

優子は部屋着のジャージにそのままダウンジャケットを羽織りつとす。

「あつ、あのや……着替えた方がよくな?」

「あ? なんで? そんな遠くに行くの?」

優子は動きを止めた。

「いや……そんな遠くじゃないけど。外寒いから、ジーパン履けば?」

「じゃあ、おひと待つてて。今着替えるよ。ジャージは寒いよ。」

「じゃあ、おひと待つよ。ね。

優子がそう言つと、直樹はドアを静かに閉めた。

「何処行くの？」

「いいから」

優子は直樹について、住宅街を歩く。

夜の冷たい空気が全てを凍りつかせているかのようで、一人の小さな足音だけが響いていた。

暫く歩いて角を曲がる。

そして、再び反対側へ曲がって、また曲がる。

優子が気づいた時には、既にその家の近所まで来ていた。逆方向から来たので、気付くのが遅れた。

ま、まさか「イツ。舞衣ちゃんと喧嘩でもして、あたしに仲裁頼むつてんじやないでしきうね。そんな余裕なんだよ、あたしは。ちょっと直樹。あたしそんな余裕ないよ」

「はあ？ 何の余裕だよ」

直樹が立ち止まる。

「舞衣ちゃんの家に行くんでしょ」

「ああ。やつと気付いた？」

「ず、ずつと前から気付いてたけど言わなかつただけだよ」

直樹は小さく笑うと、再び歩き出す。

しかし、優子は動かなかつた。

振り返つた直樹は戻つて来て、彼女の腕を引っ張る。

「ちょっと、なんであたしが舞衣ちゃんの家に行くのよ。理由を述べなさいよ」

「いいから。来れば判るつて」

直樹はとにかく優子の腕を引っ張つて歩いた。

彼は舞衣の家の門扉の少し手前で止まると、携帯を取り出して彼女にコールする。

何であたしがこの寒空の下、アンタに付き合つ筋合いがあるのさ。自分の事でイツパイだつつの。

優子は両手で冷えた身体を摩つて空を見上げる。

この夜は、とにかく星が綺麗だつた。

直樹が電話を切るが早いか、門扉の行灯が燈つて、誰かの姿が見えた。

優子もその気配に視線を向ける。

舞衣ではない……身長も髪の毛のシルエットも全く違う。

淡い山吹色の明かりに浮かぶ黒いシルエット……一瞬彼の爽やかなライムの香りさえ届いた気がした。

それが優子に懐かしさと安堵をもたらしたのは確かだつた。

住宅街の時間は止まっていた。

いや、優子は今まで止まっていた自分の時間が動き出すのを感じた。だから、周囲の時間が止まつてゐるようを感じたのだろう。

それと同時に、胸の奥から熱い何かが沸き立ち、溢れてきた。しかし彼女の足は前に踏み出せない。

黒い影がゆっくり近づいてくる。

「姉貴、貸しだぜ」

小さくそう囁いた直樹は静かに後ずさりして、路地を曲がった陰に消えた。

「こ、こんな所にいたの？」

やつと言えた言葉だった。

どうして、どうしてこんな近くにいて、教えてくれなかつたの？

言いたかつた言葉が溢れて、喉元で渋滞を起こしていた。

「ああ……ちよつと家がごたごたしてたから。連絡取れなくてごめん」

忍の笑顔は変わらなかつた。

自分の誕生日の夜に見た、あの笑顔。

それまでも何度も見てきた、ムカつくほど綺麗で優しい笑顔だった。

優子は何も訊けないまま、立ち竦んでいた。

心の奥から湧き出たような熱い涙が、頬を伝うのだけは判つた。

恥ずかしい……人前で泣いた事なんて、小学校の時にプールで転んで頭から血を吹いた時以来無いのに……

優子は無言で頬に伝う涙を右手で拭つた。

忍は自分の手を差し出すと、彼女の左頬の涙を拭う。

飛び込んでいいの？ 彼の胸に飛び込むんだよね、こんな時

つて。

しかし優子の足は動かなかつた。

ただ、黙つて彼に頬を撫でられた。

「よかつた……無事で……」咳くように優子は言つた。

「ごめん、心配かけたね」

「ハワイに行ったのかと思つた……」

「ハワイ？」

「ううん、何でもない」

優子は大きく首を振つて、涙目のまま笑つた。

「期末試験は？」

「昨日、受けてきたよ」

忍はそう言つて髪をかき上げると「さすがに今回の1番は安西かな

二人は街路灯の在るところまで歩くと、並んで堀に寄りかかつて  
いた。

お互に顔をよく見たいといつ気持ちに変わりは無かつた。

「じゃあ、明日の終業式は来る？」

「それはちょっと……」

「どうして？」

「まだ、ちょっとね。でも、冬休み開けには学校へ行くよ」

「そう……」

優子は少し俯いた。

それを見た忍は「デートは出来るよ。イヴは出かけよう」

「ほんと？」

「行き場所決めた？」

「何処でもいいよ。丸井の屋上でも」

優子は真剣に言つたつもりだったが、それを聞いた忍が笑い出しつて、彼女もつられて笑つた。

冷たい空気は苦にならなくなっていた。たぶん心の中が火照つた  
せいで。

「お父さんは？」

優子は落ち着いて、やつとまともな事を訊く。

忍は小さく首を振ると

「わかんないよ。俺の方が先に家を出た。後の事はわかんない」  
彼は空を仰いだ。

「でも、心配するなつて言つてた。だから、大丈夫だと思つよ

「そなんだ……」

優子は眉を潜めて再び俯いた。

「お前が落ち込む事ないだろ」

「でも……」

「俺はオヤジと離れる事も、あの家から出る事も何とも思つてない  
よ。母さんと離れる事もね」

忍は優子に気を使つように明るく笑つて見せた。

「暫くはここで厄介になるよ。舞衣に勉強も教えられるしね」  
そう言つて、舞衣の家の塀を見上げる。

弱い風が辺りを通り過ぎてゆく。

優子は小さく肩をすくめた。

「寒くない？」

「うん、平気。でも……直樹のやつ、何も言わずにいきなり引つ張  
つてくるからマフラー忘れた……」

彼女の不平な咳きに、忍は再び笑つた。

優子は今この瞬間が夢では無い事を祈つた。

少しでも長く、時間がゆっくり過ぎればいいと願つた。

三日月の囁くような明かりと星の瞬きが、今夜は彼女の為にほん  
の少しだけ時間を止めてくれるような気がした。



## 第69話（後書き）

「琥珀色の風」をお読み頂き、有難うござります。

現在、春企画参加作品「放課後のプリズム」を連載中です！

<http://ncode.syosetu.com/n7719d/>

12月24日

鮮やかな花火が、夜空を染め上げた。

優子はかつて見た事の無い光景に、完全に氣後れする。

イヴの夜のディズニーリゾートは、どのアトラクションも2時間待ちが当たり前。

考えているうちに列はどんどん伸びるし、人混みでこんなに広いはずの通路が通り難いのも初めて。

もちろん、最後に来たのは中学の卒業記念だから、かなり久しぶりだ。

「ね、ねえ。これじゃあ何にも乗れたくない？」

「仕方ないさ。今日はここにいることを楽しむしかない」

忍はそう言つて笑つた。

みんながそう考えれば、乗り物空くんだけどな……

優子は打ち上げられた花火を見上げた。

右も左も幸せそうな笑顔で溢れている。

雑踏に押し潰されそうな中で、ただ賑わいを堪能するのが精一杯だった。

うわっ、チューしてんつ。ていうか、みんな感覚麻痺している

人混みを気にしないで抱き合つカップルはここそこにいる……しかも、かなりの数。

かと思えば、ファーストフードの店の前で、子供が大声で泣き出した。

そんな光景を見るだけで、なんだか余計に疲労が増して、優子と忍は早々にそこを出でてしまった。

しかも浜風が異常に冷たくて、とにかく過酷だった。

あの中で賑わいに加われる連中は、ある意味スゴイと思つた。

「、ここから何が目的でここに来てるの？ 何でこんな人混みで抱き合えるのよ……」

「何だか疲れた……」

優子はゲートの外へ出ると、近くのベンチに座り込む。

「さすがに俺も疲れた」

忍は近くの自販機で熱いココアを買って隣に座る。

まあ、あんたといるのは何時も疲れるけど……でも、会わないとまた一緒にいたくなっちゃうんだ……

優子は彼の差し出したココアを受け取った。

ブルタブを引いて、一口飲む。

「ねえ、前から訊きたかった事があるんだけど」「何？」

忍はそう言いながら、自分に買った缶コーヒーを口にする。

「あたしの携帯電話の番号って、どこで知ったの？」

「携帯番号？」

「ほら、初めてあたしに電話くれた時」

忍は笑って星空を見上げると

「ああ、あれか」

な、何よ。言いなさいよ。

「で……どうして？」

「優子、前に携帯落としたる？」

「そう言えば、夏休み前に一度落とした。ていうか、学食に置き忘れた。

「そ、そう言えば、そんな事あつたけど……」

「あれ、拾ったの俺だ」

「そ、そうなの？」

優子は一瞬納得した。

「ん？ て、いう事はあたしの携帯勝手に覗いたのか？ 盗み見？」

「で、でも、それって、あたしの携帯覗いたの？」

見？

「ん……まあ、ちょっとな」

忍は再び「一ヒーを口にすると

「でも、誰の携帯か確認するのにオーナー情報を見ただけだよ。他人見てない」

「で、でもそれって先生が見れば済むじやん」

「まあね。でも知りたかったんだよ」

忍ははにかみながら周囲を見渡して「優子が忘れて行つたのを見てたから」

見てたのか？ だつたらその時声かけるよ。ていうか、それってどういう意味？ そんな前からあたしに興味があつたのか？ 優子は、忍の無邪氣とも取れる笑顔に何も言えなくなつた。自分に興味があつたと言われて、悪い気はしない。これが舟越だつたら、もつと怒つているに違ひないだろうが……「まあ、何がキッカケになるかは判らないって事さ」忍はそう言つて、優子の肩に手を触れた。

12月31日。

年の瀬末日。優子の携帯が鳴つた。  
表示番号には見覚えが無い。

「もしもし……」

優子は警戒心を含んだ声を出す。

「あつ、五十嵐？ 舟越だけど」

舟越？

電話の相手は舟越だつた。すつかり存在を忘れていた……

「な、何？ どうしてあたしの携帯知つてるの？」

「そんなことより、大変なんだよ。一大事だ」

舟越は慌てた口調で言つた。

何が大変なんだよ。アンタから電話が掛かってきた事自体、

一大事だつつの。

「な、何?」

「高森を見かけたよ」

その言葉で、優子は拍子抜けした。

なに今更いつてんのよ。もう何度も会つてるんだよ。

しかし今の段階では、教師意外に彼の消息は知らなまんなのだろ

う。

忍の話しによれば、冬休み明けにさつづなく学校へ復帰する予定との事だ。

「そ、そななの……」

優子は苦笑しながら、とりあえず初耳の振りをする。

「それで、何処で見かけたと思つ?」

「どうせ、駅近辺とかじゃないの?」

「ど、何処で?」

「五十嵐の住んでる駅前だよ。意外と近くにいるんじゃないかな?」

「そ、そななんだ。なるほどね。へえ……」

優子はとりあえず驚くフリなどしてみるが……

「なあ、これから一緒に探してみない?」

「はあ?」

どうしてあんたと一緒に探さなくちゃいけないのよ。ていう

か、そんな必要ないんだつてば。

「い、いこよ。別に……」

「俺だつて、五十嵐の役にたちたいと思つてゐるんだ。僕にだつてキ

リを見守る事ぐらじできるよ」

それ思ひ過ごしだよ……つづか、それどつかで聞いたセリフ

なんだけど……ブライト?

「いや、別にいいのよ。そのつが由へんと頃つかり……」

「そんな投げやりになつちやダメだよ

なつてないつつの。

「ど、とにかくさ、いいのよ。ありがとう。気持ちだけ受け取っておくよ

優子はさう言って電話を切った。ありがとうの気持ちは本当だつた。

途端に、街の喧騒が耳に戻つてくれる。

「誰？　電話」

隣で忍が言った。

「あ、ああ……な、直樹。弟の直樹だったよ  
彼女は笑いながら「バカな電話でさ」

## 第70話（後書き）

「琥珀色の風」をお読み頂き、有難うござります。

現在、春企画参加作品「放課後のプリズム」を連載中です！

<http://ncode.syosetu.com/n7719d/>

な、何で？ 何でこんな事になるの？

優子は安西のアパートの小さな部屋で、忍と一緒に並んで座っていた。

小さなテーブルを挟んだ向かい側には、篠山の姿もある。

近くの神社に忍と初詣に行つたら、篠山と安西も来ていたのだ。  
しぐじつた……もつと遠くへ行くべきだつたんだ。あたしと  
した事が、安西と同じ場所へ初詣に行つてしまつなんて……

新しい住宅街が出来る以前から在るその神社は、意外に大きい。  
図書館の先を少しうくると小さな丘が在る。

何時もは閑散とした場所だが、鳥居の入り口から出店が並んでいた。

石段が延びる先は林に囲まれた平地になつていて、再び大きな鳥  
居を潜る。

古びた神社を取り囲むように出店が立ち並ぶそこは、参拝者も多  
く人混みで溢れていた。

何人かの同じ学校の連中を見かけたが、気付かれず、又は知らな  
い振りで通り過ぎる事ができた。

それなのに、安西とは鉢合わせをするかのように、本当にバッタ  
リと出合つた。

もはや知らない素振りなど出来る状況ではなかつた。

「あけましておめでとう」

安西はすかさず言つた。

こんな時でも彼女は冷静だ。

4人で東屋に座つて話をしているうちに篠山が言つた。

「これから安西の家で飯食うんだけど、お前らも来ないか？  
彼にしてみれば氣を使ったのだと思う。

自分の家には招く事は出来なが、安西の家なら忍も大丈夫だと思

つたのかもしれない。

もしかしたら、安西と忍の事を知らないかもしれない。  
相変わらずアパートの敷地に在る枯れ木が、魔女の邸宅のよう  
物寂しげに佇んでいた。

でも……

優子は安西の部屋に入つて直ぐに気付いた。

篠山は幾度と無くこの部屋に来ている……

ていうか、あたしがこの前来た時の物寂しげな雰囲気が無い  
じやん……

何だか部屋の中が明るい。

畳の上にはグレーの絨毯が敷かれ、小さな茶箪笥も在る。

カップもグラスもやたら増えてない？ ていうか、全部一人  
分ないか？

優子は正座をして周囲を見渡していた。

「ハイ、どうぞ」

安西は3段の重箱を出してきて、テーブルに広げた。

お、お節？ 安西、お節作れるの？

「すげえな」

篠山がそう言つて割り箸を割る。

「いま、お雑煮作ってるから」

安西はそう言いながら、小さな台所を行き来する。

「あ、あたしも何か手伝おうか？」

「あら、優子も料理できるの？」

安西が振り返つて笑う。

料理ぐらいでできるつつの……お節は判らないけどさ……

「優子の料理は、意外とつまいよ」

忍が言つた。

「へえ、俺も食べてみたいな」

安西の鋭い視線を他所に篠山は無邪気に笑つて、伊達巻をくわえる。

「じゃあ優子、お餅焼いてくれる」

安西の声に優子は立ち上がりながら

「お餅どー?」

「ああ、冷蔵庫に入れて在るよ」

篠山が応える。

あ、あんた、餅のありかまで知ってるのか?

優子は台所で小さな冷蔵庫を開けた。

優子は台所にある小さなオーブントースターで餅の焼け具合を見ながら、奥の部屋で談話する忍と篠山の姿を何度も見る。何のわだかまりも感じない、以前と変わらない二人がそこにはあつた。

優子は安西に背中を突かれて振り返る。

「餅、やばいよ」

「あつ……」

優子は慌ててトースターの扉を開けて、餅を取り出した。

うわっ、ヤバ……黒くなつてる……

膨れ上がった餅は、片面がガリガリに硬くなつて焦げている。

「それ、あんた食べなさいよ」

安西は小さな声で、冷たく言った。

陽が暮れる頃、優子と忍の二人は安西の家を後にした。

篠山が出入りするあの部屋は、もう孤独の砦ではなかつた。

忍に思いを寄せながら過去にすがつて生きていた頃に比べると、安西はふつくらとした笑顔を見せるようになつた。

忍との過去にすがるという事は、結果として自分の過去も忘れられないという事なのだ。

今の安西は、閉ざされた長い孤独からちょっとぴり解放されたのか

もしれない。

優子は何故だかそんな事にホッとして、古い壇に向ひひのアパートを振り返った。

「どうした？」

忍が声をかける。

「うん、何でもない」

優子は少し先で止まつた彼に小走りで追いつくと

「高森は、安西の部屋に来た事あつたの？」

「ああ、前に一度だけね」

「そつか」

澄み渡る寒空を見上げる。

「何時とか、訊かないの？」

忍は優子を見つめた。

「別に、いいよ。何時でも」

優子は白い息を吐きながらひそひそ笑つと「今年はいい年になるといいね」

忍はそんな彼女を見つめて「ああ」と応えた。

連日晴天が続く空は、冬風にさらされたように何処までも澄み渡つていた。

試験休みを含めれば充分長い冬休みも、年が明ければ1週間ほどで終わる。そして明日から始まる3学期は、忍が学校に復帰する日もある。

忍は直ぐに部活にも復帰すると云つので、優子は彼の弁当作りをかつて出た。

安西なんかに負けたられない。お節なんて作れなくたって、お弁当くらい作れるんだから。

優子は駅前のスーパーに買い物へ行き、ついでに本屋に寄つた。久しぶりの本屋で、彼女はついつい時間を費やしてしまつ。ふと顔を上げると、外は暗くなつていた。

ヤバ、帰らなくちゃ。

慌てるように店を出ると、誰かにぶつかりそうにな。

「あ、すいま……」

優子はその相手を見上げて「舟越……？」

「ああ、五十嵐か。ビックリした」

「ビックリしたのはこっちだよ。何してるので、こんな所で舟越は頭に手を当てる

「いや……高森の居場所を探そつかと……」

「こいつ、まだ探してたの？」

「あ、ああ。そうなの……」

ていうか、高森もかなり外に出歩いてるし、あたしとだつて出かけてるのに、それに出来わざない方がおかしくない？

「あ、あのね、舟越……」

優子は何だか舟越が氣の毒に思えて、一瞬言葉を呑み込む。

舟越はそんな彼女に気付かず

「「」のまま高森が出てこなかつたら、どうする？」「はあ？」

「だから、もう一度と彼に会えなかつたら……そしたら、俺、待つてるよ」

いや……待たなくていいから……全然眼中にないから……

「あ、あのね。高森は、明日から学校に来るつて」

「連絡あつたの？」

舟越は皿を丸くして言った。

散々出かけてるつつの……

「う、うん。あつた。連絡來たよ」

「「」に住んでるつて？ 家には誰もいなかつたぜ」

家に行つたのかよ……

「あ、なんか、親戚の家に暫くお世話になるつて

「そつか……じゃあ、園辺つて所だなきつと」

そんな事まで知つてゐるのに、なんで肝心の事が判らないんだ

よ……調べ方おかしくない？

「よ、よかつたな。じゃあ、俺も安心したよ」

舟越はそう言つて、駅の方へ歩き出す。

「あ、舟越」

優子は思わず彼を呼び止めると

「心配してくれて、あつ」とうね」

「あ、ああ。いいて」

舟越は店頭の明かりに照らされて頬を紅潮せると「じゅあ」

そう言つて、再び足早に歩き出した。

優子は夕飯の仕度とは別に、明日の下「」しらえをする。

あつ、高森つて、嫌いな物あるのかな？ 訊いとけばよかつたな。

その時、外にサイレンの音が聞こえた。何処か遠くで犬が吼えて

いる。

佐助はサイレンの音に反応しないので安心だが……

優子はフライを揚げながら外の夜気に耳を傾けた。

リビングのテレビの音で最初は気がつかなかつたが、しだいにサイレンの数が増えて、しかも何だか近い。

消防車だ……何だかやたら数が増えてる……近くで火事かな？  
そして、救急車やパトカーの音も入り混じつて、外はいつそう慌しくなつた。

\* \* \*

忍は舞衣のお供で彼女の通う塾へ行つて来た。

彼が暫く勉強を見るため、受講する教科を減らしてもらつて来たのだ。

駅前の国道を歩いてくると、本屋の向いの空が紅く染まって真っ黒い煙が立ち昇つているのが見えた。

「すごい……火事じゃない？」

舞衣が言つた。

路地に入れない消防車が、本屋の脇に止まつてゐる。風に乗つて焦げクサイ臭いがした。

手前の路地を入つたが、ひとつ先の十字路まで行くと燃えている家屋が見えた。

「ちょっと見て行こうよ」

舞衣がそう言つて、真つ直ぐ通り過ぎようとする忍を引き止める。黒々とした煙にオレンジ色の火の粉が、バチバチと音をたてて竜のように紺青へ立ち昇る。

表通りよりも野次馬は少ないが、先には消防車と救急車が停まつていた。

路地から遠巻きに見る野次馬の脇をすり抜けるように、舞衣はどんどん前に進んで行った。

「あんまり近づくと危ないぞ」

先を行く舞衣に忍が声をかける。

そう言いながらも、二人は群がる人垣の方へ歩いた。

全焼は免れない状況だろう。

周囲の消防車は、両隣の家屋に燃え広がらない処置をしているようを見えた。

その時野次馬の人波が割れて、救急隊によつて担架が運ばれてきた。

呼吸器を着けた婦人が何かを叫んでいる。

「まだ中に……子供が中に……一人いるんです」

救急隊員は「大丈夫です」とだけ言つて、彼女を宥める。もう独り担架で運ばれてきた。

「子供が、まだ下の子がいます。助けてくれ……」

「大丈夫です」救急隊員は同じ言葉の繰り返しだ。

忍は小さな群集を割つて前に出た。

消防隊員が慌しく動き回つていて、炎の熱が頬を照りつける。手

前にいる警官が野次馬を入れないように、周囲に注意を促していた。担架が再び運ばれる所で、それが忍の前を通り過ぎる。

薄い毛布で包まれた担架を忍が覗き込むと、どうやら子供らしい事がわかつた。

しかし、子供はもう一人いると両親は言つていた。

「もう一人の子供は?」

「ああ?」

救急隊員が言つた。

「子供がもう一人いるはずだつて」

「判らない。救出したのはこの子で最後だ」

「もう一人子供がいるはずだつて」

忍は繰り返した。

「こつちは自分の持ち場で精一杯だ」

その時、二階の柱の一つがガラガラと音を立てて崩れ落ちた。警官も振り返つて、一瞬固唾を呑む。

「もう一人いるはずなんですけど」

忍は一番近くにいた消防士にも声をかける。

「もう中には入れない」

消防士が放水位置を指示しながら振り返つた。

「子供がもう一人いるんですよ」

「無理な物はムリだ。もう倒壊寸前だ」

警官が近づいて身を乗り出す忍を制したが、彼はその制止を振り切つて消防士へ近づく。

「忍くん。やめて、危ないよ」

舞衣が後ろで叫んだ。

「危ないから下がりなさい」

消防士が言った「ベストはつくしている」

炎の熱が、全身を照りつけた。

四方から放水する飛沫が跳ね返り、忍の身体を濡らした。

既に家屋は二階建てに満たないものへと化している。

しかし、彼の耳には何かが聞こえた。業火の吠えるような音に混じつて、確かに聞こえたのだ。

忍は僅かに家屋に近づいた。

「声が聞こえました」

「あ？」消防士は消火の指示に忙しい中で応える。

「キミ、危ないから下がりなさい」

警官が再び近づいてくる。

「中にはいますよ」忍は必死で訴えた。

「無理だ。もう手遅れなんだ」

消防士も彼を野次馬の人垣に押し戻そうとするが、忍はわざと消

火放水の飛沫を浴びた。

「やめる、下がれ。何を考えてる」

忍は家屋に向って後ずさりする「声が聞こえたんだ」

ひとつ息をつくと、彼は狂った業火の中へ向って一気に走り込んで行った。

「停まれ、やめるんだ！」

消防士が叫んだ。

彼を捕まえようとした消防士と警官の手が、上着に掠つて同時に空を掴んだ。

から揚げと、白身フライとハンバーグと……卵焼きは必須だよね。

あんまり多いと、部活で走るしなあ……

優子は明日の朝使う弁当箱を取り出してレイアウトを思い描き、幸せそうな笑みを零した。

「姉ちゃん、駅前でスゲー火事だぜ」  
外から帰つて来た直樹が、台所に入つて来て優子に声をかけた。  
「サイレン凄かつたもん。やっぱり近くだつたんだ」  
「一軒マル焦げ。ていうか骨だけつてカンジだね」  
直樹はそう言つて冷蔵庫からオレンジジュースを取り出すと、グラスにあけて  
「この辺まで焦げクサイ臭いがするよ」  
「そう言えばそんな臭いがした」  
優子はお玉を持ったまま「あんた、わざわざ現場見てきたの?」  
「だつて、ほんと駅から直ぐ近くだつたよ」  
「しょうがない野次馬ね」  
彼女は弟をチラリと見て肩をすくめた。  
直樹はリビングのソファに腰をおろして「」飯まだでしょ  
「もう少し。あんた、カバン部屋に置いて来な」  
「うん……後で」  
その時直樹の携帯電話が鳴る。  
「おひ、舞衣だ」  
直樹はわざと声に出して携帯を開いた。  
「まつたく……」  
優子は溜息混じりでリビングに背を向けると、味噌汁に豆腐を入れた。直樹が舞衣と何を話しているのか、まつたく耳に入らなかつた。  
炊飯器のランプが緑に変わつて、ご飯が焼き上がつたのが判つた。彼女が後に気配を感じて振り返ると、何時の間にか間近に直樹がいる。  
「うわっ、ビックリした……何よ、気配消さないでくれる」  
「ね、姉ちゃん……大変だ……」

直樹の顔色は蒼白だった。口から泡でも吹きそうな表情で立っている。

「どうしたの？ もしかしていきなり振られた？」

優子の冗談にも彼は反応しない。

「姉ちゃん……」

「な、何よキモイわね。言いたい事あるんならはつきり言こなよ」

直樹は一度続けて息を呑み込んだ。

「高森さんが……」

「なんで……どうして……あたしの生活はもっと平凡だつたじゃない。誰にも干渉されず、何も起こらないありふれた日常の繰り返しだつたじゃない……」

「なんでこんなに次々といろんな事が起こるの？ どうしてそつとしておいてくれないの……」

優子は集中治療室の扉の前で、ドアに爪を立てて首をうな垂れた。

『面会謝絶』その文字が、事の重大さを物語ついていた。

優子は忍が運び込まれた救急病院へ、直樹と一緒に来ていた。

「あたしがいけないんだよ。あたしが火事見て行こうなんて言つたから……」

舞衣が自分の両親の前で肩を震わせて泣いていた。

「大丈夫、大丈夫よ……忍君は正義感が強いからね

母親がそう言つて、舞衣の背中を摩つた。

「姉ちゃん……いつたん戻ろ。治療はまだ大分かかるし、俺たちはここにいても何も出来ないよ

「つるさい！」

優子は直樹を突き飛ばした。

「姉ちゃん……」

「「「めん……先に帰つて。少ししたら、あたしも帰るから……」

優子はそう言つて、近くの長椅子に腰掛けた。

病院の廊下には、すすり泣く舞衣の声と看護師の足音だけが響いていた。

\* \* \*

擦れた薄雲が、虚空に浮かぶ。

あまりにも澄んだ空は、寒々としていた。

終業式が終わつて生徒が教室へ揃うと、担任教師の口から忍の事が告げられる。

「高森は今日から学校へ復帰する予定だつたのだが、昨日の夜に大きな怪我を負つてしまつた」

担任が生徒を見渡すように囁く。

「怪我つて？」

誰かが訊いた。

「昨日あつた大きな火事は知つてる者もいるかもしれない。取り残された子供を助け出したのは、高森だ」

「スゲージャン」

「アイツ、さすがだよ」

「忍くんらしい」

そんな声が教室を満たした。

優子は何も言わずにそれを聞いていた。

何処が凄いのよ。けつきよく自分は重症で、いつたい何が残るの？ 人の為に自分を犠牲にまでして……

優子は唇を噛み締めると、耳を塞いだ。

「怪我、酷いんですか？」

質問したのは安西だつた。

「かなり酷いらしい……」

担任教師はいたわしい素振りで視線を下げるが、直ぐに顔を上げ  
「しかし、命に別状ないそうだ」  
「ムリに微笑んだ。

「どうして連絡くれなかつたの」

安西が言った。

「そうだよ、どうして知らせてくれなかつたの？」

一葉も近づいて來た。

ホームルームが終わると、優子の回りに何人かが集まつて來た。

「言つてどうなるの……」

「どうなるも何も、こっちにだつて知る権利があるわ」

安西が机を叩いた。

「こつちは知りたくなかった。ていうか、そんな知らせなんか来て  
欲しくなかつたよ」

「起きてしまつた事をどういつ言つても仕方ないでしょ」  
安西の言葉を他所に、優子はカバンを掴むと足早に教室を出て行  
つた。

## 第73話（後書き）

「琥珀色の風」をお読み頂きありがとうございます。

この作品は、暗さと明るさのギャップが激しいです。  
また少し、アップダウンがあります。

「先生、高森君はどんな状態なんですか？ お見舞いに行つても平気ですか？」

安西は耐え切れず、職員室へ来ていた。

直接担任に訊けば済む事だ。

「今は面会できないらし……」

担任は回転式の椅子ごと彼女の方を向いて、膝の上で両手を組み合わせた。

「命には別状ないつて……」

「ああ、それは大丈夫だそうだ」

「何処を怪我したんですか？」

「左半身と左の顔に重度の火傷を負つたらし……しばらく集中治療室だそうだ」

担任はそう言つて、いかにもぬるそつなお茶を啜ると溜息に混じつた声を零した。

「人を助けたつて言つのに……」

安西は困惑して眉を潜めた。

「顔……ですか」

「ああ、かなり酷いらし……」

担任は再び湯飲みに口を着けると「暫くは、会うのはムリだらう

\* \* \*

高森忍の姿の無いまま始まつた新学期は、あまりにも空虚に過ぎてゆく。

優子の存在は何時の間にか彼と親しくなる以前に戻つていた。

口数は減り、一葉や里香意外とはほとんど話しましない。もちろん、用事が無いからもあるが……

優子が学校帰りの道を歩いていると、後から足音が迫り上りてきた。

「優子、待つてよ」

一葉が駆けて来て、優子の肩を叩いた。

「最近独りが多くない?」

「前からよ……」

ちょっと不機嫌そうに、優子はボソリと呟く。ひと言で。

「そんな事言わないでさあ」一葉は苦笑して彼女に並んだ。

「優子、高森の病院には行つてるの?」

「行つても仕方ないんだよ。会えないんだから」

「まだ面会できないの?」

「うん。まだ身内しか入れないみたい」

「そつか」

一葉はそう言って、カバンを抱え直す。

冷たい風が一人の身体を吹き抜けて、同時に首をすくめた。

優子は何度か忍の病院へ行つてみたが、会つ事は出来なかつた。舞衣に聞いた話によると、顔はほぼ全て包帯で巻かれて会話は出来ないらしい。

考えてみれば、そんな彼の姿は想像できないし、見るのも辛い。

「はあ……」

駅のホームに降りると、優子は椅子に座つて溜息をついた。

ずっと変わらない景色がそこはある。

学校へ通いだして以来ほとんど変わらない風景……自分はどれ程

に……いや、自分に関わる人たちにはどれ程の変化があつただろう。

「一葉は、また陸上やりたいとか思つたりする?」

優子はふいに言葉を発した。

ゆっくりとした動作で、一葉も優子の隣に腰を下ろす。

「ううん。どうかな……あんまり思わない。今はね」

「今は？」

「陸上が出来ないって聞いた時は、名残惜しかった。それだけで自分の世界は終わるような気がした」

一葉は遠くの空を見上げて、少しだけ目を細めた。

「でも、たいした事なかつたよ。そんな事は意外とちっぽけな事だつて判つたし、走らなくても楽しい事はいっぱいあるし。優子を追いかけるくらいは出来るしね」

「そつか……」

「持つてるものを手放すのは辛いけど、手放してみると意外と平気だつたりね」

一葉はそう言つて笑うと

「だからさ、あんまり臆病になるな」

優子は彼女を見つめた。

一葉の笑顔が少しだけ大人に見えた。

\* \* \*

熱い炎が燃え盛つて、周囲を取り巻いていた。

そこはまるで地獄の業火だ……

彼は行けると思った。

いや、そんな事は考えずに飛び込んだのかもしれない。考える暇なんて無かつた。

彼には確かに聞こえたのだ。

燃え盛る家屋の中から、小さな子供の泣き声が……

中に入ると、思ったよりも煙が凄くて視界はきかなかつた。

走り抜けて子供を捜すなんて出来ない……しかし、もう後戻りは出来なかつた。

微かに聞こえた泣き声が、確かな物に変わっていたから。

音を立てて燃え盛る炎は悪魔の叫びのようだ。

自分の背丈の火柱を初めて間近で見た。

濡れたN3Bが、アツというまに熱くなつた。

タイタンクロスは燃えない……本当だらうか……

このN3Bは本当に防火能力があるのか……彼には確信なんて無かつた。ただの宣伝文句かもしれない。

それに、いくら上着が燃えなくたつて、髪の毛もジーンズも焦げてしまう。

フードをかぶつて、足早に炎を掻い潜るしか術は無かつた。

早くもフードを縁取るココーテの毛はチリチリ音を立てて焦げていた。

姿勢を低くしてバンダナを口に当てる時、いくらか呼吸がラクになる。

ジャケットを買った時にオマケでポケットに入れてよこしたバンダナが思いもかけず役に立つた。

幸いな事に、子供は1階の和室にいた。いや、そこが和室かどうかなんて判らない。

ただ、リビングではないのでそう思つただけだ。

二間続きの仕切りの襖は完全に燃え切ろうとしている。紅い炎の先に真っ黒な仏壇が見えた。

子供は手前の部屋に倒れて泣いていた。何歳くらいなのかは判らない。

3歳か、それとも5歳か……とにかく抱えて部屋を出なくてはならなかつた。

部屋の天井が崩れそうになつて、垂れ下がつた天板が逆流する滝のように煙を上げていた。

荒れ狂う炎はまるでオレンジグリのようすに綺麗で、氣を抜くと見とれてしまい、吸い込まれそうだ。

彼の脳裏には不安ばかりが過る。このまま出られないと思つた。入らなければ良かつたと思つた。

何処を走ったかなんて判らない。

家屋の中を抜ける風に乗って、炎は生き物のように蠢いた。

何か熱い物が左の肩にぶつかったのが判つたが、彼は構わず走つた。

本能が出口へ導いたのかもしれない。それとも、天使が導いてくれたのか……

視界が開けた瞬間、全身に痛みが走つた。

何かが崩れて自分の上に落ちてきたのが判つた。

微かに見えた消防士に向つて、忍は抱えていた子供を放り投げた。

上手く渡つたかは判らない。

記憶はそこで途切れ、自分は死ぬのだと忍は思つた……

いや……次に意識が戻つた時、死んだ方がよかつたと思つた。

自分にはもう何も無い。

今まで自分を際立たせていたのは、自分自身の努力の成果だと思っていた。

それを自負する事で、再び頑張る事ができた。

しかし、少し違っていたようだ。

容姿というモノを考えなかつた。

生まれ持つたものだから、別段意識した事はないのだ。

いや、判つていた事だ。

自分に近づく女性たちが自分の容姿に引かれてやつてくる事を、前から知つていたではないか。

だから、優子に声をかけたのだ。

彼女は自分の容姿に興味がなさそうだつたから……

しかし、そんな試すよつた事が出来るのも、所詮この姿があつたから。

身体はいい。

洋服で何とかなるだろつ。

しかし、左半分の顔はどうにもならない。

形成手術を繰り返せば元通りになるらしい……しかし、今は両親

のいない身でそんな代金が払えるわけも無い。

ここに入院する医療費だつてバカにはならないだろつ。

これくらいなら、園辺さんたちが払つてくれる。

しかしそれ以上を求める事はできない……

もう自分には何もないのだ。

きつと優子も離れてゆくだろつ。

この顔を見れば……

忍はシミひとつ無い病院の白い天上を眺めながら、毎日同じこと

を繰り返し考えた。

\* \* \*

1月も末になると、風は上空の寒波に煽られて凍てつく景色をセ「ミニックのように冷たいモノへと変える。

放課後、優子が通りを歩いて駅前まで来ると、車道に車が停まつた。

甲高いホーンが短く一度鳴つて彼女を呼ぶ。

優子は何だか判らずに反射的に振り返るが、そこに在るのは見覚えの無い車。

いや、見覚えはある。

そこに停まつていたのは、テレビや雑誌で見た事があるイタリアの高級スポーツカーだったから。

跳ね馬の黄色いエンブレムが輝いている。

歩道側のドアが開くと、ペッタンコなその車内から長身の男が出て来た。

優子も見た事があった。バスケ部の3年生……中村輝だ。

以前、一葉に付き合つてバスケ部の紅白戦を見た時に、華麗にコートを走つていたのが印象的だ。

優子は無言で彼を見上げた。

忍や篠山よりも大分背が高い。

「やあ、五十嵐優子さんだよね」

「は、はい……」

彼は自分の車に寄りかかると「じう～ 最近元気ないみたいだけ

じ

じう～ て、何？ ていつか、アンタと話すの初めてなんだ

けど……

「高森の彼女でしょ？」

真冬の陽射しに、彼の白い歯が光つた気がした。

「いや……彼女っていうか……」

「何気に有名だよ。キミ」

有名？ あたしが？

「高森が入院して落ち込んでるようだし……」

中村はポケットに手を入れると

「気晴らしにドライブでもどう？」「

だから……なんでほとんどの初対面のあんたとドライブするのよ。

「いや、あの……けつこうです」

中村は部活をやつていた頃より伸びた髪をかき上げて

「噂通り、謙虚なんだな」 そう言つて笑つた。

いやいや……誰だつて初対面の男の車には乗らないって……

ていうか、今は乗るの？

「フューラーに乗る機会なんて滅多にないよ」

中村は、わざとらしくおどけて見せる。

「あ、あたし車はよく判らないし……」

「でもさ、塞ぎ込んでばかりじゃ疲れるでしょ？」

優子は彼の後にある腰ほどの高さの車を眺めた。

周囲の景色を取り込んだ黒いボディーは、まるで熔けかけのキャラメルのように艶やかだ。

中村輝……一葉から噂は聞いたことが在る。

3年生の中で一番人気の彼は、人当たりもよくて女の子に優しい。

悪い話は全く聞いたことが無かつた。

もちろん、一葉自身も直接話した事はないのだろうが……

優子は周囲を見渡してから、空を見上げた。

「ね、少しどライブしよう。帰りは送つて行くからさ」

初対面の篠山雄二郎よりは好感が持てたのも確かだつたが、何だか腑に落ちない胡散臭さが漂つてゐる。

しかし……優子はやはり、心のどこかで気分転換を望んでいたの

かもしだい。

中村輝は絶妙なタイミングでそれを突いて来たと言えるだらう。

「じゃ、じゃあ、少しなら……」

て、いうか、こいつも金持ちボンボンなんだ……つむの学校つて、お金持ちの子供多いのか？

優子は再び周囲を見渡すと、辺りに同じ学校の生徒がいない事を確認して、車の右側に回りこんだ。

中村は素早く右側に回つてドアを開けてくれた。

車内を見下ろすと、かなり地面に近い場所にシートがある。

「最初にお尻から」

中村が促した。

優子は言われたように、お尻からシートに潜りこむ。やがて、乗り込むと言つより、潜りこむ感じだ。

「さやつ！」

思った以上に実際の座面は低くて、尻餅でも着くようにストンツとシートに着座すると、思わず両脚が開いて浮き上がつた。彼女は慌ててスカートを抑えて足を降ろす。

うわっ、ヤバイ。いまパンツ見えた？ 見えたよね？

彼女は紅潮した顔で上目遣いに中村を見上げる。

「大丈夫？ 足、中に入れて」

中村は普通の笑顔でそう促す。いかにも慣れている感じだ。優子はゆつくりと両脚を車内に引き込んだ。

## 第75話（後書き）

何時もお読み頂き、有難う御座います。  
もつと暫くお話を続きますので、宜しくお願いいたします。

「カバン、後に置いて大丈夫だよ  
車が走り出すと、中村が言った。

「あ、大丈夫です」

優子は警戒が完全に取れず、持ち物を手放す気にはなれなかつた。  
「免許、何時取つたんですか？」

「俺は5月生まれだから、取つてからずいぶん経つよ。夏休みも友達と車で出かけたしね」

優子は話を聞きながら車内を見渡す。

タン色のスウェード張りのダッシュボードなんて、国産車ではありえない事だ。

「寒くない？ ヒーター強くする？」

「あ、大丈夫です」

国道の景色が低い視線で流れてゆく。  
何だか不思議な光景だつた。

だいたい、走る車の右側に乗つてゐる事自体、妙な気分だ。

「これ、先輩の車なんですか？」

「まあ、一応、オヤジと共用つて事になつてるけどね」

「何が共用だよ。お金なんて払つてないくせに。」

「そ、そなんですか……」

優子は彼に気付かれないように苦笑する。

甲州街道に出て車線が広くなると、微妙に加速Gを感じた。  
背中で甲高い独特の乾いた音が唸る。

少し行くと、前方は急に空になつた。高速のランプに上がつたのだ。

「えつ？ ど、何処に連れてくの？ 何処行くの？」

「あ、あの……どうして高速に乗るんですか？」

「お台場行こうよ。高速の方が速い」

優子は中村の横顔を見る。

合流車線で車は再び加速して、本線に入ると同時に前方の車を追い越した。

「ほ、本当にお台場？」

「ああ」

中村は口角を上げると「それとも、他に行きたい所ある？」

「い、いえ、別に……」

優子はシートバックに背中を着けて、フロントガラスに見える景色を眺めた。

ビルの中腹を潜り抜ける光景は、地上の風景とは違っていた。高い建物が近くに見えて、蒼い空は小さく見えた。

特に話す事なんて無いし、何を話せばいいのかも判らない。

「静かだね」

中村がチラリと視線をくぐる。

「高森とは何時から？」

「何時からって？」

「何時から付き合つてるの？」

「いや、だから付き合つてるとか、そんな感じとはちょっと違つていて……」

「じゃあ、付き合つてないの？」

なんでそこそこだわるんだよ。アンタには関係ないしつつの。

「いや、そういうわけでも……」

優子は困惑して笑みを零す。

東京タワーが左に見えたが、なんだか中村の陰になつてよく見れなかつた。

浜崎橋ジャンクションを抜けて海沿いに出ると、左前方に大きなアーチが見えた。レインボーブリッジだ。

優子はそれを見て、密かにホッと息をつく。

「ほり、ちゃんとお台場に向つてるだろ？」

「えつ？」

「心配そうな顔してるからや。せらわれたびつじょべ。みたいな  
「そ、そんな事……無いですか？」

芝浦ジャンクションを抜けて橋に入ると、中村は再び加速する。  
どんどん加速して車線変更すると、前方の車をいじぼつ抜きした。  
路面に描かれた文字が、読む間も無く車の下に滑り込んでゆく。  
優子は異常な加速度に思わずスピードメーターを覗き込むが、目  
盛りが細かくてよく見えない。

目を凝らすと、針が180キロを越えている。  
「ちょっと、ちょっとスピード出して過ぎないですか？」

「怖い？」

そういう問題じゃないだろー。

「いや、ちょっと怖い」

中村はアクセルを緩めた。

乾いた唸りを上げて、エンジンブレーキが後ろから身体を引っ張  
る。

「わりこ、この時間にしては空いてたからつこ」

つい出すよつなスピードか？

優子はただ苦笑して見せた。

しかし、ついアクセルを踏めばあつと言つ間にそんなスピード領  
域に飛び込む車なのは事実だ。

直ぐに景色が開けてゲートが見える。

中村が僅かにハンドルを切ると、車はETCのゲートにノーズを  
向けた。

減速する車を何台か抜き去った。

ゲートがみるみる迫つて来る。

えつ？ あのゲートってそんなアクティブに開くの？ スタ  
ーウォーズの自動ドアみたいに瞬時で開くのか？

「あ、あの……あのゲートって、こんなスピードで通れるんですか  
？」

「まあ……」

中村はあまりも明るく笑つた。スピードが今以上に落ちる気配がない。

スピードメーターは50キロを指してゐる。

まあ……。つて何？ ていうか、みんな凄くスピード落としてるじゃん。こんなスピードでこの場所走つてる車なんて無いじゃん。

優子は中村の横顔と迫り来るゲートを交互に見た。ピピッと何かの音がした。

「ちよ、ちょっと？」 優子が声を出す。

ETCに感應したゲートが開き始める。が、あつと間に車の鼻先はその前方まで出ていた。

優子が想像していたよりは速い動きでゲートは上がつたが、どう考へても完全に開き切るタイミングではない。

優子は思わず首をすくめる。

首から上を頭ごと刈り取られる思いだつた。頭上でビュウッと音がした。

車高が低い為に、車のルーフはギリギリで開きかけのゲートの下を抜けれる。

「ほらつ、抜けられたる」

中村が声を上げて高らかに笑つた。

こ、こいつ頭おかしいのか？

優子は首をすくめたまま、彼の横顔を恐る恐る見た。背中の後ろで、再びエンジンが軽やかに唸つた。

フェリー乗り場の近くで車を止めて桟橋から海を眺めた。遠くに成田空港が見え、その先には川崎の工業地帯が怪しい光を発している。

微かに見える沢山のクレーンが西田の影になつて、まるで東京湾から上がってきた黒い怪獣のようだ。

「どう？ 海って気持ちよくない？」

ガードレールに寄りかかって、中村が笑う。

西田をふんだんに浴びる彼の顔は、確かに一枚目だった。

優子は桟橋の端まで行つて海面を覗き込む。

思つたほど汚くないんだ……

少しだけ海中が見えた。

彼女は視線のピントを移動させて、水面に映る自分の顔を見つめた。

波間に揺られてフニャフニャに歪んだ顔は、今の自分の心境を物語つてゐるような気がして、何だか親近感が湧いた。

中村が後から海面を覗く。

「何がいた？」

「うん……ヘタレな女が一人いた……」

中村は大きな声で笑つた。

「ホント、噂に聞いた通りだな。五十嵐優子は」

優子は顔を上げて中村を見る。

あたしの噂つて、いつたいどうなつてんの？ 謙虚じやないの？

「ど、どんな噂？ さつきは謙虚だつて……」

中村はやつと笑いを納めると

「ああ、謙虚でちょっと暗そうだけど、意外と強くて面白い」

な、なんか複雑な人格……

「そ、そんな複雑じゃないです、あたし」

中村はジャケットの内側からショートホープを取り出して咥えた。

「た、タバコ？」

「ダメ？」

「い、いえ……」

ていうか、ダメに決まってるじゃん。あたしがイイとかいつても日本国憲法でダメなんだよ。

中村は咥えたタバコにクラシックジッポーで火をつけると、慣れた素振りでフツと一息吸い込んでそれを吐き出した。

浜風に乗つて、白い煙は海の向こうへ消えてゆく。

浮かんだブイの上で休んでいたカモメが、景色のまま飛び立つのが見えた。

「誰だつて、複雑だよ」

「はあ？」

「人格なんて、みんな複雑だろ」

あ、ああ。人格の話が続いてたのね……

「そうかな……」

「ううう。俺だつて爽やかスポーツメンを氣取る反面、タバコも吸うし、ハンドル握ればスピードに魅了される」

やつぱ、スピード狂か……

「そ、そうだよね。いろんな面を持つてるのが普通よね」

「そうそう」

中村はタバコの煙をくゆらせながら笑う。

「でさ、今日の俺はちよつとナンパ」

「はあ？」

いや……あんた、会つた時から充分ナンパに見えるけど……

「帰り、どうか寄つてかない」

「はあ？」

優子はたちまち困惑して「ど、どこかつて？」

「俺ももう直ぐ卒業だしさ」

いや、それって答えになつてないって……

空が緋色に染まつて、夕陽が雲に隠れた。雲の淵がオレンジ色に輝く。

「ま、いいや。とりあえず車に戻る」

優子は車に近寄る。例によつて彼がドアを開けてくれた。

親切だと思ったが、もしかしてドアノブ周辺に傷を付けられたくないのかもしれない。

「あ、あの……」

優子は車に乗り込む前に「まさか、帰りはホテルとかつてコースは無いよね……」

中村の眉がピクリと動いて、笑顔を作る。

やつぱり……

「あたし、そんな氣無いから」

優子は少し後ずさりすると「あたしには、そんな軽い人格はないから

「でも、まだなんだろう?」

「はあ?」

「初めては高森と。なんて思つてる?」

「べ、別にそんな……」

「だけど、アイツのアプローチも坦々でんじやないの?」

優子の胸に何かが突き刺さつた。

「そ、そんな事……だつて、ちゃんと付き合つてないし」

中村は侮蔑<sup>ぶべつ</sup>な笑いを浮かべた。

「付き合つとか、付き合わないとか、そんなの気にしてたらキリ無いじゃん

「どうか、この人はこういう人なんだ。最初に感じた僅かに不審な雰囲気はコレだつたんだ。」

「そんな事、あんなに関係ないし」

優子は踵を返して歩き出した。

「おー、どうして帰るんだよ。駅までけっこつまみだ。やりかも  
め超混んでるぞ！」

中村の声に、彼女は振り返らなかつた。

容赦の無い夕暮れの海風は、優子の背中を冷たく叩いていた。

## 第77話（後書き）

第77話をお読み頂き有難う御座います。

春企画：放課後のプリズム【完結済み】

まだ読んでないかたは急げ！　いや、急がなくて大丈夫です……

おすすめ作品

【時速メロスの速さ】<http://ncode.syosetu.com/n7892d/>

【空における】<http://ncode.syosetu.com/n7953d/>

【あやきこの空】<http://ncode.syosetu.com/n7692d/>

他にも沢山の作品が人気を集めて連載中ですーー！  
是非、ご覧下さい。

優子は見知らぬ景色の中をひたすら歩いていた。

「ゆりかもめの駅つて何処……？」

遠くにビルが見えるが、まだ大分ありそうだ。モノレールの軌道は見えるのに、その駅が判らない。

視線の先にフジテレビのビルも見えるが、それは尚遠い。というより、広大な暮色の土地に巡る高架線と高層ビルが、距離感を消していた。

「ずいぶん歩いた気がするのに、何だか景色が変わらない。

優子は街路灯の照らす片隅で、携帯電話を取り出すとアドレスを流して観覧した。

篠山の名前で止まる。

「あいつ、何か乗り物持ってるのかな。お抱え運転手とかいないのかしら？」

咳きながら優子は、ダメ元で篠山の携帯にメールを出す。着信を確認しないまま、携帯をカバンにしまった。

車通りは思った以上に少ない。

ここが東京だなんて一瞬思えなくなつて、時折周囲を見渡した。太陽はもう見えなかつたが、西の空には薄つすらと明るさが残つている。

高架の下は真っ暗だったが、街路灯が多いので闇に包まれる感覚はない。

ただ、東京湾はもう暗幕に包まれて何も見えなかつた。桟橋の街灯と対岸の明かりが微かに浮かんでいた。

優子は何だか疲れて、自販機の明かりの前に屈みこんだ。カバンを胸に抱える。

何だか動けなかつた。体力よりも、気力が無い……

高森、どうしてるかな……もう病院はご飯たべたろうな……

一人部屋だから、やつぱりご飯は一人なんだね。

何だか無性に恋しさがまして、うずくまるように膝を抱えた。

すると、交差した通りの向こうから明かりが近づいて来て、反対

側の車線に停まつた。

優子はふと顔を上げて、それを見つめる。

一瞬篠山かと思った。が、違う。

中村の車だつた。

水銀灯の明かりをギラギラと反射した黒いボディーが、車道に止まつていた。

中村が降りてきて、軽やかに大股で道路を渡つてくる。

「ここにいたんだ。探したよ」

優子は立ち上がらなかつた。

「行こう」

「いいよ」

「どうして？ 送つてくれよ」

「いい……」

「何処にも寄らないつて放つておいて……」

優子は遠くの暗闇を見つめた。

「そんな事言わないで、帰ろう」

中村が優子の腕を掴むと、彼女はそれを振り払う。

「高森だつて、真意なんて判らないんだぜ。アイツがお前にじつて近づいたか……」

優子はハッと彼を見上げた。

「どういう意味？」

「アイツだつて、せつせとやりたいと思つてゐつて事だ」

「高森はそんな奴じやない」

「じゃあ、どんな奴だよ。お前は高森をどれだけ知つてゐる？」

優子は息を荒くして中村を見上げた。

「アンタよりは知つてゐるわ

「勝手にしろ！」

母校に一端立ち去らへりした

優子は半ばホツと息をつく……が、少し離れた所で中村は再び優子に駆け寄るとムリヤリ腕を掴んで立ち上がらせた。

痛いが何を放してか。」

お前、どうして神経してんだ？ 僕が説いてやっているんだ

中村輝のもうひとつ顔が現れた瞬間だった。

いや、コレが本当の顔なのかもしれない。

「高森なんかと付き合つていい気になつてんじゃねえぞ」

優子は中村に後ろから羽交い絞めにされると、そのまま引き摺ら

アスファルトを削るようご、ローファーの踵が歩道にすれる音がした。

うござい力……あなたししゃ 叫れないよ……全然ダメだよ

その時暗闇に妻の轟音が轟いた。

何処か遠くからそれは聞こえていた。

暴走族の今時では、車は近づいてる

轟音は確が、一矢の矢である。

小さなライトの光軸が直線道路の先に見えた。

中村もあまりの音はその方角を見るが、優子を抱いた手には相変わらず

「放れ。あんまり喧嘩しないの野郎はめったにない」

優子の声が大きくなつたのは、轟音が直ぐそこまで近づいていた

か  
ら

ふと見た時  
光はすぐ近くまで来ていた

ハイケ……世にはじハイケの音た

その光は勢いよく歩道に乗り上げると、そのまま一人の方に向

て突っ込んでくる。

ヘッドライトの光の大きさに比べて、車体はデカかつた。

「な、なんだ！」

中村は優子を放して、後に飛んだ。

「痛つ」

いきなり解放された優子は、前に崩れるように膝を着く。その一人の間に割り込むようにバイクは急停車した。

メタルに光るV型エンジンの地を這うような振動は、周囲の夜気までも振るわせた。

「何だよ、呼び出しておいて知らない男といちゃついてんのか？」

優子は前かがみになつたまま、振り返った。

B3ボンバージャケットを着た男が、ヘルメットにゴーグル姿で彼女を見下ろしてゐる。

「し、篠山？」

篠山はゴーグルを外すと「チョー寒むかつたぜ」

そう言つて、両手をすり合わせながら笑つた。

「なんだお前？」後に下がつていた中村が彼に近づく。

「あんた、誰？」

篠山が振り返る。

中村はムツとした顔で

「お前、一年の転校生だな。高森と仲がいいとかつていう元ヤンだろ？」

彼は小さく笑うと「ウチの学校、バイクは禁止だぜ」

「へえ、フュラーリはいいんだ」

篠山も言い返す。

「チツ、シノテックの御曹子か……結局高森んとこまで吸収してさ

「悪いけど俺には関係なくてさ」

優子は立ち上ると

「そうだよ。子供に親の仕事は関係ないよ

「さんざん親のスネ齧つてゐるのに？」

中村が嘲るように笑う。

「アンタの車も、自分で買ったとは思えないけど?」

篠山がそう言つと、中村の顔が真っ赤になつた。

水銀灯の下でも、はつきりとそれがわかつた。

中村が息を荒げるのを堪えて威圧感むき出しじで詰め寄ると、篠山は相変わらず笑顔のまま

「わりいけど、俺、けつこいつ強いよ」

彼の軽く握つた拳をチラリと見て、中村の足はそこで止まつた。殴り慣れた拳は丸みをおびると、篠山の拳はまじしくそれだつた。

「元ヤクザの親父がいると強えよな」

吐き捨てるよつに中村は自分の車に向つて歩いて行くと、速やかに乗り込む。

路面に大胆なブラックマークを残したフェラーリ360モデナは、甲高く響き渡る音と共にあつと言つ間に見えなくなつた。

周囲の景色が、優子には明るく見えていた。

さつきまでの暗たんとした闇に燈る無機質な街路灯も、何だか湾岸に咲くイルミネーションに見える。

「篠山、バイク乗つてたんだ」

「まあ、今時はね」

篠山はそう言つて

「親の金だけどな」予備のヘルメットを優子に差し出します。

「これ、跨ぐの？」

「バイクだからな」

「パンツ見えちゃうじやん」

「夜だから平気だろ」

「お抱え運転手とか、いないの？」

「なんだよそれ。そんなのいないよ。テレビの見過ぎだつて」

篠山は笑つて優子を後へ促す。

「安西は？」

「はあ？」

「安西はこの事知ってる？」

「なんで今、安西なんだよ」

優子は一端跨つたバイクを降りた。

篠山は苦笑して「アイツも知ってるよ。言つてきたから」

篠山との事でまで、安西とイガミ合いたくは無い。それ以前に、今の優子には彼女とイガミ合つ氣力も根性もないのだ。

彼の返事を聞いて、優子はハーレーの小さなシートを再び跨いだ。「ていうか、このヘルメット……安全第一で書いて在るんだけど……

優子は手に掴んだ黄色いヘルメットを眺める。

「安全なんだろ」

…

篠山が振り返る。

「違うでしょ。これってドカヘルじゃん。工事現場のオヤジが被るやつじやん」

「そうなの？ どうりで安いと思つた」

「そう言つて笑う篠山の頭に優子は手を伸ばした。

「それと交換してよ」

「しようがないな……」

彼は渋々自分のジーツトヘルを優子の頭に被せると、自分がドカヘルを被つた。

「当たり前じやん。普通乙女にドカヘル被らせないよ」

優子はぶつぶつと呟くと「なんか寒そつ……」

篠山の腰を掴んだ。

「だから、寒いって。ていうか俺、その寒い中往復なんすけど」「いいじやん、たまにはさ」

優子は笑つて彼の背中を軽く一回叩いた。

古い革の匂いが叩いた数だけ彼女の鼻孔に届いた。

篠山は肩をすくめてバイクをスタートをせると、歩道から降りて反対側の車線にUターンした。

加速すると、冷たい風が頬を叩く。

優子はその冷たい風が、何だか楽しく感じた。

果てしない距離に見えた道路をあつと言う間に駆け抜けて、遠くに見えた水銀灯の淡い光が後へ飛んで行つた。

「寒いっ！」

「バイクは風と一帯になる乗り物だからな」

「このバイク、うるさすぎ！」

「ハーレーはこのうもんなんだよ」

交差点を曲がつて大通りを走ると、高層ビルの谷間を抜ける。優子は、まだ明かりの燈るビル群を見上げた。

「なんかさあ」

「ああ？ バイクの爆音で聞き取れない。」

「なんかさあ！」

「なんだよ」

「地面から眺めるビルって、いいよね」

「はあ？」

篠山は少しだけ振り向きながら、アクセルを開けた。

レイブリの連なる照明の下を駆け抜けると、寒さを忘れるほど清

々しくて優子は夜空に視線を巡らせる。

右手に東京タワーが煌々と聳えていた。

「篠山、東京タワーだよ」

「別に、珍しくないだろ」

「そういう問題じゃないの！」

優子は少し前かがみになると、「ゆつくり行こうな

「俺は安全運転だから大丈夫だよ」

優子は彼から身体を離すと「ウソばっか

周囲を走る車との仕切りは無い。

360度の有視界は、光と音を一体化させた。

星は見えないけれど、溢れる光の中で彼女は晴れやかに上空を見つめる。

聳える橋の支柱にゆつくりと点滅する航空警告灯が、幻想的に紅い光を放つて優子の瞳に滲んだ。

## 第80話（前書き）

【中間あらすじ】校内トップレベルのモテ男、高森忍からの突然のアプローチで、優子の学校生活は変化してゆく。

優等生安西ひとみとの確執と学校裏サイトへの介入……謎の転校生篠山祐一郎との奇妙な関係。

しかし、忍の父親の会社が篠山の父親の会社に吸収され関係は複雑に……

さらに追い討ちをかける忍の大怪我は、優子の心をズタズタに切り裂いた。

時は確實に流れていた。

泣いても笑つても、同じように時は刻まれて当たり前に過ぎてゆく。

空虚になつた心をすり抜ける風は、まるで野原をかける木枯らしのようだ、何時の間にか気がつくと時間は流れゆく。

優子は何時から空を見なくなつた。

見上げる虚空の景色に、何も感じなくなつた自分が嫌だつた。それでも家と学校の時間は何も変わりなく過ぎて、新しいやるべき事も迫つてくる。

そして食事になれば、やつぱりお腹は減る。

この日は国民的恒例行事と云つ事もあって、一田中学校の空氣は雑音に満ちていた。

その為か、放課後の閑散とした佇まいが、優子にはやたらと安堵をもたらす。

「ねえ、俺傘持つてるけど、五十嵐は？」

「は？ 傘？」

物理の実験レポートの束を掴んで、優子は隣で同じくレポートの束を抱えた舟越に振り返つた。

なんで傘なのよ。今日は晴れてたじやん。

「持つてないよ」

舟越は窓の外を見ていた。

優子もその視線に留ひ、今度は窓に視線を移した。

「うそ……」

外は真っ白な雪が横殴りに降つていた。

ほんのついつきまで青空が広がつて、西に大きく傾いた太陽の陽も注いでいた。

それなのに、何時の間にかほの暗い景色は吹雪いて真っ白に震ん

でいた。

「凄い雪……」

校舎の直ぐ外に植えられた赤松の枝が、片側だけみるみる白く色を変えてゆく。

「朝の天気で夕方は雪だつて言つてたよ」

舟越は優子を見て笑つた。

「最近天気予報見てなかつたよ……いつも晴れだつたじやん」

優子はとにかく仕事を済ませようと、理科実験室の先にある準備室へ入つた。

6時間目にあつた物理の授業のレポートを、クラス分集めて放課後の準備室へ運ぶ。

今日も、クラス委員の仕事として舟越と一緒にだ。

「あああ……なんか、外は最悪だね」

優子の呴く独り言に舟越は

「俺、傘持つてるよ」

「貸してくれんの？」

「えつ……いや、そうじやなくて

「じゃあ、ダメじやん」

優子はそう言いながら、理科実験室を出た。

教室にはもう誰も残つていなつた。

少し前にはまだ男女の喧騒がうごめいていた校舎も、急変した天候に急かされたようになんの姿は消えている。

階段ですれ違つたクラスメイトが、外の天気に大騒ぎしながら駆けて行つたのが最後だろう。

優子は手早くカバンを掴むと

「じゃあね、舟越」

そう言つて教室を出る。

「いや……あのさ……」

舟越は優子の後を追いかけた。

足早に階段を下りる優子に追いついた彼は  
「傘、一緒に入ってかない？」

「はあ？」

優子は、思わず立ち止まる。

しかし、再び足を前に出して「冗談でしょ」

「な、なんですか。いいじゃん、雪まみれよしさ」

雪まみれでいって。アンタとアイアイ傘なんて、想像できない。

優子は無言のまま足早に階段を下りると、昇降口へ急ぐ。  
ほの暗い昇降口の外はすっかり雪景色で、駐輪場の横に倒れた自転車は一回り大きくなっていた。

優子は溜息をつきながら靴を履き替える。

「なあ、入つていきなよ。別にいいじゃん」

優子は靴を履いて再び外を眺めると、息をついて舟越を振り返る。  
舟越は傘を手に微笑んでいる。

優子はさらに溜息が込み上ってきた。

「そんな事しても、何もないよ」

「別に、何も期待してないって」

仕方なく舟越と駅まで来て電車の乗った優子は、何時も降りる自分の駅を通り越した。

「あれ？ 降りないの？」

「う、うん。ちょっと用事」

優子は、相変わらず雪の振りそそぐ外の景色を見つめたまま言った。

「高森の病院？」

「うん。今日行ってみようって思つてたから」

「でも、今日は天気がさ……」

「いいの、決めてた事だから

「あつ……」

舟越が顔を上げる。

「何?」

「いや……なんでもないよ」

舟越が降りる駅は次に迫っていた。

「俺も付き合おうか?」彼は電車が止まる間際にそう言つた。

「いいよ。」「めん……ほつといて……」

優子は愛想笑を浮かべようと思つたが、出来なかつた。

「じゃあ、この傘もつて行つていいから

彼は優子の手首に無理やり黒い傘を引っ掛け、急いで電車を降りる。彼女はわざと舟越の姿を目で追つ事はしなかつた。

降り注ぐ雪が、何だか何処か知らない町に来たような錯覚を起させた。

もうひとつ先の駅を降りると忍が入院している病院がある。

駅を出ると、幸い雪は小降りになつていた。

路面に積もつた雪が、風に舞つて白い波に見えた。

優子はカバンの中を確認してから駅前の花屋で少量の花を買つと、傘をささずに病院までの道を歩き出した。

2月14日……冷たい路面を踏むその足取りは、今までに無いほど重く感じていた。

白い床と壁は寒々と続いていた。

優子は形成外科病棟の階段をゆっくり上がり上がつて行った。

エレベーターであつと言つ間にそこへ到達する事が怖かつた。

ナースステーションの横を通り過ぎてすぐの四人部屋。高森忍は

1週間前、一人部屋からそこへ移つたのだ。

一人部屋と違つてドアが開放された四人部屋は、入り易いと思つた。

しかし、優子は病室の手前で立ち止まつたまま、そこから先に行けない。

看護師の足音がパタパタと横を通り過ぎてゆく。  
息を呑んで足を踏み出した。

頭だけを病室に入れて中を覗き込む。四人部屋といつても使つて

いるベッドは一一つらしいのは先週来た時と変わらなかつた。

手前の一つは空きベッドになつたままで、その奥に年配の男性が見えた。

彼女は以前にも一度ここまで足を運んでいる。

しかし、その時はこの場所で引き返しているのだ。

奥のベッドに身体を起こしていいた男が、優子の気配に気付いて軽い会釈をくれたので、彼女も慌てて頭を下げた。

問題は、もうひとつベッドだ。周囲をカーテンが囲んでいた。

優子はゆっくりと病室に入ると、閉ざされたベッドへ近づいた。

カーテン越しにベッドサイドに立つ。

「た……高森……」

少しの沈黙があつた。

「優子か？」

近づく気配を感じていたのか、彼は静かに応える。

「うん……」

「来なくていいって伝えたけど、聞いてない？」

「冷たく刺々しい声だつた。

優子は忍の容態の経過を舞衣に訊いた時、当分病院には来ないで欲しいと言つ彼の言葉も一緒に聞いていた。

だから、以前の病室から数えて病院にも病室の前にも何度も来たが、結局途中で引き返しているので、忍と言葉を交わすのは彼が入院してから初めてになる。

「聞いてたけど……来ちゃつたよ。気になつて……」「

「気にななくていいよ。」

忍はサラリと言つた。

「気にするよ……」

優子は小さい声で呟くように言つた。

「ねえ、カーテン開けてくれない？」

出来るだけ笑顔の声を無理に発する。

再び沈黙があつた。

「……それは出来ない

「ど、どうして？」

「どうしても……」

優子はもう何を話していいのか判らなくなつっていた。

「お花買つてきたよ。外は雪でさ。超寒かつたよ

「じゃあ、早く帰つたほうがいい」

「……そ、そういうつもりじゃ……」

優子は一瞬俯いた顔をあげると、ベッドサイドの棚に置かれた花瓶を掴んで

「お花替えてくるね」

花瓶に水を入れながら、優子は小さな溜息をついた。

やつぱり来ない方がよかつたのかな……ダメダメ、せつかく

来たんだからちゃんと対面しなくちゃ。

優子は再び病室に入ると、花を生けた花瓶をベッドサイドの棚に置いた。

自分のカバンの中に手を入れて、リボンのかかった包みに触れる。と、とりあえず渡さなきや……

「優子……」

「な、なに？」

「俺の顔が見たいか？」

「う、うん。見たい……かな」

「ほんとうに？」

「う、うん。もちろん……」

忍は勢いをつけてカーテンを開けた。

上から注ぐ蛍光灯の明かりに、彼の姿はぼっかりと、しかしあつあつと浮かんでいた。

しかし優子は彼の顔を見て、思わず後にたじろいでしまう。

し、しまった……反射的に驚いてしまった……そんなつもりじゃないのに……

忍は、顔の包帯を半分以上はほどいていた。

ほどいた長い包帯が、彼の身体を伝うように膝元へ零れている。左の眉も、睫毛も無かつた……もちろん左半分は髪の毛も無い。そして、頬が赤い牛肉のように光沢を発していた。

怖くはなかつた……しかし、優子は思わず両手を口に当てる、後へ下がつてしまつたのだ。

持つっていたスクールバッグが落ちて床に音を立てた。

想像以上の怪我の酷さに驚いたのだ。

忍は直ぐにカーテンを閉めると吐き捨てるよつこ

「帰つてくれ……」

「「「」めん……ちょっと驚いただけだよ。べつに……」

「別に、なんだ？」

優子は言葉を呑み込んだ。

「こんなんじゃ、チヨン食べられないじゃん……」

「別に怖くないって？ 気持ち悪くないって、言いたいんだろ？」

カーテン越しの向こう側が、彼女には遠く感じた。

「そ、そんな……そんな事思つてないよ」

「帰れっ！」

「高森……」

優子はカーテンに手を触れた。

「帰れ！ もう来るなっ！」

彼女はビクリと身体を震わせて、カーテンから手を放した。

忍が怒鳴ったのを初めて聞いた気がした。

怖かったわけじゃない……なのに、優子の瞳からは何故か涙が零れ落ちた。

忍に気付かれないように、優子はカーテンから少し下がつて口を塞いだ。

落ちたカバンをそつと拾い上げる。

白い床に、沈黙した零が滴り落ちた。

「もう、来ない方がいいよ」

忍は何時もの落ち着いた声で言った。

それが逆に優子には決定的な言葉に聞こえて、気づいた時には階段を駆け下りていた。

大きなロビーを駆け抜け正面玄関からイッキに外へ出ると、駐輪場の庇の中に入つて立ち止る。

外は再び降り出した雪で、真っ白に染まっていた。

陽射しのない夕暮れは夜のように暗く、雪山のように全ての景色は荒涼として蔭つている。

音もなく降り注ぐ雪は、雪女の呪いに呑み込まれたかのように全てを覆い尽くして沈黙させた。

あたしの心みたいだ……

優子は透明なアクリルの屋根越しに空を見上げる。

しかし、大半は積もった雪で屋根は覆われて、まるで雪崩に埋もれた遭難者のような気分だつた。

やつぱり来るんじやなかつた……

カバンの開いた口から手をいれて、リボンのかかつたチョコレートを掴む。

優子は大きな溜息と共に、手前の自転車に寄りかかる。か……何だか安定が悪かつたのか、その自転車は彼女の体重に負けて奥側に向つて倒れた。

うわっ、なんだ、なんだ？ ナニナニ、何で？

優子は慌てて自転車を押さえようとするが間に合わなかつた。既に体重は後方にかかりきつて、持ち直す事はできない。こんな暗たんとした気分の中で、俊敏な行動が取れるわけも無い。自転車は奥の自転車をなぎ倒すように倒れた。

すると、その隣の自転車も倒れる。

ぎえっ、ヤバイ！ ダメダメ、とまつてっ！

自転車はみるみる将棋倒しに隣の自転車に折り重なつた。ドミノ崩しのよう連鎖の波を広げると、10数メートルある駐輪場に並んだ自転車は見事なくらい全て倒れた。

ありえない……なんでだよ……もつ……

優子は最初に倒れた自転車の上にひっくり返つたまま、横たわる車輪の群れを眺めていた。

はあ……ついてない。まるで昔のあたしだ……ていうか、昔の自分で何？昔も今も、あたしはあたじじやん……

優子は渋々立ち上がりて一番手前の自転車に手をかけた。

痛つ……脚いたい……

自転車にぶつけた脚が痛んだ。

改めて車輪の群れを見つめる。

こんなにイッパイ直せないよ……ていうか、ひとつはあたしの責任だけど残りはこの自転車の責任よね。ちゃんとスタンドが口ツクして無かつたのが悪いんだよ。

優子はとりあえずひとつ目の自転車だけ引き起こした。

このまま帰ろうか……超面倒じゃん。普通こんなにイッパイ一気に倒れるか？ありえないよ。ぜつたいあたしのせいじゃない

「大丈夫かい？」

突然直ぐ横で声がした。

優子が慌てて振り返ると、男が一人、隣の自転車に手をかけた。雪が足音と気配を消したらしい。直ぐ横に来るまで全然気付かなかつた。

「あつ……はい……」

優子は苦笑いを浮かべて男を見た。

高校生とかではない。

大学生……いや、そうとは限らないが二十歳前後くらいだろう。

何だか判らないが、そんな大人の香がほんのりと漂っていた。

男は笑顔のまま次々に手際よく自転車を起こしてゆく。そんな彼の姿を見た優子も、慌てて他の自転車を起こし始めた。

「コレで最後だ」

男はそう言つて、最後尾で倒れていた自転車を引き起しす。

「しかし、派手に倒したね」

「す、すいません……」

優子は小さく縮こまつて首をうつな垂れる。

「でも、偉いよ。普通逃げるぜ。こんなに倒しちゃつたらさ

逃げようか考えてたらあんたが現れたんだよ……

「いえ……はあ……」

彼女の方は言葉が出ない。

「しかし、よく降るなあ。今日は」

男は駐輪場の底から空を見上げると

「キミ、入院中の彼を見舞いに来た娘だろ？」

優子はハッと顔を上げて男を見つめる。

「お医者さん、ですか？」

彼は声を出して笑つた。何だかずいぶんあつけらかんと笑う男だと、優子は思つた。

「いや、違うよ。僕は大学のボランティアサークルで、ちょくちょくこの病院へ来るんだ」

「ボランティア？ ですか」

「ああ。身障者の子供や、小児ガンの子供に紙芝居や人形劇を見せたり、話し相手になつてあげたり」

こんな若いのに、そんな人いるんだ……

「キミ、先週も見かけたからさ……もつとも、先週は入り口で帰つてたよね」

優子はどう応えていいのか判らずに、降り注ぐ雪を見つめた。

「僕は、杉原一真。よろしく」

宜しくつて言われたつて……何をよろしくなの？

杉原は笑つて優子を見ると「君の名前は？」

「あ、あたしは、五十嵐優子です」

「あの彼は、顔中包帯巻いてたね」

「見た事あるんですか？」

「ああ、何度かね。治療室でもチラリと姿を見たけど、酷い火傷だね」

「ええ……火事場で子供を助けたんです。でも、自分は焼け落ちた残骸の下敷きになつて……」

優子は俯いて、白い地面についた自分の足跡を眺めた。

「そうか……偉いんだな」

杉原は優しく微笑んだ。

「あの怪我……治るんでしょうか……」

優子は思わず第三者である杉原という男に助言を求める。

「整形手術が必要かもね。それに、火傷の治療はかなり辛いって聞いたことあるな」

「辛い……んですか？」

「焼けた皮膚をたわしみたいな物で擦つて落とすんだ。新鮮な皮膚が再生し易いようにね」

「たわしで擦る？ 患部を？」

「酷い激痛に耐えなきゃ いけない……」

彼はそう言つてから、優子を見下ろして

「でも、彼なら大丈夫だろうね。勇敢なんだろう？」

「だといいんだけど……」

その時、離れた場所から声が聞こえた。

「一真、行くぞ。どうしたんだ？」

大学サークルとやらの仲間らしき連中が、駐車場の出口付近で車を停めていた。

杉原は振り返つて「ああ、今行く」

優子の肩をポンと叩いた。

「また会うかもしれないね。じゃあ」

彼はそう言つて雪の中を軽快に走ると、駐車場の出口口に止まつていたミニバンに乗り込んだ。

優子は舟越に借りた傘を玄関の傘立てに置きっぱなしにしていた

事を思ひ出して、慌てて駆け出した。

優子が帰宅すると、弟の直樹も既に帰っていた。台所からはもう直ぐ出来上がる夕飯の匂いがしている。

彼女は一階へ上ると、直樹の部屋のドアを叩く。

優子が彼の部屋に入ると、直樹はチョコレートを口にしていた。舞衣に貰った物だろう。

「あんた、夕ご飯前に食べて大丈夫なの？」

「だ、大丈夫だよ。全部いっぺんには食わないから」

優子は彼に近寄ると大きな包みを渡した。

「何だよ……？」直樹が訝しげに訊く。

彼にも包みの中身は何かが想像はついたが、どう考へても弟用にしては大きさがおかしかった。

「あんたにあげるよ」

優子は座っている直樹の足元に包みを置くと、何も言わずに部屋を出た。

## 第82話（後書き）

次回 第82・5話

久しぶりに一葉の言葉で綴るお話です。

第82・5話（前書き）

今回は、全て一葉の心の声です。  
普段見えない、友達の視線で優子の姿を描いています。

最近優子の様子がおかしい。

確かにちょっと変わった娘だし、周りの知らない誰かから見たら、前からどこかボーッとして掴みどころが無いように感じるようだけど……

でもあたしには判る。

ボケツとしているようでも、あたしのさう氣ないボケにツツコミを入れる隙の無さは彼女の持ち味だ。

でもやっぱり最近はどこか上の空で、何だか笑顔もまろまろと淋しく見える。

ふと気付いて見ると、ゴミ箱や掃除用ロッカーを無心で眺めている。

無理も無い……

学校へ毎日来る生活は、それでなくとも意外とパワーが必要なのに、それにくわえて苦悩や苛立ちを心の隅に隠し持つて生活しているのだ。

あたしもそんな時期があつたから判る。

ただ、あたしの場合は全部自分自身の事だったから、自分の中で少しずつ消化して消してゆけばよかつた。

でも彼女は、相手があつての事だ。

あたしの次に日常を共にしていた高森忍が、あんなことになってしまったのだから。

しかたがない……

きっと彼女自身、嫌々付き合っているフリをしているうちに、何

時間にか彼をかけがいのないヒトと考えるようになったんだ。

前に訊いた時はまだ何もなって言ってたけど、もしかしたらも

うキスぐらいはしてるかもしない。

でも、もうしそうならちょっと嬉しい。

だって優子はどこか冷めていて、男子を男として見ようとはしないところがあつたから。

最初はあたしも高森の事ちょっとといつて思つてたけど、やつぱりあたしが見るのは彼の華麗な容姿だけで……

でも優子はたぶん違うと思つ。

一年になつたばかりの頃の席は、優子の斜め後ろに高森がいた。なのに彼女つたら全く高森に興味を示さないし、ちつとも話しきしない。

席の遠かつた桜井美登里なんて、宝の持ち腐れだつて密かにぼやいてた。

でもまさか、高森が斜め前にいる優子を何時も見ていたなんてホント信じらんない……

奴は彼女の何処に惚れたんだろう。

本当に惚れてるのか、悪戯の一環なのか最初は疑つてたけど、どうも高森自身も本気らしい。

いや……冗談のつもりが本気になつたのかな？

あまり大勢と関わらない優子は周囲から誤解されてる部分も多いけれど、本当は無口でもノリの悪い女でもなくて、ごく普通の樂しくてカワイイ女の子だから。

きつと高森もそれに気付いたのかもね。

だから凄く気になるんだ。

普段あまり自分の事は言わない優子だけに、笑つていても虹彩の奥にはどこか悲しげな光が見え隠れしてるの……

でも、あたしから何かを言つたりはしないよ。

彼女はそう言つ的好きじやないつて知つてるから。

もしかして、最近何だか心を交わしちゃつたっぽい安西ひとみも、優子のそんな部分に気をきかせてるかもね。

彼女はもともと頭イイから、そう言つて感じ取るのも早いかも。

ほら、今も知らないフリして教室の対角距離から少しの間優子を見ていた。

昔はやたらキツイ女だと思つてたけど、最近ははちゅうぴり優しげな眼差しを見かける。

そういえば、安西は最近クラスで話す友達増えたかも。  
それともやっぱり、同じ男を好きになつたりすると気持ちが共鳴しちゃうのかな？

あたしが安西と共鳴しないのは、きっと篠山を本氣で好きだったわけじゃないんだ。

なんだかこうして考へてると、あたしつつもしかして本当の恋をしてないのかなあ。

何だか一人が羨ましいよ。

でも、本氣で恋するつて事は、本氣で傷つく覚悟がないとね……

あたしにはそんな覚悟はないし。

なんだかんだ言つても、優子も安西もエライよ。

高森の容態もよく判らないし、今はただ友達として優子を見守るしかないけれど、何かあれば……あたしが応援できる時が巡つて来たら……きっと背中を押すよ。

だつて何時も傍にいて何もしてあげられないなんて、やっぱ辛いじゃん。

だからつて何時も気遣つフリするのも、ちょっと違つと思つた。  
今はできるだけ何時も普通にバカ話しかけて、気分を紛らわす事しかできないけど……

本当は里香のまづがバカ話しさは得意なんだけど、あの娘はマジ彼に夢中でそれどころじゃないしね。

でもそんなノロケ話しさを聞くと、それはそれで優子も気が紛れる

のかもしれないから、里香も貢献してゐるのかしら。

こんな事考へてゐあたしも、ちよつとおかしいのかな……

教室を眺めると、何時ものつゝりだ午後の陽射しに溶け入るような雑踏が、何時もと変わらずに響き渡つてゐる。

その片隅から近づいて、彼女はゆるゆると笑つて時々自分から声をかけてくる。

「一葉、どうしたの？ ボーッとしてさ」

ほら、一見は普通なんだけどさ。

……ていうか、あんたに言われたくなつよ。優子。

第82・5話（後書き）

いつも読んでいただき有難う御座います。  
次回から本編に戻ります。

一月の末、優子は何時に無くソワソワした。

忍が1回目の形成手術をする事が決まつたらしいのだ。

彼とは一度会つたきり優子は病院へ行かなくなつた為、手術の事は舞衣に聞いた。

最近は忍についての事は、直樹を経由せず舞衣が直接優子の携帯に電話をしてくれる。

ただそれは、直樹が直接伝えて欲しいと舞衣に言ったからだ。  
少しでも人伝でなく、出来るだけ忍に近い身内から伝えてあげたいと思つたからだ。

優子は忍が形成手術を受けて少しでも傷が癒えたなら、再び会えると信じていた。

優しい笑みで自分を見つめ、またのらりくらりとした感情を表に出さないような曖昧なアプローチで自分を誘つてくれる信じていた。

あのミニアムレアのような彼のアプローチは、今思えば過剰なプレッシャーもなく心地よくさえ思えた。  
経過が順調なら、来週の予定らしい。

優子は学校へ行つてもどこかソワソワして落ち着かず、何か違う事で気を紛らわせようとしたが、それすらもままならない。

里香の彼氏の話をして聞いてみたり、一葉のたあいもない流行の洋服や人気アイドルの話をして聞いてみたりしても、やっぱりどこか上の空で頭の中には留まらない。

そんな日々を過ごすうちに、あつと言ひ聞こえの日は訪れた。

その夜、舞衣がわざわざ優子の家を訪れる。

忍の怪我の原因について未だに責任を感じている彼女が僅かでも

出来る事は、彼と優子の橋渡しなのだ。

直樹の部屋で床に腰掛けながら、三人でコーヒーを飲む。

「とりあえず手術は成功だつて言つてました」

「そう……よかつた」

舞衣の言葉に優子は安堵の息をつくが……

「でも……少なくともあと一回は手術が必要だつて」

「そりなんだ……」

「でもさ、逆に言えば手術を重ねればちゃんと治るつて事でしょ？」

二人の重い表情に、直樹が言葉を挟む。

「うん……」

優子も舞衣もなんとなくおざなりに頷く。

「次は経過を見てからだつて」

「そうだろうね」

優子の不安は数知れなかつた。

このまま3学期を全て休んだら、進級でないんじゃ……でも、成績がいいから大丈夫なのかな……

いつたい彼の姿が元通りになつて学校に復帰するのは何時の事なのだろうか……

優子はそんな予想もつかない先が、不安で仕方がない。

「気長に待つしかなんだろうね」

それでも優子は舞衣に氣を使って、明るく言つた。

彼女だつて責任を感じて不安でイッパイのはずだ。

とにかく、全快する事に希望を膨らませるしかないのだと思った。

「そう言えば、今日佐助の散歩に行つたら、垣根の隙間から出て来た猫が佐助の顔にいきなり飛びついてさ」

直樹が、明るい話題を提供しようと切り出す。

「佐助の顔に猫が？ それヤバイよ」

優子が言つた。

佐助は猫が苦手だ。

何故かは判らないが、猫より犬の方が強いという基本概念を知ら

ないみたいで、昔からそうなのだ。

だから、猫を見ると動作が止まって、それが通り過ぎるのを待つか、気付かないフリをしてやり過はります。

「ああ、だから佐助は急に走り出したの？」

舞衣が笑つた。一緒にその場にいたのだ。

佐助の顔に飛びついた猫は再びジャンプして、直ぐ横の家のガレージの脇を通つて姿を消した。

ビックリして気が動転した佐助は、脇田もふらずに一田散に走り出した。

「佐助はね、たぶん犬の容かたちをした別の生き物なのよ」

優子はそれが真実であるかのように、背筋を伸ばして言つ。

「別の生き物つて何だよ？」

「そ、そんなの知らない」

直樹が呆れ顔で肩をすくめる。

舞衣は、二人の姉弟の会話を聞いて、再び声を出して笑つた。

「今日は有難うね」

玄関先で、優子は舞衣に言つた。

「機嫌のいい時を見て、優子さんの事言つてみます」

「ううん、いいよ。あたしの事は言わなくて……」

優子は今の忍の心に触れる事が怖かつた。

それが間接的とはいえ、複雑な彼の心情の中に入り込む勇氣は無い。

「きっと、忍くんも氣を落としてるから……本当は優子さんと話したいんだと思う……」

「うん……ありがとう」

優子は舞衣に笑顔を見せると

「別に、あたしも辞めたわけじゃないから。チャンスを覗のうよ」といって、

「あたし何言つてんだろ……」

「けれど、あたし何言つてんだろ……」

しが彼にラブ・ラブみたいじゃん……

「判りました」

舞衣が小さく微笑む。

月影に照らされた雲がゆっくりと動いていた。

何だか久しぶりに見上げた夜空は澄んでいて、鮮やかに浮かんだ

月面の模様が見える。

「あんた、ちゃんと送つてきなよ」

優子は直樹に向つていた。

「今更大丈夫だつて」

直樹はそう言つて一シトキヤップを頭に被る。

優子が「じゃあね」と手を振ると、舞衣も笑顔で手を振つて庭を  
出て行つた。

黒く艶やかな髪が揺れていた。

二人の姿を目で追いながら、優子は玄関に入る。

庭先にいる佐助も、舞衣と直樹の姿をゆらゆらとシッポを振つて  
見送つていた。

自室へ戻ると、ベッドに腰掛けた彼女は考えた。

うつかり出たさつきの言葉……

何時まにか忍に追いかけられる日常が当たり前になつて、突然  
それを失つてしまつた。

そしてあの日々はもう戻らない……

そう思つと、彼に追いかけられたあの頃が懐かしくて遠い日々の  
幻想のように脳裏に蘇える。

もう戻らないのだろうか……あの曖昧で複雑で、オレンジの皮をむ  
いた時に香るような甘酸っぱい思いは、もう出来ないのだろうか……

そんな事ない……忍はぜつた元にもどるよ。

あまり考えないようにしていた事を改めて思考すると、暗たんと

した未来と果敢なげな思い出だけが頭を過る。

しゃえぱよかつたのかなあ……

何故か胸の奥が、苦しくなつた。

まるで肺が萎んでゆく気がした。

優子は忍の事を考えて、初めて口の奥が熱くなつた。

自分でも何だか判らないうちに、ほろりと雫が零れ落ちて、慌て

て頬を拭つた。

久しぶりに雨が降った。

天気予報では雪に変わりそうだと言っていたが、結局雨のままだつた。

凍えそうな大氣から零れ落ちる雨は、氷のように透き通つて全てを冷たく呑み込む。

次の日、陽が暮れる頃、優子は久しぶりに佐助を連れて散歩に出た。

前日の雨に濡れて部活をした為か、直樹が熱を出して寝込んでいる為だ。

雨上がりの冷えた路面を、佐助は力強く蹴つて爪音を響かせる。相変わらずよく走るよ。犬が寒さに強いってのはホントだね。優子はダウンジャケットに身を包んで犬を追いかけた。

直樹とはどのコースを歩くのか知らないが、優子と佐助は以前と変わらないコースを通つた。

佐助はリードを持った相手で、自分が歩くコースを見分けて自然にそちらへ行くらしい。

前日から降り続いた雨が上がつたばかりの空はまだ雲がひしめいて、その隙間から微かに月のシルエットが覗いていた。

ぼんやりと浮かぶ銀色の月の上を、薄雲が流れていた。

ぐるりと路地を廻ると、以前高森の住んでいた家の前を通る。

大きな敷地は暗闇に紛れてひつそりと潜るように沈黙していた。

街路灯の明かりを浴びた檜の大きな門扉は、何だかずいぶん古くなつた気がした。

こんなにボロかつた？ 家も、主を失つと急に古臭くなるのかな……

優子は立ち止まって門柱を見上げた。

佐助が先へ行こうとするので、彼女も再び歩き出す。

先にある公園の中で、優子はポケットから犬用ジャーキーを数本取り出して佐助に食べさせた。

一本を3等分して少しずつ『』える。

佐助は指先で摘んだジャーキーを咥える時も、ゼッタイに人の指を噛んだりしない。

正確に言えば、あま噛みして探りながら巧みにジャーキーだけを口にするのだ。

だから、どんな持ち方でおやつを『』えても、人を傷つける事はない。

何時だつたか、優子がまだ小さい頃、佐助は彼女が指で摘んで差し出したビスケットを咥える時、誤つて彼女の指ごと齧つてしまつた。

小学生だった優子は痛みと驚きで泣き出した。

佐助は慌てて口を離したが、優子の泣き声は止まらなかつた。血が出るほど噛んだわけではなかつたが、鋭い犬歯が当たつた恐怖と確かな痛みでとにかく驚いたのだ。

襲われると思ったかもしない。

佐助は困つたような、申し訳ないような表情で尾をダラリとさせて、彼女の膝の周りをウロウロした。

優子の泣き声に、何時ものん気な母親も足早に縁側へ來た。

「どうしたの？」 優子

「佐助が噛んだあ

鼻水を流して優子は泣き叫んだ。

母親は優子が怪我をしていないか確認すると

「佐助は間違つただけだよ。優子に噛み付くはずないじゃない

彼女の足元にビスケットが落ちていたのを見て、母親はだいたいの状況は予想がついた。

自分も時々間違つてガブリとやられる。

母親は何も言わないから、佐助は自分の失態に気付かなかつたの

だ。

しかし、それ以来佐助は人の指と食べ物をしっかりと探しながら噛むようになった。

もともと仔犬をあま噛みで運ぶ犬は、かなりの微調整ができる。人差し指と中指の間に隠すように挟み込んだジャーキーも、佐助は巧みに舌先なども駆使しながら指を傷つける事無く上手に掠め取つてゆく。

優子はジャーキーを「え終わると、最近ホームセンターのペット用品売り場で見つけたペット用スポーツドリンクを取り出して、佐助に与えた。

耳をペタリと寝かせて飲む。

もちろん走つたから喉が渴いているのだろうが、彼が耳を寝せるのは美味しい物にありついた証拠だ。

そんなに美味しいの？ これ。

優子は佐助の頭をグルグルと撫でる。耳がピクピクと動いた。久しぶりの一縁の散歩だから、今日は大サービスだ。

「そろそろ行こうか」

優子の声で、佐助は再び目的を思い出したかのように歩き出す。彼女は一度だけ振り返つて、公園の植木の向こうに見える闇を見つめた。

雨に濡れた雑草の露が、街灯に照らされて微かに白い光を放つていた。

「ああ、疲れたあ」

散歩を終えた優子は、佐助に餌と水を「え」リビングへ戻つた。

「どうしたの、優子。その格好……」

「はあ？」

母親がマジマジと見るので、彼女はその視線を辿るよつて自分を眺める。

「なんだ、最近はそんな模様が流行ってるのか？」

父親が笑つてお茶を啜つた。

優子が履いていたグレーのジャージと上に着た白いダウンには、右半分の肩から足首にかけて、見事なほど綺麗に点線が描かれている。

まるで、ここで切つてください。という感じの切り取り線のようだ。

うわっ、なにコレ？

「佐助にやられたわね」

母親は、以前雨上がりの散歩に出かけて同じ模様を付けられて帰つてきた直樹を知つていた。

「こうなるつて知つてたら、行く前に行つてよ」

ふと髪を触ると、小さな土の塊が指に触れた。

全然気付かなかつたが、泥跳ねは髪の毛まで飛んでいた。

犬の跳ね上げた雨上がりの細かい泥水を、後ろを行く優子は全部受けっていたのだ。

彼女は愕然として息をつくと

「お母さん、タオル！」

急いでダウンの汚れを濡れタオルで拭き始めた。

忍の手術から5日が経った頃、優子は再び彼の入院している病院の前にいた。

大きな白い建物に、蒼空そらの光が映りこんでいた。

彼女は正面玄関の前に佇んで、窓に映る雲を見上げる。

「あれ？ キミ……」

声がして振り返る。

この前会った大学生、杉原一真が立っていた。

「彼、退院したんじゃないの？」

「えっ？」

優子は声にならない声を上げた。

「いや……一昨日来た時、彼の病室の前を通りたけど……彼の姿は無かつたから」

優子は杉原の顔をポカんと見上げていた。

「いや……散歩か検査にでも出てたのかな？」

杉原も自分の言った事に自信が持てなくなつて、思わず頭をかく。最近は病室の入り口に名前を出さない事も多い。

「そうですか……」

優子は何と返していいのか判らずに、困惑した笑みを見せる。

「行つて見て来れば？」

「えっ、ええ……」

「この人、一緒に行つてくれないかなあ……」ていうか、それは無いよね……全然関係ない人なんだから。でも、頼んだら行つてくれそう。

しかし、仲間が彼を呼んでいる。

「あ、じゃあ、頑張つて」  
爽やかな大人の笑顔だった。

何を頑張るんだよ……

優子は大きなバンに駆け寄る杉原を見送ったあと、ひとしぐ息をついて玄関の自動ドアをくぐった。

「いなくなつた？」

優子は思わず声を上げた。

病室にいない忍の事を看護師に聞くと、最初は誤魔化そうとしていたが、若い看護師が渋々口を開いたのだ。

「何処に？」

「それが判れば苦労しないんです……」

新米らしい若い看護師はそう言つて困惑すると、虚ろに床を眺めた。

「それもそうだよね。

優子は一階の玄関口まで出て、携帯で舞衣に連絡してみる。

「ああ……とうとうバレちゃつたんだ……」

舞衣の困惑している顔が、優子には思い描く事ができた。

「知つてたの？」

「うん……でも、病院から報告があつたのも昨日で……」

「何時から？」

「2日前の朝にはいなかつたって……あたしも術後に会つたきりで

……」「……

舞衣の声は、何時もよりだいぶ小さい。

優子は溜息混じりに「何処行つたんだるつ……」

「それが判れば苦労しないんですけど……」

舞衣の言葉に、優子は思わず苦笑した。新米看護師からも聞いた言葉だ。

「思い当たる所は連絡してみたんですけど……あまり公にも出来ないから……」

舞衣は深刻そうに続けた。

「そうだよね……」優子も思わず頷く。

「優子さん、どこか心当たりは無いですか？」

「あたしは……『じめん……全然ないかも……』」

結局忍の行方の検討はつかないまま、優子は電話を切った。

駅へ戻る足取りは一層重かつた。

どうして彼はそう何度もあたしの前から消えるの？ 近づいて来たのは向こうじゃん……

会えなくともあそこで治療を続けて頑張る忍の姿を思い描けば、ある意味それで満足していた。

しかし……何処にいるか判らない今、何をどう思えばいいのかも判らない。

何れ、忍は本当に消えていなくなってしまったのではないだろうか。本当は、彼は元々存在していないのだろうか……

優子はそんな馬鹿げた事まで考え始めてしまう。

もう直ぐ2年生最後の期末試験がある。

忍は何とか参加してくれるような気がしていた優子だが、何処にいるかも判らないのでは試験の受けようも無い。

まさか、学校に姿を現すとも思えなかつた。

心なし暖かい陽射しを感じながら、それ以上に少し冷たい風が優子の身体をすり抜けてゆく。

優子は忍が姿を消した事を誰にも言わなかつた。

いや、言えなかつたのだ。

大騒ぎになる事態を知つていながら、自分の口から先走つて発する事は出来ない。

何処からか情報が漏れるのを待つた。

誰から伝わつた言葉で、みんなが忍を気にすれば彼の行方は判るかもしねりない。

しかし、学校内ではそれに携わるような噂は聞かなかつた。

何か自分の知らない事態が起きていて、忍は別に消えたわけじゃないのかもしない。何か得策があつて彼は姿を消したのだろうかと、優子は思った。

少しでも好転するような事態を考えたい。

でも、そんなはずは無いのだと、自分で自分にツッコミを入れてしまつ。

そんな虚しい思いを繰り返すうちに、3年生の卒業式は行われて3日後には期末試験が始まろうとしている。

夕暮れの時間が何時の間にか大分遅くなつて、西日はどこか暖かい光の小波を注いでくるが、今の優子にはそれは届かなかつた。

## 第85話（後書き）

いつもお読みいただき有難う御座います。  
ラストに向つて話しばれております。

カーテンの外は静かな闇に浮かぶ月光が、帳の白道に沿つてゆつくりと動いていた。

机に向つてウトウトしていた優子の携帯電話が鳴つた。彼女は口から零れそうになつて、ヨダレを慌てて拭うと、直ぐに置いていた携帯を手に取る。

『ああ、姉貴？ 僕』

直樹の声だつた。

「どうしたの？」

『今さ、忍さんっぽい人見かけたんだ』

直樹の口から出たその言葉に、一瞬なんの事だか頭が混乱した。が、『忍』というワードに反応して、優子の寝ぼけた脳内はあつと言つ間に覚醒せいいする。

「何処で？」

『表参道なんだけど……』

「表参道？」

表参道……つて、原宿の表参道？

まだ少し、優子の思考は寝ぼけている。

『ああ。でも……』

直樹は言葉を濁す。

「何？」優子はそれに苛立つた。

『デッカイバイクに乗つてたよ』

「バイク？」

高森もバイクの免許持つてたのかな？

『ハーレーつてヤツじゃないかな。裏路地から出てきて、そのまま大通りを走つて行つたよ』

『確かに高森だつた？』

『たぶん……フルフェイスのヘルメットを被つてたけど、路地から

出て来た時はシールドを上げてたんだ……左頬はガーゼで覆われてたし、忍さんの眼だつたよ

直樹の口調は多少曖昧だつたが、その中には彼なりの確信が見え隠れしていた。

「どうして表参道？」

『そんなの知らないよ』

どうして忍が表参道などをうろついてるのか……？ しかもバイクで。

優子にはいくら考えても判らなかつた。

「ていうか、あんたこんな時間にそんな場所で何やつてるの？」

『あつ……いや、ちょっと舞衣と買い物……』

時計を見ると8時を過ぎていた。

優子は小さな息をつくと

「高森を見たのって何時？」

『少しそ前……7時過ぎくらいかな』

「暗いのに高森って判つたの？」

『姉ちやん、都内はけつこう夜でも明るいんだぜ』

直樹はやゆしたように囁つ。

そう言えば都内の大通りは、この辺の住宅街とは比べ物にならないくらい明るいよね……

「そ、そんな事判つてるよ」

『確信はないけど、とりあえず伝えよつと黙つてね』

「……うん。ありがとう』

優子は携帯を握りなおすと「あんまり遅くならないうちに帰つてきなよ」

バイク？ 免許はともかく、バイクなんて何処から持つて来たの？ いくらなんでもそんなの買えるわけないし、まさか盗んだりもないよね……いや……もしかしてヤケになつて？ いやいや、

高森に限つてそれはないよ。

優子は直樹の電話の後、ベッドにひっくり返つて考えていた。

その間に母親が帰つてきた物音が玄関からリビングへ入り、間も無く台所で夕飯の仕度が始まつたようだつた。

父親の直ぐ後に直樹も帰宅して、いつも通り家族で夕飯を食べる  
と優子は再び自室へ戻つてベッドに腰掛けた。

両親は明日からの試験勉強をしていると思つてゐるだろうが、優  
子自身はそれどころじゃない。

頭の中に何かが引っ掛かつて、それを小さな靄が覆つてゐる。

テレビを点けると、夜中のバラエティー番組が流れていた。

ゲストの趣味に番組ホストが付き合つという最近よくあるものだ。  
知つた顔の俳優は、大きな公園の駐車場に大きなバイクで乗り付  
けていた。

踏ん反り返つた姿勢で跨るバイクの前輪は、前方に突き出て、陽  
射しを浴びたシルバー・ポリッシュのエンジンが、ギラギラと輝いて  
いる。

『俺はもう、いまハーレーひと筋つすね。他に趣味はないっすよ』  
テレビの中の男が言つた。

ハーレー……そうだ、あれがハーレーだ……

優子は直樹が言ったバイクの名前ではピンとこなかつたが、テレビに映つたそれを見てハツと思い出した。

自分の身近にハーレーを持つていたヤツがいる。

篠山だ……篠山が高森に貸したんだよ。ゼッタイそうだ。  
優子は勢いだけで篠山の携帯電話をコールした。

『何だよ、こんな夜中に?』

「あんた、今バイクある?」

『はあ？』

「バイクよ。あの大きいやつ」

『あ、在るよ……どうしたんだ？ 急に』

「じゃあ、明日見せて」

『な、なんだよイキナリ。乗りたいのか？』

「えつ……う、うん。乗りたい。だから、明日の放課後乗せて」

『いや……実は今修理に出してて……ほら、外車は壊れ易いから』

苦笑する声が聞こえる。

「……高森にバイク貸してんじやないの？」

『な、なんだよ。それ……』

「今日、あたし見たのよ」

優子は直樹から聞いた事を、そのまま自分に置き換えて言った。

『見たって、何を？』

「高森がアンタのバイクに乗つてた」

『な、何かの見間違いだろ……』

明らかに声は動搖している。

やつぱりそなんだ。篠山は何かを知ってるよ。

「とにかく、明日の放課後篠山の家にいくから」

篠山はあからさまに溜息をつくと

『ああ……判つたよ』

放課後、篠山は安西を待たずして逃げるよひに校舎を後にすると、足早に駅へ向っていた。

「篠山！」

後からパタパタと足音が迫ってくる。

彼には振り返ることなく、それが誰なのか判っていた。

「ちょっと、なこさつさと帰つてるの？」

優子は命懸け走つてやつと追いついた篠山に、息を弾ませながら言つた。

追いつかれては篠山も、観念するしかなかつた。

「いや……そ、そだ。うつかり忘れてたよ」

「嘘つき」

優子は篠山が走り出して逃げなつよう、彼のカバンの端を掴んだ。

\* \* \*

「やつぱりね」

優子は声を出して、少しキツイ視線を篠山に浴びせると、マックのプレミアムカフュを一口噛む。

「苦い……」

「い、ココアの方がよかつたんじゃないか？」

「マックにココアは無いでしょ」

何とか話しかけをそらしたい篠山に、優子はぱシヤリと返す。

途中の駅で何故か下車した二人は、駅ビルのファーストフードシヨップに入つて顔を突き合わせていた。

篠山らしくないモジモジとした表情が続いたが、「怒らないから、

正直に言つてよ」と優子が言つと、渋々語りだす。

昔よく、直樹のウソを暴くときに使つた言葉だ。

「で? どうして高森にバイク貸したの?」

優子は胸の前で両腕を組むと、威嚇の意味で胸を張つた。

「いや……少しの間貸してくれつて……」

篠山もコーheiを一口飲んだ。ポテトを摘んで口に押し込む。

「おかしいでしょ。入院中の高森にどうしてバイクなんか貸すの?」「それは……」

「何よ?」

篠山は再びポテトを摘んだ。

「治療にも息抜きが必要かと思つてさ……」

「だつて、術後間も無くじやない……感染症とか起こしたらどうするの?」

舞衣からの受け売りだつた。

この前電話で話した時「術後間もないのに、ばい菌が入つて感染症にならなきやいいんだけど……」と彼女が言つていたのだ。

優子は組んだ腕を解いて、苦い「heiに砂糖を加えた。

「アイツだつて辛いんだ。いろいろあつたし……1つはウチの親父のせいだけ……」

篠山はコーヒーカップに手を添えて続ける。

「俺も火傷の事を知つた時には驚いたよ。ひとみ……安西が暫くそつとしておけつて言うからコンタクトはとらなかつたんだ」

「じゃあ、病院を抜けてからあんたの所に?」

「ああ。いきなり来てバイクを貸せつて」

「それで、黙つて貸したの?」

優子に睨まれて、篠山も今更罪悪感が湧き出るもののが、間違つた事はしていないと思つた。

「だから、アイツには今、息抜きが必要なんだよ」

「彼は今何処にいるの?」

優子の視線は篠山を捕らえて離さない「知ってるんでしょ？」

篠山は口へ入れたポテトを少しの間無言で噛んでいたが、それを

飲み込むと渋々口を開いた。

\* \* \*

「お前、明日の勉強いいのか？」

「別にいい」

二人は都心まで出て山手線に乗ると、原宿駅で降りた。表参道を少し歩いて直ぐ、左手に表参道ヒルズが見える。

篠山に促されるまま、優子は手前の路地を奥に向って入った。高い建物が陽差を遮つて、ほの暗い通りが続いていた。

篠山の家で持っているアパートが、この裏路地の奥に在るらしい。そして、その空き部屋の一室を高森忍に提供しているらしいのだ。父親には黙つて、篠山が管理不動産に分けを話し、鍵を借りたのだと言う。

「そんな事して大丈夫なの？」

「ああ、去年の春に俺が家出した時も協力してくれたオヤジなんだ。子供の時から知ってる仲だから」

アンタも家出経験者かよ……ていうか、子供の時からって、今も子供じゃん。

「でも、使つてない部屋なんて、電気や水道は？」

「一ヶ月だけ出してもらつたよ」

優子は篠山の行為が悪友ゆえの善意に思えて、それ以上何も言えずと思わず肩をすくめる。

何でそんな事に気を回してんのさ……自分が家出経験者だから、高森の気持ちが判るのかな……ていうか、その不動産屋つてもしかして、組系？

優子はすまし顔で歩く、篠山の顔を思わず見上げる。

路地を暫く歩くと、開けた駐車場があった。

その向こうに古びているが、小奇麗な鉄筋モルタルでできたアパートがある。

「あそこだよ」

篠山が腕を前に突き出して指で示した「でも、いないみたいだ」「何号室？」

優子は点々と明かりの零れるアパートを見上げる。

陽が沈みかけて、部屋には電気を燈す時間なのだ。

一階に6部屋の一階建てなので、全部で12世帯ある建物だ。

建物の横には通路に通じる洋風のエントランスがセリ出している。

「204号室」

篠山が言つた部屋を端から数えて確認すると、確かに明かりは点いていなかつた。

「何処に行つてるの？」

「そこまでは俺も知らないよ。バイクも見当たらぬから、何処かへ出かけてるんぢやないか？」

優子は大きく息をついて辺りを見渡すと、再びアパートを見上げた。

安西のアパートに比べたら大分立派な建物なのに、夕暮れに浮かぶその風景は何処か寒々としていた。

忍が居るはずのアパートで優子は暫く待つたが、彼は何時まで経つても戻つてくる様子がなかつた。

明日の試験勉強を全くしないわけにもいかない。優子は篠山にも促されて渋々自宅に帰つてきた。しかし、当然勉強なんて手につかない。

開いたノートに視線を落としても、文字を読む氣になれなかつた。息抜きが必要……篠山の言葉が頭を過る。

今の高森にとって、あたしは息抜きで会える相手にはならないんだ……

カーテンの僅かな隙間から月の光が微かに注いで、カーペットに細い閃光を映している。

エアコンの室外機がカタカタ鳴つている音だけが、静まる夜氣に響いていた。

試験の中休みに土日が入るのは、意図的なものだらう。土曜日の午後、優子は再び新宿へ出ようと思つていた。

明日があると思うと、今日は勉強なんてする氣にもならない。少し前に気晴らしで買った、ハードウォッシュのローライズデニムを履く。

ん？ なんかキツイ……いやいや、こんな感じだよね。

試着の時には気にならなかつたが、以外にタイトなデザインで下半身の線ができる。

優子は姿見用の鏡の角度を変えながら、何度も自分の後姿をチェックした。

SLY<sup>スライ</sup>のニットパーカーの下は、ユニークロで買ったチエニックだが、彼女にしては上から下まで久しぶりに気を配つてみた。

革……で出来たような合皮のショルダーバッグを肩に掛けると、ショートブーツを履いて玄関を出た。

母親はパートに出た後だし、直樹は相変わらず部活に励んでいる。佐助だけが何かモノ言いたげに、優子を見つめていた。

「なに？ 文句在る？」

優子は佐助にそんな言葉を投げかけると、門を開けて通りへ出る。陽射しが降り注ぐ部屋は暖かかったが、通りへ出ると少し風が冷たく感じた。

駅の横断歩道を渡ると、背中から車のクラクションが短く一度鳴つた。

嫌なシチュエーションだと思い、優子は素知らぬ不利で足を速める。

再びクラクションが鳴つた。

何だか知らないが、ごく平凡なフ抜けたクラクションの音色だったので、優子は周囲を見渡す振りなどをしながら、振り返る。

「やつぱり！」男の声がした。

オンボロの白いバンが止まっている。

助手席の窓から顔をつき出していたのは、忍が入院していた病院で何度か会った大学生、杉原一真だった。

「あっ、こ、こんにちは」

優子は咄嗟にペコリと頭を下げる。

「あ、俺、ここで降りるわ」

杉原はそう言つて車のドアを開けると、仲間に手を上げてそのまま降りてきた。

「あ、何で降りるの？ あたし、別に何も言つてないよね。

丁度降りるところだったのか？

「いや、また会いたいと思つてたんだ。今、暇？」

「そんなに暇に見えるか？」

「いや、あの……」

優子は迷つていた。

実は彼女も、杉原ともつと話してみたいと思つていたのだ。  
しかし、これから行く所がある……が、別に待ち合わせでもない  
し、約束があるわけでもない。

「す、少しなら……」

優子は思わず苦笑する。

「そう、よかつた。車降りちゃつたし、どうしようかと思った  
ていうか、そういう事だつたら、降りる前に訊けよ。」

優子はちょっとびり大人の香りがする杉原を見上げて笑つた。

二人は何となく歩き出して、線路沿いの国道を当てもないのに進  
んでいた。

「何処か、出かけるところだつたんじゃないの？」

「えつ、ええ。ちょっと……でも、別に約束とかはないから」

年上の男といつたら、父親か学校の先生くらいしか並んで歩いた  
事なんてなかつた。

そう言えば、この前連れまわされた中村輝も年上だが、アレは既  
に問題外だ。

しかし、優子は思いのほか自分が落ち着いている事に気付く。  
以前から感じていた事だ。

彼の存在は、何故だか優子の心を落ち着かせる。奇妙な緊張がな  
いのだ。

それとも、彼女なりに男慣れしてきた証拠なのだろうか。

「あの彼、どうした？」

「あ、ああ。ええ……」

優子は思わず俯いて言葉を濁す。もちろん、高森忍の事だ。

「訊いちゃマズかったかな？」

杉原はそれほど長くない前髪をかき上げた。

「あつ、いいえ。何処かへ行っちゃつたみたいで……」

「何処か？」

「脱走したみたい……」

優子は、杉原を見上げて、わざと笑つてみせる。

杉原は少しだけ沈黙して**曼**を見上げた。

優子の言つた事に、特に大きな驚はないようだつた。

彼女もつられて、顎を上げる。

薄雲が視界の隅に僅かに漂うだけの、碧空あくが広がつていた。

「たぶん……」

杉原が呟く。

上を向いてるせいか、優子にはよく聞こえなかつた。

「え？」思わず聞き返す。

「たぶん、少し疲れたんじゃないかな。少し、休みたいんだよ」

「休みたい？」

入院してるんだから、充分休んでるんじゃないの？ でも、

そう言えば篠山も同じような事言つてた。

杉原は優子を見下ろした。

何時でも包んでくれそうな、包容力が全身に漲るような笑顔だ。優子は思わず頬が熱くなるのを感じた。

「入院つてさ、外の人から見るとダラダラ樂そうに見えるけど、患者にしてみたら働いているくらいしんどいものなんだ」

「しんどい？」

「ああ。毎日決まった時間に検温して、その日によつて検査、検査、また検温。辛い治療だつてある。その合間に、これまた毎日決まつた時間に食事。個人の意思は問題じやない」

杉原は大学のサークルでボランティアをしている。

いろいろな病院を廻つて、小児ガンに苦しむ子供や高齢者の重病患者に幾度となく接している。

彼らに共通して欠落しているのは、毎日の検査や治療、決まった食事以外の娯楽や安らぎなのだ。

普通に生活していれば、仲間や友人たちとの関わりの中で、楽しさを経験する。もちろん、嫌な思いだってするけれど、心から笑うような出来事も少なくない。

しかし、病院の中にはなかなかそう言った出来事はないのだ。重病患者の仲間は、同じく命にかかる病に侵された者が多い。現実の苦悩から逃れられないのだ。

杉原は、簡単にそれを優子に話して聞かせた。

「だから、紙芝居や人形劇をやるの？」

「ああ。逃げ出したい気持ちが、少しでも安らぐようにな

杉原の笑顔に、優子も笑みを返す。

「なんか、凄いね」

優子は杉原の言葉で、初めて忍の抱える苦悩に少しだけ共感でき

た気がした。

そして、そんな事を考えられる杉原一真を、改めて大人だと思った。

もちろん自分に比べたら大人なのは当たり前のだが、あと二年で自分もこんないかにも大人な考えが出来るようになるのだろうか

……

他人の事を、そこまで考えられるようになるのだろうかと思つた。しかし……つい歩き過ぎてもう直ぐ隣の駅に着いてしまう事を、

優子は言えずにいた。

第88話（後書き）

次回も杉原一真とのHAPPYENDです。  
お楽しみに！

「「」、「めんなさー」……あたし……」  
優子は杉原の腕の中で呟くように言った。

\* \* \*

線路沿いの国道は、途中で踏み切りを渡るが、県道が線路に沿つて続いていた。

それをブラブラ歩いていた二人は、隣駅に着いてしまった。  
「あっ、隣駅まで来ちゃったね」

歩道脇の金網越しに駅のホームが見えて、杉原も気付いた。

遅くない？ 意外と話好きなのか？

優子は苦笑しながら「そ、そうだね」

「ど、どうしようか？」

杉原が、初めて苦笑する。

どうする？ って、アンタが声かけて来たんじやん。

とりあえず一人は、駅前のカフェに入る。

ハードロックカフェに似た看板だが、アートロックカフェと描いてあつた。

「悪いね、急につき合わせちゃって」

「うんん。全然平気」

優子はテーブルに出されたばかりのミルクココアをそっと啜る。  
「でも、アレだね。女子高生って、もつと意味不明の言葉で喋ると思つたら、普通なんだね」

なんだよ、意味不明つて……同じ日本人だつつの。

「相手によつて、ちゃんと変えてるよ。みんな」

「そうだよな。俺たちだつて、そうだもんな」

「そつなの？」

「敬語とタメ語だつて、そうだろ」

あつ……あたし、敬語使つてないよ……年上なのこ。

「あ、あの……敬語の方がいいですか？」

優子はココアの入つたカップを両手で包み込む。

瀬戸のマグカップから手のひらに伝わる温もりは心地よかつた。

「あつ、いや……そつじやないよ。例えば、仕事場とプライベートじゃ話し方も言葉も違うつて事さ。キミとは友だちだから、敬語はいらないよ」

「よかつた。やつぱ女子高生だ。とか思われたら、なんか嫌だし」「嫌なの？」

杉原は、少し困惑した笑みを零して楽しそうに言つた。

「嫌つていうか……なんだか、何も考えずに生きてるみたな言われ方がイヤ」

真剣な顔で主張する優子に、杉原はハハツと声を出す。

そ、そんなおかしな事言つてる？ あたし。

「直ぐに解るさ。キミが悩みを抱えてる事も、それを吹つ切らうと頑張つて笑顔を探して取り出すようにしてることも」

杉原は自分の小さなカップに入つたコーヒーを口にして

「少なくとも、俺にはね」

優子は、その言葉がもの凄いスピードで、一瞬の瞬きと同時に心の奥まで沁み入るのを感じた。

何かが胸元に競りあがつて来る気がして、言葉は出なかつた。

誰にも言つていらない自分の、自分なりの苦悩。

この数ヶ月、人知れず彼女は彼女なりに苦悩してきた。

心の中を見透かされているよつた羞恥心と同時に、人の温かさを感じた。

これなんだ。この人といてなんだか落ち着くのは、こうこう  
事だつたんだ。これつて、なに？

優子の瞳は僅かに潤んで、窓から入る陽射しに輝いていた。

瞬きしたら何かが零れ落ちる気がして堪えた。

「俺、大学で精神医学とか専攻しててさ。病院に入りしてるせい  
もあって、人の心つていうか、感情に敏感なんだ……」

「それつて、ラッキー？」

「いや……常に顔色を見てしまうつて言つたが、ここの奥を考えて  
しまう」

「だよね……」

「で、でも、何だかホツとする」

優子は田を細めて、鼻の頭にシワを寄せて笑つた。

「ホツとする？」

「杉原さんといふと、ホツとするよ」

優子は自分でもちよつと可愛いかな。と思つような笑みを返して  
みた。

特に意味は無い。

自分の苦惱をすくい出して見据えてくれたお礼だ。

「俺も、ホツとする」

「あ？」

「えつ……？」

「最初に逢つた時から、なんだかホツとする娘だなつて思つたよ  
な、なに言い出すんだよ。」

杉原は「コーヒー」を飲み干して、隣に置いてあつた水をグイッと口  
に入れる。

「だから……」

もう一口水を飲んだ。

「いや、彼氏もきっと、キミのそんな所が好きなんじゃないの？」  
「か、彼氏じゃないんです。別に……」

杉原は白い梅の花を思わせるような、澄んだ笑顔で優子を見つめ

ると

「そうか」

優子は彼の視線を避けるように、ココアのカップを口に着けた。

「そろそろ出ようか

「あ……うん

レジで会計を済ませると、一人はカフェのドアを抜ける。

3段ぐらい低い段差になつて通りの歩道へ出るのだが、優子は2段を越えて安心してしまつた。

「きやつ！」

3段目の小さな段差で、ブーツの靴底がゴロリと横を向いて、身体のバランスを崩す。

杉原は慌てて彼女を支えた。

長くてガッシュシリとした腕が、意外とか細い優子の肩を包む。転ばないように優子の身体を引きつけると、自然に彼女は杉原の腕の中に納まつた。

「い、ごめんなさい……あたし……」

優子は上目遣いに杉原を見つめる。

一瞬、時間は停まつたと思えるほど辺りは静寂に包まれていた。空気は静かに、ゆっくりと動いている。

彼の息使いが聞こえた。

優子は確かに高鳴る自分の鼓動を聞いた。

が……

「あはははははっ、キミ、そそかしいんだな

そう言われると思ったよ……

「マジで…」  
試験の休み時間、一葉が叫ぶ。  
周囲の何人かが振り返ったのを見て、彼女は慌てて口をふさいだ。  
週が明けて、期末考査は続いていた。  
「マジで別れちゃったの？」  
確認するように再び問う相手は、里香だった。  
優子も興味津々で、彼女たちの話に聞き入る。  
「だつて、あんなにラブラブだつたじゃん」  
「うん……それがさ……怒ると怖くて……」  
「怖い？」  
「最近機嫌が悪いこと殴られる」  
優子と一葉は同時に手を丸くした。  
「殴る？」  
一葉は優子と顔を見合させてから「手で？」  
「うん……グーで」  
「グーで？」  
再び大きな声がする。一葉と優子が同時に声を発した。  
グーで女を殴る男なんて、ホントにいるんだ。  
「最低だね」  
優子はポソリと言いつ。一葉は少し興奮気味に早口になる。  
「そうだよ、最低だよ。そんな男はとつと別れて当然」  
「やつぱりうだよね……でも、普段は優しいんだよ」  
「それはまやかしだよ」  
「まやかし？」  
「女を征服しようとするまやかし。普段は優しくして、俺がこんなにお前の事を思つてやつてゐるの……て感じなんでしょう」

「 そつなの？」

一葉の言葉に、優子が声を出す。

「 そつかも……」

里香は少し俯いて笑った。

ほんの一瞬だったが、優子は里香のそんな淋しげな笑みを始めて見たと思った。

その時チャイムが鳴って、深刻な話もあつと言つ間に終わりを告げ、彼女たちの頭は試験問題を解くために仕事を始める。

優子は解答用紙を半分埋めた時、チラリと里香の背中を見た。

不思議なくらい平氣で問題用紙に視線を落として、悲しげな面影は既に皆無だ。

おそらく、それが彼女のキャラなのだろう。

そのステージで気持ちを切り替えるスイッチが在るのだ。

里香がシャーペンを咥えて天井を仰ぐのを見る。

あれは別れた男に苦惱してる姿じゃないな……どう見ても、因数分解が解らなくて苦惱してる顔だ。

優子はクスリと小さく笑うと、再び問題用紙に視線を落とした。

放課後、久しぶりに安西が優子に声をかけてきた。

「 忍、篠山のバイクで家出したんだって？」

「 いや、家出つていうか、病院だから脱走……」

「 しようがないな……」

窓際の机に寄りかかって、安西は外を眺めた。

久しぶりに見る安西の横顔は、白くて透き通つて……優子には何

だかそれが、新鮮な野菜でも見ていくような瑞々しささえ感じた。

「 で？ 見つかったの？」

優子は黙つて首を横に振る。

「 住んでる場所は聞いたんでしょ？」

今度は首を縦に振った。

「安西も聞いたの？」

「訊かないよ。あたしは」

安西は小さく笑つた「だつて、それはもう、アンタの役割じゃん  
篠山は、忍が病院を抜け出した事と、自分が彼にバイクを貸して  
しまつた事だけを安西に話した。そして、それが優子に知られて行  
方を聞かれた事も。

安西は篠山の話す事だけを静かに聞いた。

後は優子がどうするかだ。自分には何もできない。

彼女はそれを判つていた。

「ねえ、篠山は安西の事叩いたりする？」

「はあ？ なに、それ」

「怒つた時とか、喧嘩した時とか」

安西は優子の方に身体を向けると「そんなわけないじやん

黒髪をかき上げる。

「あたしはアイツを叩くけどね」

それを聞いて、優子は吹き出した。

「篠山、喧嘩強いんだよ」

「そんな事知ってるよ。でも……」

安西は少しだけ言葉を切つて息を呑むと、優子から視線を外す。  
「でも、篠山は喧嘩が強い事を男の象徴だとは思つてないよ。誰か  
を守る時、自分を守る時の手段だつて知つてゐるのよ。だから、それ  
以外で誰かを叩いたりしないよ」

安西は少しだけ照れくさそうに校庭を見つめたまま言った。

篠山の事、そんなに知つてゐるんだ。もう、なんでも判つちゃ  
うんだ。

優子は何だか知らずに笑みが零れた。

「何よ？」安西が振り返る。

「な、何が？」

「いま、笑つた」

「笑つてないよ」

「ゼッタイ笑つた」

昼の陽射しと開放感につつらぐ試験の終えた放課後。  
部活の無い校庭も校舎も閑散として何処か寂しげに沈黙している  
のに、一人の時間は暖かく緩やかに過ぎて行った。

## 第90話（後書き）

次回更新は「ゴールデンウイーク明けになると想います。

試験の間、優子は帰りにそのまま表参道まで行つて、2時間うろつき、それから家に帰つて翌試験の勉強をした。

彼は何時もいなま、出会つ事は無かつた。

一日中張り込みたいけれど、試験が終わるまではそもそも行かない。試験が全て終わつた日、一葉と里香がカラオケと買い物へ行こうと優子を誘う。

彼女も少し息抜きがしたいと思つたし、明日からいくらでも忍を

探せるとと思つと、小休止のつもりで一人に付き合つことにした。

渋谷まで出てカラオケをした後、暫くブラブラしていた三人だが、マックに入つて他愛無い話が飛び交う中で、里香が唐突に表参道に行きたいと言つた。

「オープン以来行つてないからさ。久しぶりに行こうよ」  
表参道ヒルズの事だ。

半日一緒にいて、他愛無い話を積み重ねた事で気持ちが何時もより開放されたのか、優子もついでのよう突然切り出す。

「実はさ……今高森つて、表参道にいるみたいなんだ……」  
「はあ？」

一葉が声をだす「高森は病院でしょ？」

「実はさ……」

優子は自分でも納得していない事実を話して聞かせた。

高森が一度目の形成手術の後、病院を抜け出して姿を消した事。どうやら、篠山の家が所有しているアパートに隠れている事。

「なんで言わなかつたの？」

一葉は「一ラのカツプを手で潰す勢いで言つ。

「だ、だつてさ……なんて言つたらいいか判らないし、あたしも何だかわけ判んなくて」

「じゃあ、早く行つてみよ」

「一葉、それは無いよ」

里香が言つた「表参道までは一緒に行つても、高森の隠れてるアパートにあたしたちが行くのはマズイつて」

「そ、そうか……」

一葉は「一ラの残りを、音を立てて啜るととにかく向おう」

そう言つて立ち上がつた。

優子は一人から離れて、高森のアパート。正確には彼のアパートではないのだが……そこへ行つて見る。

しかし、ヤツパリ高森の姿も氣配もそこには無かつた。

いつたい何処に行つてるんだろつ。本当にここに隠れてるの？  
優子は別行動の友人たちが気がかりで、アパートの周りをぐるりと廻ると、その場を後にした。

「どうだつた？」

一葉と里香の待つ場所で合流する。言葉を発したのは一葉だ。

優子は小さく頭を横に振つて、わざと明るく笑う。

「やつぱりいなかつた」

「そつか……」

三人は明治通りと表参道が交差する歩道橋を登つて、西の空に沈みかけた太陽を眺める。

高層ビルの黒い影の谷間に、オレンジ色の夕日が浮かんでいた。

優子は手すりに片手をかけると、もう一方を前方に突き出して宙を掴む。

手が届きそうなほど、夕陽が大きかつた。

一葉も手すりに腕」と絡めるように、身体をくつつけた。

「楽しい試験休みも、優子には苦難だね」

「それでもないけど……」

「優子も新しい男搜せばいいのに」

里香が背中で手すりに寄りかかる。

「あんたと優子は違うの」

一葉が里香の腕を押した。

ビルの長い陰は、街並に逸早く暮色を忍ばせ、車道を行き交う車にはヘッドライトがポツポツと燈り始めていた。

後を行き交う同じ年頃の声が、高い笑い声と共に過ぎてゆく。

「あつ」優子が小さく叫んだ。

「なに? どうしたの?」

一葉は優子に振り返ると、彼女の視線を追つ。

「あのバイク……」

「バイク?」

歩道橋の直ぐ下の車道に、信号待ちで停まつたアメリカンタイプの大型バイクが見える。

そのアイドリングは、周囲の喧騒から秀でた音を奏でていた。

「あれ、高森だ」

「うそ?」

一葉が首を伸ばして覗き込む。

「ゼツタイ高森よ。あれ、篠山のバイクだもん」

「ああ、言われてみれば篠山らしい音がしてるかも」

一葉と一緒に、里香も身体を返して車道を見下ろした。

「優子、行かないの?」

「そうだよ、あんた、早く行きな」

一葉が優子の腕を取る。

「えつ、で、でもさ……」

「バカ、早く行けって」

一葉は彼女の身体を手すりから剥がすよつて腕を引っ張ると、背中をバンと叩く。

「早く、信号変わつちやうでしょ」

一葉はモタモタしている優子の腕を掴んだまま走り出した。

サラリーマンと肩が触れて「あ、ごめんなさい」と言いながら、

意識はそれどころではない。

「早く、早く！」

階段の手前で優子の腕を放し、背中を再び叩いて強く押す。交差する信号が黄色になつて、右折の矢印が点灯する。

「早く走れ。早く！」

優子は一葉に後押しされて、階段を駆け出した。

「もっと速く走れ！」一葉の声が再び背中を押した。

肩に掛けたスクールバッグを握り締めて、優子は一段とびで階段を駆け下りる。

階段を上つてくる人波を搔き分けると、それらの視線が行き過ぎる彼女を追つた。

不完全燃焼で燻されていた想いが、唐突に湧き上がって真っ赤に燃え上がる。

鼓動が跳ね上がって、激しく胸を叩くのは走つてからではない。

想いに決着をつけたい……いや、そもそも想いに決着などつけられるのだろうか……

ローファーの踵が、足から外れそうになつて浮き上がつた。膝上丈のスカートが、走る風で舞い上がる。

歩道を横切るとき、信号が青に変わるのが見えた。

優子は止まらなかつた。

以前の彼女なら、諦めて立ち止まつたかもしない。

しかし、今の優子には彼と歩んだバイクボーンと、背中を押してくれる友人達がいる。躊躇する事無く、そのままの勢いで車道へ飛び出して、停止線の最前列にいた忍のバイクの前に飛び出た。

ダダダダッと、ハーレーのエンジン回転数が上がつた。

唸りを上げたバイクは走り出そうとしたが、直ぐにブレーキを掛け止まる。

沈むフロントホークと一緒にグッと前方に揺れたヘルメットが、優子を見つめた。

「忍！ 高森忍！」

優子は肩で大きく息をしながら、周囲の喧騒に搔き消されないよう、仁王立ちのまま精一杯叫んでいた。

心臓が張り裂けそうなほど騒がしい動悸を奏でて、バイクの騒音までをも飲み込む。

ヘッドライトの燈した車の群れが傍らを次々に流れ、優子は光の帯に包まれた。

## 第91話（後書き）

何時もお読みいただき有難う御座います。  
加筆・修正の調整にもよりますが、あと2話で完結予定です。  
渾巣く展開にお付き合いくださる読者の方々に、大変感謝いたしま  
す。

ビルのミラー・ガラスに映り込む夕陽が、姿を消そうとしていた。煌々と燃える炎が、闇に溶けてゆくようだ。

忍はバイクをゆっくりと歩道脇に寄せて停めた。

イグニッショ n をオフにしてエンジンを停止させると、幻聴が途切れたような一瞬の静寂の後に、街の雜踏が割り込んでくる。

「無茶するなよ。危ないだろ」

紅いイナズマが描かれた黒いフルフェイスのヘルメットを被つたまま、シールドだけを上げる。

優子は彼を呼び止めたものの、その後の言葉が出なかつた。激しく息を弾ませる呼吸は、まだ収まつていない。

夕陽が消えても、空には横道光が残り火を燈している。

「どうして……」

優子は言いかけた言葉を呑み込むと大きく息を吸つて

「そろそろ、病院にもどろう」

穏やかな口調が、自然に口から出る。

一瞬で選んだ言葉だ。

しかし、忍は視線を僅かにそらす。

通りの向こうで、タクシーがクラクションを鳴らす音が聞こえた。正直、優子には何故忍が逃亡したのかは、まだ理解できない。杉原の言つた言葉は理解できるし、それによつて忍の苦悩を僅かながら共感できた。

しかし、姿をくらます行動は理解出来なかつた。

篠山が言つた、休息の意味も露のかかる山頂を眺める感じだ。

それでも彼のキズの痛みは、理解できる。

自分だつて、顔の半分が火傷で醜くなつてしまつたら……今の自分をとびきり美人だとは思わないけれど、やっぱりそうなつたら生きるのが辛くなると思う。

何処まで完治するか解らない不安と毎日直面して日々を送るなんて、やっぱり耐えられないかも知れない。

今の彼には支えてくれる家族もない。

それでもやっぱり、優子は忍に怪我の治療をして欲しい。何処まで快復するのか全く解らないけど、とにかく元気になつて学校へ戻つて来て欲しいのだ。

それが一番の彼女の願いだ。

バイクのシートに座つたままの忍へ近づいて、優子は腕を伸ばした。

「彼女は忍の顎にかかつたヘルメットのストラップを外す。前に篠山におそわったから、解るんだよ」

忍は何も言わなかつた。

ただ、顎紐に添えた自分の指先を見つめる優子を見ていた。彼女は彼のヘルメットを力いっぱい持ちあげる。

焼けた髪の毛も、大分生えてきていた。

焼けていない部分はそれに合わせて少し切つたようだが、毛先は全く揃つていない。

「ボサボサだつたから、適当に自分で切つたよ」

優子の巡らす視線に、忍は少し不揃いの髪の毛をクシャクシャとかいた。

「言つてくれれば、あたしが切つてあげたのに」

「彼女の言葉に、忍はようやく笑顔を零した。

「お前、そんなの出来ないだろ」

「失礼な、アンタが自分で切るよりは上手に出来るよ

彼女はそう言つて、さり気なく彼の髪の毛に手を触れた。

顔の左半分は相変わらず痛々しく、目の上と頬にガーゼを貼つている。

綺麗なガーゼも、自分で交換したのか知らない。

視線は優子の方が上にあつて、僅かに忍を見下ろせた。

久しぶりに、彼を間近に感じた。

他愛ない会話は、長くは続かなかつた。

それでも、優子は今までに無く忍を愛おしく思つた。

それが母性なのか愛情なのか、そんな事は自分でもよく判らないし、解る必要はないと思つた。

もつと彼に触れたかつた。

彼の温もりを感じたかつた。

息使いを共有したかつた。

「あたしは……」

言葉を呑み込む優子を、忍は微かに見上げていた。  
耳の奥で自分の鼓動が響いてくる。

それは、忍も同じだつたかもしれない。

「あたしは、忍の外觀に惚れたわけじゃなんだからね」

優子は初めて自分からキスをした。

唇に集中した意識は、彼の温もりも息使いも、その全てを熱く捉えた。

頬に貼られた大きなガーゼから、微かに消毒液の匂いがする。  
街の雑踏は暮色に浮かぶ光の時間に変わろうとしていた。

優子と忍の姿を誰も振り返る者などいない。

歩道橋の上から二人の友人だけが、熱い視線で見守つていた。

「バイクの免許持つてたんだ」

「いや……」

「無免許？」

「交通法規は知ってるよ。後乗つてくか？」

「止めとく……」

第92話（後書き）

次回、最終話です。

## 最終話（前書き）

最終話です。

おそらく、今まで全話を読み重ねて下さった方と、飛び飛びで読んで下さった方は、全く感じるものが違うかもしれません。

ラストの感じ方は、優子の積み重ねた生活を知る分量に比例いたします。たぶん……

病院へ戻つた忍の怪我は、順調に快復した。

忍が子供を助けた火災現場の家は、シノテックの子会社の幹部社員宅だつた。

忍の高額な治療費は、彼が救つた子供の親が全面的に負担する事になり、一度の形成手術が無事行われた。

そして、三度目は今までの術後の傷を消す手術だつたそうだ。

篠山の父親が何かをしたか誰にも判らないし、篠山も何も言わない。

ただ、深謝の意を表す為に一度だけ顔を出したきりの両親が、急に息子の命の恩人を敬い出したのは確かだ。

治療の経過の合間に、忍は春休みの学校へ通つて補習を受けた。

出席日数はギリギリだつたようだが、こんな時、日頃の成績がモノをいうらしい。

ほとんどの生徒が新しいクラスに馴染んだ4月の終わり、忍はみんなに遅れて新学期を迎える。

彼は新しい携帯電話を持つと、真つ先に優子にメールアドレスを教えた。

優子は彼の識別着メロに、トトロの挿入歌『さんぽ』を選んだ。ずっと『歩こうマーチ』とか勝手に名前を付けていたが、少し前に一葉が無料着メロサイトからダウンロードしてくれてよこしたのだ。

「歩こうマーチって名前じゃないんだね」

「そちらしい……」

一葉も優子につられて、勝手な名前で覚えていた。

忍が進級して初登校した朝、優子は後ろから彼を見ていた。

彼がその日から登校すると判つていたから早めに家を出たら、同

じ電車だったのだ。

しかし、彼女は忍に声をかけなかつた。

校庭の端に植えられた小さな桜並木は満開で、風に舞う花びらが何処か果敢なく優子の目には映つた。

忍の左の眉はまだ少し無くて、左右の長さを調整して眉ペンシリで描いていた。

一部の髪は焦げて無くなつたが、頭皮は火傷していなかつたので、綺麗に短くカットしてそろえると、なかなか見栄えがイイ。

短髪にすると、綺麗に通つた鼻筋が際立つ。

頬には微かに傷跡が残つてゐるが、時期それも消えるようだ。

何だか新宿にいそくなホストっぽい。なんて言つ連中もいたが、それがまた彼の人気を引き立てた。

傷を負つた悲しい過去を持つホスト。そんな哀愁漂うイメージだらうか。

\* \* \*

ゴールデンウイークも過ぎ去つて、三年生最初の中間考査が始まる頃、抜けるような青空に吹く風は、もう充分に初夏の香りがした。連休後に始まつた高校総体に沸き立つ中で、忍は完全に学校へ溶け込み、部活最後の大会でスター・ティングメンバーとして試合に出場した。

何事も無かつたかのように、彼のまわりには他校の女子が群れを成す。

遠い……あの人は遠くにいる。きっとコレが正確な距離なんだよ。

試合会場の片隅で、優子はゲルマニュウム灯の淡い光源を見上げ

る。

時間は確実に流れ、高校生活の新しいページは捲られた。

「優子、最近高森と全然会つてないんじゃないの？」

帰りの駅で、一葉が言った。

里香は失恋一ヶ月で新しい男を見つけ、ゴールデンウイークは幸せ満開だった。

「うん……なんかさ、やっぱクラスが違うと距離は離れるのかな……」

優子は少し伸ばして明るく染め直した髪をかき上げる。

三年生になつた優子は、忍とは別のクラスになつた。

安西とも離れて、彼女とはもう全く会話を交わす機会はない。

篠山は相変わらずで、クラスが違つても廊下で会つと声をかけてくるが……

暫く前まで一緒に過ごした連中も少しずつ距離は離れて、別々の時間を過ごす事が当たり前になつた。

強風に煽られて制止したゴンドラの匂いも、寒空の下で観た花火の果敢なげな彩りも

ハーレーで走り抜けたレイブリの降り注ぐイルミネーションも……

今は蒼い虚空の果てに霞む、幻想的な白い月のようだ。

それでも一葉との仲は、まったく変わらない。

再びクラスも同じになつた。

やつぱり、教室が同じつていうのは特別なんだ……何時も同じ空気を共有する事は、何にも変えられない貴重な事なんだ。

最近優子はそんな事を思つ。

自分から忍にキスをした時に、彼への思いは完結したのかもしれない。

もちろん入院中は何度も見舞いに行つたが、退院してからは逆に一緒にいる時間は減つていつた。

忍は部活にも復帰し、ペースを戻すのに大変そうだった。

光る汗を迸らせて自分を取り戻そうとしている彼に、優子はあって近づかなかつた。

彼の邪魔にはなりたくないなかつた……

限られた高校生活の時間は、瞬く間に進化を遂げる。

そして、人の縁というのは必ずしも明確な境界線が在るとは限らない。

同調して交わつて、もう離れられないと思つていても、気が付いたら何時の間にか遠く手の届かない場所へ離れている場合もある。

「まあ、春は別れの季節つて言つしね」

一葉はわざとおどけて、でも優しく笑つた。

「そうなの？」

「前に、そんな歌なかつた？」

「しらなゐ」

なんだかわけも判らぬ、二人同時に声を出して笑つ。

どうでもよかつた。

どうでもいい事に頭を使って、笑いたかつた。

そうしないと、何時でも心は萎れて泪が零れそつた。

「ねえ、どつかでお茶して行こつか」

電車に乗り込んだ時、一葉が言つた。

二人は隣の駅にあるミニストアに寄り道して時間を費やす。定期を持っているから、途中何処で何度も乗降を繰り返しても平気なのだ。

目先の持て余す時間はいくらでもあつた。

「優子は進路どうするの？」

「映画の字幕とかやりたい」

「あんた、英語全然ダメじやん」

「やつぱ、ダメかあ……」

優子は想像できた彼女のリアクションに苦笑した。

「でもあんた、意外と奇跡とか起こせる素質があるのかもね」

一葉は少し真面目な顔で言つて、ショーハンマー・ナツを片手に笑いを零す。

なんだよ、奇跡つて……高森忍か？

「じゃあ、一葉は？ どうすんの？」

「あたしは……どうしようかなあ」

一葉は窓の外を遠く見つめた。

そんな現実的な会話が、どこか仕方なしに口から出でしまう時期に入つていた。

再び電車に乗つて帰路につくと、先に降りる優子に一葉は何時ものありふれた風景に囮まれて手を振る。

「じゃあね」

何時ものありふれた笑顔だ。

でもそれは、いかにも穏やかな日常を象徴するものに他ならない。優子も何時もと変わらない、ありふれた笑顔を返す。

時間は通り過ぎるものなのか……それとも訪れるものなのか。

今の時間を貴重だと……だつたと、彼女たちが感じるのはまだまだ先の事だろう。

今はただ、次々に迫り来る時間の波を搔い潜るのが精一杯だ。時にはぶつかって溺れかける事もあるけれど……

夕陽が紅色に雲を染め上げて、それが街並全てを淡く照らしていった。

走り去る電車を振り返らずに、優子は駅のくすんだ階段に右脚を乗せる。

琥珀色に染まる暖かい風は、プラットホームを吹き抜けて優子の後ろ髪を揺らすと、そのまま遠くへ飛んでいった。

電車のノイズが遠ざかると、辺りには人波の残像と、僅かな雑踏だけが残つていた。

優子はふと気付く。

カバンに入れたままの携帯電話が、お気に入りの曲を奏でている  
とに……

END

## 最終話（後書き）

最後まで読んでくださった方に、大変感謝いたします。

かなりコメディー色の強い前半で喰い付いた読者の方は、思わず暗い展開に驚いて離れてしまったかもしれません（苦笑）。

コレはラブコメではありません。

ただ、個人に降りかかる苦悩の分量を、上手く書けたか自信はありません。

後半は次第に描写文が増えて、慌てて減らしたりする事も、しばしば（苦笑）。

中盤、安西の家庭やその他について、あえて深入りしない部分もあります。

とにかく、少しでも覗いていただいた方、最初から最後まで読んでくださった方々全てに感謝いたします。

有難う御座いました。

tokujirou

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0077d/>

---

琥珀色の風

2010年10月8日13時19分発行